高松市埋蔵文化財調査報告第82集

市道山口１号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

神高古墳群（かんだかこふんぐん）－神高池北西古墳（かんだかいけほくせいこふん）－

２００５年3月

高松市教育委員会

例　　言

1　本報告書は，市道山口１号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　発掘調査地及び調査期間・面積は次のとおりである。
　調　　査　　地　　高松市鬼無町山口 153 番地（神高池池敷内）
　調　査　期　間　　昭和 63（1988）年２月１日～２月 15 日
　調　査　面　積　　155㎡
3　発掘調査は，文化振興課 事務吏員 藤井雄三総括のもと，讃岐文化遺産研究会 末光甲正・中西克也（中西は当時文化振興課嘱託）があたった。
4　整理作業は，藤井総括のもと，末光と中西があたった。
5　本報告書の執筆・編集は，第Ⅰ章～第Ⅳ章を末光が，第Ⅴ章を文化振興課 文化財専門員 川畑聰が担当した。
6　調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）
　香川県教育委員会　香川大学　香川県埋蔵文化財センター　徳島文理大学香川校
　今岡重夫　大久保徹也（徳島文理大学文学部助教授）　丹羽佑一（香川大学経済学部教授）
　片桐孝浩・古野徳久（香川県埋蔵文化財センター）　渡邉淳子（善通寺市教育委員会）
7　本報告書掲載の遺物写真撮影は，西大寺フォトに委託した。
8　本文の挿図として，国土地理院発行 1／25,000 地形図「五色台」，「白峰山」，「高松北部」，「高松南部」および高松市都市計画図 1／2,500「鬼無」を一部改変して使用した。
9　発掘調査で得られたすべての資料は，高松市教育委員会において保管している。ただし，第Ⅴ章に掲載した資料は，それぞれの調査機関で保管しているが，香川大学調査の大部分は本市教委で保管している。
10　本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は磁北を表す。ただし，第２・３・20・21・54 図は座標北を表している。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過
　第１節　調査前の状況……1
　第２節　調査の経緯と経過……1
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……3
第Ⅲ章　調査の成果
　第１節　調査の概要……6
　第２節　横穴式石室の概況……8
　第３節　遺　物……10
第Ⅳ章　まとめ
　第１節　石室造営の技法等……38
　第２節　暗文付土師器について……38
　第３節　神高池北西古墳の年代……40
第Ⅴ章　神高古墳群について……50

挿　図　目　次

第１図　佐料遺跡出土縄文土器実測図……３
第２図　周辺遺跡分布図……５
第３図　調査位置図……６
第４図　墳丘平面／遺構配置図……７
第５図　石室実測図……８
第６図　墳丘断面土層図 ……９
第７図　発掘区設定図……10
第８図　遺物出土位置図……11
第９図　出土遺物実測図①……15
第10図　出土遺物実測図②……17
第11図　出土遺物実測図③……19
第12図　出土遺物実測図④……21
第13図　出土遺物実測図⑤……23
第14図　出土遺物実測図⑥……25
第15図　出土遺物実測図⑦……27
第16図　出土遺物実測図⑧……29
第17図　出土遺物実測図⑨……33
第18図　出土遺物実測図⑩……35
第19図　出土遺物実測図⑪……37
第20図　暗文付土師器出土地分布図……39
第21図　神高古墳群分布図……50
第22図　山野塚古墳横穴式石室実測図……52
第23図　古宮古墳横穴式石室実測図……56
第24図　古宮古墳玄室出土遺物実測図……58
第25図　古宮古墳羨道出土遺物実測図①……59
第26図　古宮古墳羨道出土遺物実測図②……60
第27図　古宮古墳玄室出土弥生・
　　中世～近世遺物実測図……61
第28図　古宮古墳羨道出土
　　中世遺物実測図……61
第29図　古宮古墳玄室出土
　　玉製品・金属製品実測図①……62
第30図　古宮古墳玄室出土
　　金属製品実測図②……63
第31図　古宮古墳玄室出土
　　金属製品実測図③……64
第32図　古宮古墳羨道出土
　　金属製品実測図……65
第33図　古宮古墳出土
　　玉製品・金属製品実測図……65
第34図　古宮古墳遺物出土位置図……66
第35図　鬼無大塚古墳横穴式石室実測図……68
第36図　鬼無大塚古墳玄室出土
　　遺物実測図①……70
第37図　鬼無大塚古墳玄室出土
　　遺物実測図②……71
第38図　鬼無大塚古墳羨道出土
　　遺物実測図……71
第39図　鬼無大塚古墳玄室・羨道出土
　　弥生・中世遺物実測図……71
第40図　鬼無大塚古墳玄室出土
　　金属製品実測図……72
第41図　平木１～４号墳地形測量図……73
第42図　平木１号墳墳丘測量図……74
第43図　平木１号墳遺物出土状況図……75
第44図　平木１号墳横穴式石室実測図……76
第45図　平木１号墳出土遺物実測図①……78
第46図　平木１号墳出土遺物実測図②……79
第47図　平木１号墳出土金属製品実測図……80
第48図　平木２号墳出土遺物実測図……81
第49図　平木２号墳横穴式石室実測図……82
第50図　平木３号墳横穴式石室実測図……84
第51図　平木４号墳横穴式石室実測図……85
第52図　平木４号墳出土遺物実測図……85
第53図　神高古墳群出土遺物変遷図……88
第54図　神高古墳群変遷図……91
第55図　神高古墳群石室変遷図……92

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧……４
第２表　暗文付土師器出土古墳一覧……39
第３表　神高池北西古墳出土遺物観察表……43
第４表　神高古墳群石室一覧表……87
第５表　神高古墳群出土遺物比較表……93
第６表　神高古墳群出土遺物観察表……95

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第1節　調査前の状況

神高池北西古墳が所在する高松市鬼無町は，律令期に香川（介加波）郡笠居（加佐乎利）郷とされ，江戸期に笠居村～上笠居村，明治23年には村制の上笠居村となり，昭和31年の第5次合併で高松市に属することとなった地域である。

笠居郷域では，古墳時代前期（4世紀）に横立山経塚古墳，原経塚古墳，かしが谷2号墳，中期前半（5世紀前半）に今岡古墳が築造されるが，中期後半（5世紀後半）に属するものは現在不明であり，約100年以上の空白期間の後，後期後半（6世紀後半）に神高古墳群等の横穴式石室墳群が出現した。

県域の該期類例中でも際立った存在としてよく知られた中世山城勝賀城跡が立地する勝賀山東麓は，裾部に幾筋もの谷を下刻しつつ形成された丘陵が東に向かって延びている。

その谷合いにはこれらを塞き止めて造られた大小の溜池が多数所在する。本古墳が所在する神高池は，これら溜池群のうちでも最下流部に位置して，周辺で最も長く伸びた二つの丘陵の端部を南北方向にほぼ直線状につなぐ堤防を築くことにより閉塞して造られたものである。

本「神高池北西（かんだかいけほくせい）古墳」の現況は，この神高池の池敷内にあって，石室の基底石部分のみが遺存し，低水位時は石材の一部が視認できるが満水時には水没するものであった。この谷筋で，おおよそ6世紀後半に継起的に築造された横穴式石室墳の一つが，近世に成立した「神高池」の池敷内にとりこまれた結果の状景を現出しているものである。

本古墳に関する概要は，昭和47（1972）年3月までに作成された『高松市文化財（史跡）分布調査報告書』（報告者・小竹一郎高松市文化財保護委員〈当時〉）1)に収録され，且つ，『全国遺跡地図37香川県』（文化庁文化財保護部編・昭和52年）にも「円墳」として記載されている周知の遺跡であった。

上記『報告書』1）では，「地目＝溜池。所有者＝国有地。墳形＝盛土円墳。立地＝南面した傾斜地にある。出土遺物＝何も知られていない。

現状＝＊神高池の北西隅にあるので，池の水が満水になると水没する。

＊封土は流失してしまい，石室も崩壊して，大小の石塊が長さ10m，幅5.5mの広さに散在，集積しているだけになっている。

＊これらの石塊は，安山岩質の自然石である。

＊池の底になっているが，この石塊の散在区域はうず高くなって，高さ約1.2mある。」とされていた。

第2節　調査の経緯と経過

本古墳が所在する高松市鬼無町山口153番地（神高池池敷内）の同池北～北西岸は，地形的には山側にあり，東西方向に「へ」字状に200m余に亘って伸びる市道山口1号線の路側擁壁の機能も併せ持たされているものである。

昭和63年（1988）に至り，上記市道山口1号線が拡幅・改良されることとなり，本古墳にも影響が及ぶところから，事前の1月25日に現地の現況確認を行い，古墳周辺で中世の土師質土器片コンテナ1箱分を表面採集し，遺構周辺写真を撮影した。1月30日，原位置を遊離した遺構周辺の石材の移動・搬出に立会った。

2月1日～2月15日にかけて発掘調査を行った。墳丘は，ほぼ全面的に失われていたが，石室基底部の石材がある程度残存しており，おおよその玄室の規模と羨道の一部の状況を確認できたほか，古墳に伴う僅少の土器類と多量の中世土師質土器類を得たところである。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

神高池北西古墳（かんだかいけほくせいこふん）は，高松平野の北西縁辺部，香川県高松市鬼無町山口所在の溜池「神高池」の池敷内に遺存している。同池は別称「新池」とも呼ばれ，勝賀（かつが）山東麓に形成された谷状地形の谷側部分を，ほぼ直線状の約 270m（現況）に亘る築堤で塞き止めた「谷池」である。

高松平野は，香川県の中央やや東寄りに位置する沖積平野である。北縁では瀬戸内海に臨み，東部はその海岸に突出した屋島・立石・雲付山地によって画され，西縁部は大きく備讃瀬戸に張り出す五色台・堂山山地，香南台地に限られている。この五色台山地南東端の袋山と堂山山地北端の伽藍山間に本津川による隘路が形成され，高松平野と西方の綾川流域・綾北平野を連結する回廊となっている。

平野中ほどやや西寄りには独立丘陵石清尾山山地が座を占め，南縁では，讃岐山地が，中央構造線（M.T.L.）関与の活断層に由来する東西方向のリニアメントを示して階段状に高度を減じ，北麓に基盤岩からなるケルンバットの小山を点在させながら平野部に移っている。南辺中央に由良山・日山・上佐山山地とそれらの台地が張り出し，その東西で山地間を下刻しつつ春日川・新川水系と香東川・本津川水系とが北流している。

高松平野は，この香東川によって，海抜高 90m余の香川町岩崎付近を扇頂とし，西の栗林公園付近から平野部東縁に近い「弘福寺領讃岐国山田郡田図」比定地一帯に至る海抜 10m弱の線を扇端として，緩やかな傾斜で北東方向に展開する扇状地として形成されている。この扇状地には，浅い開析谷が放射状に走っており，この谷の凹地を塞き止めた溜池である「谷池」や，舌状に張り出す微高地を利用した四方堤の「皿池」が随所にみられ，特徴ある平野の景観を現出している。一方，平野東縁の新川・春日川には扇状地を形成するほどの営力はみられない。

讃岐山地から瀬戸内海に注ぐこの香東川を主な営力とし，これに春日川・新川をも加えた沖積世の堆積によって形成された平野域には，およそ 180 平方kmに亘って条里型土地割が展開している。

本遺跡・神高池北西古墳が立地する勝賀山・堂山東麓一帯は香東川左岸扇状地帯の西縁にあたるが，本遺跡と香東川の間には，小河川・本津川が国分寺平野部から北へ流下しており，香南台地から段丘面を開析しつつ北へ延びる古川と国分寺町・高松市境界付近で合流して氾濫原面を形成する。以北では，三角州帯を広げて海に達している。

他方，五色台山地東部の一角を占める勝賀山（標高 364.1m）南麓と袋山（標高 261.9m）北麓が平野部に漸移する傾斜変換点付近には，両山体によって形成された赤子谷が東に伸びて数条の支谷を刻み，山麓に緩傾斜面を形成しながら本津川畔に至る低地部に達している。

これら支谷は，大まかにみてほぼ 100m前後の幅で刻まれ，西から東へ流下しているが，随所に谷を塞きとめて，１条の谷に複数をもつ例も含めて数多くの溜池が造成されている。

最下流にあたる溜池の堰堤は，条里型地割の施工範囲直近にまで達しており，水利と土地利用に係わる特徴的な景観を現出している。なお，この景観は近世以降の開発によるところが大きいものと考えられる。

即ち，本遺跡=神高池北西古墳の所在位置が「新池」とも呼ばれる神高池の池敷内であり，現況においては満水時に水没するものであるところからみても，古墳築造時点においては池が存在し得なかったことが明らかと考えられるためである。「新池」と呼ばれる溜池は各所に見られ，通例は近世後半以降の築成・改良にかかるものである。

神高古墳群は，浅い谷間を介在させる山麓の斜面を占地して，中腹部から低平地に移行する裾部にかけて順次築造されたもののようである。神高池北西古墳は，後（近）世には「谷池」が形成されるような立地条件を選んで造成されて「神高池（かんだかいけ）」池敷内に遺存するに到ったのである。

市域内には，本例のほか，鶴市町御殿貯水池古墳群，三谷町住蓮寺池古墳群，同石船池古墳群等，後代に「溜池に立地する」こととなる類似の例も稀ではない。

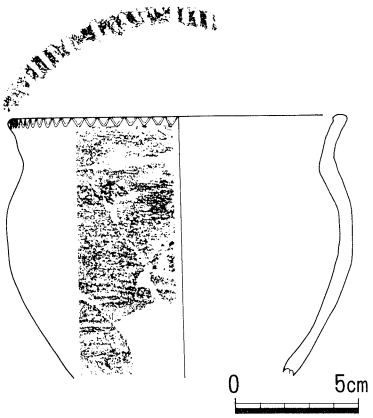
第2節　歴史的環境

本古墳の立地する五色台山塊は，特徴的なメサ台地地形の成因でもある安山岩をキャップロックとして，周辺一帯が良質・豊富な石器材料，サヌカイトの全国的な供給源として知られる。

原石産地間近な本古墳周辺ではあるが，旧石器に関する知見が得られたのは比較的近年である。1983年，南南西5km余に当たる綾歌郡国分寺町の兎子（うさんこ）山で尖頭器を含む石器群が確認され，高松市域では，1988年に御厩町西山で翼状剥片等が表採されている。90年代に入って以来，道路建設等による平野部での発掘調査が続き，多くの遺跡からナイフ形石器，角錐状石器，翼状剥片等各種石器類と共にAT・アカホヤ火山灰の検出や，これに関連する遺物包含層の層位関係確認，年代比定，石材の産地同定等に顕著な進展と成果がみられた。

中間•西井坪（なかつまにしいつぼ）遺跡では，様々な時期•形態の石器ブロックを確認。接合資料もあり，原石産地との関係や生産遺跡としての態様の差異等解明に各種資料を提供している。香西南西打（こうざいみなみにしうち）遺跡では，極めて大形の石核類の出土が目立ち，原産地遺跡との近さを印象づけている。

まだ例が多くない高松平野の縄文時代遺跡は，西打（にしうち）遺跡から早期押型文期の異形局部磨製石器や前期末岡山・里木Ⅰ式の特徴をみせる土器群と石匙など多数の石器や遺構が出土し，香西南西打遺跡でも摩耗の少ない有舌尖頭器が埋没流路にみられた。鬼無藤井（きなしふじい）遺跡の自然流路で晩期中葉の鉢類が出土，土器製作集団の存在が推定される。佐料遺跡では，後期前半の口唇端部に刻み目をもつ無文小形深鉢が，昭和62年（1987）10月頃の水路補修工事で採集されている（第1図）。



第1図　佐料遺跡出土縄文土器実測図（縮尺1/3）

弥生時代では，鬼無藤井遺跡に最大径70mの規模を有する二重に環濠をめぐらした前期の環濠集落が出現している。後期には，西打遺跡，中間西井坪遺跡で掘立柱建物跡，土器棺墓が確認されている。

高松平野において，最初に出現する古墳は石清尾（いわせお）山の積石塚古墳群である。特異ともいえるこの古墳群は，最初に造営された鶴尾神社4号墳（つるおじんじゃよんごうふん）をはじめ前方後円墳9基，猫塚（ねこづか），鏡塚（かがみづか）の双方中円墳2基，円墳10基以上，方墳1基で構成される。大型の古墳を多数有し，これらは高松平野を掌握した首長墓群とみられる。猫塚以降，規模を縮小しながらも古墳時代前期を通じて築造が続けられ，早くから知られた石船塚（いしふねづか）古墳に至って，中期に入る頃には終焉する。石清尾山では，浄願寺山山頂平坦部一帯はじめ山腹各所に後期に属する横穴式石室の群集墳が営まれている。

平野の西部では，中間・西井坪遺跡で前方後円墳を含む前期古墳の周濠3基が確認されている。

神高池北西古墳は国分台に連なる勝賀山塊東麓に位置する。北方約1ｋｍ余に前期に属する小規模なかしが谷古墳群が成立し，中期には石清尾山の前期古墳群の終息に替わるがごとく，形象埴輪や長持形陶棺をもつ盛土前方後円墳・今岡（いまおか）古墳が成立して畿内政権との関係を示唆する。

同時期には，中間西井坪遺跡で埴輪や陶棺が製作・焼成され，その陶棺が今岡古墳に搬入されたのはほぼ確定的である。後期初頭には，このほか平野部に武具・馬具を副葬する相作牛塚（あいさこうしづか）古墳が出現しており，周辺一帯に群集する「塚」群のうちには，古墳の可能性が想定されるものも含まれている。

本古墳周辺では，神高古墳群が形成されている。県内でも有数の長大な横穴式石室をもつ古宮（ふるみや）古墳が盟主と目され，平木1号（ひらぎいちごう）墳を中心とする北半のグループと，山野塚（やまのづか）から神高池周辺に至り，本墳が属する古墳群との2グループからなり，その両者とこれらに係わる村落域全体を統括する存在として古宮古墳の造営主体が形成されていたと推定されている。

勝賀山系を介して西の対辺にあたる生島湾岸地域は，前期の積石塚である横立山経塚（よこたてやまきょうづか）古墳をはじめとして，後期の桑崎（くわざき）古墳，弾正原（だんじょうばら）古墳に至る一群がみられる。

南南東4ｋｍに位置した集落，兀塚（はげづか）遺跡で，古墳時代後期末の掘立柱建物・集落がみられる。

以上のとおり，勝賀山塊とその東方にある独立丘陵石清尾山山塊に挟まれた平地に，本津川・香東川が併走して南北に貫流するこの平野部で，まとまりある古墳時代の地域社会が形成されたものと考えられ，上述のとおり前期から後期に至るまで，数多くの古墳（群）の成立がみられたのである。

後期群集墳に近接しては一般的に古代寺院が造営されるが，高松平野西部では坂田（さかた）廃寺，勝賀（かつが）廃寺が出現している。これらに伴い，坂田廃寺直近で白鳳期の鴟尾破片を窯体芯材に使用した片山池１号（かたやまいけいちごう）窯跡が操業している。

奈良～平安時代には，正箱（しょうばこ）遺跡，薬王寺（やくおうじ）遺跡が知られ，条里型区画と方位を同じくした掘立柱建物群が数次に亘って建てられていた。

本遺跡南方約３ｋｍ余には，六ツ目山北麓から平野東端の白山南麓を見通して設定したと考えられる古代南海道を踏襲した直線道路が東西方向に走っている。高松平野の条里型地割はこれを基線として区画されたものである。これら方格地割は，中世以降にも農地の径溝網として，また時に西打遺跡，香西南西打遺跡，西ハゼ土居（にしはぜどい）遺跡，鬼無藤井遺跡等の軌を一にする各種溝跡や城館の周囲を画した環濠施設等として，明確な地貌・景観を伝えてきたところである。本津川両岸沿いでは，一定の欠落がみられるものの，条里型地割の分布を認めることができる。本古墳地先の左岸側では，推定香川郡条里十～十一条，十七～二十里に亘る範囲の一定部分に径溝網の遺存がみられる。

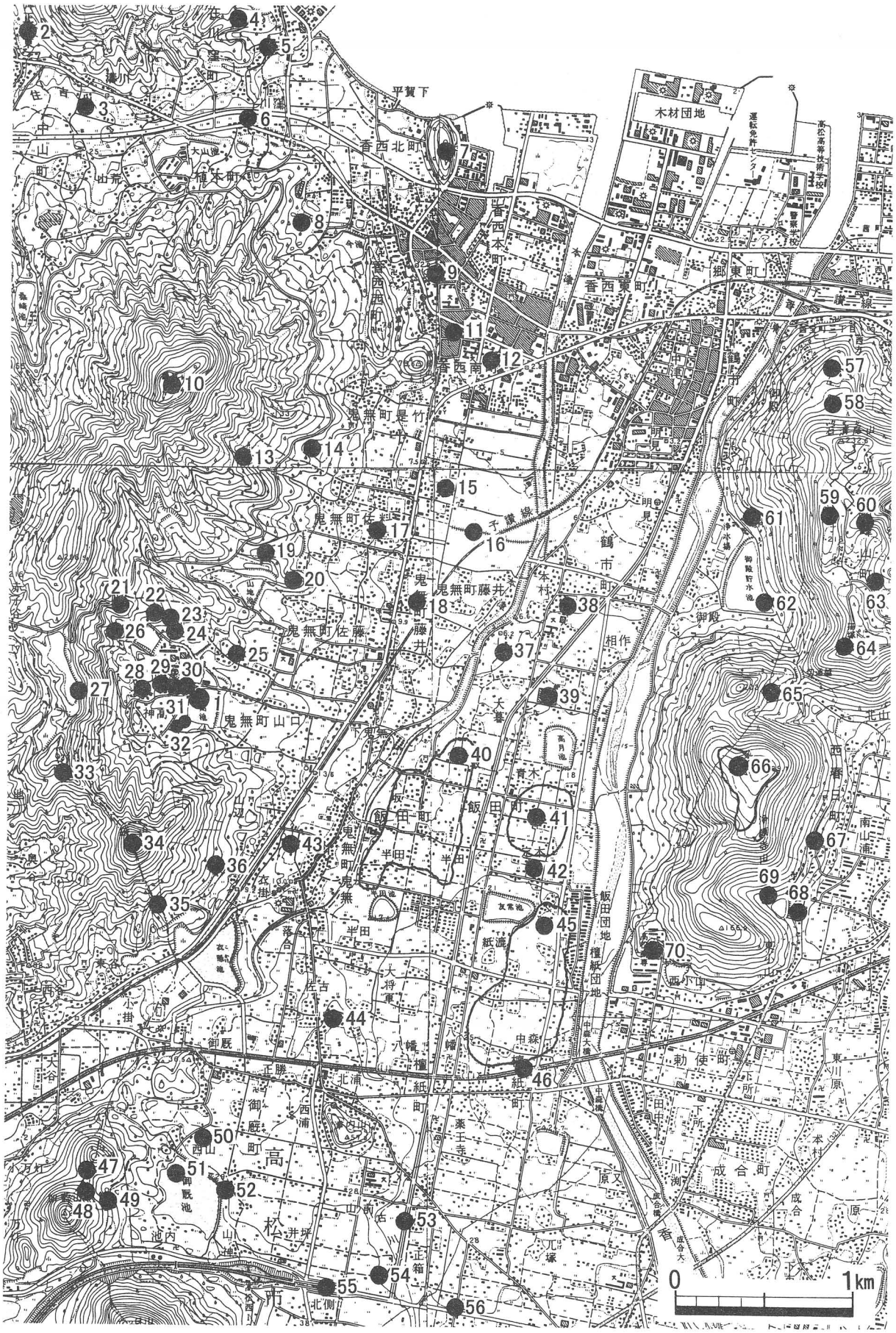
中世では，讃岐の代表的豪族香西氏が歴代の牙城とした勝賀城跡に，山城としての階段状郭配置や切通し，土・石塁の縄張り等に巧緻な城構えを残している。また，山麓に居城としての佐料城が築かれ堀跡の一部が遺存している。「詰の城」勝賀に対する「里城」佐料である。さらに配下部将の40余とも伝える大小の出城が香西・香東・綾南条・綾北条四郡に配置された。近辺では内陸の鬼無・筑城（つづき）・飯田等のほか、内海を意識して海浜部を固めるかのように中山・植松・芝（柴）山・藤尾・作山（つくりやま）等の諸城が展開する。

当地は，律令国家の時期，『和名類聚抄』によると香川（介加波＝かかは）郡・笠居（加佐乎利＝かさおり）郷に属する地域であった。平安時代末期に郡内は香東条と香西条に分かれており，さらに南北朝時代には香東郡，香西郡とよばれている。これが再び江戸時代に至って貞享元年（1684）に香川郡一郡となった。所管の郷は，大野・井原・多配・大田・笑原・坂田・成相・河辺・中間・飯田・百相・笠居の12郷であった。笠居郷は，訓は「加佐乎利・かさおり」であった。江戸期には笠居（かさい）村である。香川郡が東西に分かれた際には香西郡に属している。

明治14年（1881），笠居郷（村）が上，中，下に分離・独立して，各村に戸長がおかれたが，役場は３村連合により中笠居村に設置された。明治23年（1890）には，町村制実施によって現香西地区は中笠居村，下笠居地区は下笠居村，そして現鬼無地区は上笠居村として，鬼無のほか佐料，是竹，藤井，山口，佐藤の５地区からなる村制が布かれたものである。以来，66年間に亘る村制が維持されたが，昭和31年（1957）９月30日，高松市の第５次市域拡張にあたって高松市へ合併し，笠居郷の名称は過去のものとなったのである。

1 神高池北西古墳	15 香西南西打遺跡②	29 古宮古墳	43 鬼塚古墳	57 下ノ山遺跡
2 弾正原古墳	16 西打遺跡	30 こめ塚	44 御厩大塚古墳	58 木里神社古墳群
3 中山城跡	17 佐料城跡・佐料遺跡	31 神高池西古墳	45 紙漉塚群	59 石清尾山10～20号墳
4 住吉神社西古墳	18 鬼無藤井遺跡	32 神高池南西1・2号墳	46 中森遺跡	60 石清尾山９号墳
5 白骨古墳跡	19 善師垣古墳群	33 相越古墳	47 うたい塚古墳	61 御殿神社古墳群
6 植松城跡	20 今岡古墳	34 鬼無城跡	48 加藍山東麓古墳	62 御殿貯水池内古墳群
7 芝（柴）山城跡	21 山口龍神社古墳	35 衣懸古墳	49 山王神社古墳	63 石清尾山２・3号墳
8 勝賀廃寺	22 平木３号墳	36 袋山古墳跡	50 御厩天神社古墳	64 猫塚古墳
9 藤尾城跡	23 平木２号墳	37 王墓古墳	51 御厩池古墳	65 野山1～4号墳
10 勝賀城跡	24 平木１号墳	38 筑城城跡	52 三つ塚古墳	66 浄願寺山古墳群
11 作山城跡	25 大塚古墳	39 相作牛塚古墳	53 正箱・薬王寺遺跡	67 南山浦古墳群
12 香西南西打遺跡①	26 山野塚古墳	40 半田・小坂塚群	54 中間・東井坪遺跡	68 坂田廃寺
13 かしが谷古墳群	27 山口山頂古墳	41 青木塚群	55 中間・西井坪遺跡	69 片山池１号窯跡
14 沢池西古墳	28 空家古墳	42 飯田城跡	56 兀塚遺跡	70 がめ塚古墳

第１表　周辺遺跡一覧



第２図　周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000 を 90%縮小）

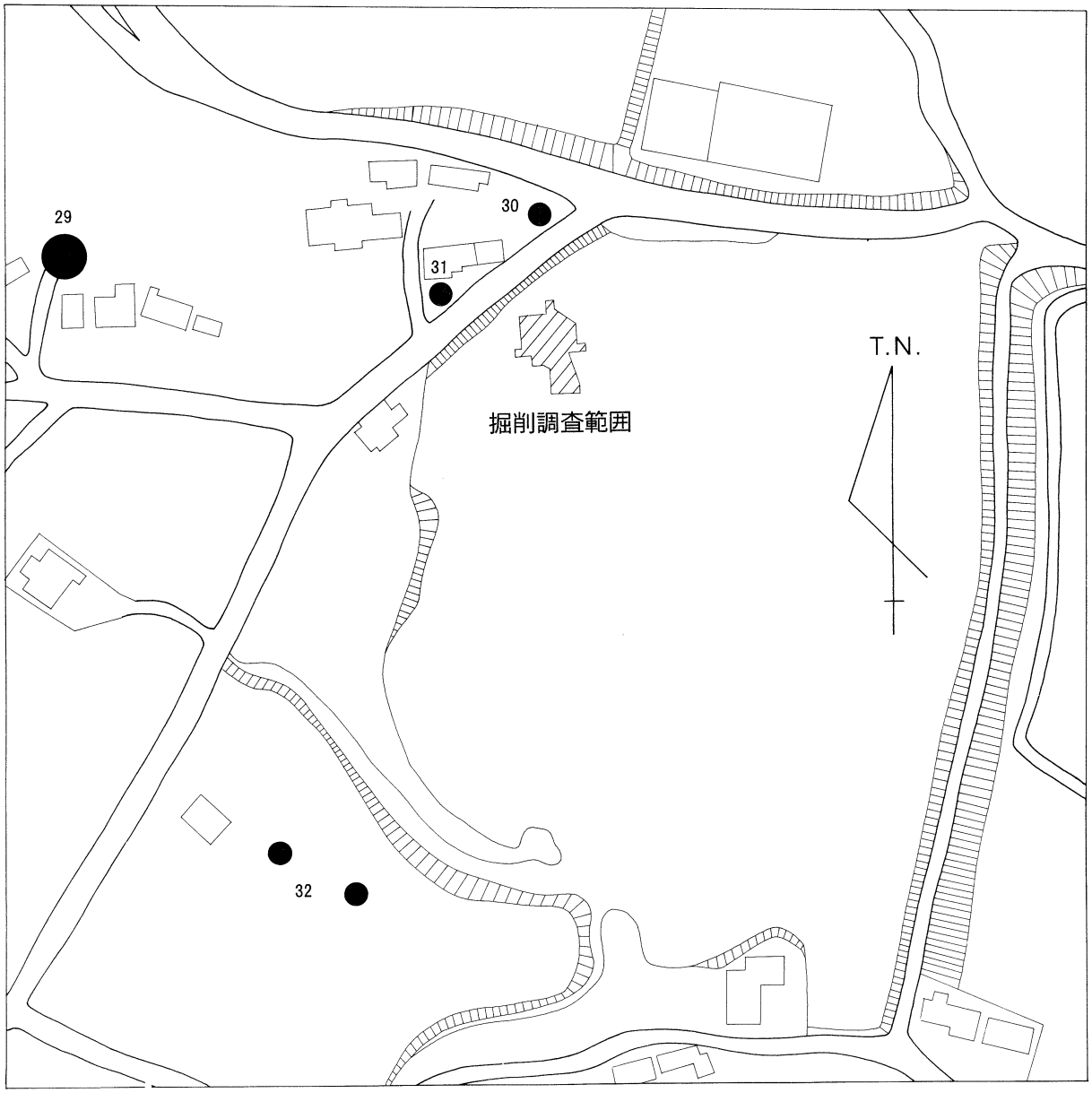
第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の概要

本古墳は，古宮古墳を盟主墳とする神高古墳群に属する横穴式石室墳である。本墳の立地は，現況で平坦部からの比高が確認できる限りの範囲においては古墳群内で最低位にあたっている。

先述のとおり，調査前において極限に近いまでの破壊を被っていたのであるが，この破壊は遅くとも近世の各種開発行為等によると考えられる。なお，調査によって明かとなった石室規模や使用石材の法量は，一定の水準を示すものであり，古墳終末期群集墳に広くみられるような顕著な矮小化は窺われない。

遺構掘削前の地表面は，強いていえば墳丘残土の可能性もあり得ると考えられる半径 10m 弱，高さ約１mの高まりが認められ，その中ほどに，石室幅と想定される約 1.5m間隔に配置された石材一対が見受けられた。付近には，上記と規模が類似した石材が，原位置を離れたとみられる場所に数個散在した状況であった。石室中軸線に当たると推定される位置に，幅１m×長さ 14mのトレンチを設定した。そのトレンチ中点に，石室を横断して中軸線に直交すると想定される幅１m×長さ 10mのトレンチを設け，さらに，奥壁と考えられる位置の側には，これに平行する長さ８mのトレンチを設けた。



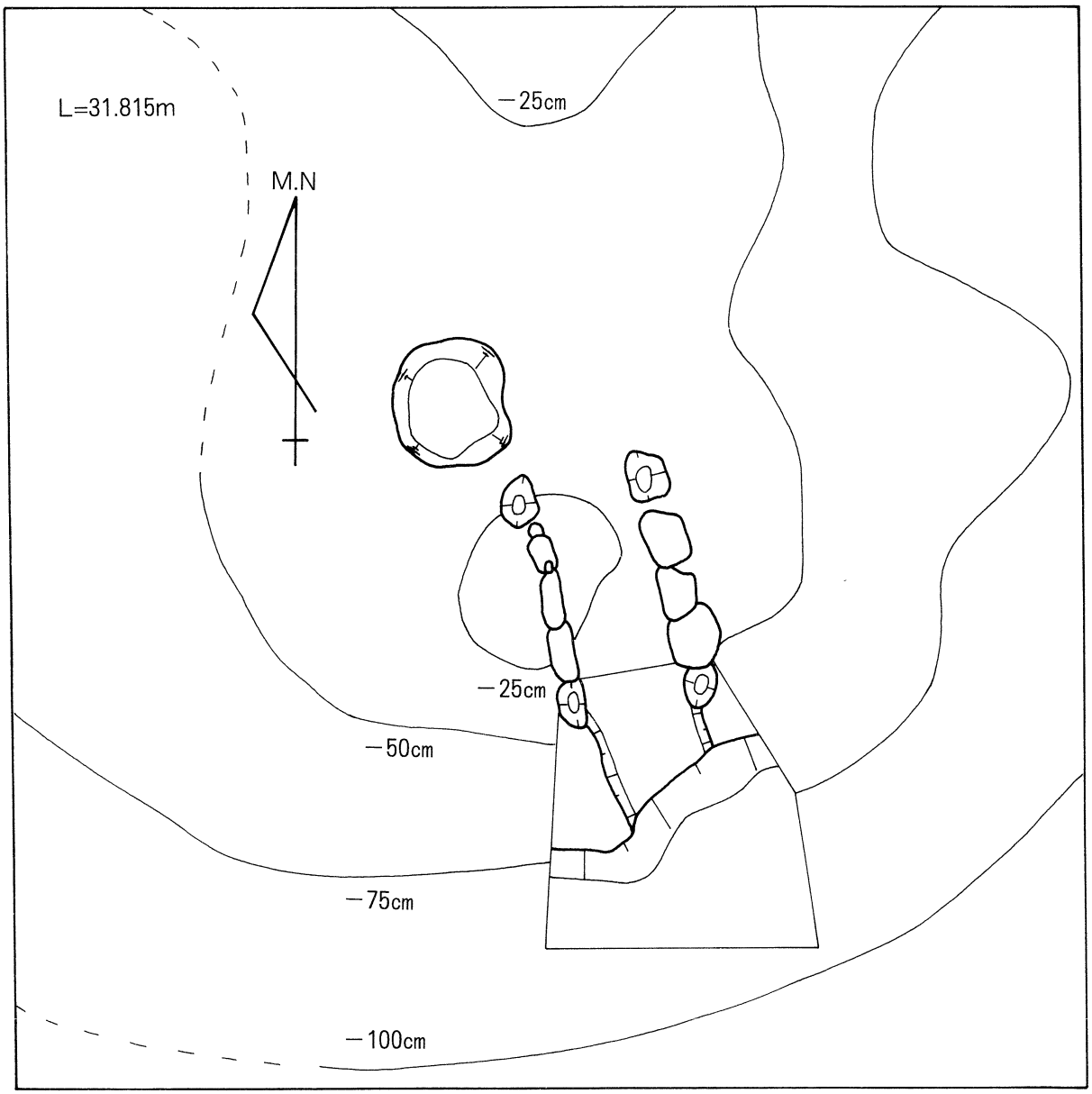
第３図　調査位置図（縮尺 1/2,000）

調査の結果，左右の石室側壁石材（但し基底石のみ）各3石，同基底石抜取穴各2基が確認された。これにより，玄室最大幅1.45m，玄室長4.0m以上，羨道長1.5m以上，石室主軸N16° Wの横穴式石室の存在を確認することができた。周溝（濠）等にあたる遺構は検出できなかった。

出土遺物の総量は，コンテナ20箱であったが，そのほとんどが中世土師質土器鍋・足釜類であった。その他に，若干の輸入青磁碗，須恵器，暗文付土師器破片等がみられたが，古墳造営・祭祀に直接関連するとみられるものは，極めて限られた点数であった。

従って，本墳の年代・性格等についての指標とする資料は，主として石室基底部の規模・形態と立地という範囲に限られており，若干の須恵器・土師器片を参照しながら推定することとなる。あわせて，神高古墳群を構成する各古墳の性格とその形成過程の検討を通じてある程度の補強が可能となる。

これらの点を概括すれば，本古墳は，群内における立地・規模・形態等との係わりからも，群形成が終息に向かう一時期の所産であると考えられよう。



第4図　墳丘平面／遺構配置図（縮尺1/100）

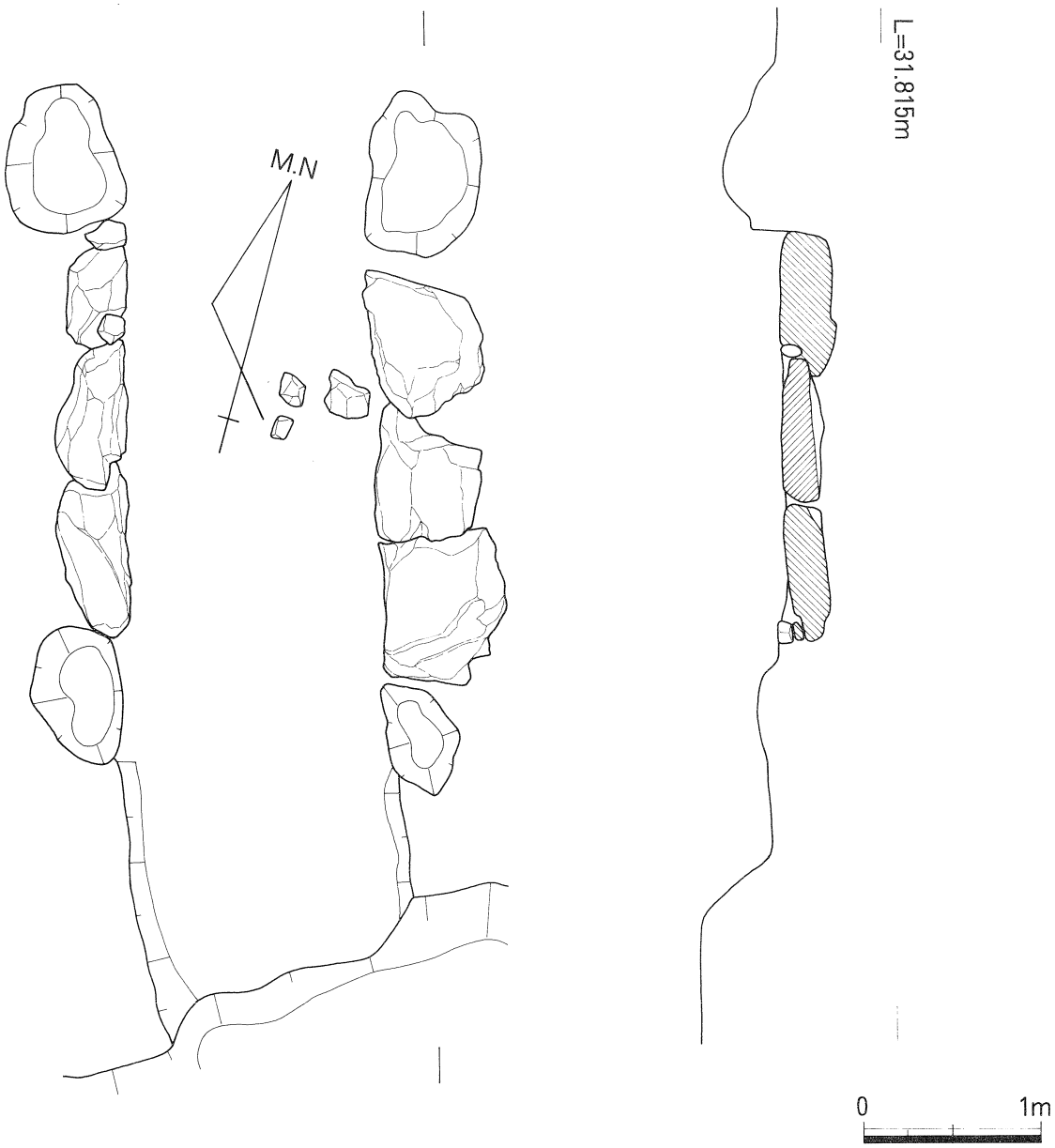
第2節　横穴式石室の概況

発掘調査の結果，墳丘の名残とおぼしい僅かな高まりが認められた周辺で，左右の側壁基底石各3石，同基底石抜取穴各2石分の遺存が確認され，基底部の一定部分に限られるものの，南面して開口するとみられる石室遺構の存在とその範囲が明確となった。

第4図のとおり，玄室最大幅1.45m，玄室長4.0m以上，石室主軸N16°Wの横穴式石室として復元できるものである。羨道は長さ1.5m以上で幅は不明であるが，溝状遺構の存在から無袖式の可能性がある。

検出できた遺構の北端部は，東側壁，西側壁の奥壁方向側に接する各1基ずつの基底石抜取穴である。この抜取穴以北は撹乱層であり遺構は残存しない。従って奥壁の位置・態様は確認できなかった。但し，上述の抜取穴は抜取穴以南の現存基底石を上回る石材が置かれていたことを窺わせるものであり，これが奥壁直近の側壁基底石の原位置である可能性が高いと考えられる。

石室内の床面と推定されるレベルでは角礫の散在が認められた。残存量は極めて少ないが，床石または棺台石が設置されていた可能性は考えられる。



第5図　石室実測図（縮尺1/40）

第6図　墳丘断面土層図（縮尺 1/50）

石室南端に現存する基底石に接するように一対の石材抜取穴が認められるが，この痕跡は現況でみる限り袖石として石室内部に向かって張り出すようなものではない。断定はできないものの，無袖式の玄門石材痕跡の可能性がある。側壁石材底面と想定玄門抜取穴のレベル差は約0.2mである。類似の例から推定して石材をやや深く埋め込んで用いた立柱状の玄門材の可能性が考えられる。

これら石材抜取穴の南端から約1.5mの位置で，通常では羨道とみられる部分を横断するように落差約0.5mの崖状落込みがある。想定羨道部分との切りあい関係でも，落込み部分からの出土遺物の年代観からしても，崖状地形が生じたのが中世以降であると考えられる。従って，羨道部については石材，同抜去痕ともに検出できず不明であるが，恐らく玄室幅よりやや狭まりながら少なくとも残存長1.5m以上に伸びる無袖式のものであったと考えられる。

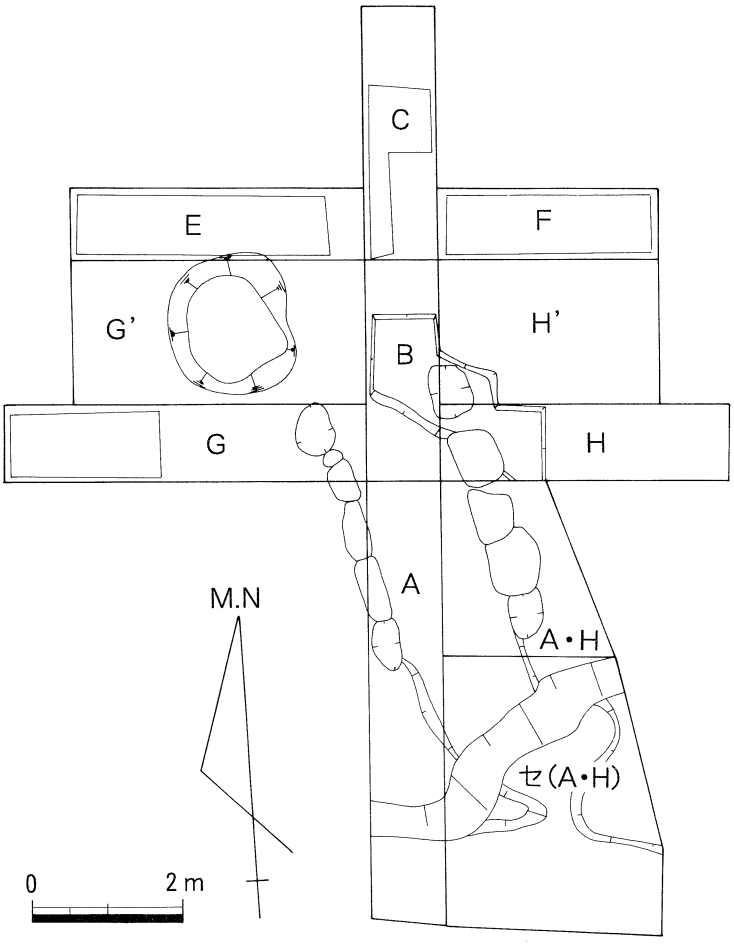
第3節　遺物

①調査区の区分等

本古墳は墳丘その他遺構が中・近世来の開墾等により，全面的な損壊・撹乱を蒙っていた。墳丘は全面的に破壊・撹乱をうけて消滅し，原状を残すものは主体部石室側壁基底石の一部のみであった。

石室床面等に相当する場所についても「遺構面」として確認できる状態ではなく，遺物とその出土状況を層位的に把握することはほぼ不可能であり，原位置を保つ状態で検出された遺物は皆無である。但し，撹乱を受けつつも年代的に古墳に伴うとみられる若干の遺物片は原位置から一定の範囲内にあると認められた。

出土遺物は，破損・分散し原位置を離れている破片の平面的な分布を観察し得る範囲に留まった。そのうち，副葬・葬送儀礼に係ると考えられる数点が散見された(第8図参照)。墳域内外の埋土は全体に撹乱が激しいが，一部分は先行した撹乱と二次的な撹乱の判別がある程度可能で，上下2層に大別して観察した。

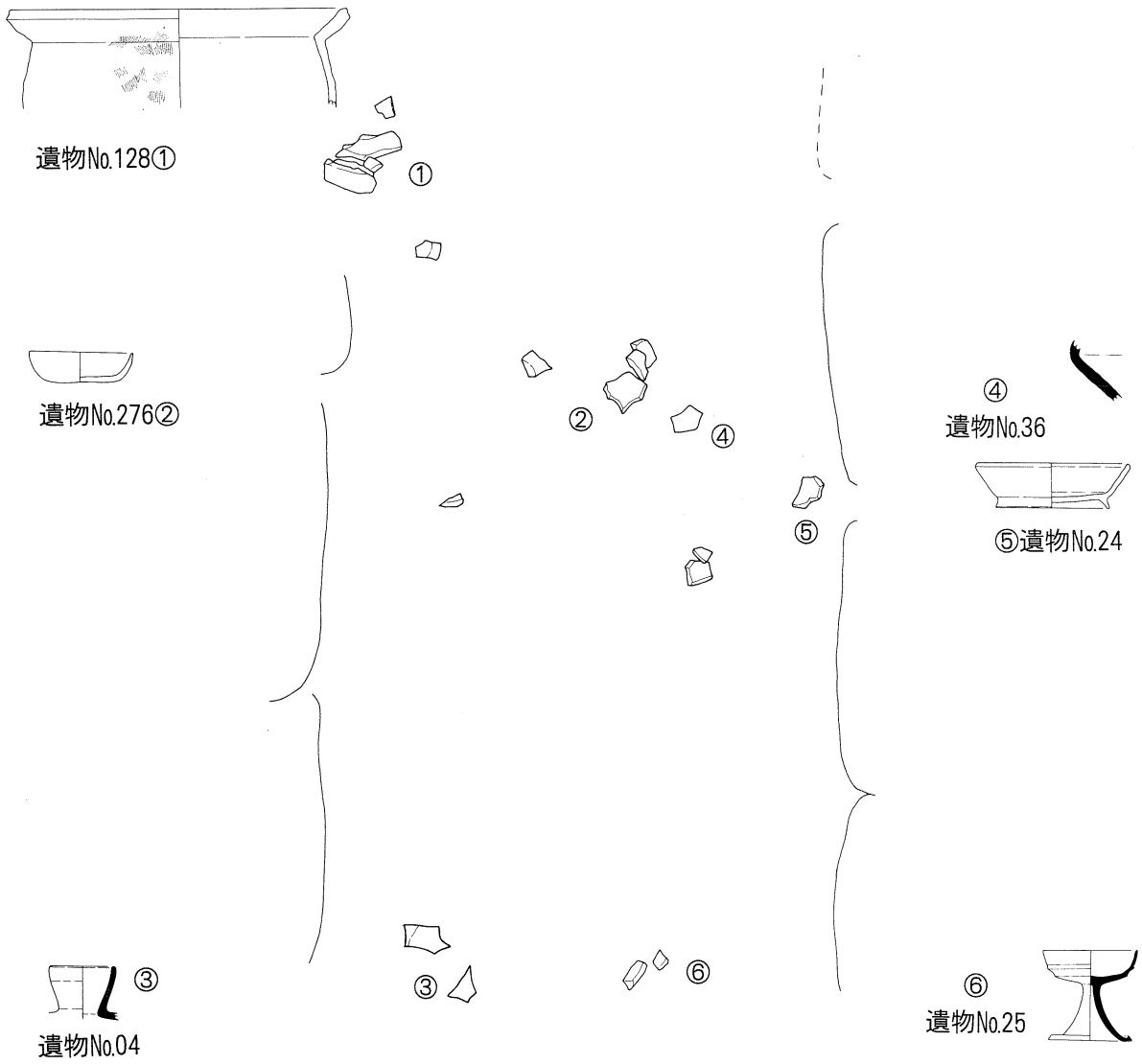


第7図　発掘区設定図（縮尺1/100）

羨道にあたる位置の南半で，企画性には乏しいが人為的とみられる掘削痕跡があり，輸入青磁碗片とともに鉄滓や焼土塊等が検出された。当該期に周辺で何らかの「再利用」を行った可能性も考えられる。出土遺物は，調査当初に仮定石室主軸に沿って設定した第7図のとおりの発掘区単位で取り上げた。

②中世土師質土器類：足釜・鍋及び杯の型式分類について

出土遺物総量はコンテナ約20箱であるが，ほとんどが中世土師質土器類であった。



第8図　遺物出土位置図（縮尺 1/20）

全面的な撹乱のため，原位置を保つ遺物の検出例は皆無であった。発掘調査の主な対象は「古墳」であるが，時期的にそれに見合う検出遺物は極めて僅少であり，古墳造営・追葬年代等の検討に充てられる資料は乏しい。他方で，中世土師質土器煮沸具や同杯・皿類が多量に出土したことから，本報告書の出土遺物に関する記述の大部分をこれらが占める。

横穴式石室墳の調査の際に，この種土器が住居等としての古墳「再利用」を示唆する状況で検出される例は時折見られる。但し，本例のように中世土師質土器が出土遺物の圧倒的部分を占め，通常の住居址・集落遺跡とするには面積当りの遺物量も過大である場合，その種の「再利用」とするのは困難である。煮沸具等中世土師質土器類の多量出土は，土器生産遺跡が遺存する可能性を示唆するとも考えられる。これを裏付けるように，若干の焼土塊が調査区内で検出されたが，土器焼成に係わるとみられる遺構は確認されなかった。現状では，積極的に本古墳近傍に中世土師質土器煮沸具類の生産遺構が存在したとは考えられないが，その可能性については留保すべきであろう。

さて，これら中世土師質土器の煮沸具類（鍋・足釜）等にみられる形態・胎土・調整・焼成等の遷移は，若干の先後があるが国分寺楠井遺跡の遷移と対比でき，一定期間は併行関係にあったことが窺える。国分寺楠井遺跡では，窯跡・土器溜りが確認され，土師質土器足釜・鍋を中心に，瓦質ないし須恵質の擂鉢，土師質土器甕を主要4器種として焼成した生産遺跡の実態が明らかにされており，県内の典型的な型式設定と編年が提示されている（佐藤 1995）5)。

本遺跡の土師質土器等は，擂鉢・甕は皆無ではないが少量で，遺物の多くは足釜・鍋及び杯・皿類が占める。このうち足釜・鍋の型式は，国分寺楠井遺跡での分類を概ね適用できると判断される。土師質土器足釜・鍋の型式分類は，楠井例にならい下記のとおり設定した。鍋の一部にその型式分類に属さないとみられる一群があり，提示されているA，B２種類に加えC類を設けた。時期的にA，B類に先行する可能性が考えられる。なお，本遺跡で個体数の少ない擂鉢・甕等については，楠井遺跡例を参照しつつ個々に観察した。

[足釜]：羽釜状に口縁部直下に鍔をめぐらし，体部には脚３本を装着して，底部に格子叩き目を施すものである。鍔部形成には，接合法と屈折法，一体接合法の３者が認められている。

〈A類〉は，このうち，口縁部と鍔部の長さがほぼ同じかやや鍔部の長いもので，口縁端部に内傾する面をもち，口縁部と鍔部の端面が平坦面をなすものである。次のとおり細分類されている。

AⅠ類＝水平に長く伸びる鍔部をもち，鍔部端面に強いヨコハケ調整を施して平坦面をつくる。

AⅡ類＝やや鍔部が短く，鍔部端面のハケ目調整もなくて，口縁・鍔端面はやや丸みを帯びる。。

〈B類〉は，口縁部が鍔部より長くて口縁端部に面をもたず，鍔部直下に圧痕１～２段があるものがある。

BⅠ類＝鍔部は接合法で，端部に強いハケ目。体部には縦ハケと下半に及ぶ叩き目。半球形底体部。

BⅡ類＝鍔部は接合法で横ナデ，稀に体部に縦ハケ。叩き目は底部に局限。底体部は境で屈曲。

BⅢ類＝鍔部は接合／屈折法で横ナデ，稀に体部縦ハケ。叩き目は底部に局限。底体部は境で屈曲。

BⅣ類＝鍔部は一体接合／屈折法で横ナデ，体部無調整。叩き目は底部に局限。底体部は境で屈曲。

〈C類〉は，口縁部と鍔部の分化が不明瞭で，鍔・体部が一体化した瘤状の縁帯となるものである。

[鍋]：直線的な体部から口縁部が屈曲して伸び，器高が口縁の１／２に満たないものである。底部に格子叩き目を施す。足釜同様に脚３本をもつ例がみられる。

〈A類〉は，このうち，屈曲点から直線的に伸びる口縁をもつものである。

AⅠ類＝口縁端面にハケ目を施して平坦面とし，口縁内外・体部外面にハケ目を多用する。

AⅡ類＝横ナデや口縁部内外の強いナデで口縁端面に凹面を形成。端面は外傾・直立気味の二様。

AⅢ類＝幅広く外傾する口縁端面をもつものである。

AⅣ類＝体部から水平に近い直線で延びる口縁端面をナデで丸く仕上げる(楠井の設定にはない)もの。

〈B類〉は，口縁部が屈曲点から内彎しながら立ち上がるものである。

BⅠ類＝内傾する口縁端面をもつ。鉄鍋模倣とみられるシャープな屈曲・内彎を示す。

BⅡ類＝口縁部に対し，直交・外傾する端面をもつ。

BⅢ類＝直立気味の口縁端面をもち，鍋AⅡの口縁内面を強く内彎させたような形態をみせる。

BⅣ類＝口縁端部をつまみ出して，内側に折り込むようにつくるものである。

〈C類〉は，楠井報告例に見ないタイプ。体部～口縁の器厚の差がない。移行部位の屈曲・彎曲の形成状況や断面形状等により区分した。層位的に比較できる出土遺構がないがA，B類の先行形態か。

CⅠ類＝内彎する体部から口縁端部にかけて，断面S字状を示すように彎曲するもの。

CⅡ類＝彎曲の少ない体部から口縁端部にかけて，断面如意状に緩やかに外反するもの。

CⅢ類＝体部から口縁端部にかけて，一定の角度を持って屈曲するもの。

[杯・皿類]：土師質土器杯・皿の分類については，『空港跡地遺Ⅳ』（佐藤 2000）20)に準じた。

③各発掘区出土の土器・遺物類

発掘区（第７図参照）単位ごとの出土遺物のうち，図化したものは次のとおりである。

AH区（AⅠ，Ⅱ，A－Bｂｅｌｔ）

01は，青磁碗片である。復元口径15.8ｃｍ。調整，焼成ともに精良。外面は，最大約２ｃｍ幅の花弁を１片おきに交互に重ね合わせた鎬連弁がめぐる。高台部を欠く。竜泉窯系で，13世紀代か。

02は，土師質土器鍋ＣⅠである。本古墳出土の土師質土器鍋・足釜の型式は，国分寺楠井遺跡での分類

を適用できるものが多いが，本例のように体部と口縁部の器厚の差がなく，口縁部への移行部位で屈曲や稜の形成なしに彎曲するものをC類とした。これは楠井で見られないものである。そのうち02は，体～口縁部にかけて断面S字状を呈している。これをＣＩとした。焼成は堅緻である。

03は，土師質土器杯ＤⅡ-8である。底面ヘラ切り・板目を残す。羨道部南半の小片と接合。底•体部間に明瞭な境界が認められず，口縁～体部は回転ナデ仕上げ。体部上半の一部分に黒い色素附着が認められる。灯火具としての用途が推測される。13 世紀末～14 世紀前葉に当たるものである。

04 は，須恵器平瓶口縁部片である。石室南半部に相当する撹乱層のうちの下層部分から出土した。焼成は良好であるがやや軟質である。口径 7.2cm，残存高 5.9cm。体部との接合部位周辺の破断面から，以下の成型技法が推定される。ロクロによる体部形成を終えた段階で頂部中央に径数cmの円孔が残り，そこから 1.5 cmほどの間隔をおいた体部外周側に口縁の取り付け孔（径 3 cm弱）が穿孔される。中央の孔を円盤状粘土で塞ぎ，穿孔位置に口縁部を圧着，基部に粘土紐を捲いて，接合部位の内外面をナデ調製で仕上げるものである。口縁は外周寄りに偏心し，その端部は外傾すると想定される。田辺編年 TK209 併行期のものであろう。

05-1，05-2 は，鉄釘片である。現状では 2 片に分かれ，接合しないが，出土位置が近接しており，同一個体の可能性がある。他に類品は検出していないが，棺釘であろう。

06 は，有溝土錘である。別称「工字状」土錘。平面形が長円の分厚い土球で両長側縁に溝を設ける。現況で249.0ｇを測り，欠失がなければ300ｇ近いか。胎土に径１～５㎜の石英•長石粒を多量に含む。中世の所産で，浜ノ町・有溝１ａ類（乗松 2004)6）に属すると考えられる。

07 は，土師質土器杯ＤⅡ-６である。底面ヘラ切り•板目。口縁～体部は回転ナデ仕上げ。口径・器高ともに類品の 03 を上回る。13 世紀第 3～4 四半期であろう。

08 は，土師質土器小皿ＣＩ片である。底部は糸切りである。

09 は，土師質土器足釜ＢⅣである。「国分寺楠井」による分類であり，口縁部が鍔部より長く，口縁端部には面を形成しない。体部外面は無調整である。

10 は，土師質土器鍋ＣＩである。分類基準は 02 に同じ。体部～口縁部の器厚に差がなく，稜の形成や屈曲なしに体～口縁へと外彎する。内面にヨコ，外面にタテ方向のハケ調整を施す。

11 は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔部を接合し，直下に約 7 ㎜長の爪形圧痕が約 3 cm間隔でめぐる。

12 は，鉄刀片である。関（まち）部付近で，残存長が5.2cmの断片である。身部分が約1/3，茎（なかご）側が約2/3を占める。残存長5㎜の刃関（はまち）がつけられている。棟側の関は明瞭でなく茎から刀身側へと緩やかに僅かに幅をひろげるつくりとなっている。錆（さび）のためやや不明瞭であるが，棟～刃の間の平（ひら）部分は，鎬（しのぎ）によって刃関（はまち）側を1/3，棟寄りの鎬地（しのぎじ）側を2/3 に区分する鎬造（しのぎづくり）とみられる。錆の進行度合いが他の鉄製品に比べて小さく，古墳に伴うとみるより，中世の可能性がある。

13 は，土師質土器足釜ＢⅡである。口縁部は端面を持たず，接合でヨコナデされた鍔部より長い。鍔の下面には，煤の附着が顕著である。

14 は，土師質土器脚部である。若干の摩損はあるが，端部の折損を免れた鍋又は足釜脚である。先端径 1.5cm。脚部は，中世の遺跡でよく見る遺物であるが，基部に比べ端部が確認できる例は比較的少ない。

15 は，瓦質土器甕底部・同体部片である。Ｂ区出土のものが接合した他，同一個体と見られる体部片があった。器表面は暗灰色を呈しており，全面に格子目叩きを施す。亀山焼第二群 21)（13 世紀）にあたる。

AH 区（AH Ⅰ，Ⅱ，A - Hbelt）

16 は，須恵器蓋(有蓋高杯)である。蓋体部から口縁への屈曲・移行部位で凹線を一周させる。頂部には低平なツマミをもつものであろう。TK209 併行期。築造および葬送当初の副葬品か。

17 は，須恵器杯である。羨道部南半と推定される位置からの破片と接合している。回転復元し完形となる。底部はヘラ切り離し,顕著な板目圧痕を残す。

18 は，須恵器碗底部片である。粘土ひもを軽く圧着しただけの簡略で形骸的な貼付高台がつく。十瓶山窯跡群産と考えられる。13 世紀後葉までのものか。

19は，土師質土器足釜ＢⅢである。鍔の成形に際して,体部の鍔部直下にやや傾斜した長さ約1.2㎝の爪形圧痕が1.6㎝前後の間隔で連続して施されている。この工程は手先で鍔上面のナデを受け止めながら進行するので，鍔下面は僅かに波状の凹凸を呈することになる。国分寺楠井第Ⅱ期第2段階相当。

20は，須恵器平瓶である。体部は撹乱を受けた土層ではあるが，石室の玄門付近にあたる位置から出土している。また，口縁部は，体部から約3ｍ南寄りの羨道部想定地で撹乱層から出土している。厚みを見せる重厚な体部下半はヘラ削り，上半は肩部でやや強く張り出す成型で，回転ナデ後のカキ目が著しい。頸部は直立して，体部上面ほぼ中央の穿孔部に接着され，漏斗状に直線的に軽く開く。TK209併行期であろう。

21は，瓦質土器甕口縁・頸部片である。体部を欠き詳細は不明だが，焼成や口縁部断面形等からみて亀山焼第二群[21]（13世紀後半）と考えられる。

22は，瓦質土器鉢底部片で，内底面付近に磨耗がある十瓶山窯跡群産捏鉢。12世紀後半～13世紀前半。

23は，須恵器高杯である。焼成堅緻。脚部下半を欠く。脚部「透かし」は2段で，上下『透かし』中間部が「節」状に僅かなふくらみを見せ，2条の沈線がめぐる。杯部の下端と中ほどをやや下がる位置にそれぞれ沈線をめぐらし，杯部底の外面に外周約2／3幅を沈線で区画し，2～3㎜間隔で放射状の線刻を施している。TK209併行期のものであろう。

24は，土師器杯である。暗文を施すことにその性格の一端が象徴されるいわゆる『畿内産土師器』である。出土は玄室部分とみられる位置であるが，細片であり撹乱も受けているため，追葬における副葬品か玄門外墓前祭祀の供献かは，正確には捉え得ない。復元口径16.6㎝，器高5.0㎝。ハ字形に裾が広がる高さ約1.0㎝の高台をつける。器壁は高台脇から外反しながらほぼ直線状にのびて，丸みをつけた口縁端部に至る。口縁端直下の内面には凹線がめぐる。暗文は器壁内面に斜め右上りで，幅約3㎜の放射状に施されている。杯Ｂと分類されているもので，平城Ⅱ期[22]であろう。

25は，須恵器高杯である。一部欠損するが，数箇所に散在した破片を接合・復元し，ほぼ完形となる数少ない1点。脚部に「透かし」を持たない小ぶりなもの。焼成堅緻で，重ね焼もしくは窯道具の影響か，脚台内面の接地部近くに自然釉が薄く認められる。杯部は，体部と底部の境界部分に強いユビナデを加えて，約45度に外傾する幅1㎝弱の凹線状区分帯を形成する。脚部はラッパ状の顕著な広がりをみせ，裾部外縁を一旦薄く延ばして上方へ引き上げ，外側へ折り返して端部を裾広がりに収める。TK209に相当しよう。

26は，鉄製鉸具(かこ)である。鞍・面繋・胸繋・尻繋を革帯等で固定する際の留金具である。鉄棒で馬蹄形状の環をつくり，基部側に自在に動く直線状の刺金(さすが)を取り付けて爪先側の帯を留めるのが原型であろうが，本例の縁金は鍵穴状の形態をとる。副葬馬具の構成要素として時折出土例をみる。近年では，香川町龍満山1号墳[23]例があり，その遺物№29は，本例とほぼ同型・同大である。

27は，土師質土器高台付碗である。吉備系[24]とみられ，回転ナデの技法は用いず器型は不整形である。断面はやや鋭角の三角形で退化傾向をうかがわせる高台を貼付する。「早島式土器」と呼ばれたものであり，後代のものに法量の縮小(小型化)と高台の簡略化がみられるといい，Ｃ-2期に相当し皿に近い器形に至った本例はその範疇である。13世紀後半～14世紀前半であろう。

28は，備前大甕口縁片で，復元口径42.0㎝。おおよそ間壁編年Ⅲ期[25]14世紀前半頃のものであろう。

29は，土師質土器足釜Ｃである。鍔部は口縁部との分化が不明瞭で，短く太い瘤状の縁帯となる。国分寺楠井Ⅲ期（15世紀中葉～16世紀前半）であるが，本例はその半ば以前のものであろう。

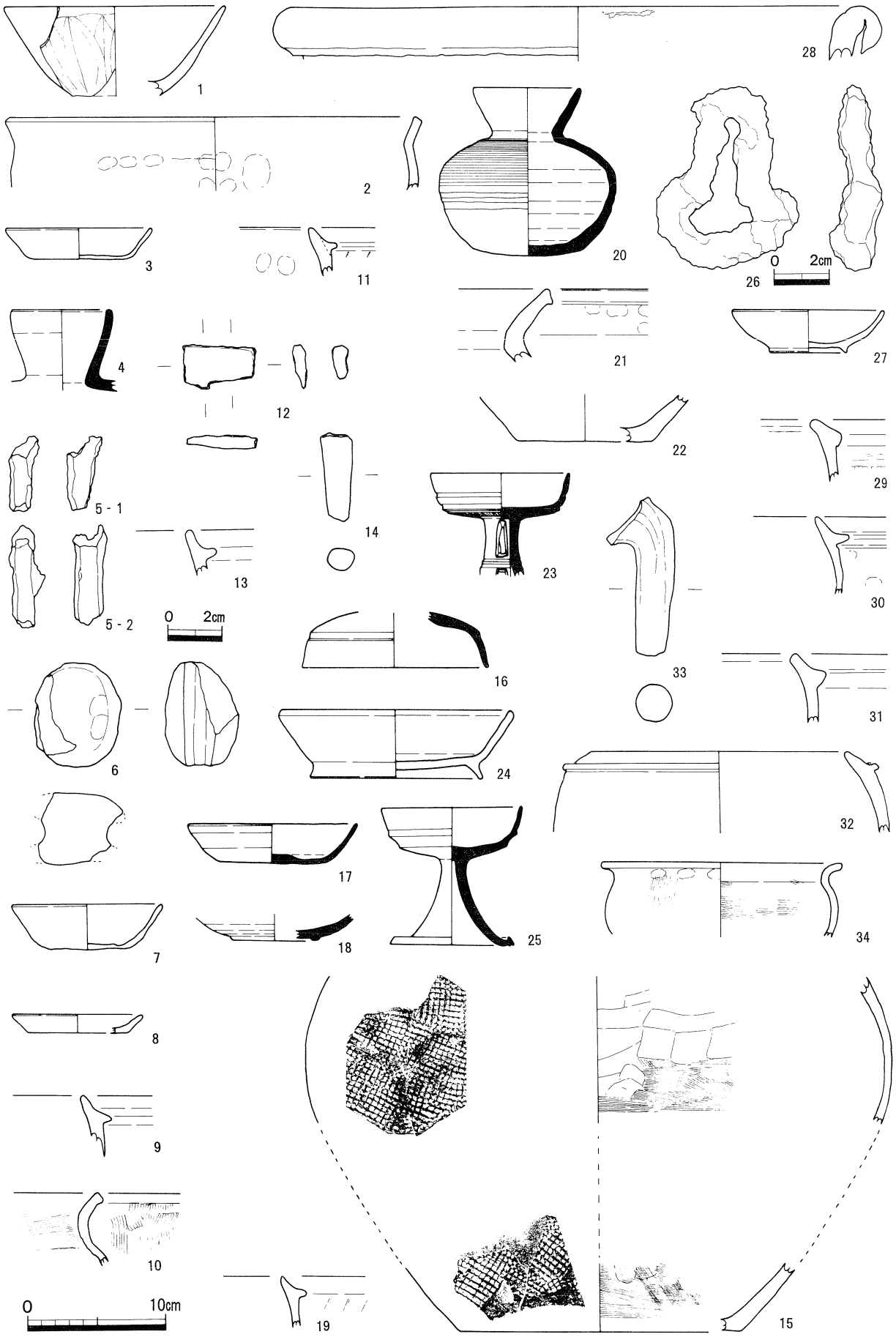
30は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔部下端にヘラ状工具で刻まれた沈線が一周している。

31は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔下端は鍔部形成に際して生じた爪形が約2ｃｍ間隔で廻っている。

32は，土師質土器足釜ＢⅣである。鍔は，断面の基部幅約1㎝，体部面からの高さ約8㎜の分厚い造り。

33は，土師質土器脚部片である。脚としては中位の法量。本体と接合する内彎部に煤あり。下半部欠損。

34は，土師質土器鍋Ｃ1である。焼成堅緻。体部外面に煤が附着。口縁部はＳ字状に彎曲する。内面ヨコハケ，外面タテハケで調整する。口縁上面はヨコナデ。口縁上端から3.5㎝下がった位置が脚部の脱落痕上端にあたる。復元口径17.6㎝で，体部厚さ3～4㎜の華奢な小形品である。



第９図　　出土遺物実測図①(1～34，縮尺 1/4，ただし 5-1，5-2，26 は 1/2)

B区（B Ⅰ，Ⅱ）

35は，須恵器甕口縁片である。高火度で，内外面に顕著な自然釉をみる。口縁外面上半部は幅約3㎝に亘って平帯状に厚さ約3㎜の肥厚をみせる。頸部外面に右上りにはねたような長さ3㎝弱,幅2㎜の直線のヘラ線刻があり，窯印の可能性もあろう。素地内部の「ス」のため4×6㎝ほどの楕円形火ぶくれ＝空洞があるが，焼成時には破裂まで至らなかった模様である。外反・肥厚の形態が多度津町黒藤窯(松本・岩橋1985)32)出土例に類似するが「肥厚部分下端の沈線」は本片にはない。

36は，須恵器甕頸～肩部片である。外面の自然釉が顕著。肩部内面以下は同心円文タタキ。径2㎝ほどの「ス」＝火ぶくれ2箇所が認められる。胎土・焼成・調整等は，35と同一個体の可能性を示している。

37は，土師質土器鍋ＢⅠ口縁部片である。内彎した口縁内面の幅は4.5㎝を測り「鉄鍋を模した」とされる形態の特徴をよく伝えている。

38は，須恵器捏鉢である。類例から推して片口付と考えられる。内面の口縁端直下1㎝あたりに強いナデによる溝状の凹線が形成される。対応するかの様に，ほぼ垂直の口縁端面が約1.7㎝幅でめぐる。東播系で，13世紀末～14世紀初頭のもの。

39は，土師質土器捏鉢である。注口付近の破片(口縁端を欠く)から片口付と知れる。内壁全面のヨコハケ目は5～6条／㎝。外面はタテハケの後，内壁のハケ工程を外側で支えたとみえる凹凸のオサエがある。口縁は器壁の延長線にほぼ直角な端面をつくり，内外双方の稜が僅かに引き出された形態を示す。備前Ⅰ～Ⅱ期25)の模倣とみられ，国分寺町楠井産で13世紀のものである。

40は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁外(下)面に粗いタテハケ。煤の附着がみられる。

41は，土師質土器杯片ＤⅡ-5である。器壁外面上半にナデによるヨコ方向の凹面2段が形成される。13世紀第2～3四半期にあたる。

42は，土師質土器杯片ＥⅠ-3である。底部は遺存が微小で断定できないが，糸切り離しと推測される。

43は，土師質土器鍋ＣⅠである。口縁部は内面ヨコハケ，外面タテハケで調整し，端部はヨコナデ。Ｓ字状に彎曲し34に類似するが，分厚いつくりでより古相と見受けられる。推定口径20cm未満の小形品である。

44は，土師質土器鍋ＣⅡである。口縁は内・外両面ともにヨコナデである。

45は，土師質土器鍋ＢⅠである。煤付着が著しい。内彎ぎみの体部内面から一旦屈曲・外反しシャープな稜を形成して更に顕著な内彎をみせ口縁端に至る。端部は内傾する平坦面。明瞭な鉄鍋模倣形態である。

46は，須恵器碗口縁片である。十瓶山窯跡群(西村)産。内彎しながら引き上げられた器壁は，肥厚して丸みを帯びた口縁端部にまとめられる。焼成良好である。内面のヘラ磨きは認められない。底部（高台）欠失で詳細不明であるが，ＡⅡ－7～8期相当で13世紀第1四半期であろう。

47は，土師器甕ＥⅡ－2口縁である。復元口径は37.7㎝。器表面は胎土に含まれた微細な砂粒が風化で脱落した痕跡によりアバタ状陥没を呈する。ほぼ真っ直ぐに上部へ伸びた胴部上端が屈曲・外反し，直線的に斜め上方に延長されて口縁を形成する。器壁に比し口縁が分厚い。口縁端部は断面半円形に近いが，上下両側からナデられ真ん中は凹線状に形成される。体部外面は指頭圧痕が著しい。11世紀中葉のものであろう。

48は，土師器杯である。暗文（復元時に摩損して現存資料ではごく一部の痕跡のみ）を施す，いわゆる「畿内産土師器」とされるものである。内壁はやや右傾斜の放射状。見込み面は粗い散漫な螺旋状である。精良胎土で水簸によるとみられるが，焼成は低火度で吸湿性があり脆弱である。断面ハ字状に開く高台を有する「杯Ｂ」タイプである。飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）期か。

49は，土師質土器鍋ＡⅡ（口縁端面直立）である。口縁上面は粗いヨコハケが顕著で，外壁面はタテハケを施す。灰白色で堅緻な焼成である。

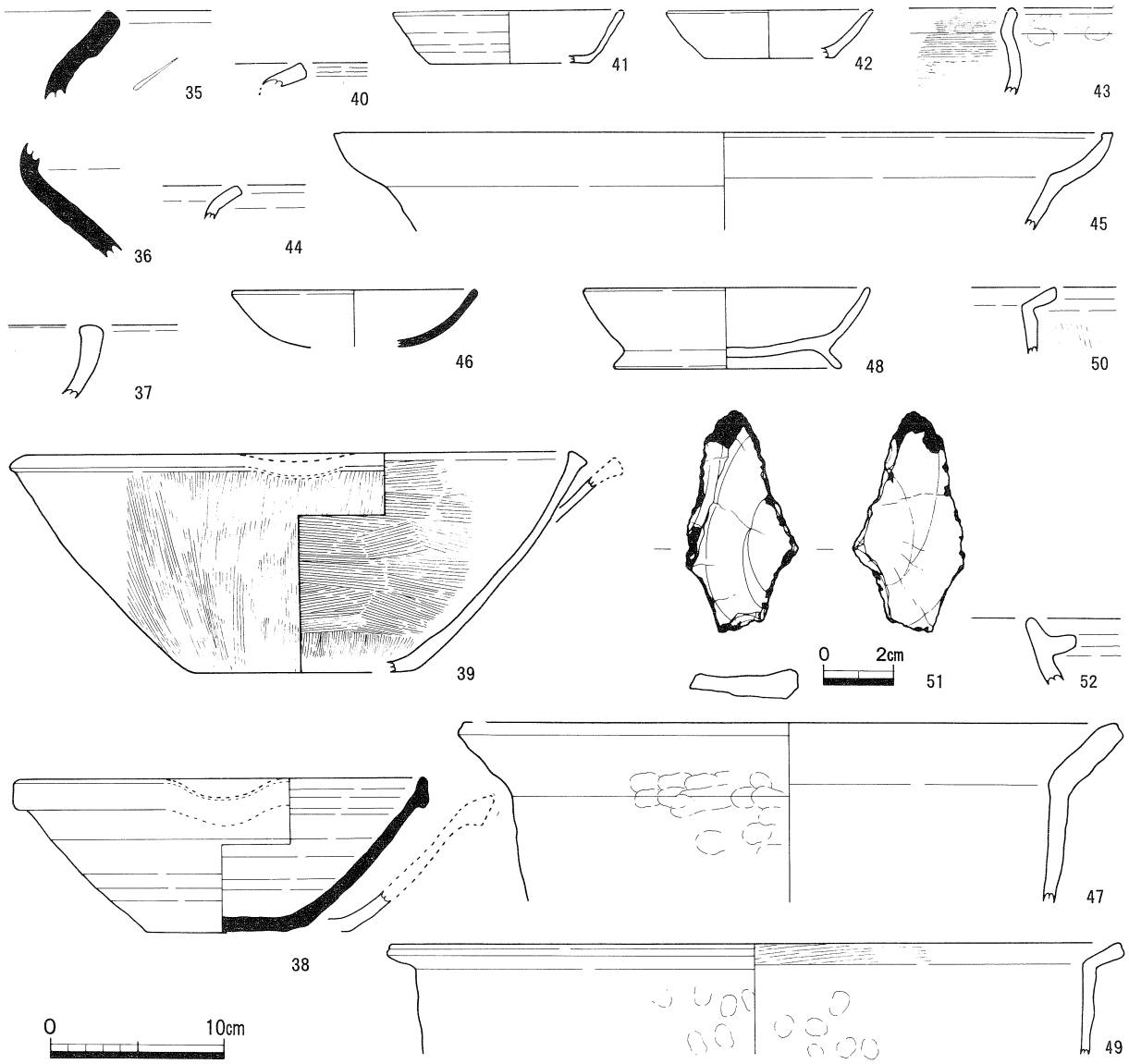
E区（E Ⅰ）

50は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁上面ヨコハケ，外壁面タテハケの調整は49とほぼ同巧である。

51は，サヌカイト製翼状剥片である。一部に2次的な欠損部分がみられるものの，形状の諸特徴や表面の風化・水和層の状況等から，一見して明瞭な瀬戸内技法による翼状剥片である。本遺跡がその山麓部に位置する勝賀山系は，サヌカイトの巨大な原石産地国分台遺跡群が立地する五色台連山の東端の一角を占めている。ここでこの資料が確認されたことはむしろ当然とも言えよう。出土位置は墳丘平面図（第4図）と対比してみれば，北側裾部ないし周溝にあたると推定される場所である。一帯は撹乱が著しく明確な土層の確認は困難であるが，古墳造営時の地山もしくはそれに近い層位の可能性があろう。

F区（F II）

52は，土師質土器足釜BⅣである。口縁端部はゆびナデで丸みをつけまとめている。肉厚く重厚な造り。



第10図　出土遺物実測図②(35～52，縮尺1/4，ただし51は1/2)

G区（G I，II）

53は，青磁碗底部である。釉は5Y5/2灰オリーブの発色である。見込みには不鮮明ながら2重の輪旋円圏文の中に花弁を形象化したとみられる曲線文様の陰刻がある。胎土目ふうに乳白色の自然釉化した斑点2点がある高台内と畳付とは無釉。胎土(灰白2.5Y8/2)・調整・焼成ともに精良である。龍泉窯系青磁である。14世紀代か。

54は，土師質土器小皿片である。底部はヘラ切り離しである。ⅢBⅢ－3。

55は，土師質土器足釜BⅢである。体部上端を外へ曲げその基部から口縁を立ち上げる「口縁2技法」(佐藤1995)5)が用いられている。口縁部はヨコナデで成形し，体部外面はタテハケ，内面はヨコハケ調整。

56は，土師質土器足釜BⅣである。短小な口縁及び鍔部が強いヨコナデ調整を受け，肉薄となっている。

57は，土師質土器足釜BⅡである。短い鍔部に比して口縁は長く伸びる。体表に微弱なタテハケがある。

58は，土師質土器足釜BⅡである。57とほぼ同巧であるが，全体に，より小振り・薄づくりである。

59は，須恵器碗底部片である。小片で細部不詳であるが碗AⅡ－9期相当とみられ，十瓶山窯跡群(西村)産。13世紀後半であろう。

60は，土師質土器足釜BⅠである。鍔端部に明瞭なヨコハケが施され，長くのびる口縁部は強く内傾する。鍔下面基部には顕著な爪圧痕がめぐる。体表はタテ，内面はヨコの粗いハケ目が目立つ。

61は，土師質土器鍋BⅠである。平坦な口縁の端面と内彎面が端正なナデで仕上げられる。鉄製鍋の形態・質感を写すに意を用いたことが知れる。器表面の煤附着が著しい。

62は，土師質土器鍋CⅡである。5㎜未満の薄手の体部から口縁部へと，屈曲点を形成することなく緩やかに外反し，口縁端部は伸長方向に垂直な平坦面をつくる。焼成堅緻である。

G'区（G'Ⅰ，Ⅱ-Ⅲ）

63は，土師質土器鍋AⅣである。「国分寺楠井」の分類にはみられないもので，短く外反・屈曲させた口縁端部をヨコナデで丸くおさめている。

64は，瓦質甕底部である。復元底径15.0㎝。西村遺跡山原地区N14-SK03例26)とほぼ同形同大である。

65は，須恵質土器広口瓶底部であろう。復元底径8.6㎝。二次的な加熱を受けた可能性がある。

66は，土師質土器鍋AⅠである。一連の粗いタテハケで口縁外(下)面と体部外面を調整した後，体部及び口縁の内面・端面をやや密なヨコハケ調整。この際に口縁端面の下端がまくれて口縁外面にはみ出す。

67は，土師質土器足釜AⅡである。器表面に顕著なタテハケ，口縁内面に僅かなヨコハケを施す。口縁外面・鍔上面はナデ。口縁端部には平坦面が形成される。

68は，土師質土器鍋CⅡである。彎曲の少ない体部から口縁端部にかけて，断面如意状に緩やかに外反するもので，楠井の類型には当てはまらないタイプである。器表面の指押さえ痕が著しい。胎土・焼成・成型・調整ともに，62例に酷似しており，同一工房製の可能性があろう。

69は，土師質土器鍋BⅢである。口縁は基部から端部にかけて内彎しながら厚みを増し，端部で更に内彎を強調して終る。端面は平滑な板ナデで，直立に近く強く外傾する口縁外面の端部近くを指頭痕が廻る。

70は，土師質土器足釜BⅡである。器表面のタテハケ調整が顕著である。

71は，瓦器碗底部片である。焼成は堅緻である。断面台形で畳付面幅3㎜の，退化した高台がつく。和泉産である。Ⅲ-1期20)，12世紀後半であろう。

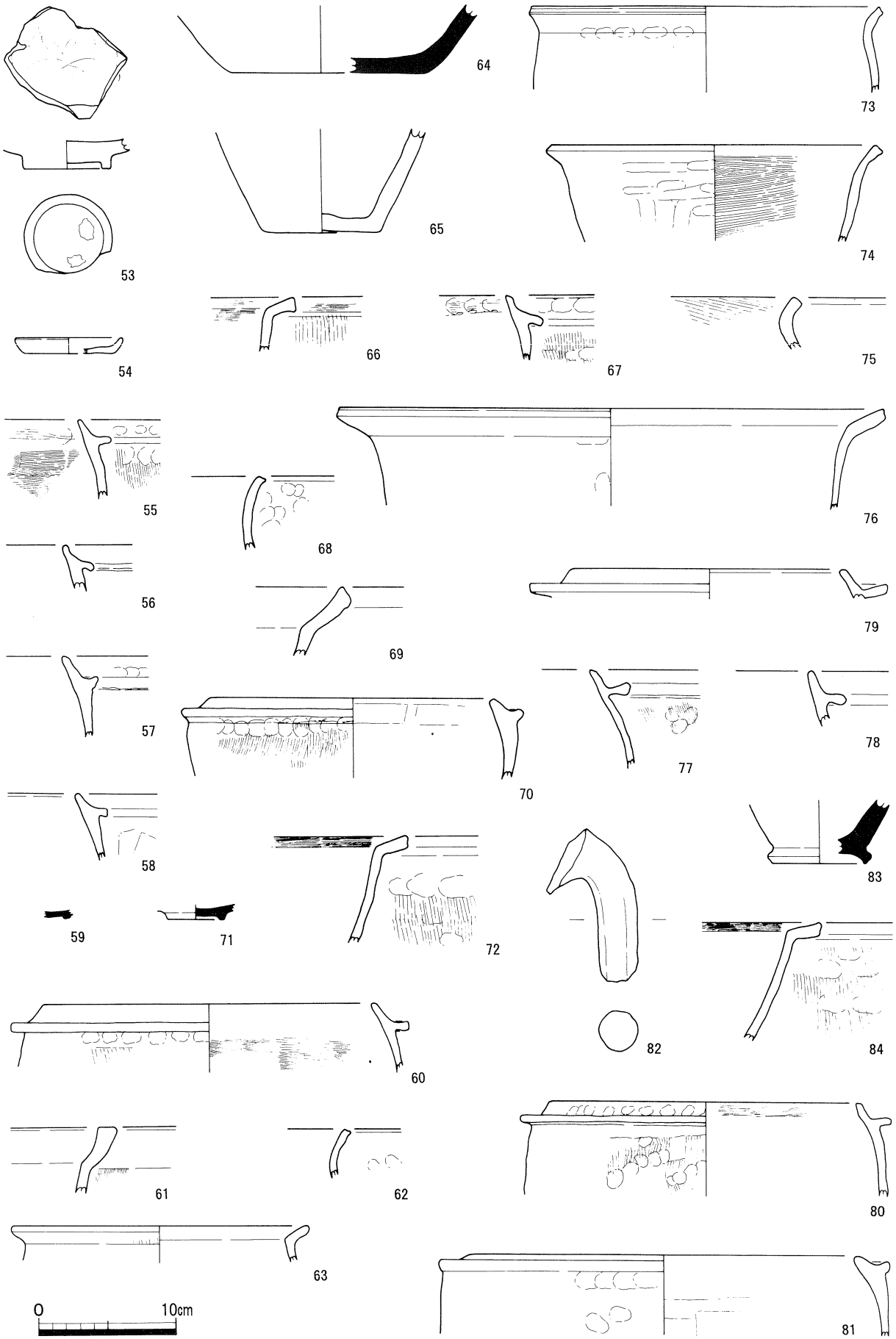
72は，土師質土器鍋AⅡである。口縁部内面のヨコハケが顕著。外面はタテハケであるが，口縁は事後のナデのために小部分の痕跡のみが認められる。口縁基部から約1㎝の間隔を置いて体部を一周するように約2㎝幅の凹面が形成されている。

73は，土師質土器鍋CⅡである。外面タテハケ。内面はヨコハケの後口縁部をヨコナデで整える。器表から口縁内面にかけて煤が附着する。

74は，土師質土器鍋CⅡである。外面は全体に指頭圧痕。内面は顕著なヨコハケ，但し口縁端に幅1㎝弱のヨコナデを施す。焼成堅緻。

75は，土師質土器鍋CⅠである。類品のなかでは肉厚である。口縁内面は3㎜前後間隔の粗い斜行ハケ目を施し端面はヨコナデでほぼ平坦にまとめている。初期的形態か。

76は，土師質土器鍋AⅡである。内面の体部～口縁への屈曲点は，ヘラ（板?）状工具によるナデで稜を形成する。外面の指頭圧痕が顕著で，そのため生じたともみえる口縁下面外周の凹部に，粘土紐を充填して圧延したとみられる貼付痕があり，口縁厚みの不均等を補うものとなっている。



第 11 図　出土遺物実測図③(53～84，縮尺 1/4)

77は，土師質土器足釜ＡＩである。体部外面タテハケ，内面はヨコハケ調整。灰白色の色調が目立つ。

78は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔部接合は外面の口縁基部にかなり深い刻線を巡らせた後，これにやや扁平な粘土紐を挟み込んでいる。鍔端部は厚めに，ヨコナデで丸くまとめている。焼成はやや低火度。

79は，土師質土器足釜ＡＩである。水平な鍔は上面をヨコハケで平坦，端正に調整。灰白で焼成堅緻。

80は，土師質土器足釜ＡⅡである。体部外面にタテハケ，内面口縁端部寄りにヨコハケ。鍔上面基部側寄りに約1.5㎝間隔で爪形圧痕が連続するのは他にない所見である。器表面の煤附着が著しい。

81は，土師質土器足釜ＢⅢである。体部内面はたて方向のヘラナデ痕跡がみられるが，口縁内外面とともに丁寧なヨコナデで仕上げられる。鍔下面基部には爪形が一巡する。また脚部脱落痕があり，この位置から下部約3㎝に脚部取り付け位置の上端があったことが推定できる。

82は，土師質土器脚部片である。基部から中・下位にかけて径の差がさほど見られない。

83は，須恵器瓶底部片である。高台は断面「ハ」字状の裾広がりに短くつくり端面は線状の凹部がめぐる。9～10世紀のものである。

84は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁内面(上面)のヨコハケ，体部外面のタテハケ調整が顕著である。灰白色の堅緻な焼成である。

G’Ｐ区

85は，須恵質擂鉢底部である。内面を6（7?）分割して，4条を1単位とする櫛描条溝を放射状に施す。内面の器表にやや磨耗・剥落があり，使用の痕跡を示す。楠井産当初(Ⅰ期)の須恵質製品。13世紀後半頃。

86は，瓦質擂鉢片である。櫛描条溝は4条(以上)とみられる。楠井ＡⅢ，13世紀中葉であろう。

87は，須恵質碗口縁片である。十瓶山窯跡群（西村）産であろう。高台部を欠き詳細不明であるが，AⅡ-8期を含む時期，13世紀前半のものであろう。口縁周辺には炭素を吸着している。

88は，鉄製鉸具である。折損しているが，本来環状をなす26例の類品である。僅かながら欠損部分があり完形には復元できない。26の「鍵穴」形とは形状を異にし，両短辺の寸法に大小がある「截頭円錐」断面形の隅丸化した形態が推定できる。錆が進行しており原形は視認できないが，Ｘ線透視写真によって，径5～6㎜の長円筒状鉄棒を加工したものと判明している。

89は，土師質土器杯ＤⅡ-5である。底部はヘラ切り・板目。復元口径11.2㎝である。13世紀第2～3四半期であろう。

90は，土師質土器杯ＤⅡ-6である。89に近似するが，底部～体部の屈曲がやや緩慢である。13世紀末か。

91は，土師質土器小皿である。底部ヘラ切り。橙でやや低火度の焼成。ＢⅢ-4，13世紀後半。

92は，土師質土器小皿である。底部糸切り。焼成はやや良。ＣⅠ,13世紀前半であろう。

93は，土師質土器小皿片である。小片で底部不詳であるが，ＢⅢ-3であろう。

94は，弥生土器甕の口縁部～体部の破片である。

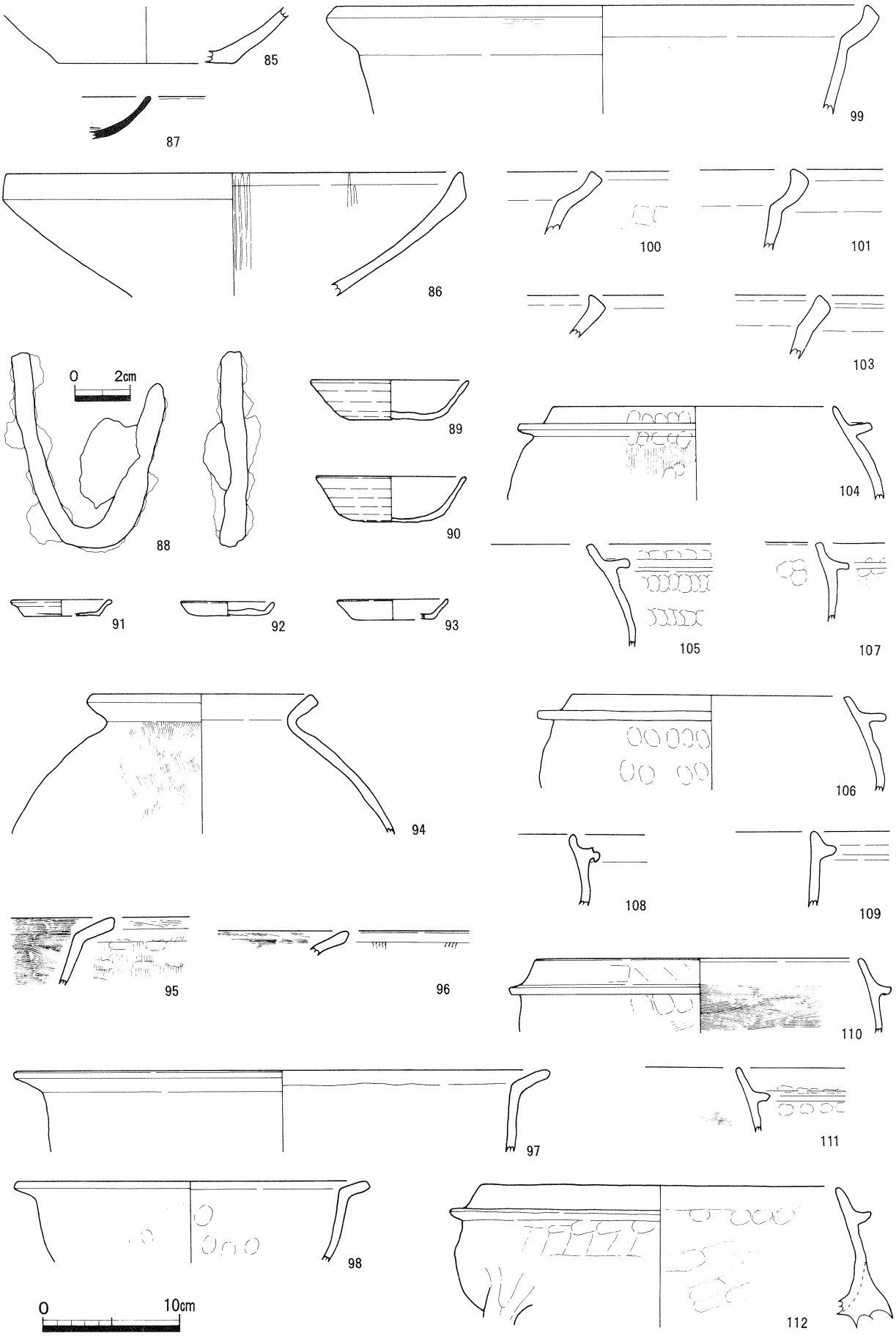
95は，土師質土器鍋ＡＩである。外面はタテハケ,内面はヨコハケであるが，口縁（端面を含む）ではやや粗い5条／㎝,体部では11条／㎝の細かいハケ目を施す。13世紀第1四半期，楠井産であろう。

96は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁外面は粗いタテハケ痕跡を残しヨコナデを施す。内面は9条／㎝程度のやや細かいヨコハケ調整である。

97は，土師質土器鍋Ａ類である。口縁が屈曲部から直線的にのびる点で明確にＡ類型に属するが，胎土・焼成・調整技法等は，楠井産とみられる他の類品にみられないものである。砂粗粒の多い胎土で堅緻な焼成である。外面は粗いタテハケがあり，口縁外（下）面にはタタキ目が施される。その後体部内面，口縁内（上）面・口縁端面の順に板ナデとする。凹凸が目立ち，粗野ともいえる調整である。外面全体に炭化物（煤）附着が顕著である。

98は，土師質土器鍋ＡⅡである。体部外面にタテハケがみられる。

99は，土師質土器鍋ＢⅡである。口縁内面・端面は端正な調整がなされる。



第 12 図　出土遺物実測図④(85～112，縮尺 1/4，ただし 88 は 1/2)

100は，土師質土器鍋ＢⅡである。口縁内面やや細めのヨコハケ。外面は全体に顕著な煤附着。

101は，土師質土器鍋ＢⅢである。前2者の口縁内面の彎曲が更に協調され，端面が拡張された形態。

102は，土師質土器鍋ＢⅢである。同前の器種である。

103は，土師質土器鍋ＢⅢである。類型化が進行し，鉄鍋に倣った形態は失われて，口縁内彎は弱い。

104は，土師質土器足釜ＡⅠである。体部外面タテハケ，口縁端面ヨコハケが明瞭で，13世紀前半頃。

105は，土師質土器足釜ＡⅡである。口縁外面に約1㎝間隔でやや傾斜した爪形圧痕がめぐる。

106は，土師質土器足釜ＡⅡである。傾斜がない爪形圧痕を持ち，105近似の器形・調整がみられる。

107は，土師質土器足釜ＡⅡである。口縁,鍔ともに縮小するが，調整その他は前2者に共通する。

108は，土師質土器足釜ＡⅡである。調整等に，上記諸例からの退化ともみえる矮小化・変容が窺える。

109は，土師質土器足釜ＡⅡである。口縁・鍔ともに小振りだが肉厚なつくりである。

110は，土師質土器足釜ＢⅠである。鍔端部のヨコハケが明瞭。口縁部内外面と鍔上面は一連のユビナデ仕上げ。体部外面は粗く,同内面はより細かい不整方向のハケ目がみられる。13世紀第1四半期である。

111は，土師質土器足釜ＢⅠである。ほぼ110に類似する。

112は，土師質土器足釜ＢⅡである。口縁内外面・鍔上面は丁寧なナデ調整を施す。脚部との接合部位が遺存しており，あまり外方へ張り出すことなく下部へ伸びるよう装着している。体部～脚の周囲に充填された素地土はヘラ状工具で幾つかの稜を形成しながら圧着されている。

113は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔基部の体部外面に，縦方向の爪形圧痕が約1㎝間隔でめぐる。

114は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔が基部から端部にかけて薄く摘み出され，鋭角三角形に近い断面を呈する。煤の附着は口縁内面側にまで亘る顕著なものである。対部の爪圧痕は114に類するもの。

115は，土師質土器足釜ＢⅢである。焼成低火度で器表面の剥落が目立つ。口縁の内傾が著しい器形。鍔部を折り返した後口縁を接着・成形するものである。

116は，土師質土器足釜BⅣである。体部上端に添えた粘土紐で口縁・鍔を同時成形する「口縁3技法」を用いている。

117は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔部のみを本体に接合する「口縁1技法:鍔部接合法」による成形である。鍔の幅はかなり狭く退化的である。口縁•鍔は端面を含めてナデ調整である。13世紀第3～4四半期。

118は，土師質土器足釜ＢⅣである。「口縁3技法:一体接合法」がとられている。鍔下面基部に約2.5㎝間隔で爪形圧痕が一周する。

119は，土師質土器足釜ＢⅠである。内外面ともに煤の附着が著しい。全体に特異ともいえる成形•調整をみせている。体部外面のタテハケが顕著である。口縁部は肉薄で長めに引き伸ばし端部は強いナデを加えるために，口縁の厚みを越えて端部が幅広く張り出す。「鍔部接合」が行われているが，厚みが大（約7㎜）であるのに比して幅は狭く（約8㎜），鍔は端面にヨコハケを施し，口縁外面•鍔上面をヨコナデした後，鍔下面基部に約1.5㎝間隔の強い爪形圧痕が1周する。

120は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部から口縁端部に至る器壁の厚みが鍔接合部位の近辺で著しい肥厚をみせている。鍔は短小化している。13世紀第3～4半期であろう。

121は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部外面に粗いタテハケがみられる。鍔部直下の爪圧痕が顕著。

122は，土師質土器足釜ＢⅢである。体部内面に粗いヨコハケがみられる。

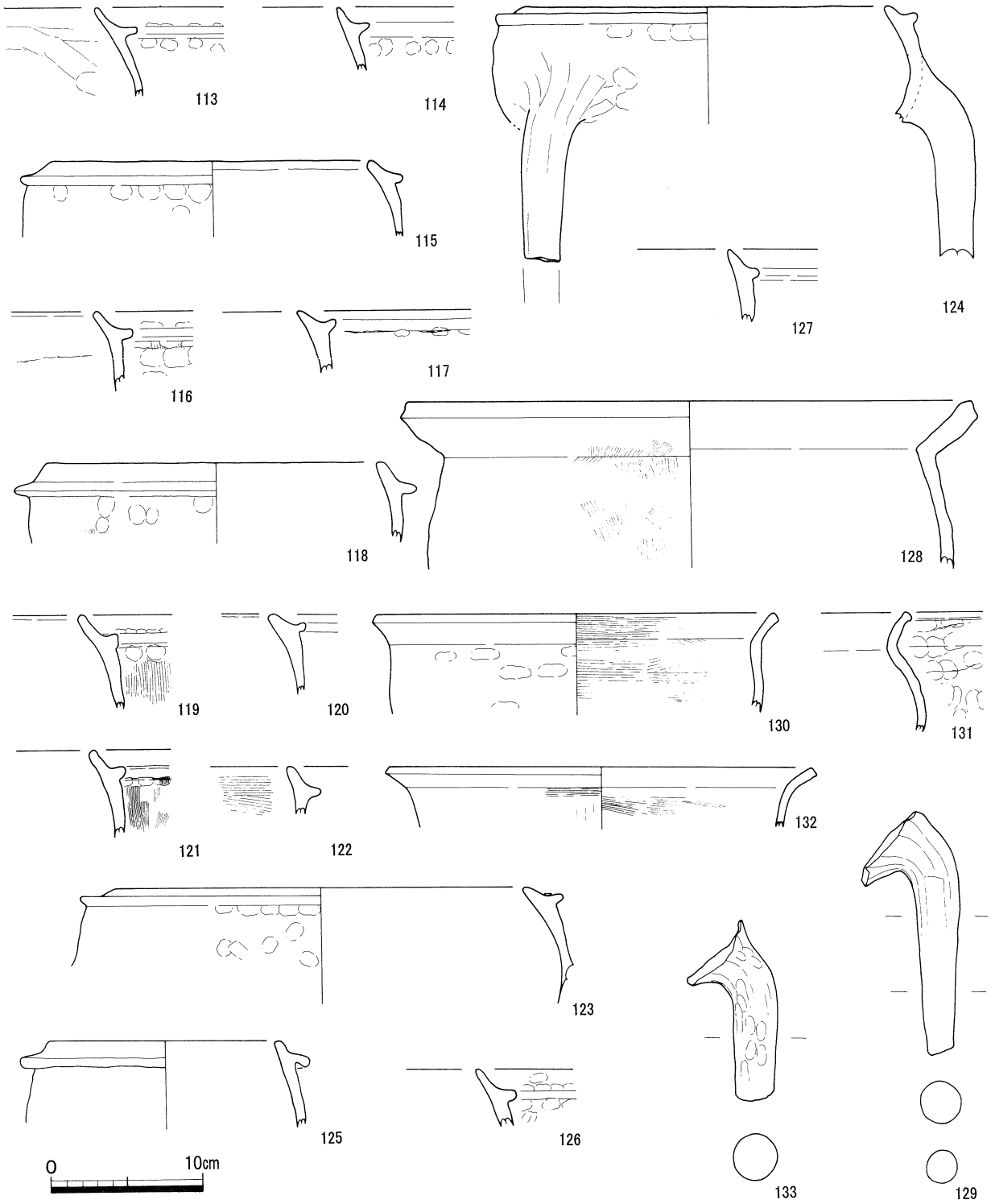
123は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部の鍔接合部位近辺の肥厚にみられる傾向は120に共通する。

124は，土師質土器足釜ＢⅣである。脚部及びその接着部位を含む破片である。底部を欠くが，浅い形態の器形であると推定される。内傾の強い口縁部と鍔部は，ともに短小化傾向をみせている。

125は，土師質土器足釜ＢⅣである。鍔形成部から口縁部にかけて強い内傾を示す。体部上端に口縁部を接合した痕跡が内面側に認められる。形骸的で短小な口縁端部から垂れ下がりぎみに深く庇状に引き出された鍔部が特徴をみせる器形である。

126は，土師質土器足釜ＢⅡである。肉薄で長めの口縁に短小な鍔が接合されている。

127は，土師質土器足釜ＢⅣである。短小な断面三角形に近い鍔接着部の上下数㎝の範囲では体部の厚みが約1㎝に達している。



第 13 図　出土遺物実測図⑤(113～133，縮尺 1/4)

128 は，土師器甕口縁である。復元口径 37.4cmを測る。外面は口縁基部も含めタテハケ調整である。口縁端部から内面にかけてはヨコハケ後にヨコナデが施される。G'P 区の撹乱からと，撹乱が比較的軽度で石室奥部相当と考えられる位置から出土した遺物とが接合したものである。

129 は，土師質土器脚部である。基部付近に煤が附着する。

130 は，土師質土器鍋ＣⅠである。薄手で焼成堅緻。内面ヨコハケ，外面タテハケ後ナデ・指頭圧痕あり。

131 は，土師質土器鍋ＣⅠである。焼成堅緻。指頭圧痕顕著で 130 よりやや古相か。胎土に砂粒目立つ。

132は，土師質土器鍋ＣⅡである。焼成・胎土は上記2点に共通する。体部内面にヨコハケ。

133は，土師質土器脚部である。脚部中位の径は3㎝を測り，類品中では大型に属する。断面形では，体部との接着部位から下方へ伸びる彎曲部付近でほぼ楕円を呈し，中位以下では円形となる。

H区（ＨⅠ，Ⅱ）

134は，土師質土器小皿片である。復元口径7.4㎝。ＢⅢ－４型式である。胎土は精選され，調整も丁寧である。13世紀第３～４四半期であろう。

135は，土師質土器足釜ＡⅡである。復元口径26.8㎝。端正な成形であり，類型的な粗放さを見せない。

136は，土師質土器足釜ＢⅠである。体部に脚部の脱落痕跡（一部）が残って，器形の大要が推測できる。成形・調整は端正である。焼成はやや低火度である。長めの口縁は体部の内彎を延長した方向で内傾する。ほぼ水平に伸びる鍔の端面にヨコハケ，体部外面にタテハケ調整を施す。鍔下面の体部との接合部は串状工具の先端で施した沈線が一周している。13世紀前半であろう。

137は，土師質土器足釜ＢⅠである。上記136に比して口縁部が長く，鍔部に短小化の傾向が見られる。やや後出するものであろう。

138は，土師質土器足釜ＢⅠである。口縁，鍔が短小化している。鍔直下の接合部分に斜め方向のハケ目を入れて整えている。小片であり部分的な観察にとどまるが，前２者より後出か。

139は，土師質土器足釜ＢⅡである。伸びのある口縁に比して，鍔は象徴的な程度に短小化している。

140は，土師質土器足釜ＢⅢである。体部は鍔接合部位付近のみ顕著に肥厚する。鍔，口縁ともに短小。

141は，土師質土器鍋ＣⅠである。体部内面の粗いヨコハケ，外面の指頭圧痕が目立つ。内外に煤固着。

142は，土師質土器鍋ＡⅠである。口縁端面，上面，内面に粗いヨコハケを施す。口縁下面はヨコナデ。色調は10YR8/3浅黄橙を呈し，焼成良好である。13世紀代。

143は，土師質土器鍋ＡⅡである。体部内面にヨコハケ。口縁は上，端，下面ともヨコナデ。低火度でやや軟質の赤褐系色調を呈するものである。口縁下面に満遍なく煤を受ける。

144は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部外面に痕跡的ながらタテハケが認められる。

145は，土師質土器足釜ＡⅡである。鍔，口縁はナデ。体部内面ヨコハケ，外面はタテハケ。ハケ目は細かくて幅１㎜強程度である。浅黄橙を呈し，焼成良好。

146は，土師質土器鍋ＣⅡである。焼成堅緻である。口縁，体部内面の顕著なヨコハケが特徴的。外面はナデ，指頭圧痕がみられる。

147は，土師質土器鍋ＣⅠである。器表面の風化が進行し，調整等不明瞭であるが，内面ヨコハケ，外面タテハケ・指頭圧痕が認められる。

H’区（H’Ⅰ，Ⅱ）

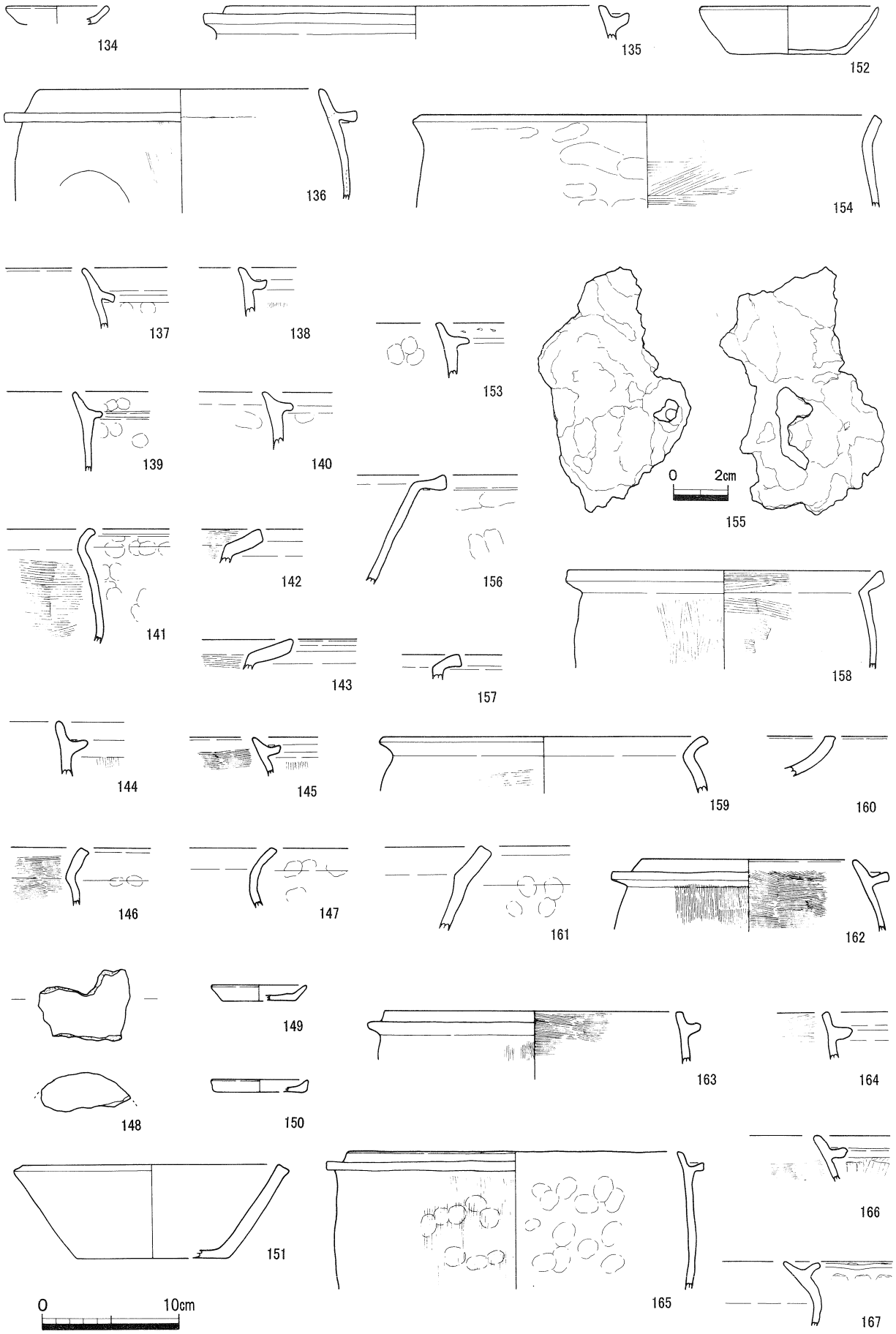
148は，鞴羽口片である。７×５×2.5㎝ほどの破片である。他に径３㎝程度の砕片数点も認められた。復元直径は約4.5㎝である。内部の送風孔を示す調整面は欠失して確認できないが，形状，被熱状況等から羽口と考えられる。胎土は３～５㎜の小礫を多量に含むものである。鍛冶等関連の遺構は確認していない。

149は，土師質土器小皿片である。ＢⅢ-４型式である。

150は，土師質土器小皿片である。ＢⅢ-５型式である。

151は，土師質土器鉢である。復元口径20.2㎝，同底径11.0㎝を測る。口縁端部の形状がやや異なるが，器形・法量は「鎌倉時代前半頃まで」とする西村遺跡-Ⅱ・S5-SK01出土瓦質鉢[26]とほぼ同型同大である。西村例は「片口」鉢とされており，本例も片口とみるべきであろう。

152は，須恵器杯である。口縁付近を一周する炭素の吸着がみられる，十瓶山窯跡群（西村）産の須恵器杯である。。底部にヘラキリ，板目圧痕。焼成良好。



第 14 図　出土遺物実測図⑥(134～167，縮尺 1/4，ただし 155 は 1/2)

153は，土師質土器足釜ＢⅢである。口縁部外周に，約1.5cm間隔で細い割竹の先端らしい２×７㎜程度の刺突痕がめぐる。刺突後に口縁外周～鍔部上面を指でヨコナデしている。他に見ない調整手法である。

154は，土師質土器鍋ＣⅡである。復元口径33.0cm。類品の中では器壁が厚めで器形も大型に属する。径１～２㎜の石英•長石粒が目立つ胎土である。焼成は堅緻。

155は，鉄滓である。約８×５×４cmの不定形で，大小のス（気泡）を含む。重量177.8ｇ。黒色の瀝青状部分が散見されるが，表面の大部分は明褐色の錆を帯びている。磁針を近づけると敏感に反応し，鉄分含有は確実である。先述，鞴羽口同様，鍛冶・鋳造等施設の存在を示唆するが関連遺構は確認されなかった。

156は，土師質土器鍋ＡⅢである。口縁部内（上）面は内彎ぎみである。体部外面は指頭圧痕が連続。

157は，土師質土器鍋ＡＩである。口縁部幅が狭小。体部・口縁部の内面と端面はヨコハケ。焼成堅緻。

158は，土師質土器鍋ＡⅡである。体部・口縁部内面は顕著なヨコハケで，体部外面は顕著なタテハケの上に指頭圧痕がめぐる。口縁下面基部は串状器具による沈線が施されて一周する。

159は，土師質土器鍋ＣＩである。体部～口縁の断面がＳ字状に彎曲する。内面はヨコハケ。口縁は端面を丸くナデ，下面には斜方向のハケ目がみられる。復元口径23.2cmで，小型の部類である。

160は，土師質土器鍋ＢＩである。口縁部のみの破片である。内彎して立ち上がる口縁に，内傾する端面調整が施され，鉄鍋由来のシャープな成形となっている。内外面ともに煤吸着が著しい。

161は，土師質土器鍋ＢⅡである。焼成はやや低火度である。外面の煤は口縁を除き体部にのみ附着。

162は，土師質土器足釜ＡＩである。口縁端，同外面と鍔下面はナデ。体部内面，同外面と鍔上面，端面はそれぞれ密度と方向の異なるハケ目が明瞭に施される。灰白系を呈する堅緻な焼成で，類型化による手抜きを感じさせない堅実な成形・調整である。

163は，土師質土器足釜ＡⅡである。復元口径21.2cm。ほぼ直立する口縁，水平にのびる鍔ともに短く作られている。体・口縁内面はヨコハケ，体部外面はタテハケ。

164は，土師質土器足釜ＡⅡである。口縁，鍔，体部内面はヨコハケで体部外面はタテハケ。鍔は上下のコーナーをナデで丸めたため，端部は凹面をなしている。

165は，土師質土器足釜ＡⅡである。内面はナデ。体部外面はタテハケ，煤附着。灰白色で堅緻な焼成。

166は，土師質土器足釜ＡⅡである。164とほぼ同巧である。

167は，土師質土器足釜ＢⅢである。鍔直下に約1.5cm間隔の爪形圧痕がめぐり，その下部約2cmの位置で体部が強く内傾したまま直線的に口縁端に至る。それに応じて鍔が顕著に上反する。破断面から鍔部屈折法による口縁接合が窺われる。14世紀中～後葉であろう。

168は，土師質土器足釜ＢＩである。復元口径23.2cm。鍔端部のハケ目が明瞭である。鍔と口縁部の幅が約1:2で，器形の特徴が明確である。13世紀第２～３四半期である。

169は，土師質土器足釜ＢⅡである。橙色を呈したやや低火度で軟質の焼成である。

170は，土師質土器足釜ＢⅡである。復元口径20.4cm。鍔下部2cmあたりから彎曲しはじめて，口縁は顕著に内傾する。その口縁と水平に伸びる鍔の長さはほぼ１：１である。

171は，土師質土器杯ＤⅡ-８である。底部はヘラ切り・板目。復元口径10.2cm。13世紀末～14世紀前葉。

172は，土師質土器鍋ＣⅡである。口縁下面，体部外面全体に指頭圧痕が分布。径1～2㎜の砂粒を多く含む胎土で，ナデ調整後にも器表面に凹凸を生じている。にぶい橙を呈する堅緻な焼成で，類品が多い。

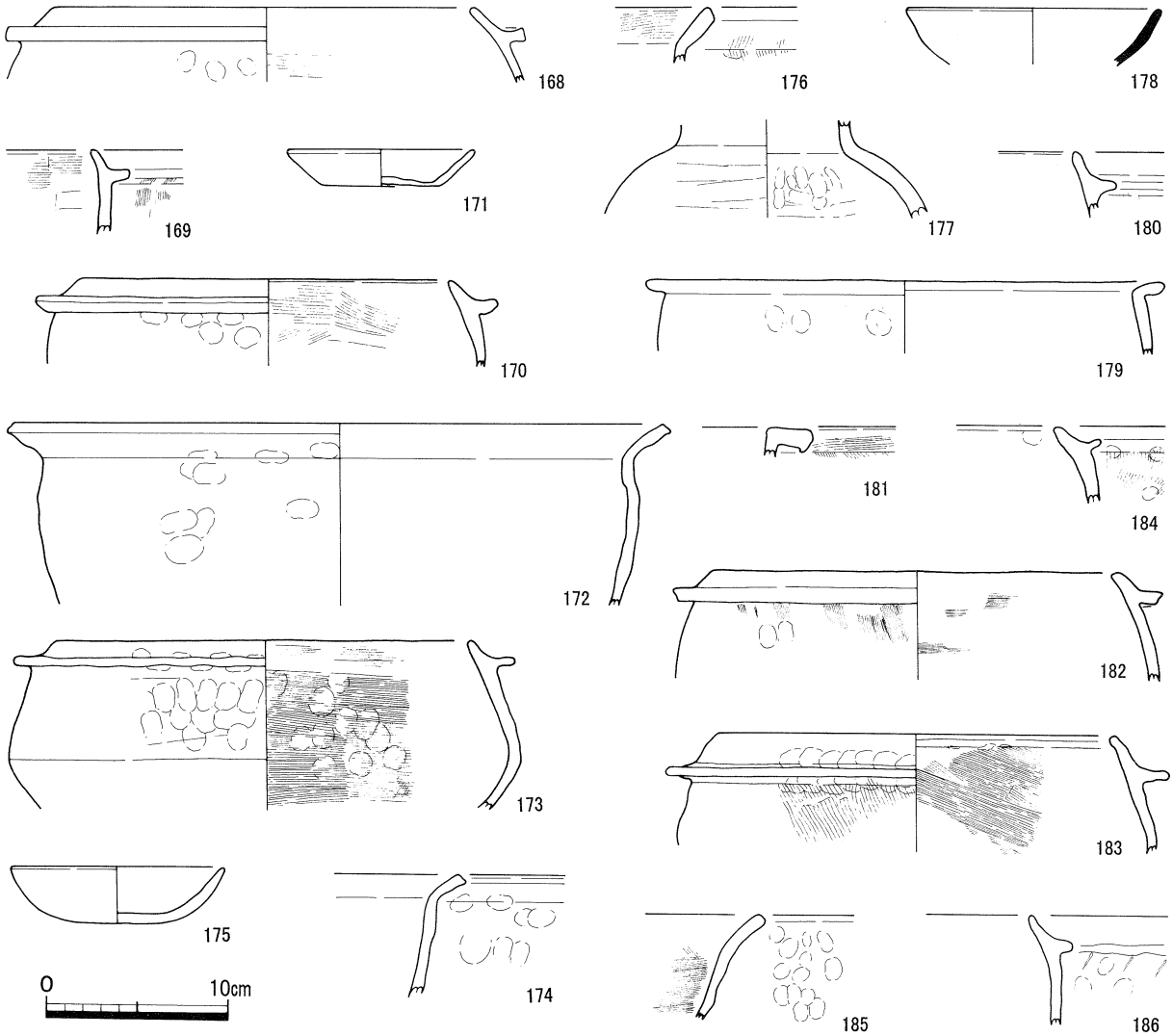
173は，土師質土器足釜ＢⅢである。鍔～口縁部の圧着に際しての指頭圧痕が約２cm間隔で施されており，それに応じて鍔端部が波状に形成されている。器表面に濃密に煤が附着。14世紀中～後葉であろう。

174は，土師質土器鍋ＣⅡである。器形，調整，胎土，焼成等は172に酷似。外面の指頭圧痕が薄手の堅緻な器壁の内面に及び凸面を生じた部分がみられる。

175は，土師質土器杯ＥⅢ－３である。底部糸切り。器壁は厚手で焼成やや軟質。13世紀第３四半期か。

176は，土師質土器鍋ＡＩである。口縁～体部内面はヨコハケ，同外面はタテハケである。

177は，須恵器壷肩部片である。肩～頸部下端にかけての破片である。厚さ約１cmの断面は器表側1/3強が還元焼成状態であるが，内面は還元せず灰白色を呈する。全容が不明であるが，あえて器形から近似の例を挙げると，前田東・中村遺跡Ｅ区SK04出土№690須恵器壺27)がほぼ同形同大である。このSK04は地



第 15 図　出土遺物実測図⑦(168～186，縮尺 1/4)

鎮の可能性がある埋納土坑で，10 世紀後半～11 世紀初頭の年代が与えられている。これとは系譜が異なる可能性を指摘できるが，十瓶山窯跡群（西村 1 号窯，2 号窯）例28)に類例がある。本例は，これらと何らかの系譜関係がある可能性を想定しておきたい。但し，177 は体～頸移行部の屈曲が滑らかで頸部を薄手につくる。

178 は，須恵器碗口縁片である。口縁端部約 1 ㎝幅は，炭素吸着がみられる。十瓶山窯跡群産と考えられる。

179 は，土師質土器鍋ＡⅣである。口縁付近で僅かに内傾する体部から，ほぼ水平に延びる短い口縁部がつく。端部はナデによってやや上端寄りに丸くおさめられる。

180 は，土師質土器足釜ＢⅢである。破断面の胎土・砂粒の状況から，体部上端を外反させて鍔とし，上方に口縁部を接合している。鍔下面から体部へ，タテのハケ目が施される。14 世紀中～後葉であろう。

181 は，土師質土器鍋ＡⅠである。上～内面ヨコハケ，下～外面はタテハケが顕著。口縁端部は強いヨコハケで上下にはみ出した胎土を，上部側コーナーのみユビナデで丸める。13 世紀第 2～3 四半期か。

182 は，土師質土器足釜ＡⅠである。短い口縁部と本来の機能を示し明確に水平に延びる鍔を形成。鍔端面のヨコハケは上下端部に施したナデで生じた凹部内で認められる。ＡⅡへの移行形態といえようか。

183 は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部外面はタテハケ，内面は向かって左上がりに斜行するハケ目。内傾が目立つ口縁端部はさらに内側へ抓みこむ。

184 は，土師質土器足釜ＢⅣである。体部外面は指頭圧痕等で抹消されがちながらタテハケの痕跡が認め

られる。内面はナデであるが口縁端部際に約3㎝間隔で斜め上方からの爪＋指頭圧痕がめぐっている。

185は，土師質土器鍋ＣⅡである。内面は口縁が向かって左上り，体部が左下がりのハケ目。体部～口縁への彎曲は非常に軽度である。器表面は全面に顕著な指頭圧痕が連続する。

186は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔直下の位置で体部外面を2㎝弱の間隔で向かって右に傾斜する爪形圧痕が施されている。鍔上面の爪形に対応した位置には浅い指頭圧痕が連続し，波を打つような形状を呈している。爪形圧痕と鍔上面の波状圧痕の対応から工法が推定される。工人が土器体部を左側に，口縁部を右側に置き，爪形の位置に左手拇指の爪先をあて，対応する位置の鍔上面側に右手拇指指頭を当てて押圧する。この工程を，2㎝弱の間隔で繰り返して一周することにより鍔の圧着，成形がなされる。

羨道部（地山）

187は，土師質土器杯ＤⅡ－5である。口径12.8㎝。底部から外反して直線的に口縁に至る。

188は，土師質土器杯ＤⅡ－6である。口径9.8㎝。器形は187に近いが口縁端寄りでさらに外反する。

189は，土師質土器杯ＤⅡ－7'である。口径12.6㎝。器高低くロクロ目が顕著である。

190は，須恵器杯片である。図上で復元すると口径は10.8㎝となるが，これは小片のためであり，他例から実際は2割程度大きくなろう。磨耗で調整等の詳細は不明。十瓶山窯跡群（西村）産のものであろう。

191は，土師質土器杯ＤⅡ－8である。口径10.2㎝。器高低くロクロ目が顕著である。

192は，土師質土器杯ＤⅡ－7である。磨耗が甚だしい。口径10.4㎝。ロクロ目あり。

193は，土師質土器杯ＤⅡ－8'である。復元口径12.4㎝。器高低く器壁は薄い。

194は，サヌカイト刃器片である。残存最大長7.0㎝，最大幅7.0㎝，厚さ2.2㎝。小部分に残る自然面以外には水和層の顕著な形成はみられない。半損しているが，材質・形態・法量等からみて打製石斧（石鍬）の刃部側残片と考える。『居石遺跡』29)では，該期サヌカイト製打製石斧として60点の資料が報告されている。このうち完存又はほぼ完存とみられるものの最大長は13.6㎝で，最大幅6.9㎝である。従って本例は居石例よりやや大型に属することになり，居石遺跡で2例が報告されている結晶片岩製のものとほぼ同大である。縄文晩期前半～弥生時代前期のものであろう。

195は，土師質土器足釜ＢⅣである。鍔下部の体部外面に向かって右に傾斜する爪形圧痕が約2㎝間隔で連続している。鍔～口縁の成形に伴うものであろう。

196は，土師質土器鍋ＣⅡである。体部～口縁内面ヨコハケ，体部外面タテハケ。復元口径40㎝である。

197は，土師質土器脚部である。胎土は，196例他の土師質土器鍋Ｃ類に共通するものがみられる。先端部が原形をとどめる少数例の一つである。

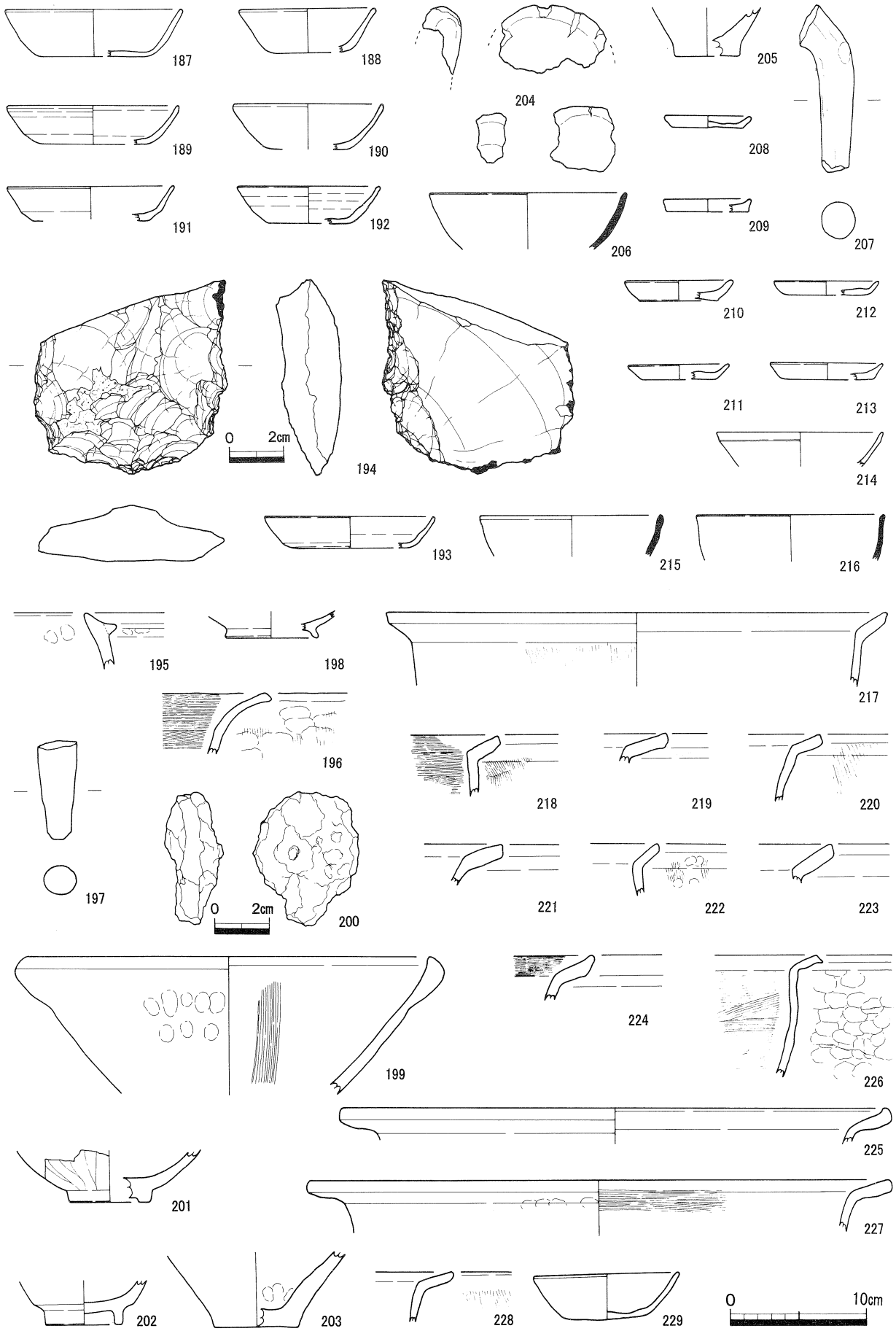
198は，黒色土器碗底部片である。断面形でハ字状に拡がる輪高台である。端面は丸く収める。器表面は炭素を吸着したオリーブ黒，胎土は灰白を呈する和泉瓦器である。Ⅱ－3期，12世紀第3四半期であろう。

羨道部（落込み）

199は，土師質土器擂鉢片である。楠井産か。6条を1単位とする櫛描条溝は，口縁付近の間隔で9㎝以上の粗い配置である。口縁は端部から約4ｃｍの位置から器壁外面側へ厚みを顕著に増し，2㎝ほどに達して丸く内壁上端部へ回りこむ。口縁端部内面側はつまみ出した観を呈する。

200は，鉄滓である。約5×4×2㎝の不定形で，2立方㎝ほどの花崗岩?片を溶結している。重量49.3ｇ。明褐色の錆を帯びている。磁針に敏感に反応する。

201は，青磁碗である。底～腰部片で，鎬蓮弁文を施す。内面は見込を含め無文。釉は灰オリーブ7.5Y6/2を呈し，内外面とも貫入がみられ，外面は気泡によるアバタ状の凹点を散見。高台際の高さは1㎝ながら高台内は深さ0.3㎝だけ削り込んだ，外径5.8㎝，内径4.4㎝の輪高台。畳付と高台内は無釉である。竜泉窯製である。14世紀前半頃か。



第16図　出土遺物実測図⑧(187～229，縮尺1/4,ただし194・200は1/2)

202は，青白磁鉢底部片である。釉は明緑灰を呈する。高台内も施釉し畳付は釉を剥ぐ。底部～高台の残片で，明確な器形を復元できないが，器形・法量は肥前外青磁鉢に酷似。肥前系青磁では見込みに五弁花を染め付け，内面・高台内は透明釉とするが，本例は釉の使い分けはない。輸入品の可能性があろう。

203は，弥生土器甕底部片である。中期後半～後期前半の範囲のものであろう。

204は，鍛鉄圧延片である。繰り返し打撃を受けて圧延され，周囲が捲くれ放射状亀裂が生じて，やや巻き返された浅い鋺に似た形状を呈する。鋳鉄では破断して用をなさないため鍛造品が充てられたのであろう。用途未詳だが，木製（?）槌状?打器の頭部に被せた円盤ないし浅鉢状の被覆・補強部品であろうか。

205は，弥生土器甕底部片である。203類似時期のものであろう。

206は，須恵器碗口縁片である。十瓶山窯跡群(西村)産。口縁端部は炭素吸着による黒色帯をつくる。幅は内面で3㎜，外面は7㎜ほどで，復元口径14.4㎝である。13世紀前半であろう。

207は，土師質土器脚部である。足釜ＢⅢ，ＢⅣ等に胎土・焼成で共通するものがみられる。

羨道部（南半部）

208は，土師質土器小皿である。底部ヘラ切りである。復元口径6.4㎝。ＢⅢ－4である。

209は，土師質土器小皿である。直立に近い短い口縁を持つ。ＢⅢ－5である。

210は，土師質土器小皿である。ヘラ切り離し。ＢⅢ－3である。

211は，土師質土器小皿である。復元口径7.5㎝。ＢⅢ－3である。

212は，土師質土器小皿片である。復元口径7.0㎝。ＢⅢ－3である。

213は，土師質土器小皿片である。復元口径8.0㎝。ＢⅢ－4である。

214は，須恵器碗口縁片である。胎土に1～2㎜の石英を含み，このために器表面に凸部が散見される。焼成は良好で堅緻。色調は地下水による鉄分の影響もあろうが2.5Y7/2灰黄。十瓶山窯跡群(西村)産か。

215は，須恵器碗口縁片である。十瓶山窯跡群(西村)産。口縁外面に炭素吸着の幅広い黒色帯がある。

216は，須恵器碗口縁片である。十瓶山窯跡群(西村)産。胎土，焼成等215に酷似する。

217は，土師質土器鍋ＡⅠである。口縁上面，同端面はヨコハケ，体部外面はタテハケを施す。13世紀。

218は，土師質土器鍋ＡⅠである。焼成良好。体部内面と口縁上面，同端面ヨコハケ，体部外面タテハケ。体部外面，口縁下面にやや厚めの煤が附着する。

219は，土師質土器鍋ＡⅠである。胎土，調整，焼成等218に類似する。口縁下面にもタテハケを施す。

220は，土師質土器鍋ＡⅠである。体部内面と口縁上面，同端面ヨコハケ後にナデ。体部外面タテハケ。

221は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁端面はほぼ直立する。

222は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁端面は直立。同下面と体部外面はタテハケ。

223は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁端面は直立。焼成はやや軟弱である。

224は，土師質土器鍋ＡⅡである。口縁は，端面の幅を非常に広くとったために強い傾斜をもっている。内外面ともに煤の附着が著しい。

225は，土師質土器鍋ＡⅢである。口縁端部は強いナデにより，上面側に幅5㎜程度が巻き込まれ，断面半円形の縁取りを形成する。

226は，土師質土器鍋ＣⅢである。やや内傾した器壁の上端で角度約60°に外反した口縁は幅約2.5㎝。内面はヨコハケ，外面は強い指押さえの連続で調整されるため器壁の凹凸が著しい。体部～口縁部の厚みは約5㎜で一定している。堅緻な焼成と胎土の特徴はＣⅠ，ＣⅡに共通している。

227は，土師質土器鍋ＡⅣである。復元口径42.7㎝。この種では大型に属する。口縁は直線的にほぼ水平に伸び，端部はナデにより丸くおさめる。内面はヨコハケ，外面はタテハケ。口縁下面は格子目タタキ。

228は，土師質土器鍋ＡⅣである。体部外面はタテハケ調整。器壁と口縁の厚みに殆ど差がない。

229は，土師質土器杯である。口径10.4㎝,底径6.2㎝,器高3.3㎝である。器表の調整は磨耗により明瞭でないが，内外面ともナデか。器壁の厚みに富み，やや小振りであるがＤⅡ-6であろう。

230は，土師質土器鍋ＡⅣである。口縁端部に「吹きこぼれ」と見られる黒色炭化物が固着している。

231は，土師質土器鍋ＢⅠである。口縁部の内彎，同端面の調整は非常に端正であり，鉄製品に忠実に倣おうとした意図が窺われる。

232は，土師質土器鍋ＢⅢである。ＢⅠに見られたような端正な風合いは失っている。

233は，土師質土器鍋ＢⅡである。胎土・焼成，口縁端を除く調整に231と共通性がみえる。

234は，土師質土器足釜ＡⅠである。復元口径28.4cm。口縁端部は丸みを帯びるが，鍔端部と上面の調整は明瞭なヨコハケ。体部内面は斜方向のハケ目の上に軽いナデ。体部外面にはタテハケ。調整技法は整っている。

235は，土師質土器足釜ＡⅡである。体部外面にタテハケ。器形のプロポーションは234に通ずるが，小型化しており口縁部の厚みが貧弱となる。調整もやや端正さを欠いて来ている。

236は，土師質土器足釜ＡⅠである。口縁端の断面は明確なコ字形を呈する。口縁～体部内面と鍔上面は10条/cmのヨコハケを施し，鍔下面～体部外面は4条/cmのタテハケが施され，胴から底部への屈曲部以下ではタタキが確認される。類品のなかでは古相であろう。

237は，土師質土器足釜ＡⅡである。236から235に移行する中間項の様相が窺われる。口縁端部の角がやや不明確になる。口縁～体部内面は幅1mm程度の細かいヨコハケである。体部外面に煤が多い。

238は，土師質土器足釜ＡⅡである。胎土・焼成，口縁～鍔付近の断面形等が235に近似であるが，本例には体部外面のタテハケが確認できない。口縁内面は幅1mm程度の細かいヨコハケの後軽いナデを施す。

239は，土師質土器足釜ＢⅡである。焼成堅緻。口縁～体部内面はヨコハケである。鍔の基部上下面に，指頭による強い圧着が連続的に加えられ，圧痕が波状を呈している。

240は，土師質土器足釜ＢⅡである。磨耗により不明瞭であるが，体部外面にはタテハケが認められる。鍔下部の連続する爪形が顕著である。外面は剥落を免れた厚い煤が諸所に見られる。焼成は低火度である。

241は，土師質土器足釜ＢⅡである。口縁～体部内面はヨコハケ。口縁端外面直下に指頭圧痕が連続。

242は，土師質土器足釜ＢⅠである。体部内面に粗いヨコハケ。鍔端部の明瞭なヨコハケが目立つ。

243は，土師質土器足釜ＢⅠである。特徴は242に酷似する。13世紀第1四半期であろう。

244は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部外面にタテハケの形跡がみえる。鍔下面基部に沈線を入れる。

245は，土師質土器足釜ＢⅡである。口縁～鍔の断面形状等は244にほぼ同巧。焼成はやや軟弱。

246は，土師質土器足釜ＢⅢである。口縁～鍔～体部にかけて全体に薄手のつくりである。内面は口縁部を含めてやや傾斜したヨコハケで調整する。口縁端部を接合した痕跡が，口縁部外面の中位の位置に，胎土の粒子密度の差による細い帯状面となって示されている。

247は，土師質土器足釜ＢⅢである。口縁～鍔の断面形は246に類似する。内面の傾斜したヨコハケは246よりも粗い。口縁端部は内面側に蕨手状に捲きこんでいる。

248は，土師質土器足釜ＢⅡである。体部外面のタテハケが目立つ。体部の鍔直下の位置に斜めの爪形が約2cm間隔で連続する。鍔端部はこれに対応する位置で波状の指頭押さえ圧痕をめぐらす。爪形と指頭痕の位置関係から，鍔の圧着作業は，釜本体の口縁部を向かって右側に置き（底部側は向かって左），左手親指の指頭(爪先)を鍔直下に当てて行ったと想定される。13世紀第3四半期以降のものであろう。

249は，土師質土器足釜ＢⅡである。器壁はやや薄手ながら口縁～鍔断面形，調整等，248に類似する。

250は，土師質土器足釜ＢⅡである。器形，調整など244に酷似する。鍔下面基部の沈線も同様である。

251は，土師質土器足釜ＢⅣである。鍔は先行形態の概念を逸脱した段階にあり，基部の厚みと鍔の幅がほぼ等しく，正三角形に近い断面形を呈している。

252は，土師質土器足釜ＢⅡである。体～口縁内面のヨコハケ調整が顕著である。

253は，土師質土器足釜ＢⅢである。鍔部を強く外反・屈折させた後口縁部を付加し，短くまとめている。

254は，土師質土器足釜ＢⅣである。鍔基部位置の器壁が著しい肥厚を示す。鍔は，かなり形骸化～痕跡化ともいえる小規模なものである。体部は，鍔直下に爪形,外面にタテハケ痕がみえる。

255は，土師器甕口縁片である。復元口径は34.0cm。胎土に径2mm前後の石英・長石粒を多量に含んであいる。焼成は堅緻であるが，器表面は上記砂粒が風化によって脱落した痕跡と推測される，微細なアバタ状の陥没で覆われる。器形は，円筒状に伸びた長胴が，上端で僅かに内彎した位置で厚みを増し，屈曲・外反

して斜め上方にほぼ直線的に延長されて口縁が形成されるものである。口縁端部は外傾する平坦面となる。類似例として南山浦古墳群11号墳11)328を挙げることができる。同例は，羨道部からの出土である。

256は，土師質土器鍋ＣＩである。復元口径24.2cm。胎土には径3mm前後の石英・長石・角閃石を顕著に含む。体部外面の煤附着が目立つ。鬼無藤井遺跡30)(SD-E3-301,No.5)例が，同形同大で胎土・焼成の特徴等を含めて近似しており，類縁性が推定される。

257は，土師質土器鍋ＣＩである。256と同系とみられる。器壁が全体に薄手で，前者より後出であろう。

258は，土師質土器鍋ＣＩである。口縁端部は，前2者が平坦であるのに対して，ナデで丸くおさめる。

259は，土師質土器鍋ＣＩである。口縁部の調整等から，256から257へ移行過程の資料かとみられる。

260は，土師質土器鍋ＣⅡである。推定口径は約40cmとなろう。ＣＩタイプに比してＣⅡは概して大口径，大容量となる。足釜類との対比では器壁が薄手であるが焼成堅緻である。外面は厚い煤の固着がみられる。

261は，土師質土器鍋ＣⅡである。焼成の色調が褐色系である点以外，諸特性は260に同じである。

262は，土師質土器鍋ＣⅡである。復元口径40.2cmである。前2者に比して器壁厚く，焼成やや低火度。

263は，土師質土器脚部である。足釜，鍋類の脚部のうちでは大型に属する。先端部を欠く。

264は，土師質土器脚部である。基部の径では中位に属するものである。先端の一部を欠くが，残存長19.1cm。類品の中では遺存状況がよくほぼ全容を確認できる。下端から約5cmの位置で色調の変移がみられるが，土(もしくは灰)中に埋設して使用された際の被熱の状況を示すものであろう。

265は，土師質土器脚部である。残存長13.5cmである。径及び長さは，上記2例からみて小に類する。

266は，土師質土器脚部である。脚部の出土は多量にみられるが，先端部の完存する例は少ない。本例にみられる形成技法は，先端部を右回転で捻りながら径を減じて引き伸ばし，所定の部位に達したとき先端を石・木等の硬く平坦な器材に押し当てて成形するものであると知れる。

267は，土師質土器脚部である。全体の6～7割遺存。先端は，素地土をちぎったままで焼成されている。

268は，土師質土器脚部である。先端部が遺存する例である。尖端を最大限に細くしている。

269は，土師質土器脚部である。268に類する。

270は，土師質土器脚部である。径は，小に属する部類である。下半部がよく遺存している。

271は，土師質土器脚部である。先端部を捻じって成形している。

272は，須恵器杯底部片である。復元底径12.6cmである。焼成低火度で磨耗が甚だしい。高台は，断面形が末広がりの「ハ」字形をしている。8世紀か。

273は，土師質土器碗底部片で，十瓶山窯跡群(西村)産であろう。薄い蒲鉾形断面の高台。ＡⅡ－9。

274は，須恵器碗底部片で，十瓶山窯跡群(西村)産。ＡⅡ-7。

275は，須恵器碗底部片で，十瓶山窯跡群(西村)産。ＡⅡ-8。

墳丘埋土

276は，土師器杯である。ほぼ完形に復元。口径11.6cm。底径8.5cm。器高3.4cmである。器壁は厚手で堅牢感を与える。て磨耗で厳密な判定はできないが底部は凹凸が少なく，糸切り離しであろう。底部から丸く内彎して立ち上がり，ほぼ直立して口縁端に至る。薄く挟みあげた後に口縁端部を丸くなでてまとめる。

277は，須恵器捏鉢底部である。灰白色を呈し，焼成良好な東播系である。

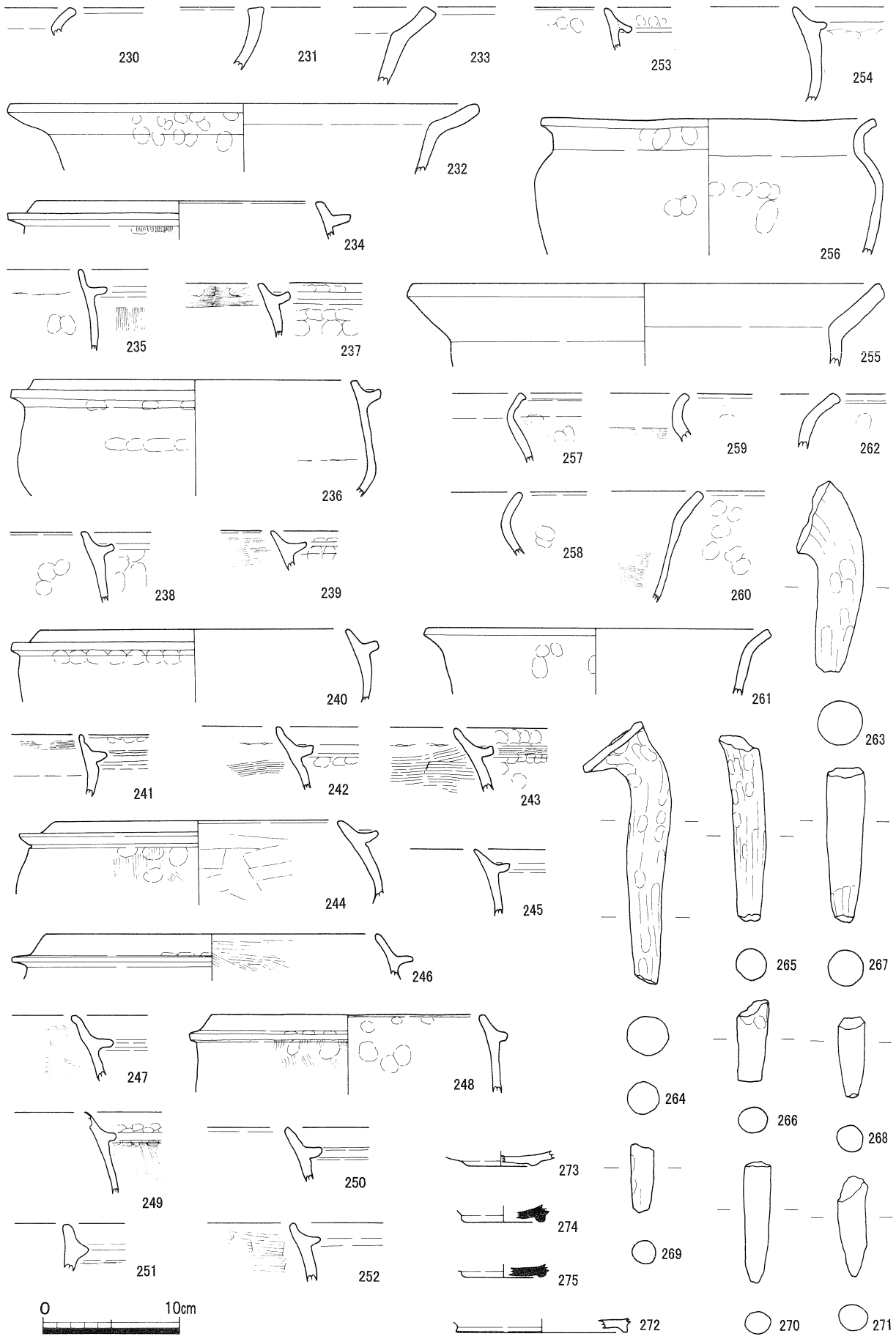
278は，須恵器捏鉢口縁である。体～口縁部片である。口縁端面に炭素吸着。277と同系。

279は，須恵器捏鉢片口である。片口部口縁片である。前2者と同系である。

280は，須恵器提瓶がかつて存在したが，現在所在が不明なものである(図示せず)。

包含層

281は，土師質土器杯ＥＩ－3である。復元口径12.0cm。焼成は火度低くやや軟質であるが粗放でなく，分厚くつくられた堅牢な製品である



第 17 図　出土遺物実測図⑨(230～275，縮尺 1/4)

282は，須恵器杯DⅡ-2である(佐藤2000) 31)。十瓶山窯跡群(西村)産。復元口径12.6cm，底径8.0cm，器高4.2cm。底面はヘラ切り平底で，口縁周辺には炭素を吸着する。近傍の出土例では鬼無藤井遺跡SK-E4-101底面のものに酷似する。14世紀。

283は，土師質土器小皿である。BⅢ－4である。底部ヘラ切り。口縁外面にヘラ線刻が残る。

284は，土師質土器小皿片である。BⅢ－3である。復元口径7.0cm。

285は，土師質土器小皿片である。BⅢ－2である。復元口径8.2cm。

286は，土師質土器小皿片である。BⅢ－4である。復元口径5.6cm。

287は，須恵器甕C－5口縁である。いわゆる十瓶山式である。推定口径約15cm。短く外反する口頸部をもつ。体部を欠くが，本来、長胴・平底であろう。外面は体部とともに口縁部分にも格子目タタキを加えて，その上に内面（タタキはない）と同時に強いナデを施してタタキ目を消し，内・外周とも凹線を生じている。凹線の位置のズレから，内周は親指，外周は食指でナデたと分かる。口縁端部はまるくおさめる。13世紀末～14世紀前葉であろう。

288は，須恵器捏鉢口縁である。東播系で片口部の基部を残す。口縁端部はほぼ直立し，断面は鋭角的な三角形を呈する。体部器壁は薄手である。外面は口縁端から体部を含め遺存部すべてN6/灰の濃い炭素を吸着している。森田Ⅲ期2段階にあたるか。

289は，須恵器捏鉢口縁である。東播系。口縁端部はほぼ直立する。体部器壁は充分な厚みをもつ。口縁端部のみ炭素を吸着する。森田Ⅲ期第1段階であろう。

290は，甕口縁片AⅡである。瓦質の楠井産である。

291は，須恵器甕口縁片である。亀山焼第二群（伊藤1987）21)にあたる須恵質のものである。体部外面は一辺3mm弱の整った方形で刻された格子目タタキである。口縁下（外）面は微かに格子目の痕跡をみせるナデである。焼成・色調は一見瓦質製品を思わせるが，さほど軟弱ではない。13世紀のものであろう。

292は，瓦質擂鉢である。底部破片で詳細は不明であるが，楠井AⅢ類であろう。櫛状工具による卸目は，底部内面の器壁が立ち上がる位置付近を起点として，1cm前後の間隔をおき4条単位で幅約1.2cmのものを放射状に配する。使用によると見られる磨耗が顕著である。

293は，土師質土器擂鉢口縁である。楠井AⅢである。

294は，土師質土器擂鉢口縁である。楠井AⅡである。

295は，土師質土器擂鉢口縁である。楠井AⅣである。焼成堅緻。

296は，土師質土器鍋AⅠである。口縁内(上)面，同端面は9条／cmの細かいヨコハケ。口縁外(下)面と体部外面はタテハケ。体部内面は右肩上がりに傾斜する5条／cmのハケ目調整である。

297は，土師質土器鍋AⅠである。口縁は上面がヨコハケ，端面及び下面と体部外面はタテハケである。その上に口縁端部と上下面はヨコナデ調整を重ねる。

298は，土師質土器鍋AⅡである。内面ヨコハケ，外面タテハケであり，口縁端面には凹部が形成される。ハケ目はやや不整に施され，体部外面は指押さえによる凹凸が目立つ。推定口径は45cmに近く，概してAⅠに比して大型化傾向がみられる。13世紀末葉～14世紀前葉であろう。

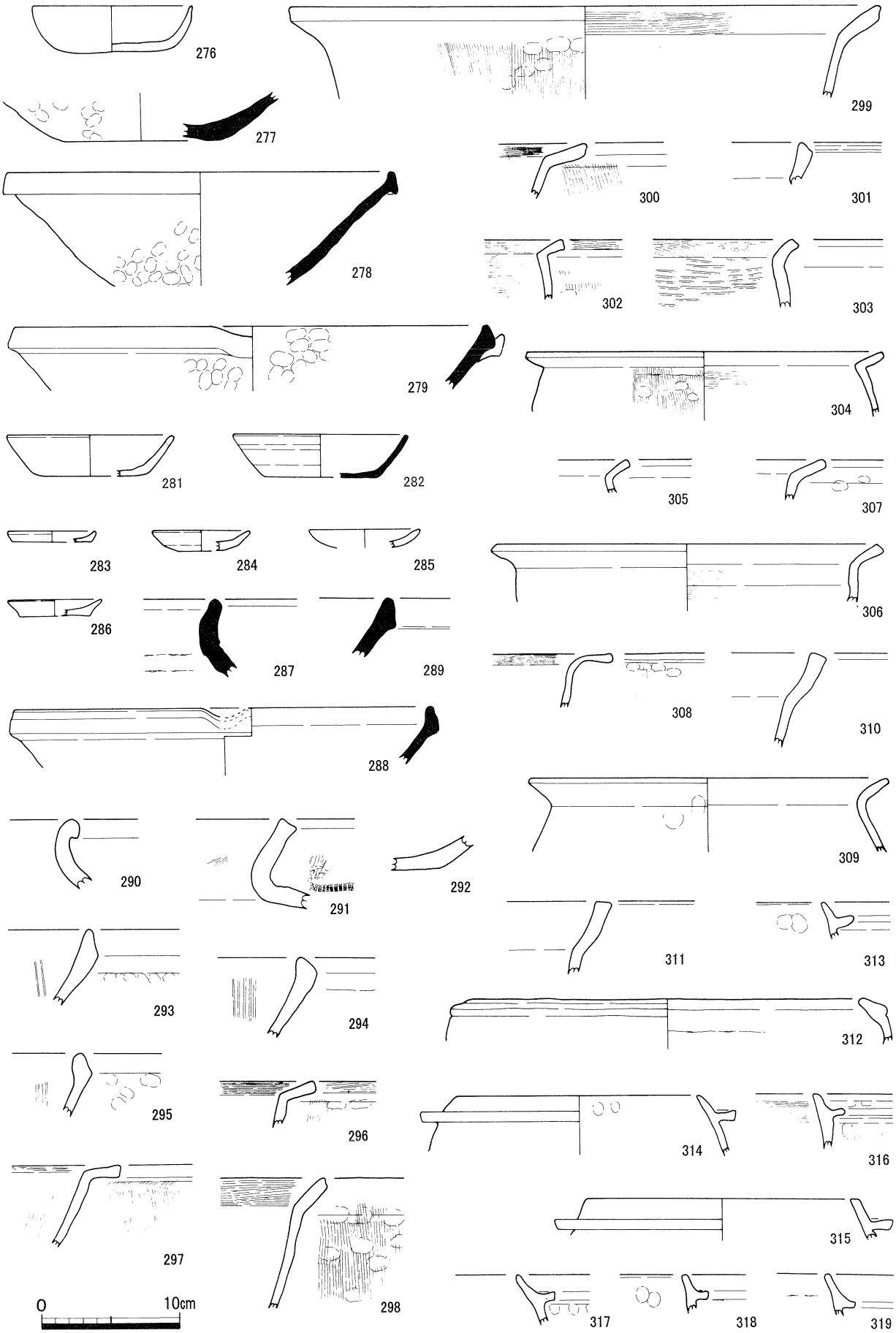
299は，土師質土器鍋AⅡである。胎土・焼成・調整等，全般的に298と同巧・同型・同大である。

300は，土師質土器鍋AⅠである。口縁上・端面ヨコハケ，口縁下面～体部タテハケ。AⅡに比し薄手。

301は，土師質土器鍋AⅡである。口縁端面は凹面をなしており，凹部にはハケ目の痕跡がみえる。また，この凹部は口縁内外面の強いナデにより生じたものである。端面は外傾。13世紀末葉～14世紀前葉であろう。

302は，土師質土器鍋AⅠである。口径や体部の形状，器壁の厚み等にC類を連想させるものがあるが，体部～口縁には明瞭な屈曲があり，A類とすべきであろう。口縁上下面と端面及び体部内面にヨコハケ，同外面にはタテハケを施す。

303は，土師質土器鍋CⅠである。口縁・体部内面は2～3条／cmの粗いハケ目。口縁端・下面と体部外面はナデに指頭圧痕がみられる。器壁はほぼ8mmの均一な厚めのつくりである。



第 18 図　出土遺物実測図⑩(276～319，縮尺 1/4)

304は，土師質土器鍋ＡＩである。器形等302に類する。口縁端面はやや丸みを帯びる。口縁上面と端面及び体部内面にヨコハケ，口縁下面と体部外面はタテハケ。

305は，土師質土器鍋ＡＩである。口縁上下面と端面及び体部内面にヨコハケを施す。302,304に比して体～口縁の屈曲がわずかに緩慢である。

306は，土師質土器鍋ＣＩである。口縁上面と体部上端の約2㎝幅の範囲は右下がりに傾斜するハケ目。上記以外の体部下方はヨコハケである。口縁端面・下面はヨコナデである。焼成は堅緻で，器面内外は色調の差が少ない橙系である。胎土・焼成の傾向はＣ類の多くに共通する。

307は，土師質土器鍋ＡⅣである。口縁上面・体部内面は2条／㎝ほどのヨコハケによる縞状痕跡を見せながら，ヨコナデ調整を施す。体～口縁上面へは稜を形成して移行する。

胎土に1～2㎜の石英・長石粒を顕著に含む。焼成堅緻である。

308は，土師質土器鍋ＡⅣである。推定口径は40㎝。器壁は5㎜未満であり，口径との対比で薄手づくりが目立つ。口縁端部は丸みを持つナデ。体部内面・口縁上面はヨコハケ，体部外面・口縁下面はタテハケ。

309は，土師質土器鍋ＣＩである。器面は内外ともにナデ調整である。口縁端部は丸くなでる。焼成堅緻。

310は，土師質土器鍋ＢⅡである。内彎する口縁の延長方向に直交して，端部は平坦な面と上下の明確な稜を形成する。鉄鍋の風貌を伝えるものであろう。

311は，土師質土器鍋ＢⅡである。口縁端面はわずかに外傾するが，310に比しその傾度は軽微である。

312は，土師質土器足釜Ｃである。鍔は形骸化して畦状の縁帯として遺存する。灰白の堅緻な焼成である。全体にヨコナデ調整であるが，体部内面はヘラ状器具でなでた痕跡が目立つ。

313は，土師質土器足釜ＢⅡである。体～口縁内面にヨコハケ痕跡がみえる。口縁・鍔端面は丸くなでる。

314は，土師質土器足釜ＢⅡである。口縁端面は丸みをつけてなでる。鍔端部は平坦に近いナデ調整。

315は，土師質土器足釜ＡⅡである。口縁端はやや丸みをもつ平坦面。鍔上面はヨコハケ，同下面はナデである。端面は上下のハケ，ナデによる僅かな凹みと外傾ぎみの平坦面をなす。焼成堅緻。

316は，土師質土器足釜ＢⅡである。口縁外面に残る爪形は鍔部接合に際する圧着によるものとみられる。また鍔は拇指と食指で強く挿んで成形されたため痩せた状態である。体部外面の指頭圧痕も目立つ。

317は，土師質土器足釜ＢＩである。口縁は鍔上面を含めて長めに強く引き上げる端正な成形。短めの鍔端部は明確なヨコハケによる平坦面。鍔下側基部に約2.5㎝間隔の爪形が残る。13世紀第2～第3四半期か。

318は，土師質土器足釜ＢＩである。調整にやや粗放の観がある。鍔端面ヨコハケ，下面斜のタテハケ。

319は，土師質土器足釜ＢＩである。鍔部成形は317と共通の強いナデによる。鍔は左例よりやや短い。

320は，土師質土器足釜ＢⅡである。調整は不明の体部外面を除き全てヨコナデである。鍔の基部では上面の指頭圧痕と下面の爪形が強調されたつくりとなっている。

321は，土師質土器足釜ＢⅡである。鍔は薄く短く退嬰化している。体部にみる斜めの爪形が顕著である。

322は，土師質土器足釜ＢⅡである。調整・断面形等は321に類似する。

323は，土師質土器足釜ＢⅣである。体部器壁の厚みに比して，鍔部及び口縁部の厚みが一見して大であることが明瞭。口縁内外面と鍔上面はヘラ状工具で平坦にナデて，鍔と口縁には界線が形成されている。

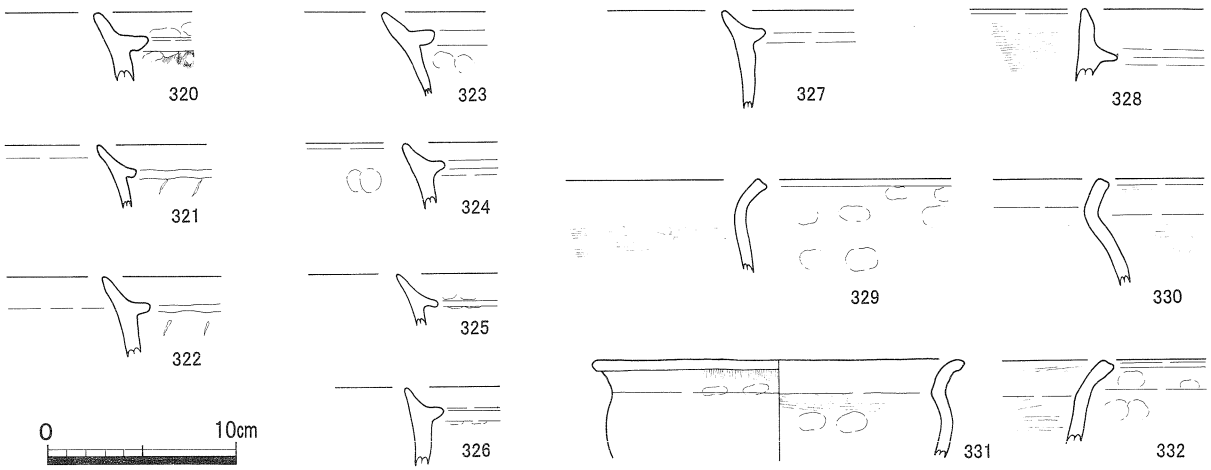
324は，土師質土器足釜ＢⅡである。胎土・焼成，調整をふくめ320・322に共通する。

325は，土師質土器足釜ＢⅡである。321と同巧である。

326は，土師質土器足釜ＢⅣである。体部は器壁が厚く頑丈なつくり。口縁・鍔は薄く短小である。

327は，土師質土器足釜ＢⅣである。断面形は326に相似であるが，胎土・焼成は322に類似する。

328は，土師質土器羽釜である。胎土・焼成は322・327等に近似。体部を殆ど欠くため全容は確定できないが羽釜であろう。口縁内面は体部とともにヨコハケにより成形，同外面は鍔接着工程に伴うヨコナデが施される。その後に口縁上半を内外面から指で挟み上げて端部をつくる。先端は段をなして薄くなりやや鋭い口縁端となる。体～口縁部への屈曲はなく，体部器壁が僅かに外反しながらそのまま口縁に至る器形である。本例は，鍔を有する点で足釜に通ずるが，足釜に通有の脚部を持たない形態と見られる。本遺跡において確認した羽釜はこの1点のみで，稀少例である。



第19図　出土遺物実測図⑪(320～332，縮尺1/4)

329は，土師質土器鍋ＣⅠである。体部内面ヨコハケ，同外面には指頭圧痕が認められる。外面の煤附着が顕著である。器壁の厚さは5㎜の薄手であり，胎土や堅緻な焼成とともに類品に共通する属性である。

330は，土師質土器鍋ＣⅠである。体部内面ヨコハケ，同外面は不整方向のタテハケ痕がある。にぶい橙系の堅緻な焼成である。

331は，土師質土器鍋ＣⅠである。体部内面の上半はヨコハケ調整が強くて器壁の内彎が目立ち，口縁へかけて外反が目立つ。口縁端は外面端部のタテハケにかぶるように外側に折れる。

332は，土師質土器鍋ＣⅡである。体部～口縁は緩慢に僅かに外反する。体部・口縁内面はヨコハケ，同外面は指頭圧痕が顕著である。器壁が薄手で堅緻な焼成は類品に共通する。

第Ⅳ章　まとめ

神高池北西古墳の調査において検出・確認できた資料は，往古からの開発等による破壊・撹乱を免れた残余の僅少部分であり，その概要は前述したとおりである。

出土量では大半を占めた，後代の「再利用」その他に係わる中世土器類を除き，主として石室に関する所見と，本古墳における古墳祭祀を端的に示す資料とみられる「暗文付土師器」（＝「畿内産土師器」）から窺うことができる性格等について考察した。

乏しい遺存資料の限界内ではあるが，主体部としての石室の形態，系譜等や副葬品乃至は埋葬・追葬儀礼等に充てたと想定される遺物の諸相等を通じ，本古墳の属性・年代等について試みたところである。

第１節　石室造営の技法等

横穴式石室を大きさで分類した場合，「巨石墳」を大型とし，終末期の単葬用小石室等を小型とすれば，大・中・小型に三分でき，神高池北西古墳は中型に属することになる。一般に，石室や石材の規模は，造営主体の政治・経済・社会的力量と技術水準に制約されるであろう。中型という分類は，本古墳造営主体の一面を反映していると考えられる。

このことは，石積みの技法にも表れている。一般に横穴式石室壁面の強度・安定性を確保するためには，‘控え’の効果が期待できる小口積みがより有効な技法であると考えられる。ところが，本古墳の側壁石組みは，基底石に限るが，小口積みではなく横口積みを採用している。横口積みに比較して，小口積みの方が遥かに大形で大量の石材を要することを考慮すれば，本古墳は石材の省量化を意図したものと考えられる。本古墳の造営主体は，政治・経済・社会的および技術的力量の限界により，「巨石墳」を造営するまでには至らず，相対的に石材の量を軽減し得る対応として横口積み工法を採用したのであろう。

ただし，側壁に横口積みが採用される要因として，県西の「三豊型横穴式石室」(國木 1988)2)に見られるような地域的技術の伝承・伝統に由来する可能性も想定すべきであろう。

第２節　暗文付土師器（＝「畿内産土師器」）について

本古墳の出土遺物のうち，古墳の時期・性格等を示す資料は僅少であった。その中で，調査時点まではあまり報告例をみなかった暗文付土師器杯片を検出することができた。ただし，本資料は低温焼成土師器の通例として器質軟弱で吸水性が高く，復元時の泥・汚れ除去等に伴い暗文がほとんど消失した。検出時に視認できた暗文は不明瞭となり，残念ながら図示できなかった。

暗文付土師器杯は，石室内の奥壁に向かって右の側壁寄りで，２ヵ所の細片群として検出された。接合した結果，２個体分の暗文付土師器杯片が復元できた。原位置を厳密に保ってはいないが，およその供献位置を示すとみられ，層位は下位に相当する（第８図）。

それでは，これら暗文付土師器をどのように評価すべきであろうか。県内の出土事例を見てみたい。

本墳周辺では，『南山浦古墳群』があげられる。直線距離にして東方約３km，日常的接触・交流圏域内といえる位置にあって，独立丘陵石清尾山塊の東斜面に分布する。この南山浦９・10・11・13号墳から，計７点の暗文付土師器杯・高杯が出土しており，報告者は「埋葬後の葬送儀礼が執り行われ，その際，暗文杯は非常に重要な位置を占めていたらしい。（中略）南山浦古墳群を形成した集団がもつ個性的な葬送儀礼」(藤井 1985)11)であると記されている。

一方，香川郡香川町『清谷１号墳』では，暗文台付皿が出土しており，「畿内色の強い横穴式石室を築造し利用する集団が，葬送儀礼に使用する供膳形態として暗文土師器を重視しつつ（中略）畿内政権との密接な関係」(國木 1996)12)にあったと指摘されている。

第20図　暗文付土師器出土地分布図

No.	遺跡名		遺構名	出土位置	遺物No.	器種	径	高	暗文文様	記事	時期	資料
①	神高池北西古墳	高松市	横穴式石室	玄室	24	坏B			見込螺旋右上り斜放射	口縁内面直下に凹線	8C	本書
	〃	〃	〃	〃	48	坏B			〃		〃	〃
②	塚谷古墳	三木町	横穴式石室	石室内	2131	坏			放射状		飛鳥Ⅳ	14)
	〃	〃	〃	側壁抜取穴	2132	坏			見込螺旋・左上り放射状	赤色顔料,搬入or模倣	飛鳥Ⅲ	〃
	〃	〃	〃		2134	坏			見込螺旋・右上り放射状	〃		〃
	〃	〃	〃	玄室＋前庭	2135	坏			見込螺旋・右上り2段放射状	〃	飛鳥Ⅳ	〃
	〃	〃	〃	抜穴＋前庭	2136	坏			見込螺旋・左上り放射状	〃	飛鳥Ⅳ	〃
	〃	〃	〃	床直, 伏位	2137	坏			見込螺旋・右上り2段放射状	〃	飛鳥Ⅳ	〃
③	漆谷1号墳	高松市	横穴式石室	羨道部	1	皿			見込螺旋・左上り放射		8C	34)
④	久本古墳	高松市	横穴式石室	羨道	115	坏			左上り放射状		7C初-中葉	35)
	〃	〃	〃	羨道	116	坏			〃		〃	〃
⑤	南山浦9号墳	高松市	横穴式石室	羨道	105	坏AⅠ		4.4	右上り放射		平城Ⅱ.725AD	11)
	南山浦10号墳	〃	〃	袖石脇	210	坏AⅠ	17.4	3.7	見込螺旋右上り斜放射	完形・裏返し	平城Ⅰ.710AD	〃
	〃	〃	〃	〃	211	坏AⅠ	19.3	4.7	〃	裏返し	平城Ⅱ.725AD	〃
	南山浦11号墳	〃	〃	玄門中間	332	坏AⅠ	18.7	5.9	3重螺旋・連弧2段放射		飛鳥Ⅳ. 7C4四	〃
	南山浦13号墳	〃	〃	玄室左袖口	611	高坏			2段右上り斜格子放射	外面右上り斜放射		〃
	〃	〃	〃	玄室右袖口	612	坏C			見込螺旋左上り放射	丸底化		〃
	〃	〃	〃	〃	613	坏C			〃	〃		〃
⑥	古宮古墳	〃	〃	羨道奥	42	皿	12.4	2.5	見込のみ外周環状放射	口縁内面直下に凹線	飛鳥Ⅴ.7C末～8C初	本書
	〃	〃	〃	羨道部	44	坏A	18.8	4.6	右上り斜放射状	口縁内面直下に凹線	飛鳥Ⅴ.7C末～8C初	〃
	〃	〃	〃	羨道部	45	坏C	17.6	5.6	右上り斜放射状	口縁内面直下に凹線	〃	〃
⑦	鬼無大塚古墳	〃	〃	玄室	46	坏A			2段右上り放射状		飛鳥Ⅴ.7C末～8C初	本書
⑧	清谷1号墳	香川町	横穴式石室	玄室敷石上	3	台付皿	22.8	5.4	やや右上り放射状	外面ヘラ磨き	飛鳥Ⅲ7C後半古	12)
⑨	竜満山1号墳	香川町	横穴式石室	玄門床面	26	坏C	12.7	4.4	放射状		九州式石室	23)
⑩	鶴ヶ峰1号墳	坂出市	横穴式石室			坏CⅠ			放射状	鶴ヶ峰西南尾根	飛鳥Ⅱ.7C2四半期	9)
	〃	〃	〃			坏AⅠ			2段右上り放射状	〃	飛鳥Ⅳ.7C4四半期	〃
⑪	緑塚10号墳	大野原町	横穴式石室	玄室右側壁	3	坏			右上り斜放射状		6C末葉	36)
	〃	〃	〃	〃	4	坏			右上り斜放射状		〃	〃
	〃	〃	〃	〃	5	坏			左上り斜放射状		〃	〃
	〃	〃	〃	〃	7	椀			見込螺旋放射状		〃	〃
	〃	〃	〃	〃	8	椀			放射状		〃	〃
⑫	平岡遺跡群	大野原町	古墳/住居址	包含層	8	坏			放射状			37)

第2表　暗文付土師器出土古墳一覧

上記のように，県内出土の暗文付土師器類は，従来はむしろ極めて稀な例に属する遺物という評価が見られたのである。しかし，近年までに古墳から出土する暗文付土師器は漸増し，第2表のとおり管見の範囲でも幾つかの古墳で確認されている。さらに，下川津遺跡や川津一ノ又遺跡で知られるように，集落遺跡での大量出土例等も加えられた。このようにして，暗文付土師器は「特異な存在」から既に一定の普及を見せ，

ある程度は普遍的に見られるようになったのである。

今回，改めて見てみると，県内の古墳及び集落その他の遺跡で出土した暗文付土師器報告例は，管見の範囲でも総数450点近くを数える事ができた。この数字には‘確実な’「畿内産土師器」以外に「模倣品」または「畿内系土師器」と呼称されるものも含んでいる。このように暗文付土師器出土例が県内で顕著な増加をみせたとはいえ，同時代の大多数の遺跡では勿論出土せず，その限りでは稀ともいえる遺物である。

さて，暗文付土師器が大量に出土した下川津遺跡と川津一ノ又遺跡では，次のような評価が与えられている。それは，搬入品とするには不自然であり，県内の出土例がほとんど古墳副葬等に見られる小点数であることから，「これら「畿内産土師器」に近似する土師器は畿内からの搬入品ではなく，下川津遺跡周辺，つまり坂出市南部がこれらの土師器の生産地であるかもしくは集積地であったと理解するのが妥当で（中略）讃岐国で生産されたものと考えられ（中略）消費地としての飛鳥・藤原地域で出土する土師器は（中略）貢納された品を消費して（中略）結果的には畿内の土師器ではある」と指摘されている（片桐1997）16)。

一方，「畿内産土師器」の論考が多い林部氏によれば，「畿内産土師器」は「七世紀後半以降の律令官僚制の整備や，それにともなう大量の官人層の出現と，その特殊な生活形態の存在を前提として（中略）宮都でくりひろげられる儀式や宴会，さらに律令国家をささえた役人の特殊な生活形態（給食など）に対応するため，特別につくりだされた」ものとされている（林部1992ｂ）9)。さらに，「畿内産土師器」は，瀬戸内海沿岸地域では集落遺跡からの出土が多く，さらに飛鳥時代だけに限ると古墳からの出土がきわめて多い」ことを指摘されている(林部1992ａ)10)。

以上のように，讃岐から暗文付土師器が畿内にもたらされていた可能性を考えると，下川津遺跡や川津一ノ又遺跡に関わった集団が畿内と強いつながりをもっていたとも考えられる。さらに，飛鳥Ⅱ（7世紀第2四半期）～平城Ⅱ（8世紀中葉）において古墳出土例が継続的にみられることは，全国的にみても古墳出土例が高いという瀬戸内海沿岸地域の「畿内産土師器」受容傾向を，讃岐は顕著に示している。このことは，畿内＝律令国家体制とのかかわりが大きく，土器そのものに律令国家の制度や理念を象徴的に体現して，畿内との一体性がきわめて強い地域という特色（林部1992ｂ)9)を反映しているものと考えられる。

以上のことを考えると，暗文付土師器が出土した神高池北西古墳は，畿内とのつながりが想定されよう。後述するように，神高池北西古墳の築造は7世紀前葉であり，暗文付土師器は7世紀末～8世紀前半と空白期間があるが，暗文付土師器を石室に納めた者は畿内とのつながりが想定できよう。さらに，暗文付土師器を石室に納める行為は，祭祀に伴うものか追葬時の副葬品かは判断しかねるが，古墳を築造した集団と暗文付土師器を納めた者との間には何らかの関係が想定され，憶測の範囲を出ないが，畿内との強いつながりが古墳造営時期にまで遡る可能性はあろう。

第3節　神高池北西古墳の年代

本古墳の年代観を示す資料としては，原位置を保たず遺存状況も劣悪ながら，古墳の造営や祭祀に供献されたと考えられる土器類がある。これらは①築造時(地鎮具等を含む)，②初葬時，③追葬時，④それら以降の墓前祭祀等の各時期に際して使用されたであろうが，極度の撹乱で，当初の供献状態や先後関係についての確認および復元はほとんどできなかった。

そうした中にあって，数少ない個々の遺物から知り得た個々の年代観は，前述の遺物の項に記す通りである。それらを年代順に配列すれば，一定範囲の年代幅を知り得ることになる。ただし，これらは古墳の造営当初から最終墓前祭祀に至る全期間の年代幅であるとの想定の域に止まるものである。

本古墳の年代について，上記の意味での指標となる遺物は次の通りである。

①土師器　特徴的な遺物として注目できるのが，遺物№24暗文付土師器（畿内産土師器）で「杯Ｂ」タイプある。平城Ⅱ期（8世紀前葉）のものと考えられる。遺物№48も，同じく暗文付土師器で「杯Ｂ」タイプである。飛鳥Ⅴ(平城)Ⅰ期とみられる。№24に先行した7世紀末葉～8世紀初頭のものであろう。

②須恵器　遺物№04は，須恵器平瓶口縁部片である。遺物№16は，須恵器高杯蓋片である。頂部を欠い

ているが，低平なツマミをもつものであろう。遺物№20は，須恵器平瓶である。遺物№23は，須恵器高杯である。脚部下半を欠くが脚部「すかし」は2段である。遺物№25は，須恵器高杯である。脚部に「すかし」を持たない小ぶりなもの。これら遺物は，一部TK217併行期に下る可能性のものもあるが，おおむねTK209併行期の時期のものと考えられる。

③　石材が逸失して確定できないものの，推測される石室の規模や神高古墳群中における立地等から推して，本古墳は群内では終末の段階に造営されたと考えるべきであろう。

以上の①・②・③に挙げた各資料からみて，本古墳の造営時期は，須恵器にみられるTK209併行期（7世紀第1四半期頃）と考えられる。そして，暗文付土師器に示される飛鳥Ⅴ期（平城Ⅰ期）～平城Ⅱ期（7世紀末～8世紀前葉)に，埋葬・祭祀の区別は難しいが，再度使用されたものと想定される。

第Ⅰ～Ⅳ章の主要参考文献（順不同）

1）『高松市文化財（史跡）分布調査報告書』高松市文化財保護委員小竹一郎 1972

2）『大原塚古墳発掘調査報告書』三野町教育委員会 1988.2

3）『川北一号墳』引田町教育委員会昭和 60 年 3 月

4）河上邦彦「横穴式石室の問題」『季刊考古学№45』雄山閣 1993.11

5）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十八冊 国分寺楠井遺跡』香川県埋蔵文化財研究会 1995.10

6）『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 浜ノ町遺跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2004.3

7）『藤原宮と京　展示案内』奈良国立文化財研究所 1991.3

8）西 弘海「西日本の土師器」『世界陶磁全集 2 日本古代』小学館 1979.11

9）林部 均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土器」『考古学研究№155』考古学研究会 1992.12

10) 林部 均「律令国家と畿内産土師器－飛鳥・奈良時代の東日本と西日本-」『考古学雑誌第77第4号』日本考古学会1992.3

11)『南山浦古墳群調査報告書』高松市教育委員会 1985. 3

12) 國木健司「清谷 1 号墳出土の遺物」『香川考古第 5 号』香川考古刊行会 1996.10

13) 林部 均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌第 72 巻第 1 号』日本考古学会 1986.9

14)『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告小谷窯跡・塚谷古墳』香川県教育委員会 2002.12

15) 大久保徹也「下川津における 7・8 世紀代の土器様相について」
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センター 1990.3

16) 片桐孝治「讃岐の土師器」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ特集7世紀の讃岐』㈶香川県埋文センター1997.3

17)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県埋蔵文化財調査センター 1996.11

18) 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究--中・四国編--』1985

19) 渡辺明夫「観音寺市なつめの木貝塚出土の縄文時代後期土器（なつめの木式）について～香川県における津雲Ａ式及び北白川上層式 1 期併行期の土器～」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅱ』㈶ 香川県埋蔵文化財調査センター 1994.3

20)『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県埋蔵文化財調査センター 2000.3

21) 伊藤　晃「亀山焼の変遷」『岡山県の考古学』吉川弘文館Ｓ62

22) 林部　均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌 72-1』日本考古学会 1986.9

23) 『龍満山古墳群～1 号墳～』香川町教育委員会・高松市水道局 2003.9

24) 『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 3 冊鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 他

25) 間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社 H3. 1. 20

26)『西村遺跡Ⅱ-国道 32 号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査-』香川県教育委員会 1981.3

27)『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 3 冊 前田東・中村遺跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1995.3

28) 佐藤竜馬「讃岐における平安期の土器研究」『中近世土器の基礎研究ＸＶ』日本中世土器研究会 2000.12

29)『一般国道１１号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 7 冊 居石遺跡』高松市教育委員会 1995.10

30)『高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1. 2 冊香西南西打遺跡・鬼無藤井遺跡』高松市教育委員会 2001.3

31) 佐藤竜馬‘「西村型土器椀」の系譜’『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅷ』㈶ 香川県埋蔵文化財調査センター2000.3

32) 松本敏三・岩橋孝「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要第 2 号』瀬戸内海歴史民俗資料館 1986.3

33)『かしが谷 2 号墳・3 号墳発掘調査報告書　高松市鬼無町所在の円墳の調査』高松市教育委員会 1986. 3

34)『高松市埋蔵文化財調査報告　第 75 集　漆谷古墳群』高松市教育委員会 2004.3

35)『高松市埋蔵文化財調査報告　第 71 集　高松市指定史跡　久本古墳』高松市教育委員会 2004.3

36)『縁塚古墳群Ⅰ-香川県大野原町丸井所在の群集墳の調査-』大野原町教育委員会 1991.3

37)『平岡遺跡群発掘調査報告書』大野原町教育委員会 1992.9

『石清尾山塊古墳群調査報告』高松市教育委員会 1973. 3

『椋の木古墳・大石北谷古墳調査報告書』長尾町教育委員会 1989.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十八冊　国分寺六ツ目遺跡』香川県埋蔵文化財調査センター 1997.8

『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 1 冊 西打遺跡Ⅰ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター 2001.11

第３表　神高池北西古墳出土遺物観察表

No.	器　種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	調　整	色　調	胎　土	備　考
1	中国製青磁椀	15.8	6+	6.5+	外面鎬蓮弁 内面ナデ施釉	胎土:N7/灰白 釉:10Y6/2オリーブ灰	密／良好	龍泉窯系
2	土師質土器鍋CⅠ	29.2		5.3	外面指圧ナデ 内面ハケナデ	外面:10YR5/4にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～0.5mm英・長／良	
3	土師質土器杯	10.4	6.4	2.2	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:10YR8/2灰白	密／良	底部ヘラ切／板目
4	須恵器瓶	7.2		5.9+	外面ナデ 内面ナデ	外面:N7/灰白 内面:N7/灰白	密／良	
5～1	*鉄釘*							未実測
5～2	〃							
6	有溝土錘	長7.6	幅6.2	厚5.2	ナデ／指頭圧痕	7.5YR6/4にぶい橙	～2mm英・長／良	復元完形
7	土師質土器杯DⅡ-6	10.7	5.6	3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/1灰白 内面10YR8/2灰白	～0.5mm英・長／良	底部ヘラ切／板目
8	土師質土器小皿CⅠ	9.4	7.0	1.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:浅黄橙	～0.5mm英・長・雲／良	底部糸切
9	土師質土器足釜BⅣ			4.4	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:5YR6/4にぶい橙	～1.5mm英・長・角/良	
10	土師質土器鍋CⅠ			5.2	外面ハケ 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1.5mm英・長・雲・角/良	
11	土師質土器足釜BⅡ			2.5	外面爪圧ナデ 内面指圧ナデ	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:5YR6/6橙	～1mm英・長・角／良	爪形顕著
12	*鉄刀片*	長5.2	幅5.2	厚1.0	鍛造	左側面:7.5YR5/4にぶい褐 右側面:7.5YR6/6橙		銹剥落あり
13	土師質土器足釜BⅡ			3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	
14	土師質土器脚部			6.5	ナデ	外面:10YR7/1灰白 断面:2.5Y6/1黄灰	～1mm英・長／良	接地端面存
15	黒色土器甕	胴径43.1	20.6	25.8	外面格子目叩き 内面ハケナデ	外面:N3/暗灰 内面N4/灰	密／良	亀山焼第二群
16	須恵器高杯蓋	13.6		4.0+	外面ナデ・ヘラ削り 内面ナデ	外面:N6/0灰 内面:N6/0灰	密／良好	宝珠つまみ? 稜下部凹線
17	須恵器杯	12.5	7.9	2.9	外面ナデ・ヘラ切 内面ナデ	外面:10YR7/1灰白 内面:10YR8/1灰白	～1mm英・長・角／良	底部ヘラ切／板目
18	須恵器碗		6.2	1.9	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y8/1灰白 内面:　〃	密／良	貼付高台 十瓶山窯跡群
19	土師質土器足釜BⅢ			3.7	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR7/4にぶい黄橙 内面:　〃	～2mm英・長・雲／良	鍔下部爪形 楠井Ⅱ-2
20	須恵器平瓶	7.7	8.0	12.0	外面ナデ・ヘラナデ 外面ナデ	外面:N5/灰 内面:N6/灰	密／良好	胴径13.0
21	瓦質土器甕	28.5		5.3	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:N3/0暗灰 内面:　〃	～0.5mm英・長／良	亀山焼第二群
22	瓦質土器捏鉢		10.0	3.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:N/灰 内面:7.5Y8/1灰白	～1mm英・長／良	十瓶山窯跡群
23	須恵器高杯	10.0		7.5	外面回転ナデ 内面回転ナデ	外面:5Y3/1オリーブ黒 内面:5Y4/1灰	密／良好	2段透 刻目文/凹線
24	土師器杯B	16.6	12.4	5.0	外面回転ナデ 内面回転ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:5YR7/8橙	密／良	暗文右下り斜線・螺旋
25	須恵器高杯	10.2	9.0	10.1	回転ナデ	外面:N5/灰 内面:N6/灰	密／良好	透かし無
26	*鉄環*							鉸具
27	土師質土器碗	10.8	5.4	3.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR8/2灰白	密／良	吉備系(早島式)
28	備前焼大甕	42.0		4.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y7/1灰白 内面:10YR5/1褐灰	～1mm英・長・角／良	Ⅲ期。自然釉あり
29	土師質土器足釜C			4.3	外面ナデハケ 内面ナデ	外面:7.5Y6/4にぶい橙 内面:　〃	1～2mm英・長／良	楠井Ⅲ期
30	土師質土器足釜BⅡ			5.6	口鍔外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR6/6橙	～1mm英・長・雲・角／良	体外面指圧　内ナデ
31	土師質土器足釜BⅡ	19		5.85	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	～3mm英・長／良	鍔下端爪形
32	土師質土器足釜BⅣ			5.0	口鍔外面ナデ 内面ナデ	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:5YR6/6橙	～3mm英・長／良	体外面ナデ　内ナデ
33	土師質土器脚			11.5	ナデ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 断面:5YR5/3にぶい赤褐	～0.5mm英・長・角／良	
34	土師質土器鍋CⅠ	17.6		5.4	外面ナデハケ 指圧内面ハケナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	～1mm英・長・角／良	焼成堅緻
35	須恵器甕	(約26)		5.0+	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5Y6/1灰 内面:7.5Y4/2灰オリーブ	密／良，気泡膨脹	自然釉，頸部窯印
36	須恵器甕			6.7	外面ナデ 内面ナデ同心円叩き	外面:2.5GY4/1暗オリーブ 内面:N7/灰白	密／良好	自然釉
37	土師質土器鍋BⅠ			4.2	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/2褐灰 内面:5YR5/2灰褐	1～2mm英・長／良	外面磨耗
38	須恵器捏鉢	23.2	8.2	8.8	外面ナデ 内面ナデ	外面:5Y6/1灰 内面:5Y7/1灰白	密／良	底部糸切，東播系
39	土師質土器捏鉢	31.6	12.0	12.5	外面ナデハケ 内面ハケ	外面:7.5Y7/4にぶい橙 内面:7/5Y6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	備前Ⅰ,Ⅱ模倣 楠井
40	土師質土器鍋AⅡ			1.2	外面ハケ 内面ナデ	外面:7.5YR4/1褐灰 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～0.5mm英・長・角／良	外面煤付着
41	土師質土器杯DⅡ-5	13.1	9.2	3.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:　〃	～0.5mm英・長・角／良	
42	土師質土器杯EⅠ-3	11.8	7.5	2.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5Y7/3にぶい橙 内面:　〃	1～2mm英・長・角／良	底面糸切離
43	土師質土器鍋CⅠ			5.0	外面ナデハケ 内面ハケ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
44	土師質土器鍋CⅡ			2.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5Y5/4にぶい褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
45	土師質土器鍋BⅠ	45.2		5.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:N4/灰 内面:N5/灰	密／良好	煤付着
46	須恵器碗	14.0		3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:N8/灰白 内面:　〃	密／良	十瓶山窯跡群 AⅡ7～8
47	土師器甕EⅡ-2	37.7		10.4	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:5YR6/4にぶい橙	英・長・角／良	
48	土師器杯B	16.4	12.8	4.7	磨耗 (暗文見込螺旋右上放射)	外面:2.5YR5/4にぶい赤褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	暗文／高台

No.	器　　種	法　量			調　　整	色　　調	胎　　土	備　　考
		口 径	底 径	器 高				
49	土師質土器鍋AⅡ	42.2		6.4	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ指圧	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR8/1灰白	～1mm英・長・雲／良	焼成堅緻
50	土師質土器鍋AⅡ			3.8	外面ハケナデ 内面ハケ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～2mm英・長／良	
51	サヌカイト翼状剥片	6.9	3.8	0.9	瀬戸内技法	風化面:5Y5/1灰 破断面:N4/灰	石理顕著　13.3g	Side SC?
52	土師質土器足釜BⅣ			4.0,	外面ハケ指圧ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:7.5YR6/3にぶい褐	～2mm英・長/良	体外面煤痕
53	中国製青磁椀		6.0	2.2+	見込線描花文ナデ 高台内ナデ	釉:5Y5/2灰オリーブ 胎土:2.5Y8/2灰白	密／良好	竜泉窯系
54	土師質土器小皿BⅢ-3	7.6	6.6	1.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:　〃	～1mm英・長・雲／良	底面ヘラ切
55	土師質土器足釜BⅢ			5.8	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ指圧	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	接合痕あり
56	土師質土器足釜BⅣ			3.4	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR4/1褐灰 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
57	土師質土器足釜BⅡ			5.9	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR7/4にぶい黄橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
58	土師質土器足釜BⅡ			4.8	外面ナデ　内面ナデ	外面:7.5YR6/3にぶい橙 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	体外面ナデ指圧・煤
59	須恵器碗AⅡ-9			0.6	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5Y8/1灰白 内面:2.5Y7/2	やや粗／良	貼付高台
60	土師質土器足釜BⅠ	24.0		5.0	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・雲・角／良	鍔下部爪形顕著
61	土師質土器鍋BⅠ			4.8	外面ナデハケ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/2灰黄褐	～1mm英・長・雲・角／良	
62	土師質土器鍋CⅡ	24.0		3.5	外面ナデ指圧ハケ 内面ナデハケ	外面:7.7YR7/3にぶい橙 内面:10YR8/3浅黄橙	～1mm英・長・雲／良	
63	土師質土器鍋AⅣ	21.6		2.7	外面ナデハケ 内面ナデ	外面:7.5YR5/4にぶい褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・雲・角／良	
64	瓦質甕		15.0	4.9	外面ナデ 内面ナデ	外面:N4/0灰 内面:　〃	～1-3mm英・長／良	西村と同形
65	須恵質広口瓶		8.6	7.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR5/1褐灰	～1mm英・長・雲・角／良	
66	土師質土器鍋AⅠ			4.0	外面ナデハケ 内面ナデハケ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長／良	口縁端面ハケ
67	土師質土器足釜AⅡ			4.7	口縁外面指圧ナデ 内面指圧ナデハケ	外面:10YR6/4にぶい黄橙 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長／良	体外圧ハケ内ナデ
68	土師質土器鍋CⅡ			5.3	外面ナデ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR4/2灰褐 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	外面煤附着
69	土師質土器鍋BⅢ			5.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	
70	土師質土器足釜BⅡ	20.6		5.75	外面指圧ハケ 内面ナデ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:10YR6/2灰黄褐	英・長・角／良	鍔接合痕
71	瓦質土器碗		4.2	1.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:N6/灰 内面:7.5Y7/1灰白	密／良	和泉瓦器Ⅲ-1期
72	土師質土器鍋AⅡ			7.7	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:　〃	～1mm英・長／良	
73	土師質土器鍋CⅡ	25.6		6.2	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:　〃	～0.5mm英・長・角／良	外面煤
74	土師質土器鍋CⅡ	23.8		7.0	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:7.5YR5/4にぶい褐 内面:7.5YR8/4浅黄橙	～0.5mm英・長／良	
75	土師質土器鍋CⅠ			3.7	外面ナデ 内面ハケ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	1～2mm英・長／良	
76	土師質土器鍋AⅡ	39.8		7.3	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	体外面指圧内面ナデ
77	土師質土器足釜AⅠ			7.1	外面ナデハケ指圧 内面ナデ	外面:2.5Y8/2灰白 内面:　〃	～2mm英・長・雲・角／良	
78	土師質土器足釜BⅡ			4.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
79	土師質土器足釜AⅠ	19.6		2.1	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR8/1灰白	1～2mm英・長・角／良	
80	土師質土器足釜AⅡ	23.2		6.8	外面ハケ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	～1.5mm英・長・雲・角/良	体外面煤顕著
81	土師質土器足釜BⅢ	28.4		5.8	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	
82	土師質土器脚			11.2	ナデ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 断面:10R6/8赤橙	～0.5mm英・長／良	
83	須恵器瓶		6.8	4.6+	外面ナデ 内面ナデ	外面:N6/灰 内面:N7/灰	密／良	高台
84	土師質土器鍋AⅡ			8.6	外面ナデ指圧ハケ 内面ナデハケ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～2mm英・長/良	口縁端凹状
85	須恵質擂鉢		12.8	4.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5Y6/1灰 内面:7.5Y7/1灰白	密／良	条溝4単位 東播
86	瓦質擂鉢	33.0		9.0+	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:5Y8/1灰白 内面:5Y8/1灰白	やや密／良	条溝　4-単位×6
87	須恵器碗			3.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:5Y7/1灰白 内面:　〃	密／良	西村 口端炭素/火襷
88	*鉄環片*							鉸具?
89	土師質土器杯DⅡ-5	11.2	8.0	2.9	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:　〃	やや密／良	復元完形
90	土師質土器杯DⅡ-6	10.8	6.6	3.3	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:2.5Y8/1灰白 内面:　〃	密／良	
91	土師質土器小皿BⅢ-4	4.9	5.5	1.2	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:5YR6/6橙 内面:　〃	～1mm英・長・角／良	
92	土師質土器小皿CⅠ	6.6	5.6	1.0	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7／3にぶい黄橙	密／良	
93	土師質土器小皿BⅢ-3	8.2	5.4	1.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR8/2灰白 内面:10YR8/1灰白	～1mm英・長／良	
94	弥生土器甕	16.3		11.5	外面ハケナデ 内面ナデ削り	外面:2.5Y7/1灰白 内面:N4/灰	～1.5mm英・長・角/良	
95	土師質土器鍋AⅠ			5.0	外面ナデ指圧ハケ 内面ナデハケ	外面:7.5YR6/2灰褐 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長／良	楠井 口縁端ハケ
96	土師質土器鍋AⅡ	40.0		1.7	外面ハケナデ 内面ハケ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	

No.	器種	法量			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
97	土師質土器鍋A類	38.6		5.9	口縁外面叩き 内面ハケ指圧	外面:10YR3/1黒褐 内面:10YR6/4にぶい黄橙	～2mm英・長・雲／良	体外面ハケ内面ハケ
98	土師質土器鍋AⅡ	25.6		5.9	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR5/1灰黄褐 内面:7.5YR5/4にぶい褐	～1mm英・長／良	体外ハケ指圧内ナデ
99	土師質土器鍋BⅡ	38.8		7.9	外面ハケ 内面ナデ	外面:10YR/5/3にぶい黄褐 内面:　〃	～2mm英・長/良	
100	土師質土器鍋BⅡ			4.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR4/1褐灰 外面:5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	外面煤付着
101	土師質土器鍋BⅢ	36.4		5.8	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR4/1褐灰 外面:10YR6/1褐灰	～1mm英・長・角／良	外面煤付着
102	土師質土器鍋BⅢ			3.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	
103	土師質土器鍋BⅢ			3.6	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
104	土師質土器足釜AⅠ	20.2		6.8	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	外面煤痕
105	土師質土器足釜AⅡ			7.5	外面ハケ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:　〃	～1mm英・長・角／良	
106	土師質土器足釜AⅡ	20.2		6.9	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:　〃	～2mm英・長/良	体外面煤痕跡
107	土師質土器足釜AⅡ			5.8	外面ハケナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:　〃	～1mm長・角／良	
108	土師質土器足釜AⅡ			5.4	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～2mm英・長/良	
109	土師質土器足釜AⅡ			5.5	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:10YR6/1褐灰 内面:10YR8/3浅黄橙	～2mm英・長/良	内外面煤付着
110	土師質土器足釜BⅠ	23.8		5.4	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR5.3にぶい褐	～1mm英・長・角／良	内外面煤付着
111	土師質土器足釜BⅠ			4.7	外面ナデ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	1～3mm英・長/量	
112	土師質土器足釜BⅡ	26		10.3	外面ハケナデ 内面ナデ指圧	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	
113	土師質土器足釜BⅡ			5.9	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	1～3mm英・長・角・雲/良	
114	土師質土器足釜BⅡ			4.2	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:2.5Y3/2黒褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	英・長／良	煤付着顕著
115	土師質土器足釜BⅢ	21.0		5.0	外面指圧 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	1～2mm英・長・雲／良	
116	土師質土器足釜BⅣ			5.3	口縁ナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	～1mm英・長・角／良	体内面接合痕跡
117	土師質土器足釜BⅡ			4.1	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長／良	外面鍔接合痕
118	土師質土器足釜BⅣ	21.6		5.3	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
119	土師質土器足釜BⅠ			6.2	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR4/2灰黄褐 内面:10YR5/3にぶい黄褐	～1mm英・長・雲・角／良	煤付着顕著
120	土師質土器足釜BⅡ			5.3	外面ナデ指圧 内面ナデ°	外面:10YR6/にぶい黄橙 内面:7.5YR7/6にぶい橙	～3mm英・長／良	
121	土師質土器足釜BⅡ			5.9	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
122	土師質土器足釜BⅢ			3.1	外面ナデ 内面ハケ	外面:5YR6/6橙 内面:7.5YR6/4にぶい橙	1mm英・長／良	
123	土師質土器足釜BⅡ	27.2		7.6	外面ナデ指圧 内面ナデ°	外面:5YR6/6橙 内面:5YR6/8橙	～2mm英・長/良	脚離脱痕あり
124	土師質土器足釜BⅣ	24.2		16.8	外面ナデ指圧 内面ナデ°	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR7/6橙	～2mm英・長/良	脚部残存
125	土師質土器足釜BⅣ	15.2		5.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR5/2灰褐 内面:7.5YR6/2灰褐	～1.5mm英・長・雲・角/良	外面煤付着
126	土師質土器足釜BⅡ			3.8	外面ナデ指圧 内面ナデ°	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:5YR6/6橙	～1.5mm英・長・雲・角/良	
127	土師質土器足釜BⅣ			4.9	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:5YR6/6橙	～1.5mm英・長・角/良	体外面指圧
128	土師器甕	37.4		11.1	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	英・長・角・雲/良	
129	土師質土器脚			16.1	ナデ	外面:7.5YR7/2明褐灰 内面:5YR8/4淡橙	～0.5mm英・長／良	
130	土師質土器鍋CⅠ	26.4		6.5	外面ハケナデ指圧 内面ハケ	外面:5YR7/3にぶい橙 内面:　〃	0.5mm英・長・角／良	
131	土師質土器鍋CⅠ			7.9	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR5/2灰褐 内面: 10YR6/2灰黄褐	～1mm英・長・雲・角／良	
132	土師質土器鍋CⅡ	28.0		4.0	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:5YR5/3にぶい赤褐 内面:5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
133	土師質土器脚部片			11.9	ナデ指圧	外面:10YR7/3にぶい黄橙 断面:7.5YR5/2灰褐	1～2mm英・長・角／良	
134	土師質土器小皿BⅢ-4	7.4	5.2	1.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR8/3浅黄橙	～1mm英・長／良	
135	土師質土器足釜AⅡ	26.8		2.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR5/1褐灰 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～1mm英・長・雲／良	
136	土師質土器足釜BⅠ	20.6		8.1	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:　〃	～0.5mm英・長／良	脚部接合痕
137	土師質土器足釜BⅠ			4.5	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:　〃	～1mm英・長／良	口縁端ハケ目
138	土師質土器足釜BⅠ			3.6	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:5YR7/4にぶい橙 内面:5YR6/6橙	0.5～1mm英・長／良	
139	土師質土器足釜BⅡ			5.8	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい褐 内面:　〃	～1.5mm英・長・雲・角/良	
140	土師質土器足釜BⅢ			4.2	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲／良	
141	土師質土器鍋CⅠ	21.0		8.4	外面ナデ指圧 内面ナデハケ	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	外面煤付着
142	土師質土器鍋AⅠ			2.6	外面ハケナデ 内面ハケ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:　〃	～1mm英・長／良	口縁端面ハケ
143	土師質土器鍋AⅡ			2.2	外面ナデ 内面ナデハケ	外面:10YR4/1褐灰 内面:7.5YR5/3にぶい褐	～1mm英・長・雲・角／良	外面煤

No.	器種	法量			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
144	土師質土器足釜BⅡ			4.1	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面: 〃	～1mm英・長／良	
145	土師質土器足釜AⅡ			2.9	外面ナデハケ 内面ナデハケ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:7.5YR7/3にぶい橙	～1mm長・角／良	
146	土師質土器鍋CⅡ			4.3	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
147	土師質土器鍋CⅠ			4.5	外面ハケ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	
148	鞴羽口	長5.2	幅6.7	厚2.6	型抜き／ナデ	外面:2.5Y7/2灰黄 胎土:5Y5/4にぶい赤褐	～5mm英・長／良	
149	土師質土器小皿BⅢ-4	7.0	5.4	1.2	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:7.5YR8/4浅黄橙	～1mm英・長／良	底面ヘラ切
150	土師質土器小皿BⅢ-5	7.2	7.0	0.9	外面ナデ 内面ナデ	外面:5YR8/4淡橙 内面: 〃	～1mm英・長／良	
151	土師質土器鉢	20.2	11.0	6.4	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR8/2灰白 内面:7.5YR8/1灰白	～0.5mm英・長／良	西村Ⅱと同形
152	須恵器杯	13.0,	8.5	3.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:5Y7/1灰白 内面: 〃	密／良	十瓶山窯跡群
153	土師質土器足釜BⅢ			4.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長／良	口縁端外面爪圧痕
154	土師質土器鍋CⅡ	50.0		6.8	外面ナデ削り 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/3灰褐 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～2mm英・長・雲・角／良	
155	鉄滓	9.0	5.2	4.0				
156	土師質土器鍋AⅢ			8.9	外面ナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR7/4にぶい黄橙	～2mm英・長・雲・角／良	
157	土師質土器鍋AⅠ			1.8	外面ナデ 内面ハケナデ	外面:5YR6/3にぶい橙 内面:5YR7/3にぶい橙	～2mm英・長／良	
158	土師質土器鍋AⅡ	23.0		7.2	外面ハケ 内面ハケ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲／良	
159	土師質土器鍋CⅠ	23.2		4.1	外面ナデ 内面ナデハケ	外面:10YR4/1褐灰z 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～3mm英・長・雲／良	
160	土師質土器鍋BⅠ			2.9	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面2.5Y3/1黒褐 内面:2.5Y4/1黄灰	～1mm英・長・角／良	外面煤残存
161	土師質土器鍋BⅡ			6.1	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長／良	体部外面煤
162	土師質土器足釜AⅠ	15.6		5.2	外面ナデハケ 内面ナデハケ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面: 〃	～1mm長・角／良	
163	土師質土器足釜AⅡ	21.2		3.8	外面ハケナデ 内面ハケ	外面:7.5YR8/4浅黄橙 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・雲／良	体部外面煤残存
164	土師質土器足釜AⅡ			3.4	外面ハケナデ 内面ハケ	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR8/1灰白	～1mm英・長／良	
165	土師質土器足釜AⅡ	24.2		10.0	外面ナデハケ指 圧内ナデ指圧	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:10YR8/2灰白	～1mm長・角／良	体部外面煤
166	土師質土器足釜AⅡ			3.4	外面ナデハケ 内面ナデハケ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:10YR8/2灰白	～0.5mm英・長・角／良	
167	土師質土器足釜BⅢ			5.0	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・雲／良	内外面煤付着
168	土師質土器足釜BⅠ	23.2		4.1	外面ナデ指圧 内面ハケナデ	外面:5YR7/3にぶい橙 内面:5YR6/3にぶい橙	～2mm英・長／良	口縁端ハケ
169	土師質土器足釜BⅡ			4.7	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:5YR7/6橙	～1mm英・長・角／良	
170	土師質土器足釜BⅡ	20.4		4.8	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	体外ナデ指圧内ハケ
171	土師質土器杯DⅡ-8	10.2	6.6	2.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5YR7/3淡赤橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	密／良	底部ヘラ切／板目
172	土師質土器鍋CⅡ	36.2		10.0,	外面指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面: 〃	～1mm英・長／良	体外下半煤付着
173	土師質土器足釜BⅢ	23.2		9.4	外面ハケナデ指圧 内面 〃 左	外面:7.5YR5/2灰褐 内面:10YR5/2灰黄褐	～1mm英・長・角／良	外底面叩き
174	土師質土器鍋CⅡ	42.0		6.9	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR7/4にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	
175	土師質土器杯EⅢ-3	11.8	5.0	3.1	摩耗・不明	外面:7.5YR8/4浅黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～1mm英・長／良	底部 板目
176	土師質土器鍋AⅠ			3.1	外面ハケ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
177	須恵器壺			5.4	外面ナデ 内面ナデ指圧	外面:10YR7/4にぶい黄橙 内面:10YR8/3浅黄橙	～1mm英・長・角／良	外面還元黒斑
178	須恵器碗	14.2		3.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y7/1灰白 内面: 〃	密／良	口端炭素 十瓶山窯跡群
179	土師質土器鍋AⅣ	28.8		11/0,	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR4/2黄褐 内面:5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長／良	体外ハケ指圧内ナデ
180	土師質土器足釜BⅢ			3.7	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR7/3にぶい橙	～0.5mm英・長／良	
181	土師質土器鍋AⅠ	38.8		1.7	外面ナデハケ 内面ナデハケ	外面:10YR6/2にぶい黄橙 内面: 〃	～1mm英・長／良	内面に煤顕著
182	土師質土器足釜AⅠ	21.8		6.0,	外面ハケ指圧 内面ハケ	外面:10YR8/4浅黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～2mm英・長／良	
183	土師質土器足釜BⅡ	20.0		6.4	外面ハケナデ指圧 内面ハケ指圧	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR8/3浅黄橙	～2mm英・長・角／良	
184	土師質土器足釜BⅣ	27.4		4.3	外面ナデ指圧ハケ 内面指圧ナデ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～3mm英・長・角／良	
185	土師質土器鍋CⅡ			5.9	外面ナデ指圧 内面ナデハケ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	
186	土師質土器足釜BⅡ			6.1	外面指圧爪形ナデ 内面ハケナデ	外面:5YR7/4にぶい橙 内面: 〃	～1mm英・長／良	鍔下爪形工程明瞭
187	土師質土器杯シDⅡ-5	12.8	8.4	3.4	外面ナデ底部ヘラ切 内面ナデ	外面:5YR7/3にぶい橙 内面: 〃	～1mm英・長／良	
188	土師質土器杯DⅡ-6	9.8		3.2	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR8/2灰白 内面: 〃	密／良	
189	土師質土器杯DⅡ-7	12.6	8.4	2.8	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/4浅黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	底面ヘラ切
190	須恵器杯	10.8	6.0	3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:8/ヽ灰白 内面:8/ヽ灰白	1～2mm英・長／良	底面ヘラ切 十瓶山窯跡群
191	土師質土器杯DⅡ-8	10.2		3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面2.5Y5/2暗灰黄 内面: 〃	～1mm英・長・雲・／良	

No.	器　種	法量			調　整	色　調	胎　土	備　考
		口径	底径	器高				
192	土師質土器杯DⅡ-7			2.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	～1mm英・長・雲・角／良	
193	土師質土器杯DⅡ-8'			2.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR8/3浅黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	
194	サヌカイト刃器	7.1	7.0	2.0	打製	風化面:N5/灰 破断面:N3/暗灰	打製石斧／石鍬 105.6g	縄文晩期?
195	土師質土器足釜BⅣ			4.5	外面ナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
196	土師質土器鍋CⅡ			4.4	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR5/1褐灰 内面:10YR8/2灰白	～1mm英・長・雲・／良	
197	土師質土器			7.2	ナデ指圧捻り	外面:10YR5/3にぶい黄橙 断面:10YR6/4にぶい黄橙	～0.5mm英・長・角／良	接地端面存
198	黒色土器椀		6.6	2.0	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面5GY2/1オリーブ黒 内面:　〃	～1mm石英・長石／良	
199	土師質土器擂鉢	29.8		10.0+	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面7.5YR6／4にぶい橙 内面10YR6／2灰黄褐	～2mm英・長・角／良	条溝6
200	鉄滓	5.0	4.0	1.8				
201	青磁碗	13.5+	5.8	3.5+	外面鎬蓮弁 内面ナデ施釉	胎土:10Y7/1灰白 釉:7.5Y7/1灰オリーブ高台内無釉	密／良好	竜泉窯系 気泡・貫入
202	青白磁鉢	9.4+	5.8	3.2+	外面ナデ高台脇・稜 内面ナデ	胎土:N8/灰白 釉:10GY7/1明緑灰	密／良好	高台内施釉
203	弥生土器甕		6.2	5.3	外面磨き 内面削り	外面:2.5Y5/3黄褐 内面:2.5Y2/1黒	～3mm英・長・角／良	下川津B類?
204	鎧鉄	4.0+	2.5+	1.5+				3片
205	弥生土器甕		4.4	3.6	外面磨耗 内面磨耗・削り?	外面:2.5YR5/3にぶい赤褐 内面:2.5Y4/1黄灰	1～3mm英・長・角・雲/良	
206	須恵器碗	14.4		4.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:N8/灰白 内面:　〃	蜜／良	口端炭素 十瓶山窯跡群
207	土師質土器脚			12.3	ナデ	外面:7.5YR5/4にぶい褐 断面:5YR7/4にぶい橙	1～4mm英・長／良	
208	土師質土器小皿BⅢ－4	6.4	5.4	0.9	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面7.5YR8／3浅黄橙 内面7.5YR8／3浅黄橙	～1mm石英・長石／良	
209	土師質土器小皿BⅢ－5	6.4	6.0	0.9	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面10:YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	
210	土師質土器小皿BⅢ－3	7.8	5.8	1.5	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:　〃	～1mm石英・長石／良	
211	土師質土器小皿BⅢ－3	7.5	5.2	1.1	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:10YR8／2灰白 内面:　〃	～1mm石英・長石／良	
212	土師質土器小皿BⅢ－3	7.6	5.4	1.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR8/33浅黄橙	～1mm石英・長石／良	
213	土師質土器小皿BⅢ－4	8.0	7.0	1.2	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:　〃	～1mm石英・長石／良	
214	須恵器碗	12.4		2.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y7/2灰黄 内面:　〃	～1mm石英・長石／良	口端炭素 十瓶山窯跡群
215	須恵器碗	13.4		3.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:N7/灰白 内面:7.5Y8/1灰白	～1mm石英・長石／良	口端炭素 十瓶山窯跡群
216	須恵器碗	13.8		3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:5Y8/1灰白 内面:N8/灰白	～1mm石英・長石／良	口端炭素 十瓶山窯跡群
217	土師質土器鍋AⅠ	36.6		5.4	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:7.5YR5/2暗灰黄	～2mm英・長／良	口縁端ハケ目
218	土師質土器鍋AⅠ			4.5	外面ナデハケ 内面ハケ	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:10YR8/2灰白	～1mm英・長・雲・角／良	外面煤痕跡
219	土師質土器鍋AⅠ			2.2	外面ハケ 内面ハケ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:7.5YR8/4浅黄橙	～1mm英・長・角／良	
220	土師質土器鍋AⅠ			4.9	外面ハケ 内面ナデ	外面:10YR4/1褐灰 内面:10YR6/4にぶい黄橙	英・長含む	外面煤付着
221	土師質土器鍋AⅡ			3.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR6/4にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	
222	土師質土器鍋AⅡ			3.8	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:7.5YR8/4浅黄橙	～1mm英・長・角／良	
223	土師質土器鍋AⅡ			2.9	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～2mm英・長／良	
224	土師質土器鍋AⅡ	37.8		3.3	外面ナデ 内面ナデハケ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:　〃	～1mm英・長・雲・角／良	
225	土師質土器鍋AⅢ	40.0		2.6	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y7/2灰黄 内面:10YR5/2灰黄褐	～2mm英・長・雲／良	口縁端丸めて内彎
226	土師質土器鍋CⅢ			8.9	外面ナデ指圧 内面ナデハケ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	輪積接合痕2線
227	土師質土器鍋AⅣ	42.7		3.7	外面叩き指圧 内面ハケ	外面:10YR4/1褐灰 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	
228	土師質土器鍋AⅣ	32.4		3.6	外面ナデハケ 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR8/3浅黄橙	英・長／良	
229	土師質土器杯DⅡ-6	10.4	6.2	3.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:2.5Y8/1灰白	～1mm石英・長石／良	底面ヘラ切・板目
230	土師質土器鍋AⅣ			2.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:10YR6/4にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	口縁端煤残存
231	土師質土器鍋BⅠ			4.6	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:　〃	～2mm英・長・雲／良	
232	土師質土器鍋BⅢ	34.0		5.2	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:2.5YR6/6橙 内面:5YR7/6橙	～1mm英・長・雲／良	
233	土師質土器鍋BⅡ			5.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR3/1黒褐 内面:5YR5/6明赤褐	～2mm英・長／良	
234	土師質土器足釜AⅠ	28.4		2.7	外面ナデハケ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR8/4浅黄橙 内面:　〃	～1mm長石・角閃石／良	体外面煤痕
235	土師質土器足釜AⅡ			5.9	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:　〃	～2mm長・角／良	体外ハケ内ナデ指圧
236	土師質土器足釜AⅠ	25.6		8.5	外面ナデハケ指圧 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR8/1灰白	やや蜜／良	外底叩体内　接合痕
237	土師質土器足釜AⅡ			3.9	外面指圧 内面指圧ハケ	外面:10YR5/3にぶい黄橙 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	
238	土師質土器足釜AⅡ			5.2	外面ナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm長石・角閃石／良	
239	土師質土器足釜BⅡ			3.0	外面ナデ指圧 内面ナデハケ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR8/4浅黄橙	～1mm英・長・角／良	

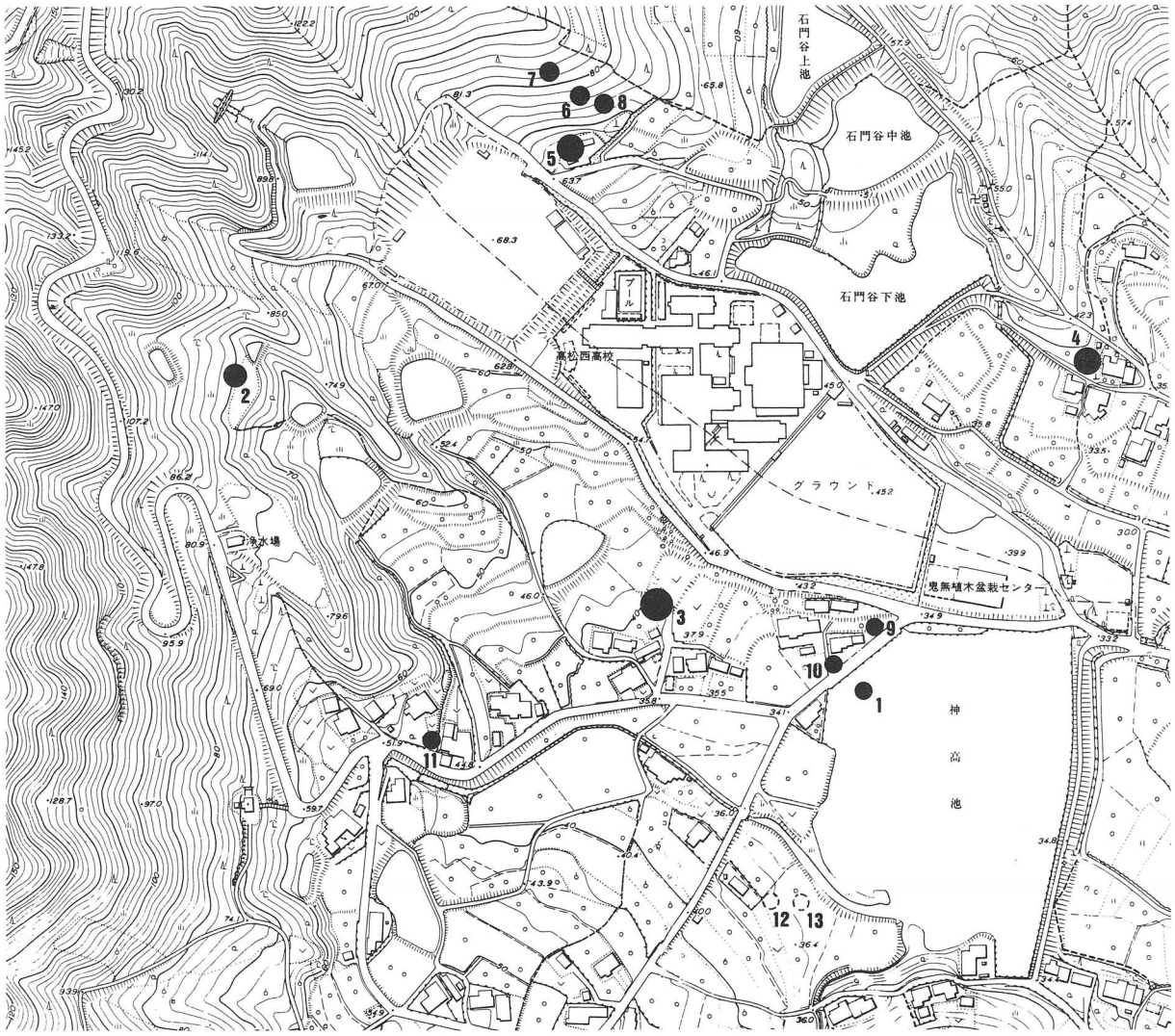
No.	器種	法量			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
240	土師質土器足釜BⅡ	22.4		5.3	外面ハケ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面: 〃	～0.5mm英・長／良	外面煤固着
241	土師質土器足釜BⅡ			4.5	外面ナデ指圧 内面ハケナデ	外面:5YR6/6橙 内面: 〃	～1mm英・長・雲／良	
242	土師質土器足釜BⅠ			4.6	外面ナデ指圧 内面ナデハケ	外面:10YR6/4にぶい黄橙 内面:10YR6/4にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	口縁端ハケ目
243	土師質土器足釜BⅠ			4.7	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/6橙 内面:10YR6/4にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	口縁端ハケ目
244	土師質土器足釜BⅡ	20.8		6.1	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	外煤鍔下条線刻
245	土師質土器足釜BⅡ			4.9	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR8/2灰白	～1mm英・長・雲／良	
246	土師質土器足釜BⅢ	24.2		3.3	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:7.5YR7/2明褐灰 内面: 〃	～0.5mm英・長／良	
247	土師質土器足釜BⅢ			4.8	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:2.5YR5/4にぶい赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	～1mm石英・長石／良	口縁端内捲き
248	土師質土器足釜BⅡ	20.0		5.6	外面ハケナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面: 〃	～1mm石英・長石／良	
249	土師質土器足釜BⅡ			6.0	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:2.5YR6/6橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	
250	土師質土器足釜BⅡ			4.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR6/2灰黄褐	～1mm英・長・角／良	
251	土師質土器足釜BⅣ			3.5	口縁外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR8/2灰白 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	
252	土師質土器足釜BⅡ			4.3	口縁外面ナデ 体部内面ハケ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面: 〃	～1mm石英・長石／良	
253	土師質土器足釜BⅢ			3.1	外面ナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
254	土師質土器足釜BⅣ			6.9	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR4/2灰黄褐 内面:7.5YR6/6橙	～2mm英・長・角／良	体外面煤付着
255	土師器甕	34.0		6.0	磨耗	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:7.5YR6/3にぶい褐	～2mm石英・長石／良	非中世
256	土師質土器鍋CⅠ	24.2		9.0	外面ナデ指圧 内面ナデ指圧	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面: 〃	～2mm英・長・雲／良	外面煤付着
257	土師質土器鍋CⅠ			5.1	外面ハケナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	外面煤付着
258	土師質土器鍋CⅠ			4.6	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm英・長／良	
259	土師質土器鍋CⅠ			3.5	外面ハケ指圧 内面ナデハケ指圧	貼付高台，十瓶山窯跡群	1～2mm英・長・角・雲／良	
260	土師質土器鍋CⅡ			8.1	外面ナデ指圧 外面ナデハケ	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:10YR8/2灰白	～1mm長・角／良	外面煤付着
261	土師質土器鍋CⅡ	24.6		5.3	外面ナデ指圧 外面ナデハケ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:7.5YR6/3にぶい褐	～1mm石英・長石／良	
262	土師質土器鍋CⅡ	40.2		4.0	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	～2mm英・長・角／良	口縁端外面捲込み
263	土師質土器脚			13.9	ナデ指圧	外面:7.5YR7/3にぶい橙 断面:2.5GY5/1オリーブ灰	0.5mm英・長／良	
264	土師質土器脚			19.1	ナデ指圧	外面:7.5YR6/6橙 断面:7.5YR6/4にぶい 橙	0.5～1.5mm英・長・角/良	
265	土師質土器脚			13.5	ナデ指圧	外面:10YR5/3にぶい黄褐 断面:2.5YR7/6橙	0.5-2mm英・長・角・雲/良	
266	土師質土器脚			5.9	ナデ指圧捻り	外面:2.5Y7/3浅黄 断面:5Y4/1灰黄	～1mm英・長・雲／良	接地端面存
267	土師質土器脚			11.3	ナデ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 断面:7.5Y6/1灰	～0.5mm英・長／良	接地端面存
268	土師質土器脚			5.9	ナデ	外面:2.5YR6/6橙 断面:10YR7/1灰白	～0.5mm英・長／良	接地端面存
269	土師質土器脚			5.0	ナデ指圧捻り	外面:5YR6/3にぶい橙 断面:10YR4/2灰黄褐	～0.5mm英・長／良	接地端面存
270	土師質土器脚			9.8	ナデ	外面:7.5YR7/2明褐灰 断面:7.5YR6/6橙	～0.5mm英・長／良	接地端面存
271	土師質土器脚			6.3	ナデ指圧捻り	外面:10YR6/2灰黄褐 断面:10YR6/1褐灰	～1mm英・長・雲・角／良	接地端面存
272	須恵器杯底部		12.6	1.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y8/2灰白 内面: 〃	～1mm石英・長石／良	
273	土師質土器碗AⅡ-9		4.6	1.1	磨耗	外面:2.5YR7/6橙 内面:7.5Y7/1灰白	1～2mm英・長／良	貼付高台 十瓶山窯跡群
274	須恵器碗AⅡ-7		5.4	1.2	磨耗	外面:5Y8/1灰白 内面: 〃	やや粗／良	貼付高台 十瓶山窯跡群
275	須恵器碗AⅡ-8		6.2	1.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:2.5Y8/1灰白 内面: 〃	密／良	貼付高台 十瓶山窯跡群
276	土師器杯	11.6	8.5	3.4	外面ナデ 内面ナデ・指圧痕	外面:5YR7/4にぶい橙 内面:5YR7/4にぶい橙	やや密／良	
277	須恵器捏鉢		11.1	3.5	外面指圧 内面ナデ	外面:2.5Y7/1灰白 内面: 〃	密／良	魚住片口
278	須恵器捏鉢	28.0		8.3+	外面ナデ・指捺 内面ナデ	外面:5GY7/1明オリーブ灰 内面:10Y6/1灰	やや粗／良	々
279	須恵器捏鉢	34.4		4.7+	外面ナデ指捺 内面ナデ指捺	外面:2.5Y7/1灰白 内面:5Y7／1灰白	やや密／良	々，口縁端自然釉
280	須恵器提瓶	欠番						所在不明
281	土師質土器杯EⅠ-3	12.0	7.8	3.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面: 〃	密／良	
282	須恵器杯DⅡ-2	12.6	8	4.2	外面ナデ底部ヘラ切 内面ナデ	外面:N7/ 灰白 内面:10YR5/1褐灰	密／良	十瓶山窯跡群
283	土師質土器小ⅢBⅢ－4	10.2	5.6	0.8	外面ナデ／底ヘラ切 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面: 〃	～1mm石英・長石／良	
284	土師質土器小ⅢBⅢ－3	7.0	3.4	1.4	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR8/3浅黄橙	密／良	
285	土師質土器小ⅢBⅢ－2	8.2	5.2	1.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面: 〃	～1mm石英・長石／良	
286	土師質土器小ⅢBⅢ－4	6.6	5.0	1.2	外面ナデ底部ヘラ切 内面ナデ	外面:7.5YR8/3浅黄橙 内面: 〃	密／良	
287	須恵器甕C5			5.7	外面ナデ格子叩き 内面ナデ	外面:N7/ 灰白 内面:N6/灰	密／良	魚住?

No.	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	調整	色調	胎土	備考
288	須恵器捏鉢	30.6		4.2	外面ナデ 内面ナデ	外面:N3/0暗灰 内面:N7/0灰白	蜜／良好	口縁端自然釉 東播
289	須恵器捏鉢	24.6		4.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:N5/灰 内面:10Y6/1灰	やや蜜／良	口縁端自然釉 東播
290	瓦質甕			5.1	外面ナデ 内面摩損	外面:N6/灰 内面: 〃	蜜／良	楠井
291	須恵器甕			6.5	外面格子目叩きナデ 内面ナデ	外面:2.5Y6/1黄灰 内面:10YR7/1灰白	蜜／良	亀山焼第二群
292	瓦質擂鉢AⅢ			2.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:N6/0灰 内面: 〃	蜜／良	楠井
293	土師質土器擂鉢AⅢ	46.8		5.5	外面ナデ指圧 内面ナデ条溝	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm英・長・雲・角/良	条溝単位3以上 楠井
294	土師質土器擂鉢AⅡ	33.4		5.8	外面ナデ 内面ナデ条溝	外面:2.5Y5/1黄灰 内面:10YR5/2灰黄褐	～1mm英・長・角／良	条溝単位5 楠井
295	土師質土器擂鉢AⅣ	28.8		4.6	外面ナデ指圧 内面ナデ条溝	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:2.5Y8/3淡黄	～1mm英・長・雲・角／良	条溝単位3以上 楠井
296	土師質土器鍋AⅠ			3.4	外面ナデ指圧ハケ 内面ナデハケ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	外面煤痕口縁端ハケ
297	土師質土器鍋AⅠ			6.6	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:10YR4/1褐灰 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～3mm英・長・雲・角／良	外面煤附着
298	土師質土器鍋AⅡ	44.5		9.5	外面ナデ指圧ハケ 内面ナデハケ	外面:7.5YR5/2灰褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm石英・長石／良	
299	土師質土器鍋AⅡ	43.0		6.7	口縁外面ナデ 外面ハケ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面: 〃	～1mm英・長・角／良	体外指圧ハケ内ナデ
300	土師質土器鍋AⅠ			4.0	口縁外面ハケ 内面ハケ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR6/4にぶい黄橙	英・長・角／良	体内面ナデ
301	土師質土器鍋AⅡ			3.1	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	口縁端凹面
302	土師質土器鍋AⅠ	31.2		4.3	外面ナデハケ指圧 内ナデハケ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	外面煤残存
303	土師質土器鍋CⅠ	27.6		5.0	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR7/3にぶい黄橙	1～2mm英・長・雲・角/良	体接合痕
304	土師質土器鍋AⅠ	26.0		4.7	外面ハケ指圧 内面ハケ	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面: 〃	～2mm英・長・角／良	
305	土師質土器鍋AⅠ			2.5	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:5YR7/6橙	英・長・雲・角/良	
306	土師質土器鍋CⅠ	27.8		4.3	外面ナデ 内面ハケ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面: 〃	～2mm英・長・雲/良	
307	土師質土器鍋AⅣ			3.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR5/2灰褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
308	土師質土器鍋AⅣ	35.4		3.9	口縁外面ハケ指圧 内面ハケ	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR8/4浅黄橙	英・長・雲・角/良	体外面ハケ内面ナデ
309	土師質土器鍋CⅠ	3.0		5.4	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:10YR6/2灰黄褐 内面: 〃	～1mm英・長・雲・角／良	
310	土師質土器鍋BⅡ	32.6		6.9	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:10YR5/3黄褐 内面: 〃	1～2mm英・長/良	
311	土師質土器鍋BⅡ	45.4		5.3	外面ナデ 内面ナデ	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面: 〃	～1mm英・長・角／良	
312	土師質土器足釜C	28.0		3.3	外面ナデ指圧 内面ナデ削り	外面:2.5Y8/2灰白 内面: 〃	～1mm石英・長石／良	
313	土師質土器足釜BⅡ			2.7	外面ハケナデ 内面ハケナデ	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:7.5YR6/3にぶい褐	～1mm長・角／良	
314	土師質土器足釜BⅡ	17.4		4.4	外面ハケナデ 内面ナデ指圧	外面:10YR8/3浅黄橙 内面:10YR8/1灰白	～1mm英・長・雲／良	
315	土師質土器足釜AⅡ	20.4		3.0	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	
316	土師質土器足釜BⅡ			4.0	外面ハケ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR6/6橙 内面:5YR6/3 橙	1～2mm英・長・雲・角/良	
317	土師質土器足釜BⅠ			3.7	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:10YR6/4にぶい黄橙 内面:10YR6/3にぶい黄橙	～1mm英・長・雲・角／良	口縁端ハケ目
318	土師質土器足釜BⅠ			4.7	外面ハケナデ 内面ナデ	外面:5YR6/6橙 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm石英・長石／良	口縁端ハケ目
319	土師質土器足釜BⅠ			3.0	外面ナデ 内面ナデ	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面: 〃	～1mm長・角／良	鍔下部爪形顕著
320	土師質土器足釜BⅡ			3.7	外面ナデハケ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面: 〃	～1mm英・長・角／良	
321	土師質土器足釜BⅡ			3.4	外面爪圧ナデ 外面ナデ	外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	爪形顕著
322	土師質土器足釜BⅡ			4.3	外面ナデハケ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/6橙 内面:5YR6/8橙	～2mm英・長／良	体外上部爪形
323	土師質土器足釜BⅣ			4.5	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	体外面煤付着
324	土師質土器足釜BⅡ			3.7	外面ナデ 内面ナデ	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:5YR6/6橙	～1mm英・長・角／良	
325	土師質土器足釜BⅡ			2.8	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR6/6橙 内面:7.5YR7/6橙	～2mm英・長／良	
326	土師質土器足釜BⅣ			4.3	口縁外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:7.5YR7/2明褐灰 内面:7.5YR7/3にぶい橙	～2mm英・長／良	
327	土師質土器足釜BⅣ			5.3	外面ナデ指圧 内面ナデ	外面:5YR6/6橙 内面:5YR7/6橙	～2mm英・長／良	
328	土師質土器足釜	27.2		3.9	外面ナデ 内面ハケ	外面:7.5YR6/6橙 内面:7.5YR6/4にぶい橙	1～2mm英・長・角／良	
329	土師質土器鍋CⅠ			5.0	外面ナデ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	～1mm英・長・角／良	
330	土師質土器鍋CⅠ			5.7	外面ナデハケ指圧 内面ハケ	外面:10YR8/4浅黄橙 内面:10YR7/4にぶい黄橙	～1mm石英・長石／良	
331	土師質土器鍋CⅠ	19.6		5.3	外面ハケナデ指圧 内面ハケナデ	外面:7.5YR8/3浅黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	～1mm英・長・角／良	
332	土師質土器鍋CⅡ			4.5	外面ナデ指圧 内面ハケ	外面:2.5Y7/3浅黄 内面:2.5Y6/2灰黄	～1mm英・長・角／良	
第1図	縄文土器小形深鉢	13.5		10.5+	内外面無文, 口唇部刻み目	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面: 〃	3mm前後の石英粒／良	なつめの木Ⅲa類

第Ⅴ章　神高古墳群について

1．はじめに

高松平野の北西縁辺部，香川県高松市鬼無町山口から鬼無町佐藤にかけて所在する神高古墳群は，高松平野において古墳時代後期を代表する古墳群である。今回報告した神高池北西古墳も，この古墳群に含まれることから，神高池北西古墳を正確に評価するには古墳群の中での位置付けが不可欠である。本章では，神高古墳群のうち調査が実施され内容が明らかになっている古墳を紹介することにより，古墳群の実態を明らかにしたい。ただし，調査された古墳のうち平木１号墳と４号墳は本市教委と香川県教委から報告書が刊行され内容が公表されているが，それ以外の古墳については未刊である。このため，調査を実施された香川大学経済学部教授丹羽佑一氏の全面的な協力のもとに，山野塚古墳，古宮古墳，鬼無大塚古墳，平木２・３号墳については，詳細な報告を掲載することにより，検討可能なレベルに引き上げたい。



1 神高池北西古墳　2 山野塚古墳　3 古宮古墳　4 鬼無大塚古墳
5 平木１号墳　6 平木２号墳　7 平木３号墳　8 平木４号墳
9 神高池西古墳　10 こめ塚古墳　11 空家古墳　12 神高池南西１号墳
13 神高池南西２号墳

第21図　神高古墳群分布図（縮尺 1/5,000）

神高古墳群は，細分が可能で，古宮古墳を盟主とした古宮支群，平木１～４号墳の平木支群，そして山野塚古墳と鬼無大塚古墳が単独で存在している（第21図)。このため，古宮支群を神高池古墳群，平木支群を平木古墳群と呼称する場合もある。また，古宮支群は古宮古墳，神高池北西古墳，神高池西古墳，こめ塚古墳，空家古墳が知られている。地形で見ると，古宮支群は，幅約250mを測る広い谷の入口近くに展開し，現状は平地，旧地形は緩斜面と推定される。谷の入口には現在神高池が築造されており，この中に神高池北西古墳が水没している。山野塚古墳も，同じ谷間にあり，古宮古墳から約320m奥に入った斜面に立地している。平木支群は，古宮支群から北側の尾根(香川県立高松西高校)を超えた谷間の奥にあたる南向き斜面に立地している。鬼無大塚古墳は，平木支群が所在する谷間の入口近くにあるが，谷北側の尾根から派生する小さな尾根の稜線上に立地している。平木支群と鬼無大塚古墳とも，古宮古墳から約300m離れており，平木支群と鬼無大塚古墳との距離は約360mである。

2．山野塚古墳

山野塚古墳は，古くから横穴式石室が開口しており，昭和63年に香川大学により学術調査が実施された。東向きの斜面に立地し，石室は南方向に開口している。

【墳　丘】

墳丘は未調査であるが，円墳と推測される。

【石室構造】

全長10.9m以上を測る両袖式の横穴式石室で，玄門がわずかに突出している(第22図)。石室の主軸は，磁北から約21°西に傾いている。石室の規模は，玄室長約5.4m，玄室幅は奥壁側で1.85m，中央・玄門側で約2.0mを測り，中央～玄門がほぼ同じ幅で，奥壁だけがやや細長くなる形を呈している。玄室の高さは2.5～2.8mである。羨道は，玄門を含めた長さ5.5m以上，幅約1.5m，高さは残存部分で約1.9m，玄門部分で約1.7mを測る。

玄室の構築は，奥壁最下部に比較的大きな石を腰石として据え，その上に4段のせている。玄室の側壁も，比較的大きな石を最下段に据え，左右側壁とも4石を腰石として使用している。また，左右側壁とも大小さまざまな石を腰石含めて5段積んでおり，一部7段に及ぶ箇所もある。奥壁近くでは，ゆるい持ち送りが見られるが，全体的に持ち送りはほとんど見られない。天井石は，4石で構成されている。

羨道は大部分が破壊されているが，左右側壁とも最下段に大きな石を腰石として据え，その上に3段ないし4段に石を積んでいる。現状では，最下段には左側壁が1石，右側壁が3石残っている。なお，羨道の天井石は，1石しか残っていない。

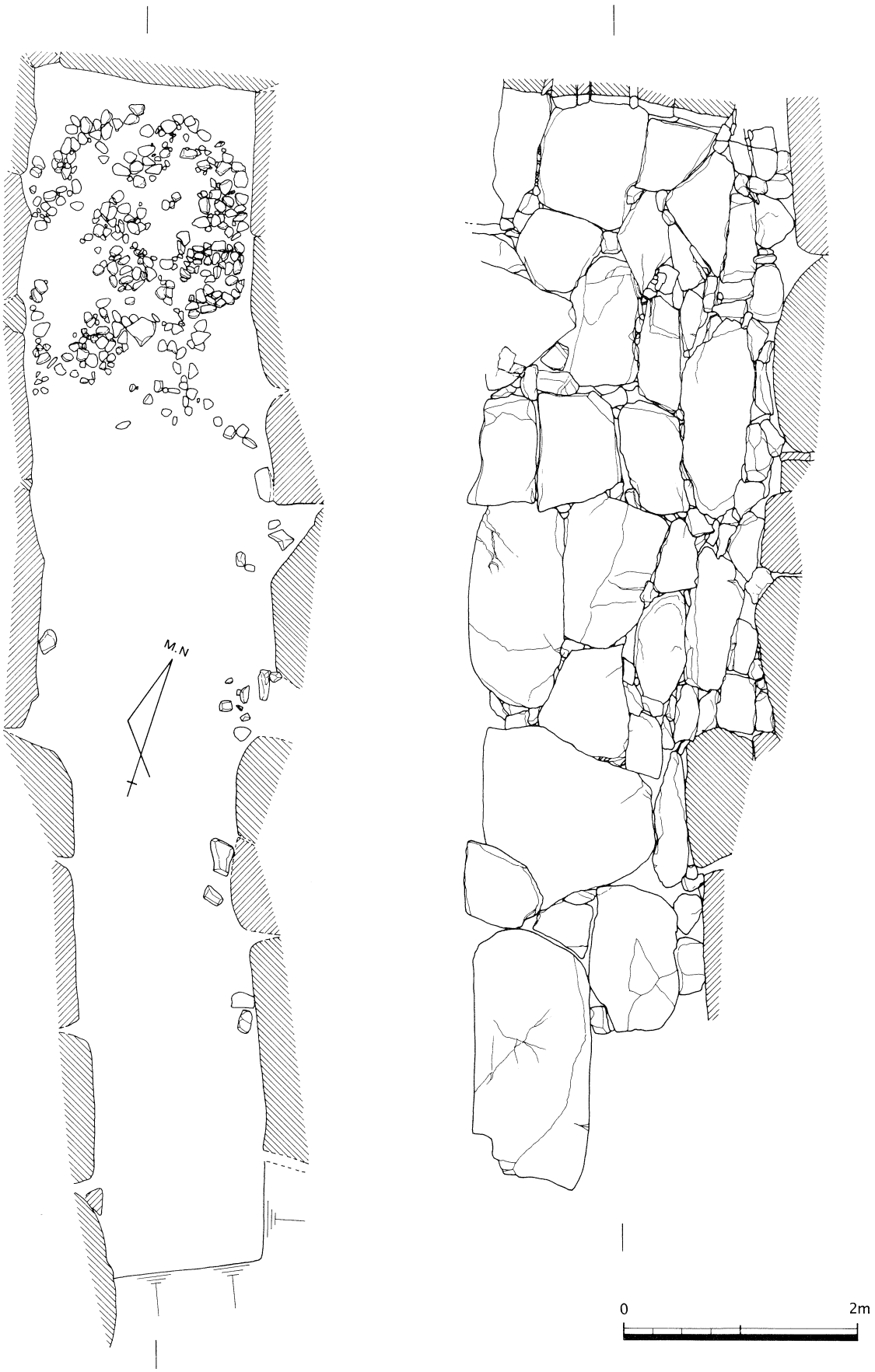
玄門は，立柱として大きな石を最下段に据え，それより小さい石を1段積んでいる。ただし，最下段の両石は，明らかに大きさが違う。天井石は1石で，羨道天井より下位に位置する。

床面は，後世の撹乱が著しいため，玄室奥壁側に約10cm大の石が認められただけである。敷居石・排水溝の存在は不明である。

【出土遺物】

出土遺物は，後世の撹乱のため残っていない。

壁奥
玄門



第 22 図　山野塚古墳 横穴式石室実測図 (縮尺 1/50, 香川大学原図)

3．古宮古墳

古宮古墳は，天井石が露出した状態で古くから開口しており，昭和59～60年に香川大学により学術調査が実施された(香川大学1985・丹羽佑一1985)。西へ下る緩斜面に立地し，石室は南方向に開口しており，奥壁側の天井石が落下していた。香川大学の調査により，多数の須恵器・土師器・鉄釘とともに鉄地金銅張の馬具や銅製の刀装具，そして金環やガラス小玉といった装飾品が出土したことから，神高古墳群の中でも盟主的な古墳として注目された。これを受けて，昭和63年に市史跡に指定されるとともに，本市教委による保存整備工事が実施され，落下した天井石は元に戻されて，石室内の見学を可能にしている。ただし，羨道の半分は天井石が傾いていて不安定な状態であることから，未調査で埋まったままである。次いで，平成13年には墳丘盛土の流失を防ぐ擁壁設置工事を行い，事前の試掘調査を本市教委で実施している（高松市教育委員会2002)。この時の調査では，断面観察により墓道と考えられる落込みや，ガラス玉・須恵器片が確認された。なお，当古墳の名称については，古宮権現社古墳等が見られるが，市史跡指定の名称に従い古宮古墳に統一している。

【墳　丘】

墳丘は未調査であるが，地割から推測して直径30m近くの円墳と考えられる。

【石室構造】

全長9.6m以上を測る両袖式の横穴式石室である(第23図)。平面図では判別しづらいが，最下部以外は玄門がわずかに突出している。石室の主軸は，磁北から約16°西に傾いている。石室の規模は，玄室長約5.9m，玄室幅は約2.0mを測り，長方形を呈している。玄室の高さは，2.9～3.2mもあり非常に高いが，玄門に近い天井石はやや低くなっている。羨道は，玄門を含めて，長さ3.7m以上，幅1.5～1.7mを測る。羨道の高さは，羨道の天井石が落下しており不明であるが，玄門部分では約1.9mを測る。

玄室の構築は，奥壁に石材の中ではもっとも大きな石を腰石として据え，その上にほぼ同じ大きさの石をもう1段のせている。玄室の側壁も，比較的大きな石を腰石として据え，左右側壁とも4石を並べている。側壁は，大小さまざまな石を，腰石を含めて4段ないし5段積んでいる。持ち送りは認められない。天井石は4石で構成されている。注目すべきは，玄門側の1石が他の天井石より低く廂の様相を呈しており，類例が各地の盟主墳に見られるという(丹羽佑一1986)。

羨道は，開口部側の約半分が埋まったままである。見えている範囲では，左右側壁とも最下段に大きな石を腰石として据え，その上に3段に石を積んでいる。羨道の天井石は，失われたものや落下しているものがあり，詳細は不明である。

玄門は，立柱として大きな石を最下段に据え，それより小さい石を1段積んでいる。天井石は1石である。床面には，長方形の敷居石を中央に置いているが，大きさは羨道幅より小さい。

床面は，玄室全面に約20～40cm大の床石を敷いているが，羨道には認められない。

【出土遺物】

玄室および羨道から須恵器や土師器といった土器が多量に出土するとともに，玄室からは金銅装馬具や刀装具などの金属製品，ガラス玉が多数出土しており，周辺の古墳と比べ被葬者の卓越性を示している。ただし，羨道入口付近は，前述のとおり未発掘であるため，今回報告する以外の遺物が将来出土する可能性がある。

第24図は，玄室から出土した土器である。1～3は須恵器杯蓋で，口径は10.3～12.0cmとかなり小さく，外面の回転ヘラケズリも器高の1/4程度である。4は須恵器杯で，口径が11.8cmを測り，1～3の蓋より口径が大きい。5・6は須恵器台付椀で，どちらも箱形の杯部に短脚が付くが，5は口縁部が内傾し，6は口縁部がやや外傾する。7・8は短脚の須恵器無蓋高杯で，8の杯部には鋭い3条の突帯がめぐるほぼ完形のものである。9・10は須恵器脚部で，おそらく壺の脚部と推定される。11・12は須恵器平瓶である。12の口縁部は体部と直接接合しない。13は須恵器脚付広口壺だが，接合面で脚部が欠損している。口縁部から体部上半にかけて波状文4条がめぐる。14は須恵器脚付長頸壺で，頸部と体部中位に沈線と列点文がめぐる。15は大型の須恵器有蓋高杯で，焼成時の自然釉によって蓋と杯部が完全に接着している完形品である。蓋頂部には摘みが

つき，上半に沈線4条がめぐる。杯部下半は回転ヘラケズリが認められる。脚部は長脚2段透かしで，中位に沈線2条がめぐる。16は須恵器長頸壺の口頸部で，中位に沈線2条がめぐる。17は土師器鉢で，口径16.7cmを測る完形品である。須恵器を模倣したものと考えられる。18は土師器甕である。19は土師器台付直口壺で，ハの字形に開く脚部が付く。体部外面は刷毛調整である。20は角形の把手で，中央に穿孔が認められる。21～24は土師器高杯で，21以外は脚部のみ残存している。小さな杯部にハの字形の脚部が付く。

第25・26図は，羨道から出土した土器である。25は須恵器杯蓋で，口径は10.7cmと小さく，外面の回転ヘラケズリも器高の1/4程度である。26は須恵器杯で，口径が9.8cmを測り25の蓋と近似する。口縁部の立ち上がりが非常に弱く形骸化している。27・28は高台付の須恵器杯である。27は口径16.6cm，器高6.9cmを測り，径高指数42である。29・30は須恵器脚付長頸壺で，ともに短脚が付く。29は頸体部境に突帯，体部中位に沈線と列点文がめぐり，脚部の透かしは方形である。30は，29より小形で，頸部と体部中位に沈線がめぐり，脚部の透かしは円形である。31は須恵器広口壺で，体部はやや肩の張った球形で，弓なりに曲がる頸部が付き，口縁端部をわずかに内側に曲げる。体部の肩に沈線2条がめぐり，体部下半には他の土器が焼成時に密着していた痕跡が残る。32は高台付の須恵器長頸壺だが，頸部が欠損している。33は須恵器片口壺で，強く張った肩に沈線3条と列点文2条がめぐり，外傾しながら直立した口縁部の一端を片口としている。体部下半に格子目の叩き痕が残る。34は須恵器壺の底部で，高台が付く。35は須恵器壺の口縁部である。36・37は須恵器長頸壺の口縁部と考えられ，沈線がめぐる。38は須恵器横瓶で，横に長い球形の体部に，外傾しながら直立した口縁部がつく。体部内面には同心円文の当て具痕がのこるが，外面にあったと推測される叩き痕は丁寧にナデ消されている。体部内面の一端に成形時に塞いだ円盤の接着痕が見られる。39は須恵器甕の体部片で，外面に格子目の叩き痕が残る。40は須恵器甕で，本来第28図に掲載すべき時期のものである。長胴の体部から「く」の字形に屈曲した口縁部が付き，外面には平行の叩き痕が残る。41は土師器蓋で，頂部に宝珠形の摘みが付くが，口縁部内面のかえりは見られない。須恵器を模倣したものと考えられる。42～45は土師器杯で，42・43は小形である。42は口径12.4cm，器高約2.5cmを測り，径高指数は約20である。内面に暗文が施されている。43は口径12.2cm，器高2.2cmを測り，径高指数18である。44は口径18.8cm，器高4.6cmを測り，径高指数24である。45は口径17.6cm，器高5.6cmを測り，径高指数32である。44・45の内面に暗文が施されている。

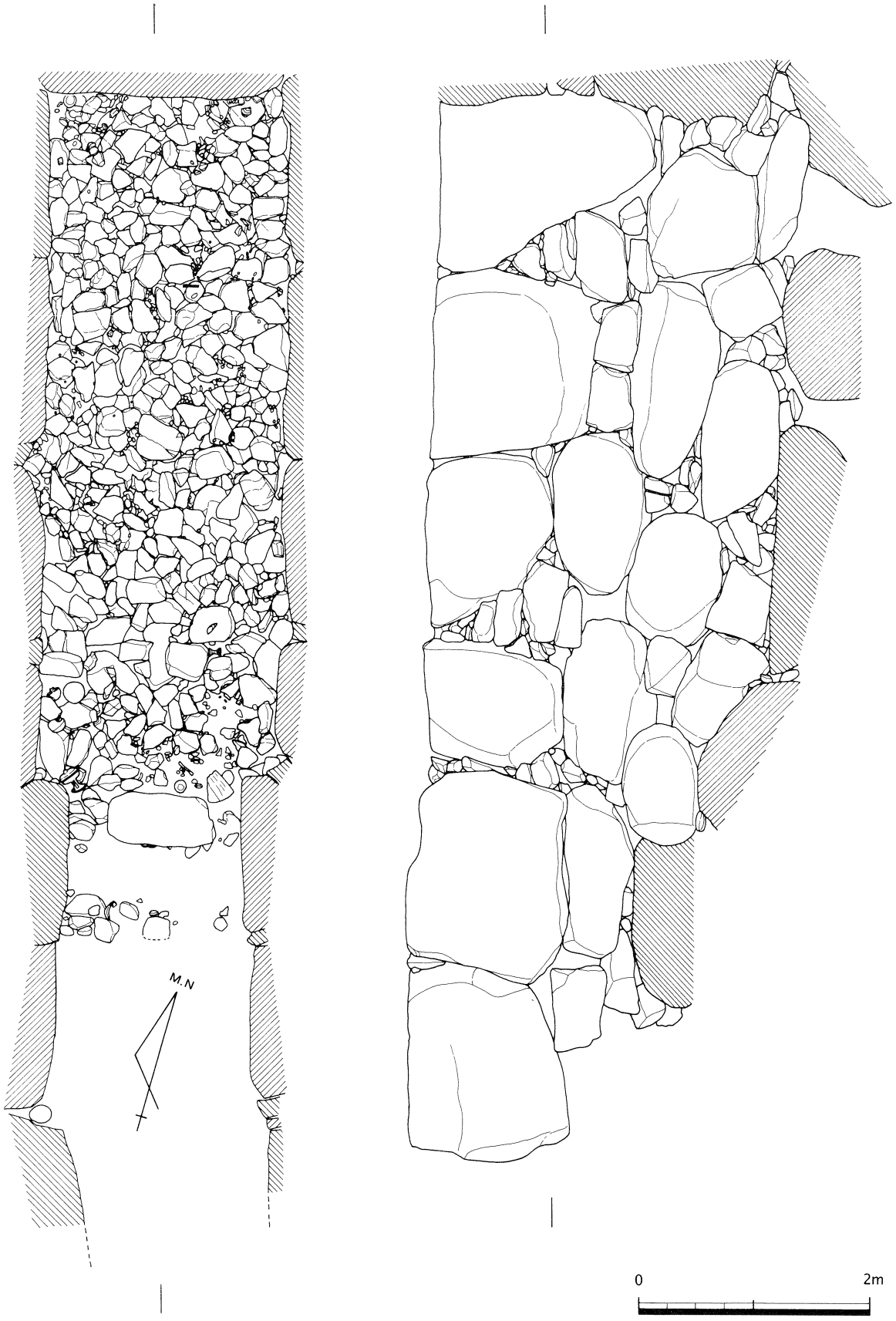
第27図は，玄室から出土した弥生土器または中世以降の土器である。46は弥生土器壺の底部である。47～49は土師質土器皿で，底面は回転ヘラ切である。51は土師質土器の脚付皿だが，脚部を欠損している。51・52は土師質土器の脚部で，近世以降のものと考えられる。53は瓦器椀の口縁部片で，内外面にヘラミガキ調整が見られる。54は土師質土器片口こね鉢で，口縁端部に弱い沈線が1条めぐり，体部外面には格子目の叩き痕が残る。

第28図は，羨道から出土した中世の土器である。55は瓦器皿で，内面にヘラミガキ調整が見られる。56～65は土師質土器皿で，65以外の底面は回転ヘラ切である。66は土師質土器椀である。67は土師質土器の脚部である。68は土師質土器の甕である。69は三足が付く釜で，底部外面に格子目の叩き痕が残る。

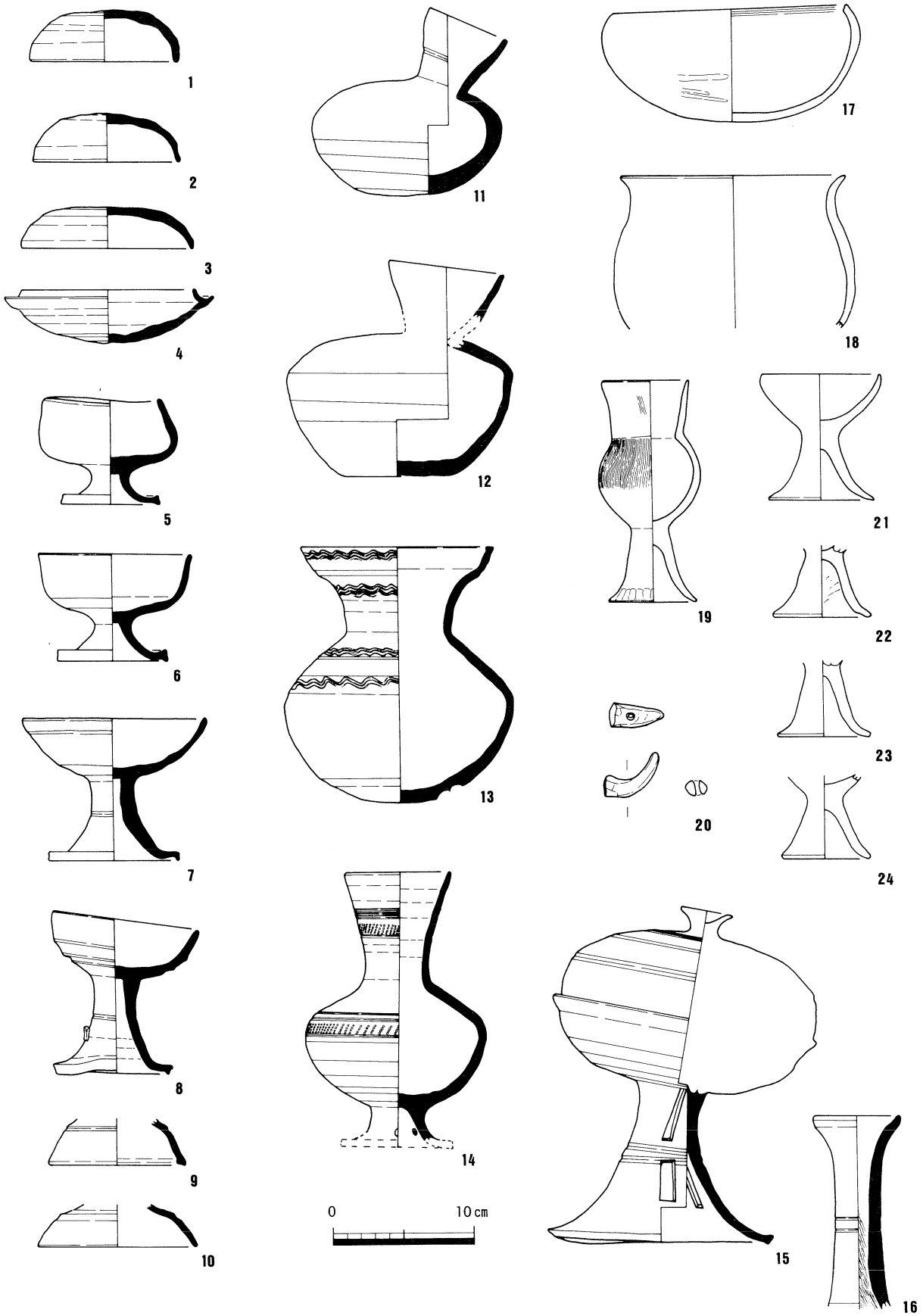
第29～31図は，玄室から出土した玉製品・金属製品である。1～3は金環で，直径2.7～3.1cmを測る。4～31はガラス小玉で，直径0.8～1.3cm，高さ0.5～1.1cmを測り，青灰色を保っているものから白色で風化著しいものまで見られる。玄室中央付近からまとまって出土している。32～35は，銅製の鞘金具である。32・33には紐通しの孔が開いた突起が付くことから上部の破片で，34は下部の破片である。35は楕円形で，布状の銅が被覆している。36は小刀の可能性がある鉄製品である。37は鉄刀だが，劣化著しい。38～40は馬具の鞍金具で，鉄地金銅張の磯金具である。38の裏に40が鋲留めされていたものと考えられる。39は下半を欠損している。38～40は破片であるため，全体像の復元が困難である。41・44は銅製品で，馬具の一種と考えられるが，特定できない。42は馬具の雲珠で，中位に沈線が2条めぐる。43は馬具の留具と考えられる。45・46は馬具の鉸具である。47～80は鉄釘で，47～57は頭部，58～68は中間，69～80は先端である。

第32図81～93は，羨道から出土した鉄釘である。第33図94～97は，出土位置不明の鉄釘である。98は，墳丘表採おそらく石室廃土から出土した勾玉で，材質はヒスイの可能性がある。

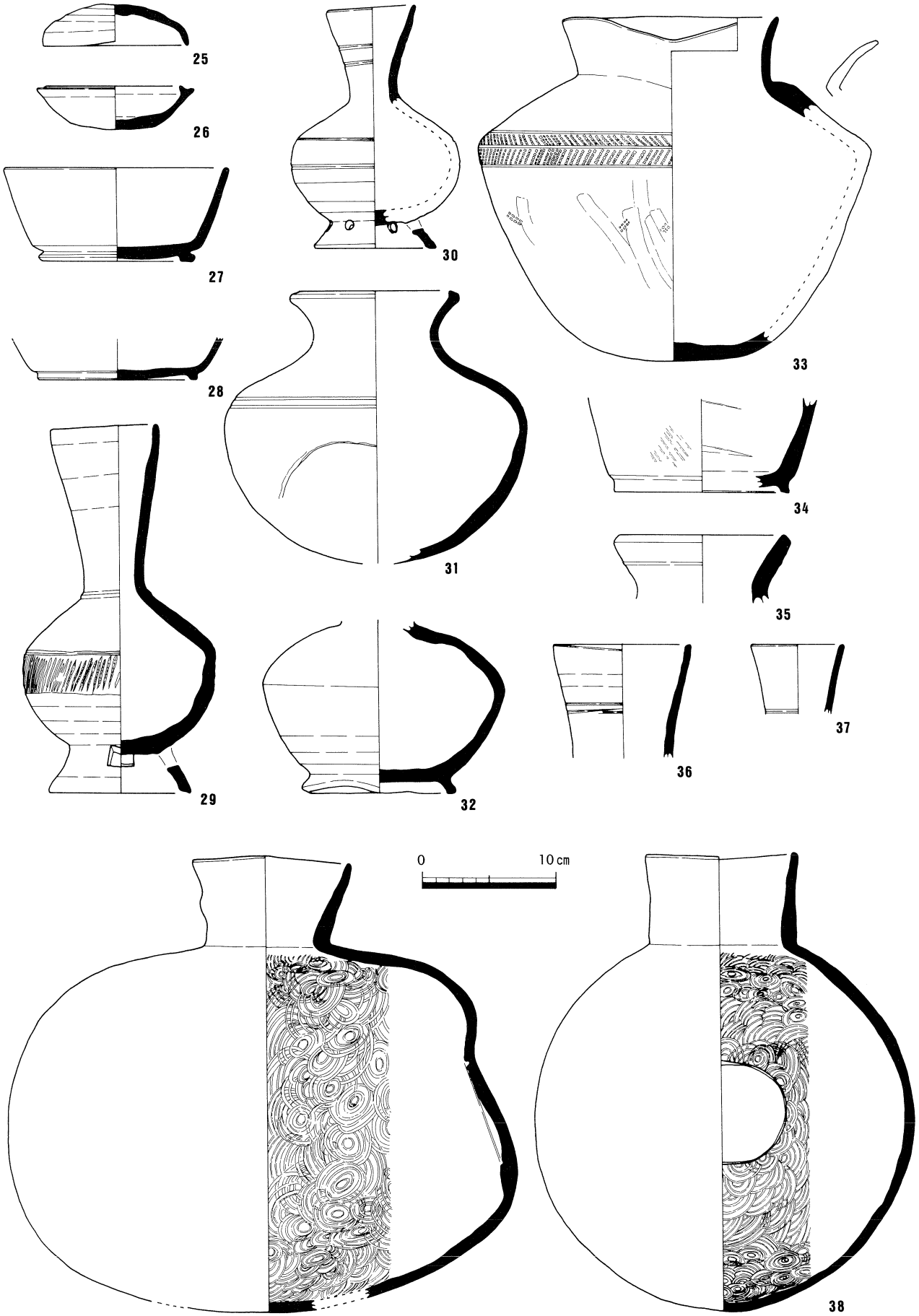
壁奥
玄門



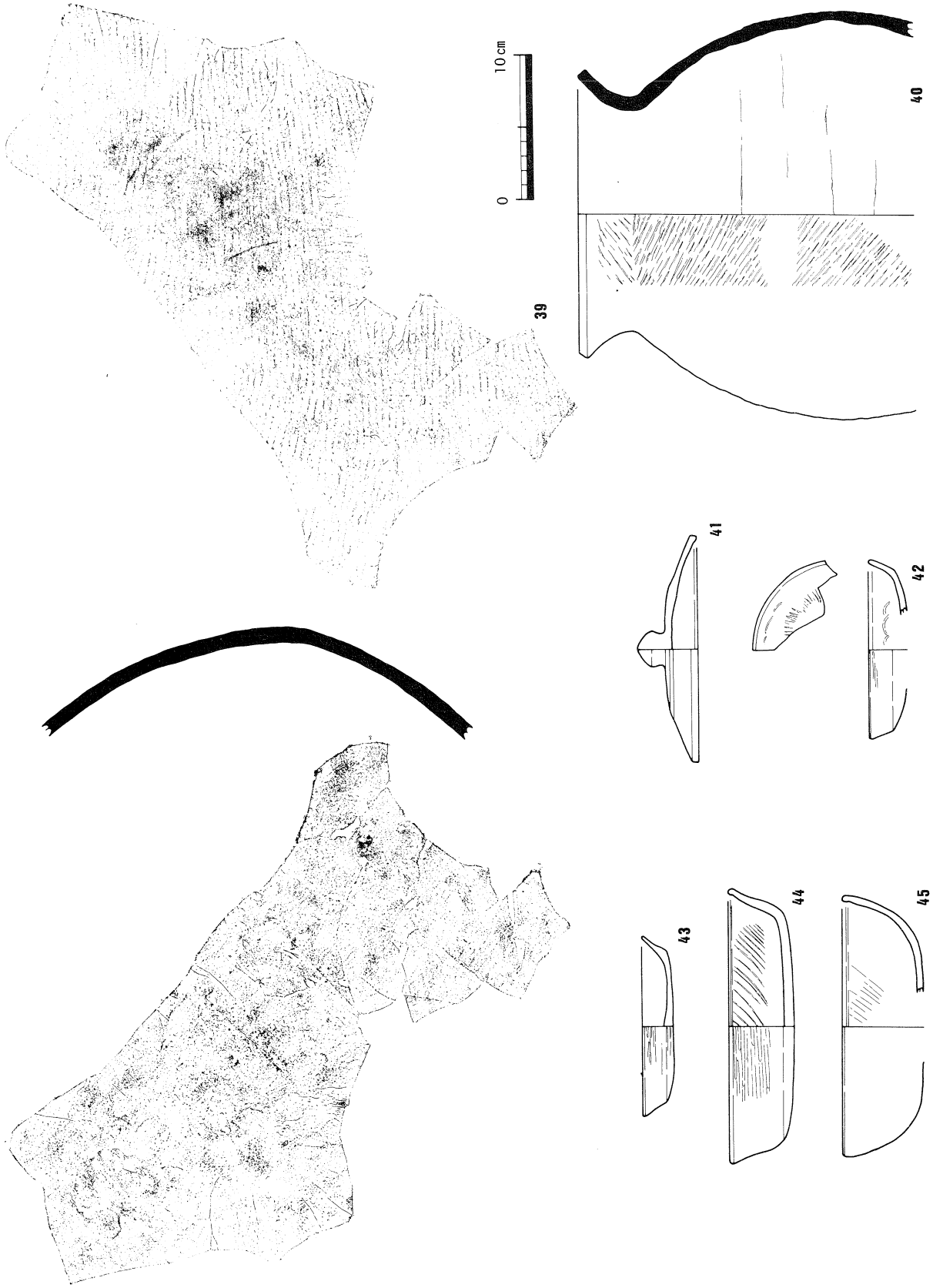
第 23 図　古宮古墳　横穴式石室実測図 (縮尺 1/50，香川大学原図)



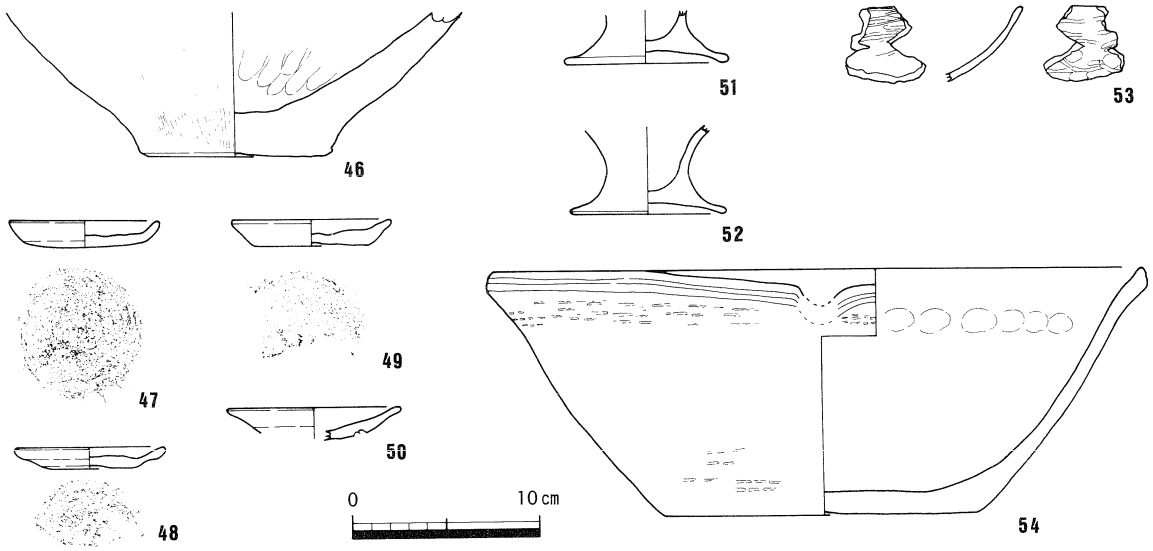
第24図　古宮古墳玄室出土遺物実測図（縮尺 1/4）



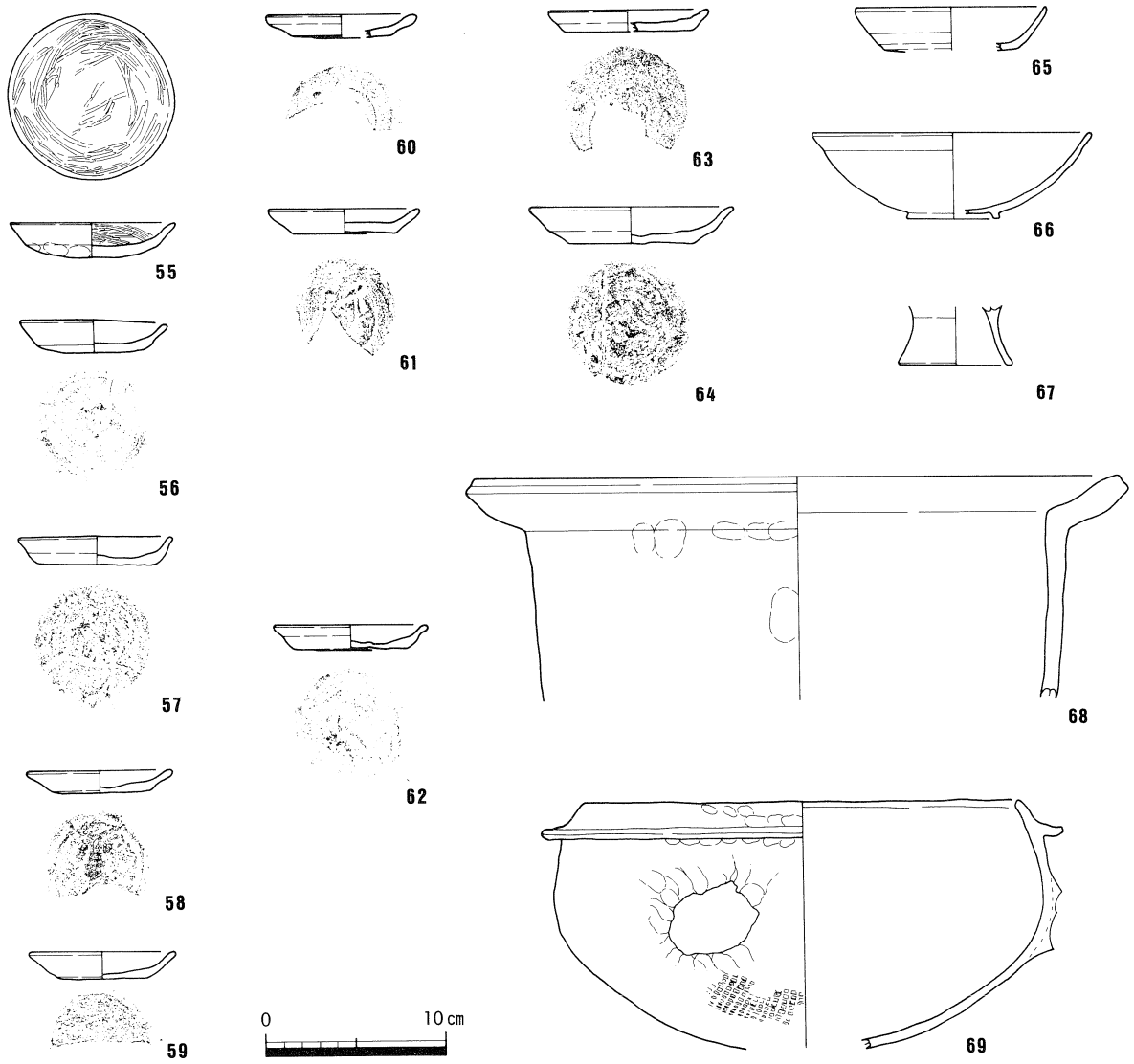
第25図　古宮古墳羨道出土遺物実測図①（縮尺 1/4）



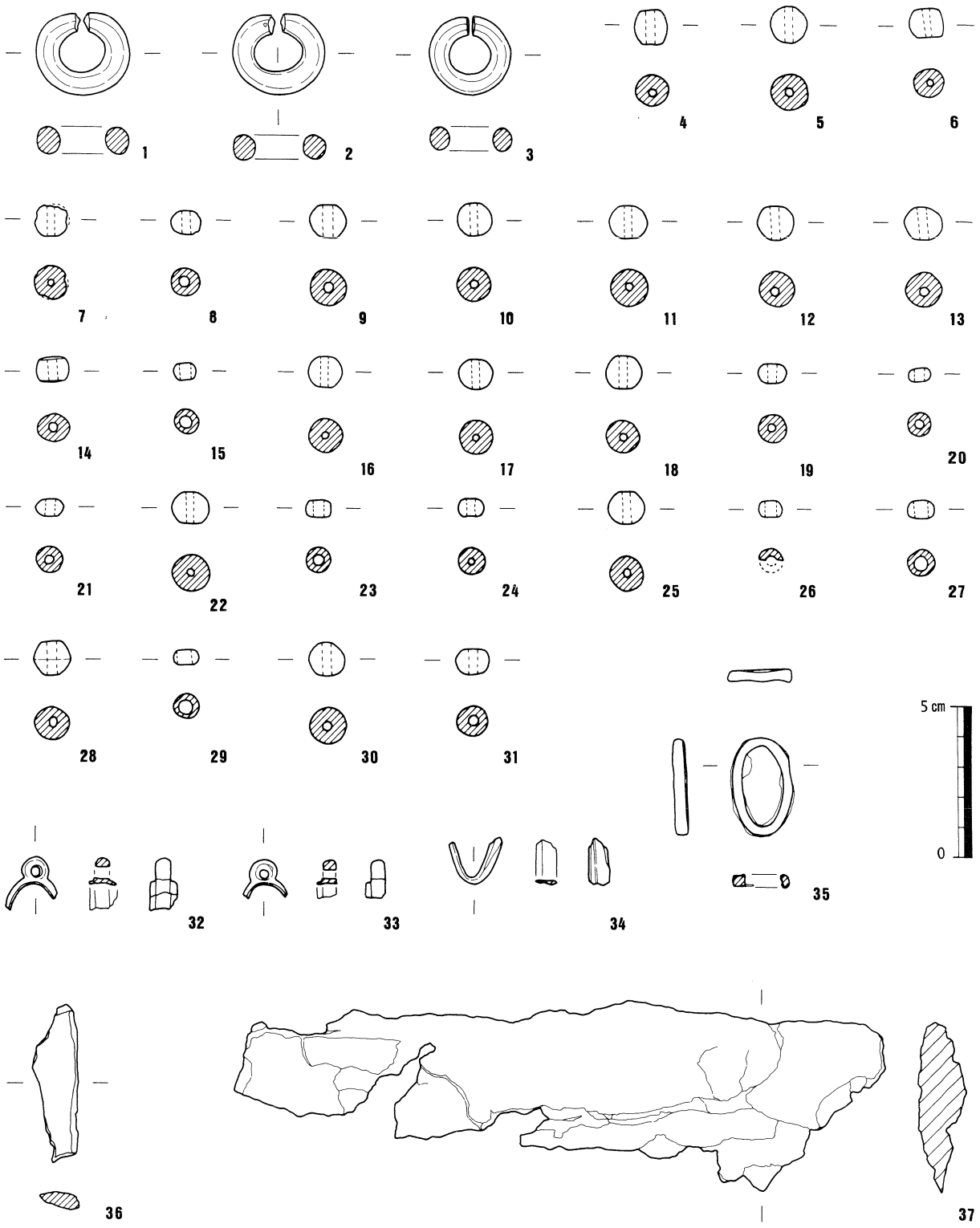
第 26 図　古宮古墳羨道出土遺物実測図②（縮尺 1/4）



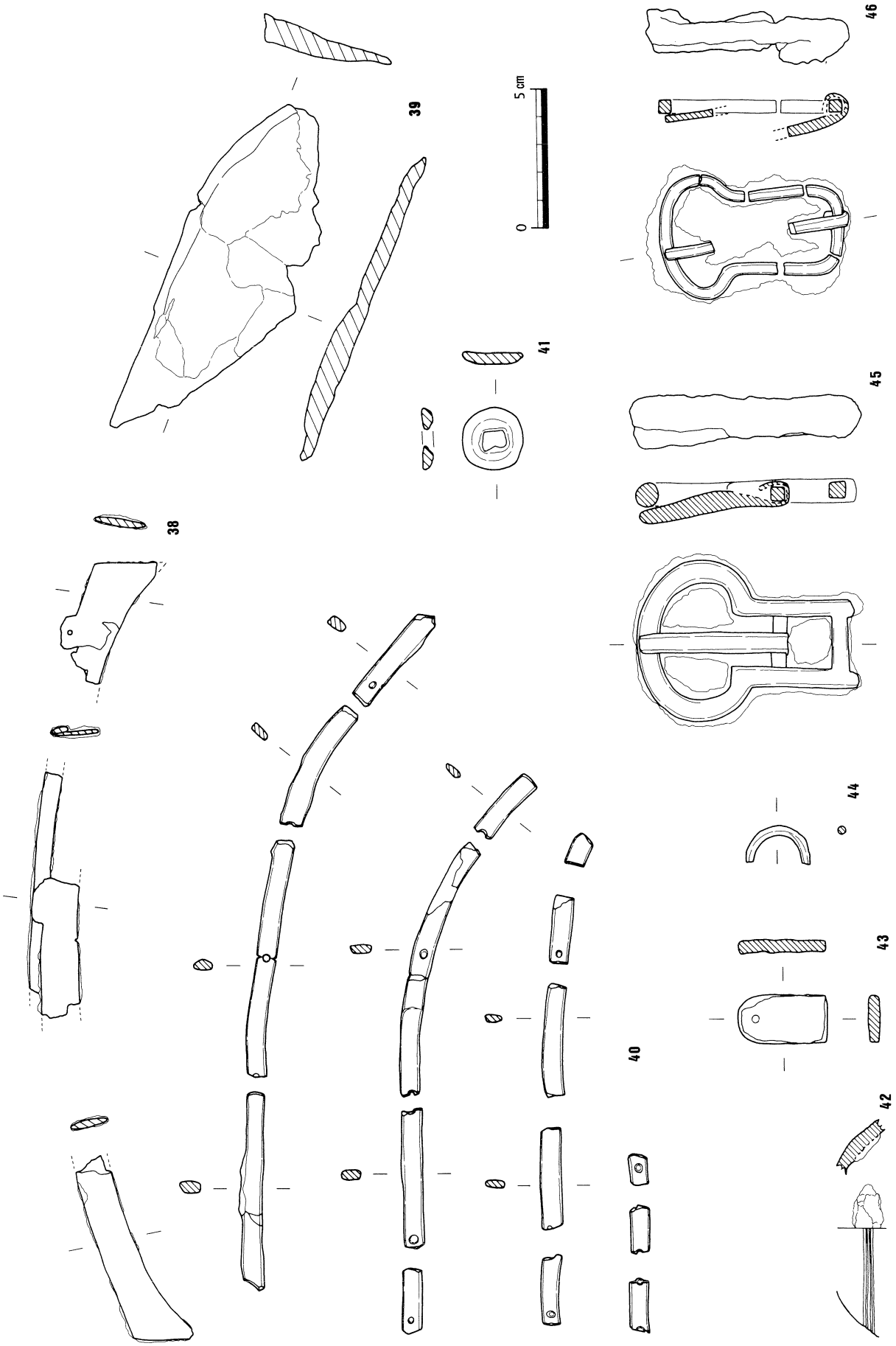
第27図　古宮古墳玄室出土弥生・中世～近世遺物実測図（縮尺 1/4）



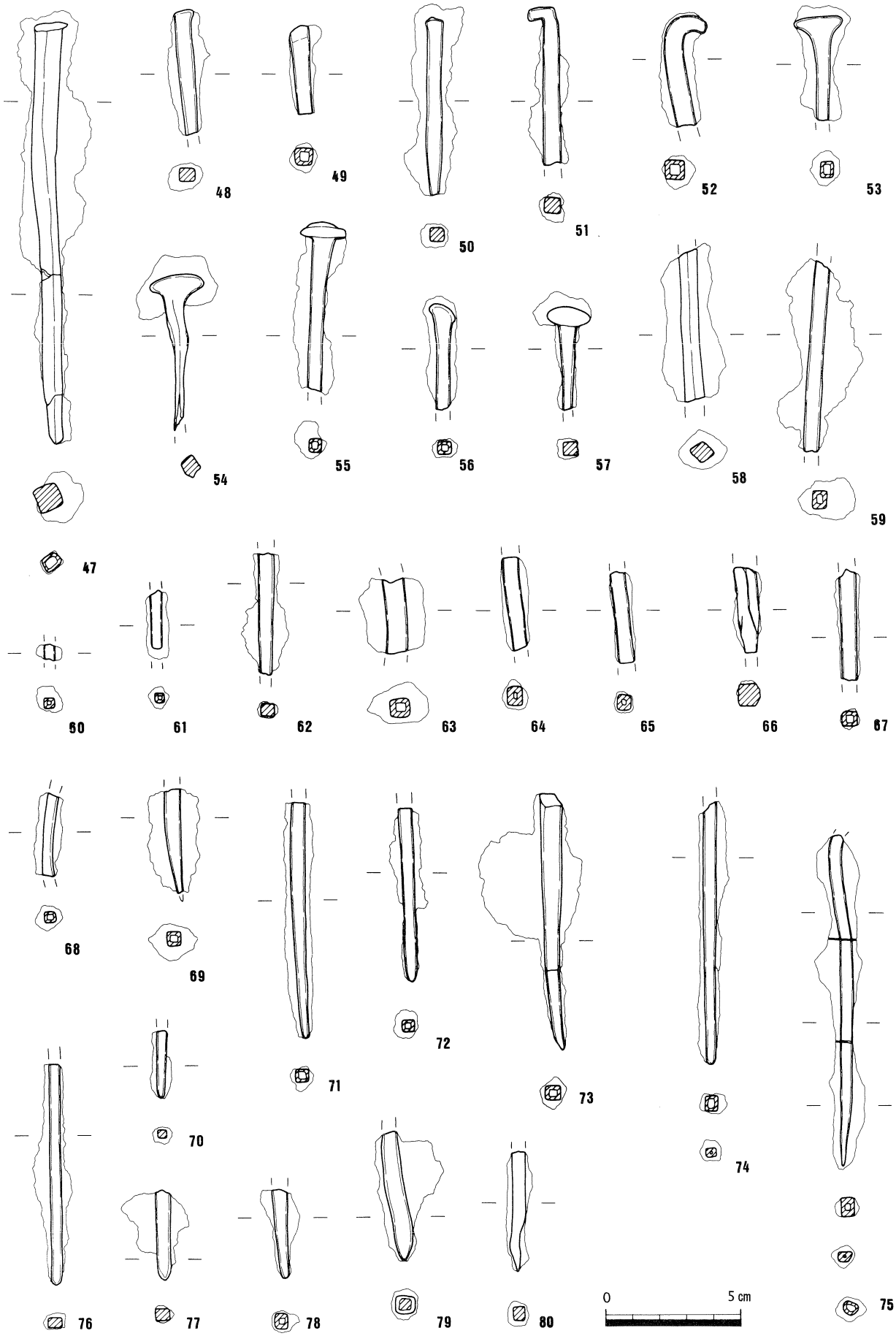
第28図　古宮古墳羨道出土中世遺物実測図（縮尺 1/4）



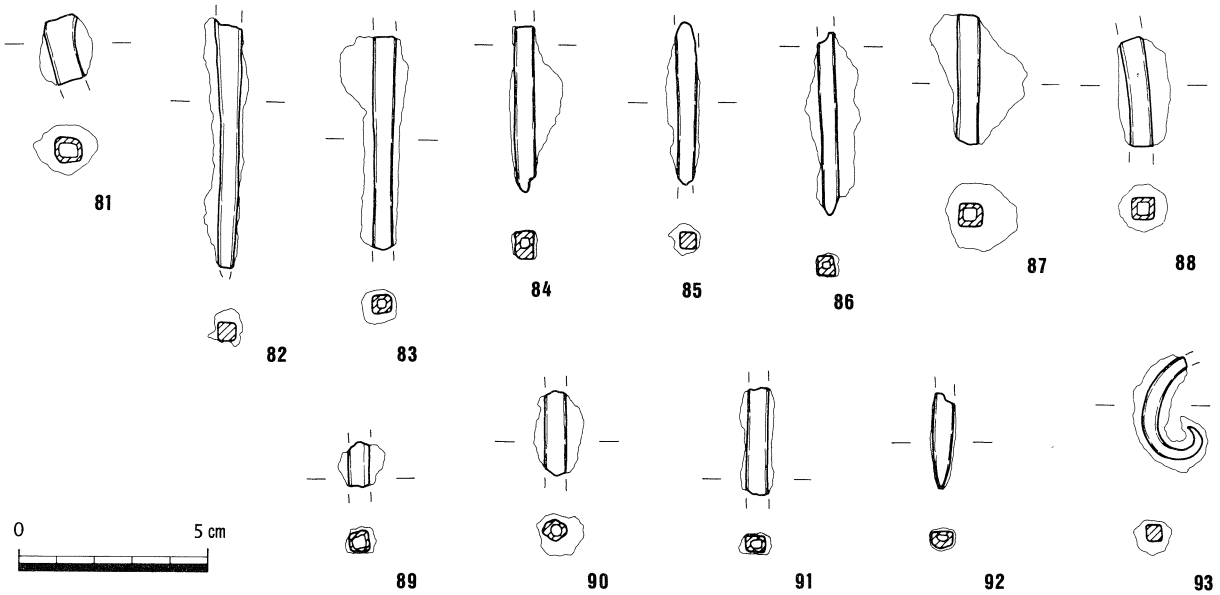
第 29 図　古宮古墳玄室出土玉製品・金属製品実測図①（縮尺 1/2）



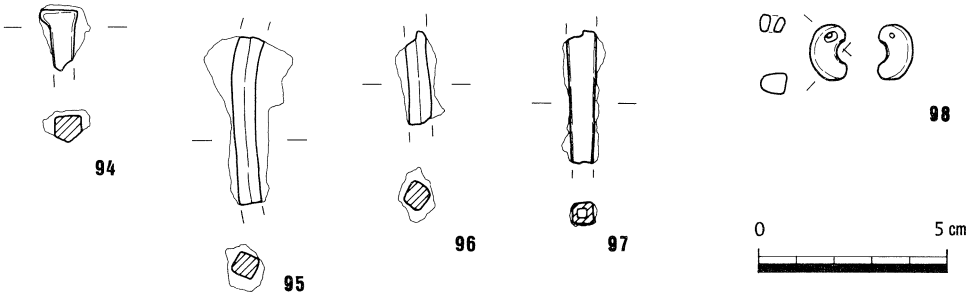
第30図　古宮古墳玄室出土金属製品実測図②（縮尺 1/2）



第 31 図　古宮古墳玄室出土金属製品実測図③ (縮尺 1/2)



第 32 図　古宮古墳羨道出土金属製品実測図 (縮尺 1/2)



第 33 図　古宮古墳出土玉製品・金属製品実測図 (出土位置不明，縮尺 1/2)

4．鬼無大塚古墳

鬼無大塚古墳は，古くから横穴式石室が開口しており，昭和 62 年に香川大学により学術調査が実施された。西へのびる尾根の稜線上に立地し，石室は南方向に開口している。

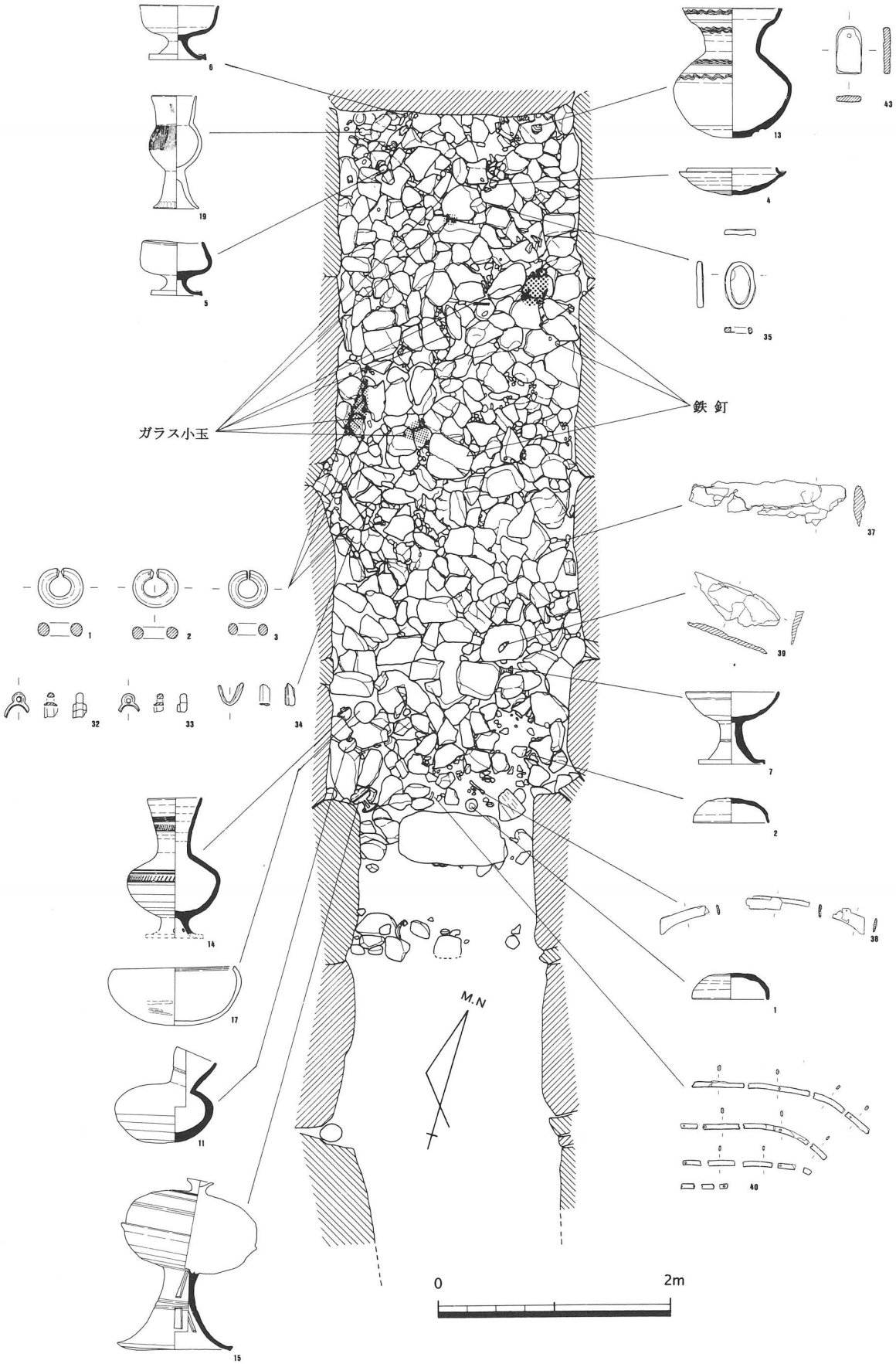
【墳　丘】

墳丘は未調査であるが，円墳と推測される。

【石室構造】

全長 9.4m以上を測る両袖式の横穴式石室であり，玄門が突出している(第 35 図)。石室の主軸は，磁北から約 20° 西に傾いている。石室の規模は，玄室長約 5.4m，玄室幅は奥壁側と玄門側で約 2.2m，中央で約 2.3mを測り，中央がわずかに膨らむ長方形を呈している。玄室の高さは 2.5～2.6mを測る。羨道は，玄門を含めて長さ 4.0mを測り，幅は玄門近くで約 1.8m，入口近くで約 2.0mを測り，ハの字形に開く。高さは，天井石が失われ不明である。玄門部分では，長さ 0.8m，幅 1.4～1.5m，高さ 1.8～1.9mを測る。

玄室の構築は，奥壁に石材の中ではもっとも大きな石を腰石として据え，その上に石を 2 段のせている。ただし，腰石の形が丸かったためか，隙ができる両肩に石を詰めている。玄室の側壁は，比較的大きな石を最下段に腰石として据え，左右側壁とも 4 石を使用している。側壁は大小さまざまな石を腰石含めて 4 段積んでいるが，奥壁側で 3 段，玄門側で 5 段の箇所もある。これは，最下段において，比較的大きな石を奥壁側に据え，それより小さい石を玄門側に据えたことに由来する。横断面を見た場合，ゆるい持ち送りが見られる。天井石は，3 石で構成されている。



第 34 図　古宮古墳遺物出土位置図 (縮尺 1/50)

羨道は，最下段の石しか残っておらず，左側壁に2石，右側壁に3石のみが認められる。

玄門は，立柱として大きな石を最下段に据え，小振りの石を1段積んでいる。天井石は1石である。現状では，床面の敷居石は認められない。

床面は，玄室全面に約10～30cm大の床石が認められる。ただし，敷居石・排水溝については，後世の撹乱によるためか不明である。

【出土遺物】

玄室および羨道から須恵器や土師器が一定量出土しているが，金属製品は少ない。主に玄室から遺物が出土した。

第36•37図は，玄室から出土した土器である。1～5は須恵器杯蓋で，口径は12.8～14.4cmと小さく，外面の回転ヘラケズリも器高の1/4程度である。6～9は頂部に摘みが付く須恵器杯蓋で，口径は14.3～17.1cmを測り，口縁部内面のかえりは認められない。10～18は須恵器杯だが，14～18は有蓋高杯の可能性もある。口径は10.5～14.0cmを測り，杯蓋1～5と組み合う可能性がある。10～13の底面は回転ヘラケズリである。11は玄室南東隅から出土している。19も須恵器杯で，口縁部内面にかえりをもつ杯蓋と組み合うものである。口径は11.6cmを測り，底面は未調整である。20～22も須恵器杯で，22の底部には高台が付く。23•24は須恵器皿である。25～27は須恵器無蓋高杯で，25•26は短脚だが，27の脚部は比較的長い。28は有蓋高杯で，脚部を欠損している。29は須恵器高杯の脚部で，長脚2段透かしのものである。30～33は須恵器高杯の脚端部と考えられる破片である。34は須恵器脚付広口壺で，全体に歪みが著しい。頸部と体部に沈線がめぐり，体部下半は回転ヘラケズリである。比較的長脚な脚部は，突帯が3条めぐり，6方向より小さな円孔を穿っている。35は須恵器広口壺で，加飾が著しい。ゆがんだ口縁部には×印の刻みを，頸部には縦方向の直線を，体部の肩には沈線2条間に刻目をめぐらしている。器形は，やや肩の張った球形の体部に，緩やかに弓なりに外傾する口頸部が付き，口縁部と頸部の境に突帯を設けている。体部外面に平行の叩き痕とカキ目が，同内面に同心円文の当て具痕が残っている。36も須恵器広口壺で，肩の張った球形の体部に，外傾する短い口縁部が付く。体部の肩に沈線が1条めぐる。体部外面上半にカキ目，体部下半に回転ヘラケズリが見られる。37は須恵器壺の体部で，外面上位の沈線2条間に刻目をめぐらしている。38•39は須恵器壺の脚部と想定される破片で，中位の折れ曲がった箇所に突帯が1条めぐる。40も須恵器壺の脚部だが，全体に丸みを帯びており，端部近くに貼付突帯を1条めぐらしている。41は須恵器長頸壺の口頸部の破片である。42は須恵器ハソウの口縁部と考えられる破片だが，壺脚部の可能性もある。43は須恵器甕の口縁部片である。44•45は須恵器甕の体部片で，43は外面に格子目の叩き痕，内面に同心円文の当て具痕が残るが，45の内面は丁寧にナデ消されている。46•47は土師器杯である。46は口径18.0cm，器高約5.7cmを測り，径高指数は約32である。内面に暗文が2段施されている。48は土師器小形壺で，球形の体部に短い口縁部が直立して付く。外面に密なヘラミガキが見られる。

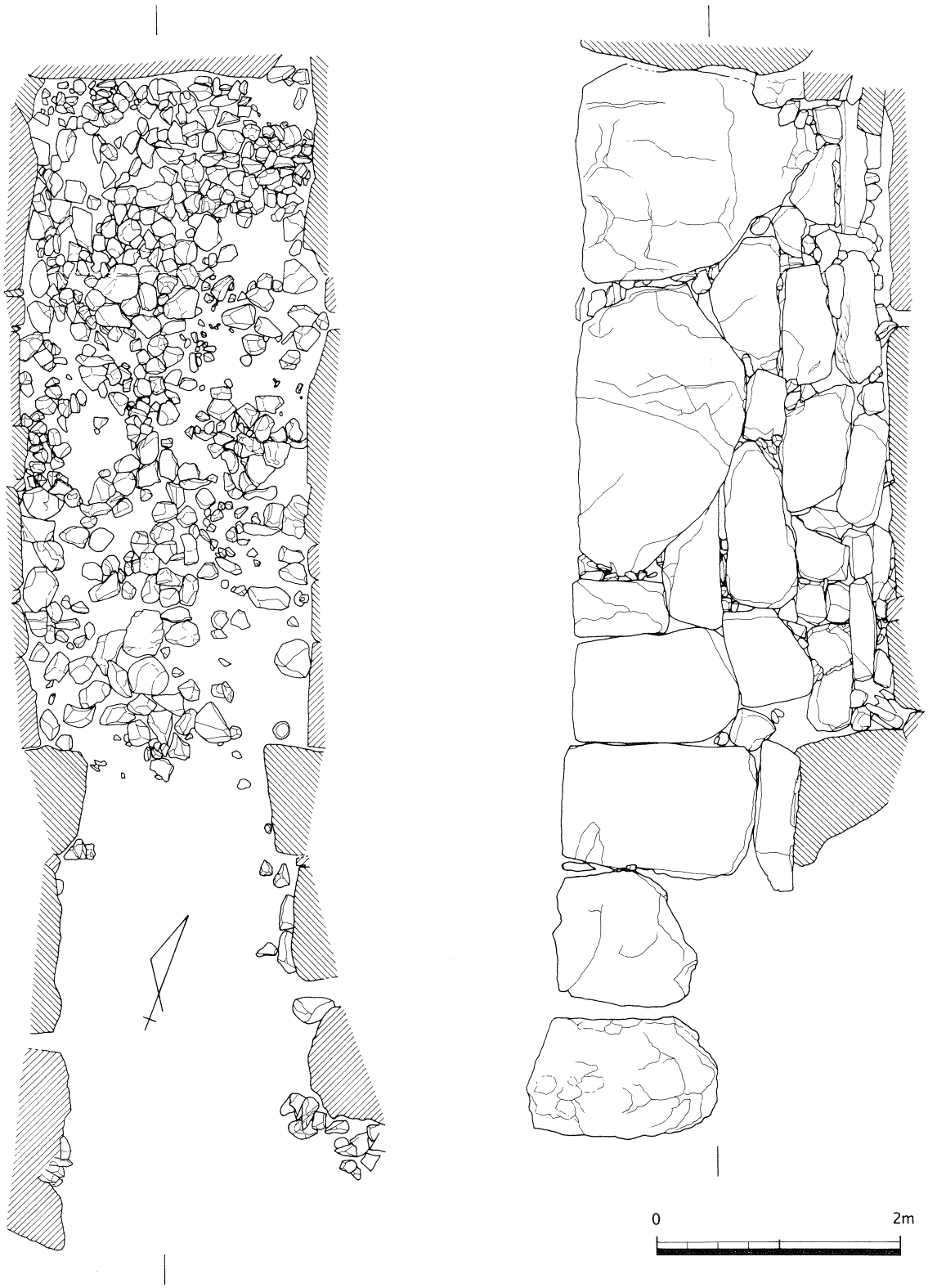
第38図は，羨道から出土した土器である。49・50は須恵器高杯の脚部である。

第39図は，玄室から出土した弥生土器または中世以降の土器である。51は須恵器椀で，西村系と推測される。52は黒色土器A類の椀である。53は瓦器皿で，内面に暗文が見られる。54は瓦器椀の底部である。55は土師質土器椀であるが，断面四角のしっかりした高台を付けており，古代に属するものかもしれない。56も土師質土器椀の底部である。57～59は土師質土器皿で，58の底面は回転ヘラ切，59の底面は回転糸切である。60は土師器甕の口縁部である。61は弥生土器の底部である。

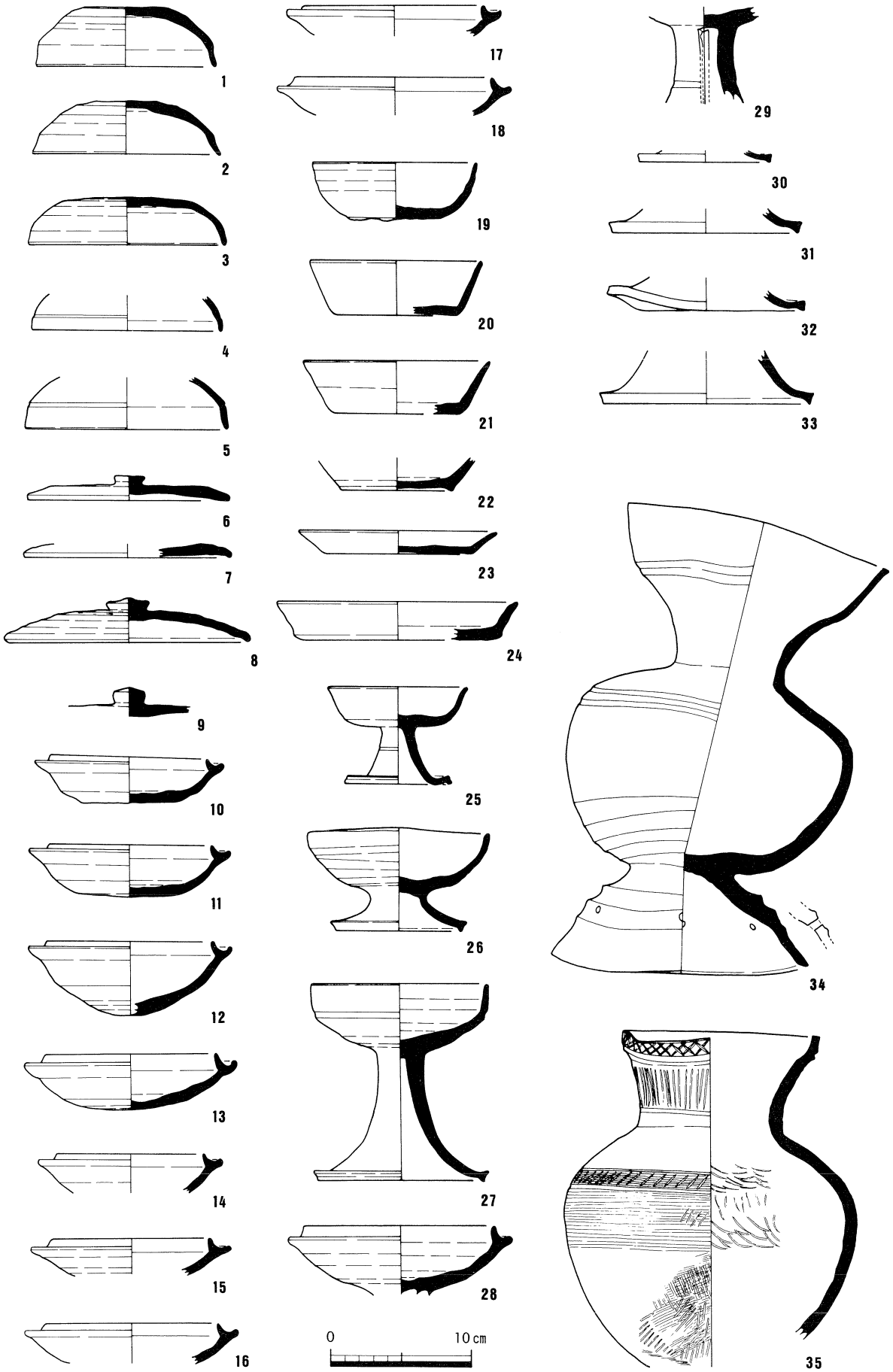
第40図は，玄室から出土した金属製品である。62は馬具の雲珠で，直径6.7cmを測る小形のものである。鉄地金銅張で，頂部に付いていたと考えられる摘みも見られる。中央より下に鉤がのびる。破損著しいが六脚の脚部が付くと想定され，脚部の破片は幅2.5cmを測り，中央に鋲が打たれている。63は馬具の留具で，鉄地金銅張である。64～71は棒状だが，円形もしくは途中で屈曲している鉄製品で，鉄釘の可能性があるが，鉸具の可能性もある。72は，途中にかえりをもつことから，鉄鏃の可能性がある。73•74は鉄釘と推測される。75～77は鉄製品である。

壁奥

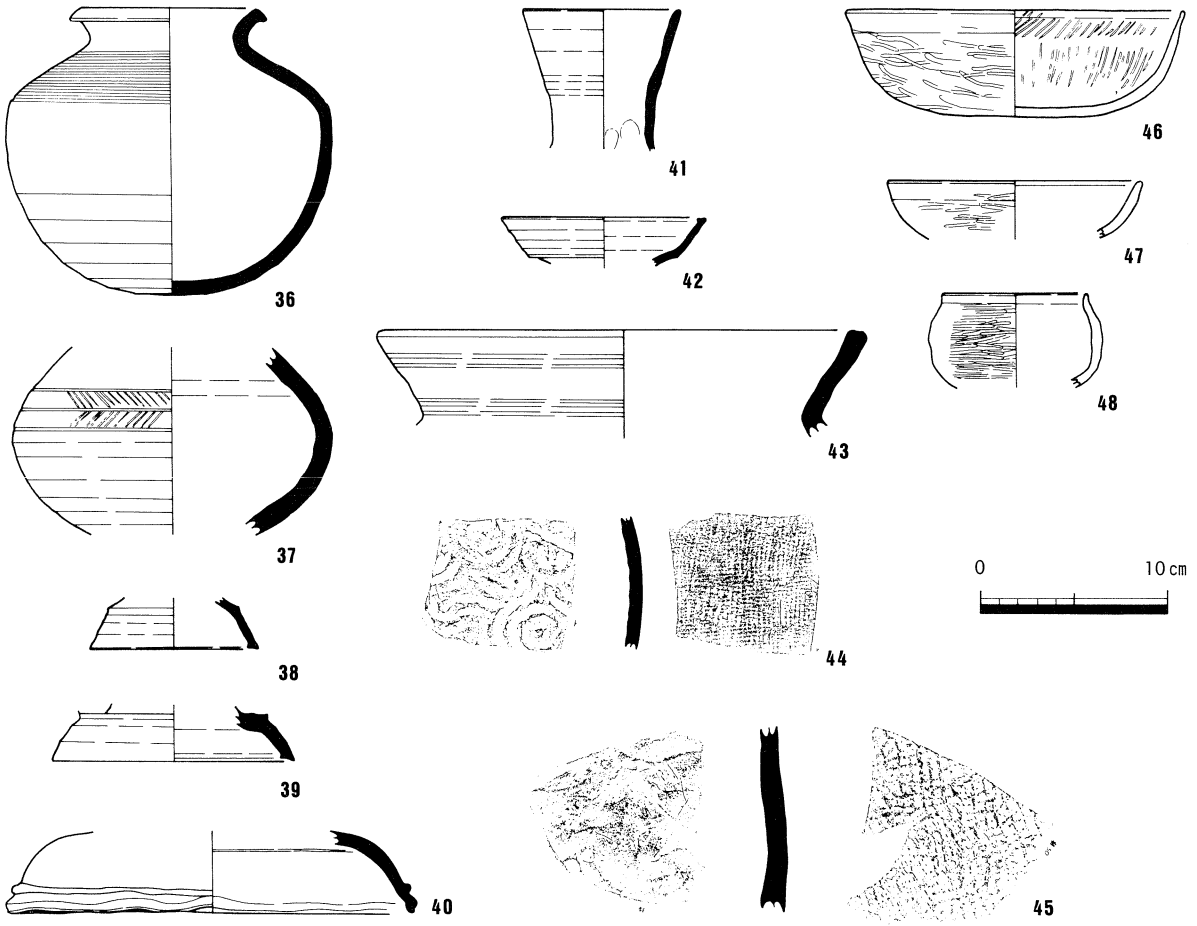
玄門



第 35 図　鬼無大塚古墳　横穴式石室実測図 (縮尺 1/50，香川大学原図)

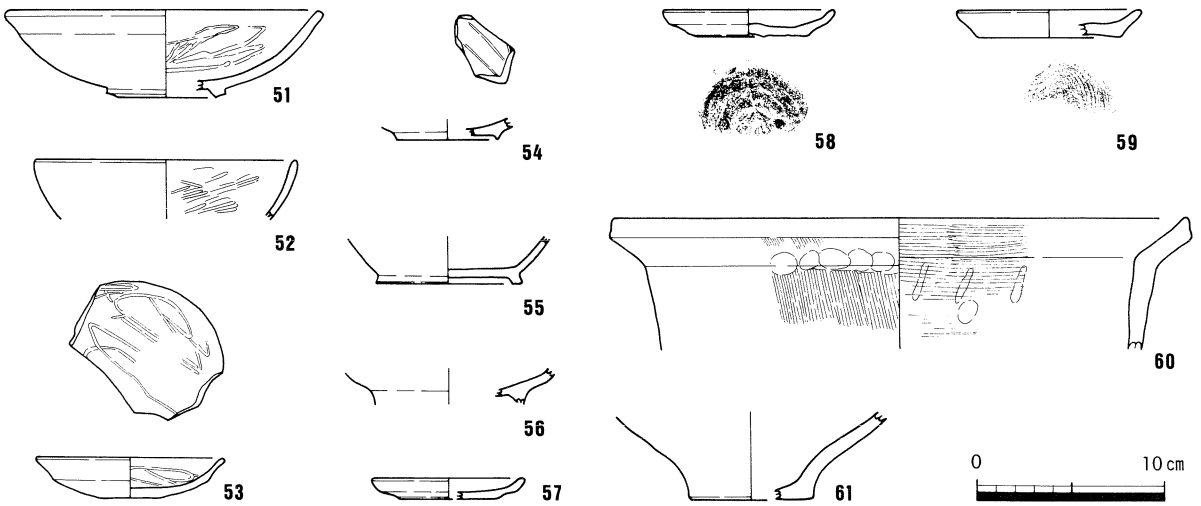


第36図　鬼無大塚古墳玄室出土遺物実測図①（縮尺 1/4）

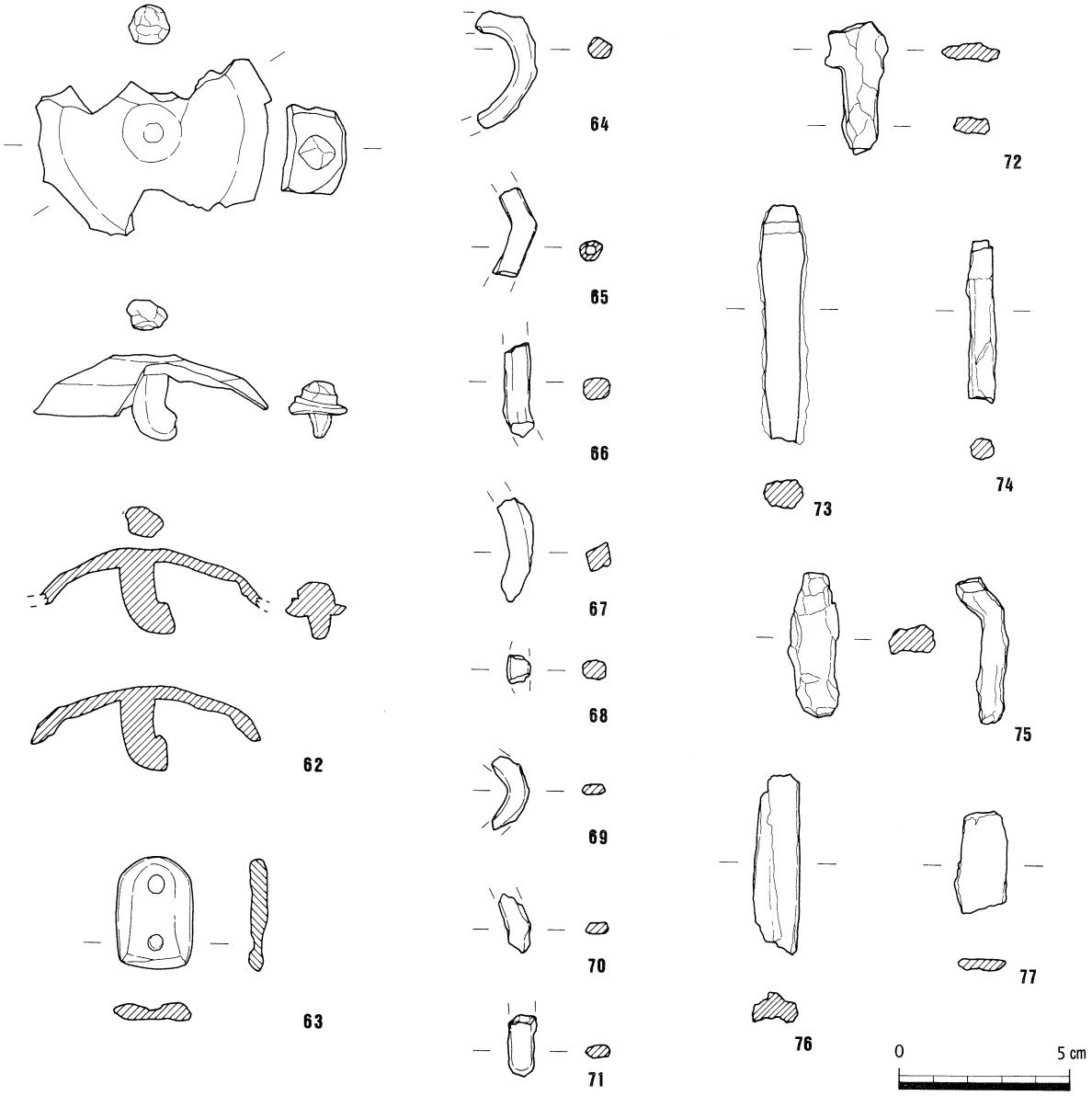


第 37 図　鬼無大塚古墳玄室出土遺物実測図②（縮尺 1/4）

第 38 図　鬼無大塚古墳羨道出土遺物実測図（縮尺 1/4）



第 39 図　鬼無大塚古墳玄室・羨道出土弥生・中世遺物実測図（縮尺 1/4）

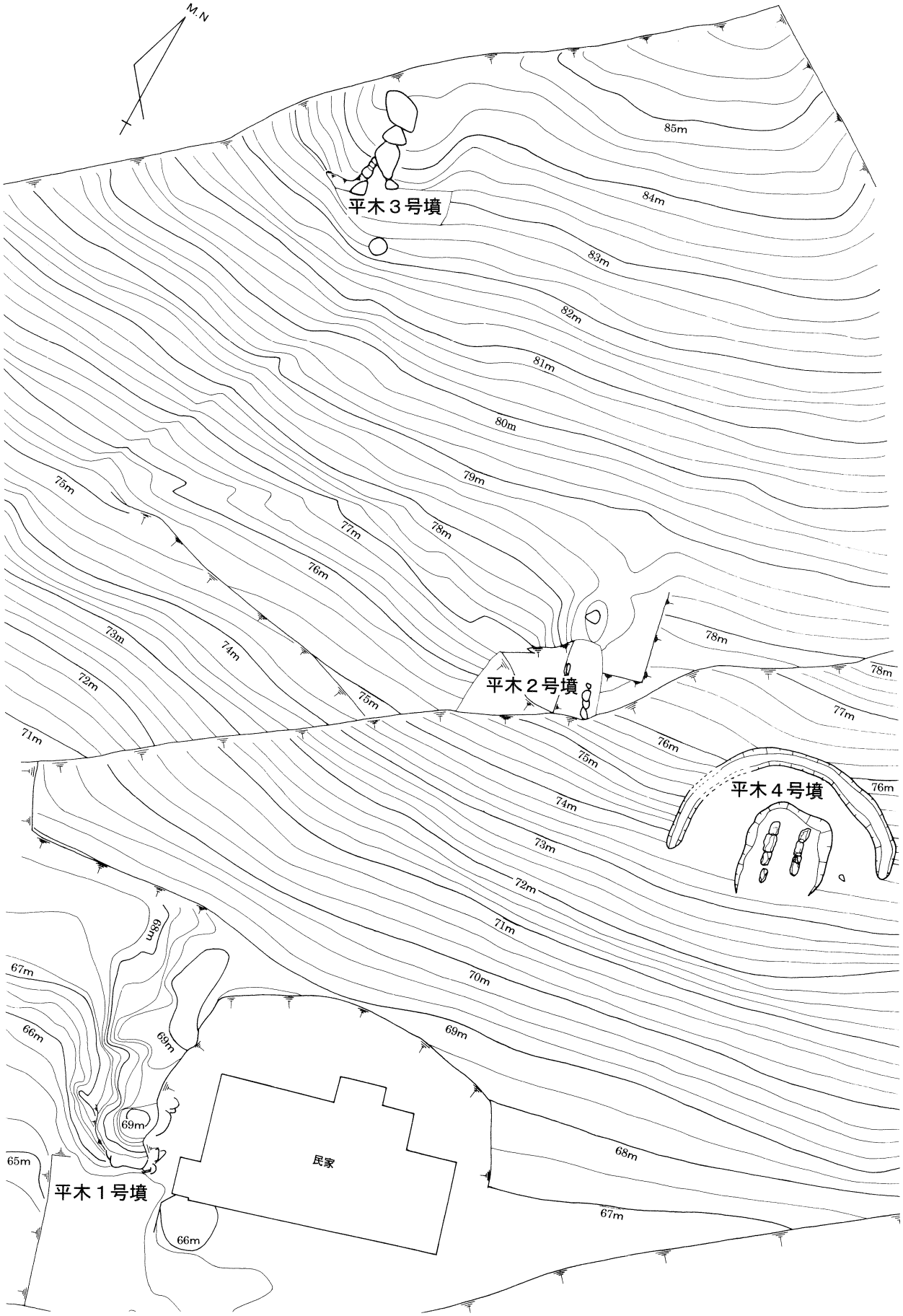


第40図　鬼無大塚古墳玄室出土金属製品実測図（縮尺 1/2）

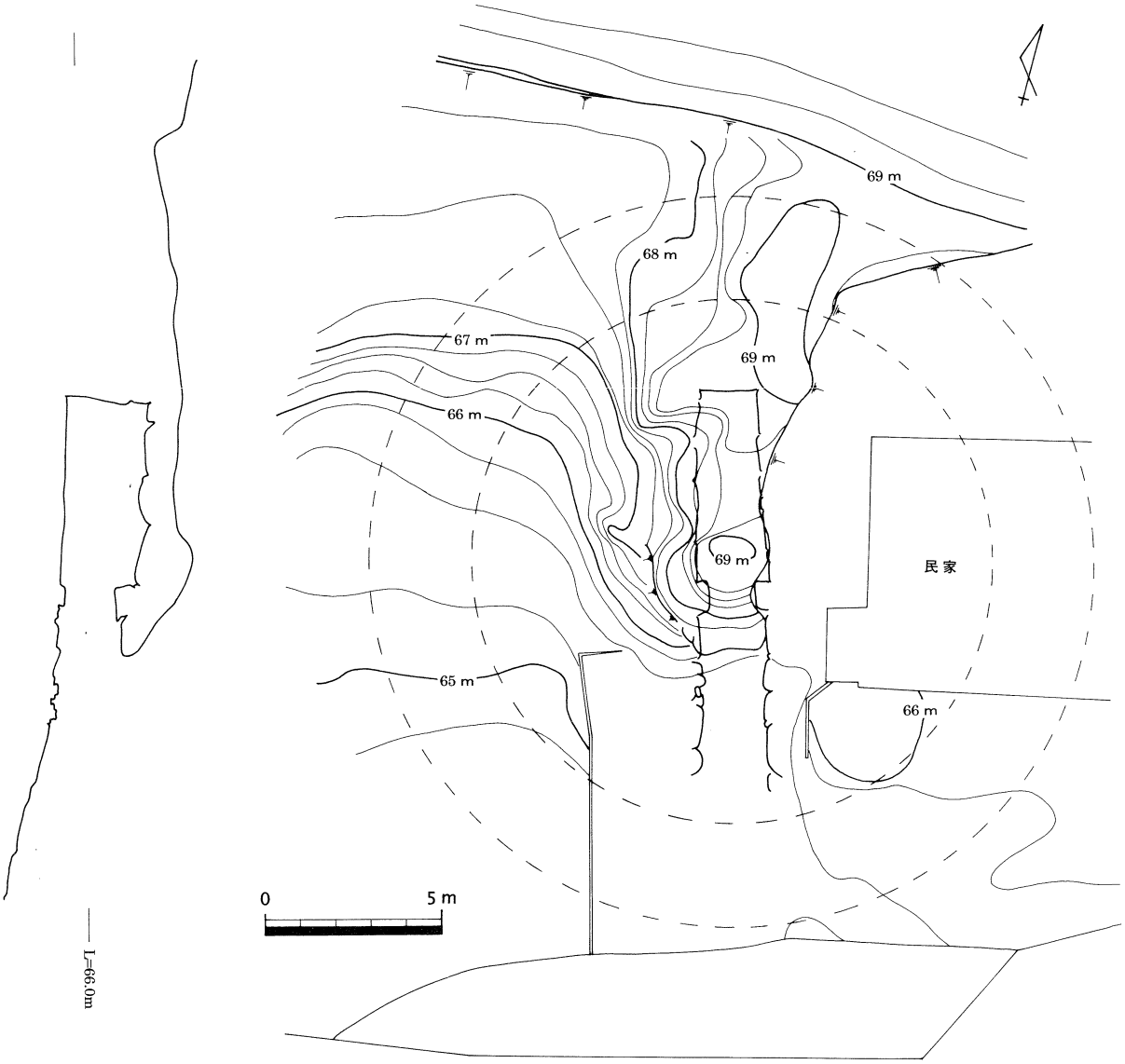
5．平木１号墳

平木１～４号墳（平木古墳群）は，南向きの斜面に立地している横穴式石室墳である。斜面下位の標高66m付近に１号墳があり，１号墳の上手にあたる標高77m付近に２号墳が，さらに上方に３号墳が標高84m付近に存在する。４号墳は，１号墳より北東方向の標高75m付近に存在していた。2・4号墳は墳丘を接する近距離にあり，その他は少し離れた距離にある。１～３号墳は古くから石室が開口しており，４号墳は石室基底石しか残っていなかった。以下，個々の古墳ごとに報告する。

平木１号墳は，昭和58年に横穴式石室内を香川大学により学術調査がなされた(香川大学 1984)。この時には，石室内に玄室奥で約50cm，入口で約30cmの土砂が堆積していたという。その後，宅地造成の計画がなされたことを受けて，平成元年に本市教委によって試掘調査を行った(高松市教委1990)。試掘調査は，墳丘にトレンチを設定して規模を解明するとともに，石室前の未調査部分を掘削した。その結果，確認された墳裾から直径約19mの円墳と推定されるとともに，石室前から確認された羨道跡と墓道から全長11.1mの横穴式石室であることが判明した。また，須恵器・土師器・金環・鉄刀・鉄斧などの多彩な出土品とともに，県内では出土例が少ない須恵質陶棺が出土し注目を集めた。このように，この古墳の重要性が明らかになり，古墳保存の要



第41図　平木１～４号墳　地形測量図（縮尺 1/300，香川大学原図に高松市教委1990・香川県教委2003を追加して改変）



第42図　平木1号墳　墳丘測量図（縮尺1/200，高松市教委1990を修正）

望書が地元から提出され，宅地造成は中止となった。一方，古墳に隣接する香川県立高松西高等学校から新体育館建設計画がなされ，平成7年に香川県教委によって，再度の試掘調査が実施された(香川県教委2003)。その結果，平木1号墳の周濠が確認され，周濠を含めた直径が約22.5mの円墳であると修正された。これを受けて，古墳を現地保存することが確定し，平成8年に保存整備工事が実施され，現在は施錠されているが見学可能な状態となっている。

【墳　丘】

墳丘は，北側を除いて大きく削られ，石室の一部が露出している状態であった。トレンチ調査の結果，周濠痕跡を確認しており，墳丘北側では幅約1.8～1.9m，深さ約20cmを，墳丘南側の石室入口近くでは幅2.3m，深さ70cmの規模を測る。この周濠痕跡から，直径約20mのほぼ正円を呈する円墳で，墳丘中心は石室玄門部やや奥壁寄りに位置することが判明している。また，墳丘は厚さ2～3cmの細かな交互土層が観察されており，版築技法により築造されている。

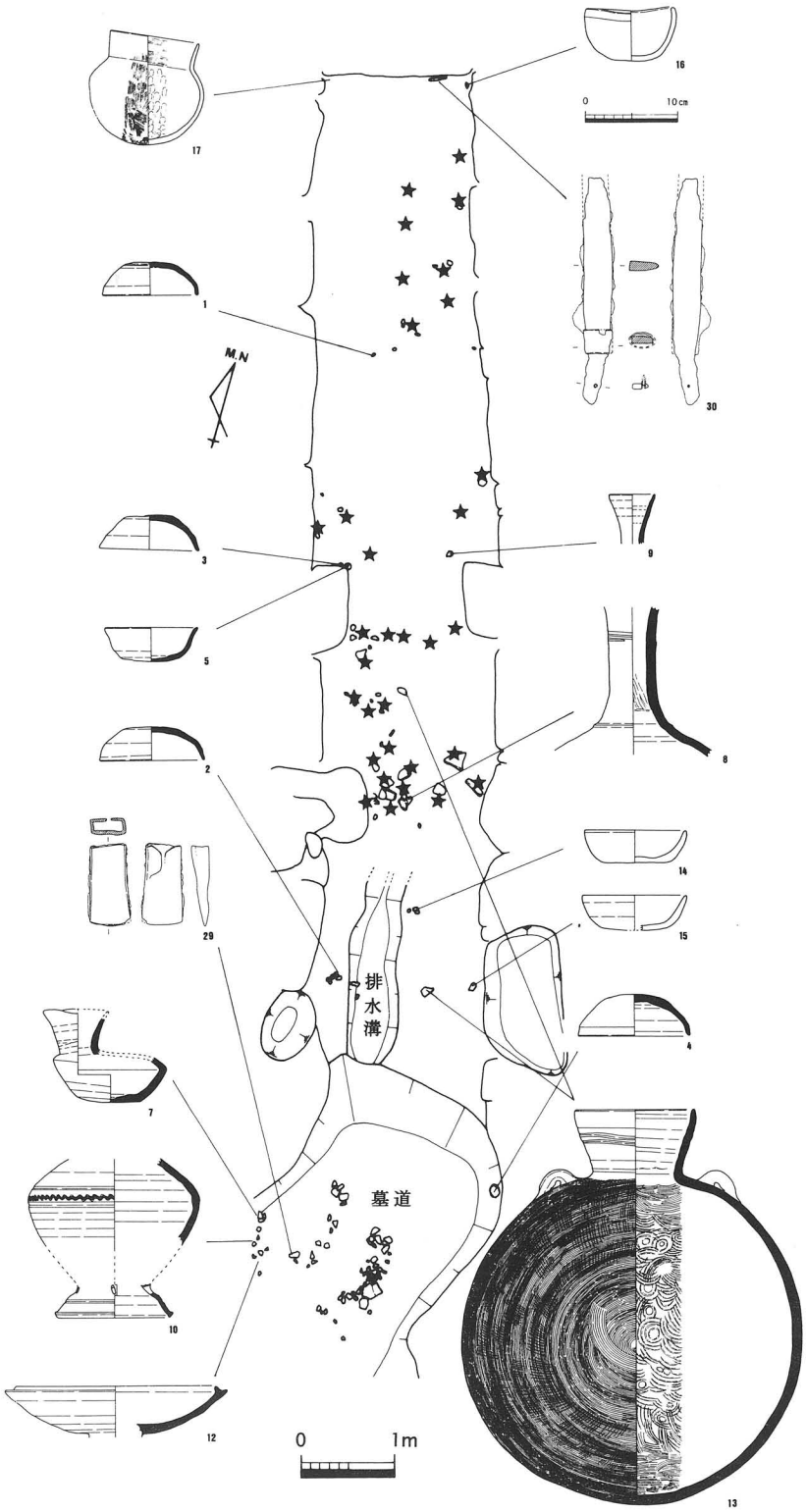
【石室構造】

全長約11.1mを測る両袖式の横穴式石室であり，玄門が強く突出している。石室の主軸は，磁北から約15°西に傾いている。石室の規模は，玄室長約5.4m，玄室幅は奥壁側で約1.6m，玄門側で約2.0mを測り，

奥に進むに従い細長くなる台形を呈している。玄室の高さは2.1～2.4mである。羨道は，玄門の突出を含めて，長さ5.1m，幅1.8m，高さは残存部分で1.8～1.9mを測る。玄門では，長さ0.6m，幅1.2m，高さ1.55mを測る。第42図の縦断面図を見た場合，玄門と羨道中央において，2つの傾斜変換点があり，玄室奥と羨道先端では約1mの標高差が生じている。

玄室の構築は，奥壁に石材の中ではもっとも大きな石を腰石として据え，その上にもう1段のせている。玄室の側壁は，比較的大きな石を最下段に腰石として据え，左側壁は5石，右側壁は4石を使用している。側壁は大小さまざまな石を腰石含めて4段ないし5段積んでいるが，一部2段の箇所もある。横断面を見た場合，上位でゆるい持ち送りが見られる部分もある。石と石の間には粘土による目張りがなされている。天井石は，4石で構成されるが，奥壁側の石はほぼ隠れている。

羨道は，奥壁側1石分を残して大部分が破壊されているが，左右側壁とも最下段に大きな石を腰石として据え，その上に2段に石を積んでいる。また，抜き取り穴等より復元して，最下段には左側壁が5石，右側壁が4石据えられていたと考えられる。なお，羨道の天井石も，1石しか残っていない。

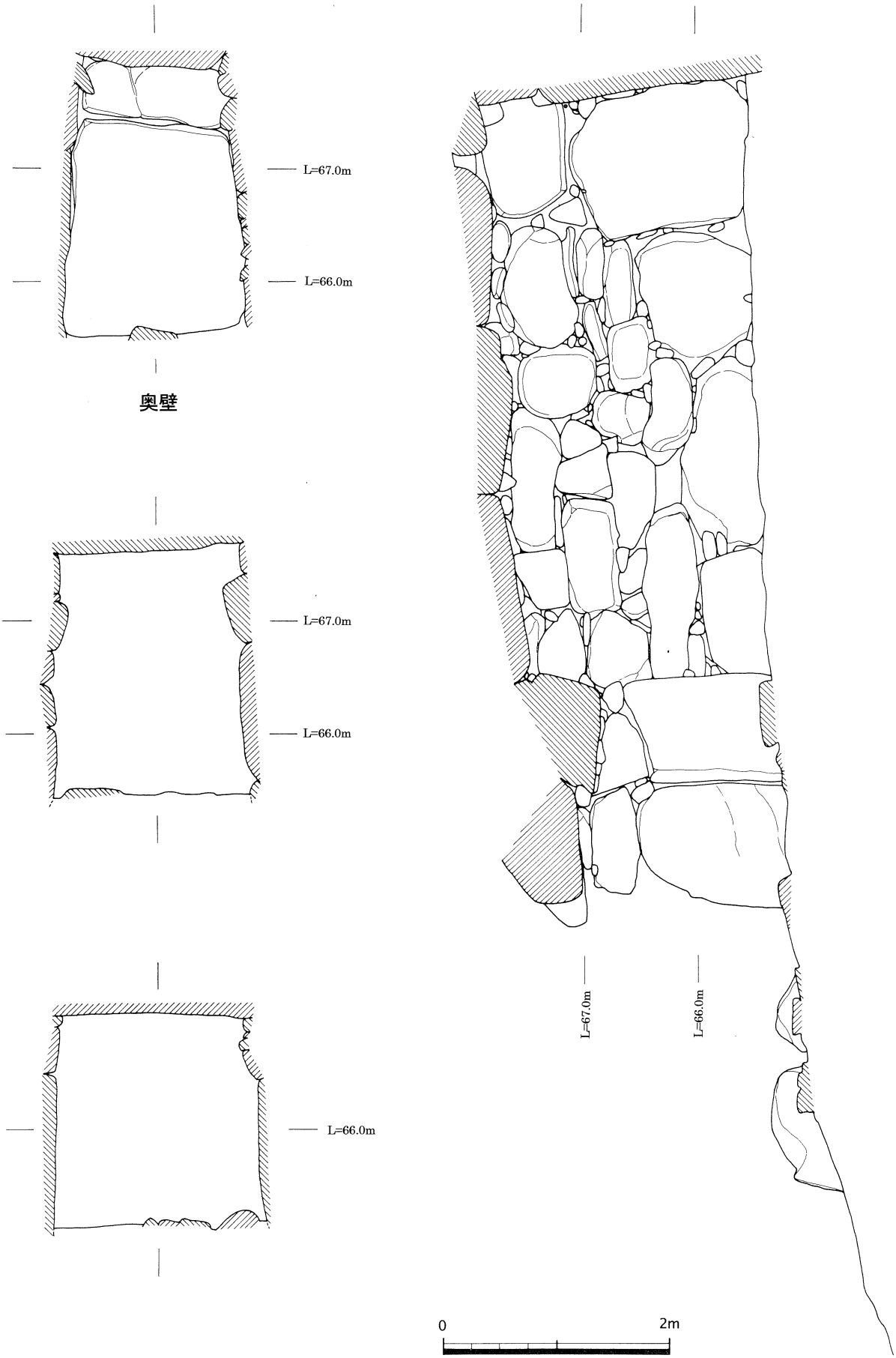


第43図　平木1号墳　遺物出土状況図（縮尺1/80，高松市教委1990）

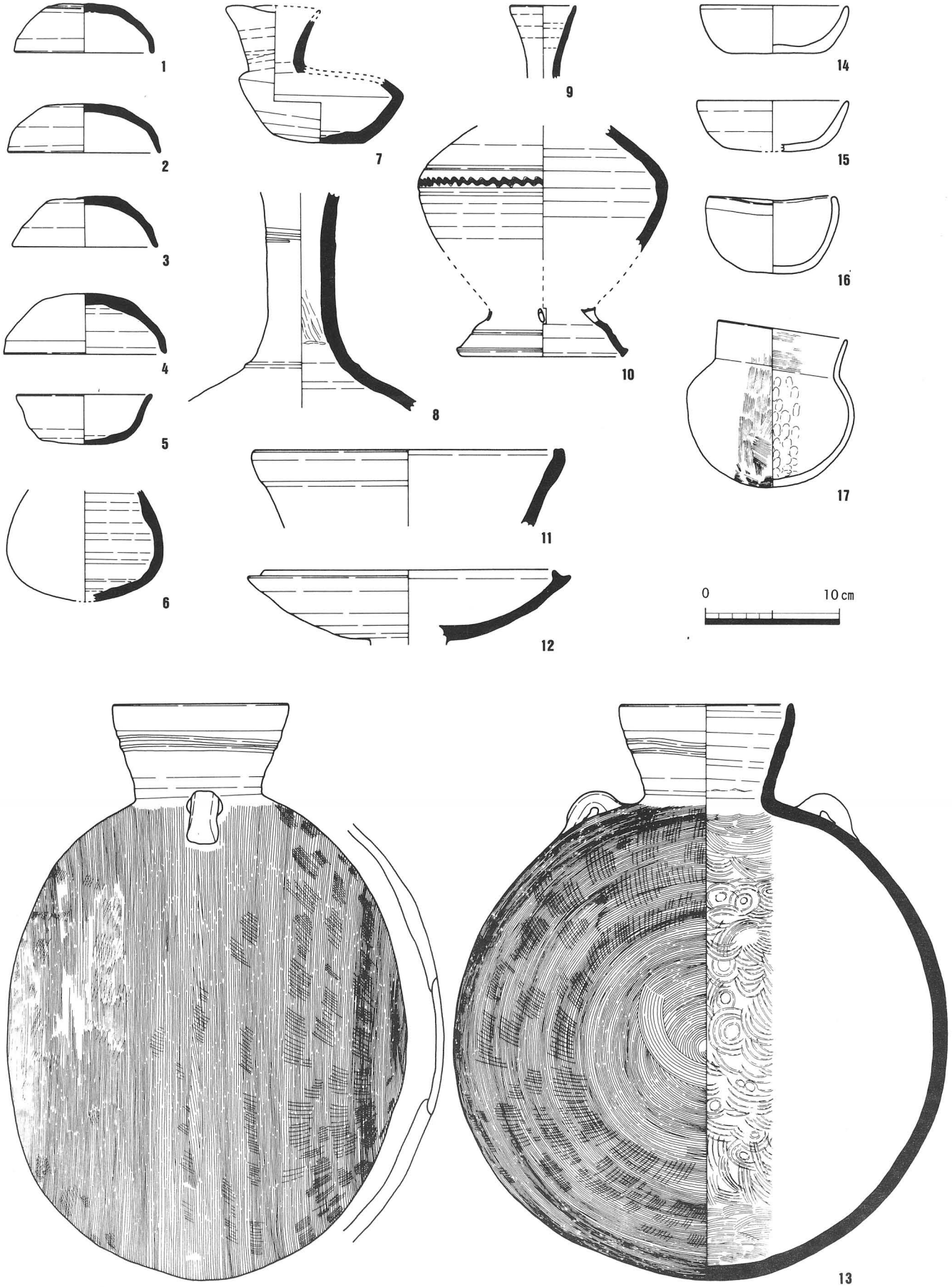
玄門は，立柱として大きな石を最下段に据え，小振りの石を1段積んでいる。天井石は1石で，羨道天井より下位に位置する。床面には，長方形の敷居石を置いているが，幅が足りなかったのか，もう1石足している。

床面は，玄室全面および羨道北半分に約20～50cm大の床石を敷き，さらに玄室奥壁側では約10cm大の丸石が床石上に敷かれていた。床石の下には，約40～50cm大の蓋石をもつ排水溝が，玄室主軸上から敷居石をおそらく潜り，羨道中央を西へ方位を振りながら縦断している。

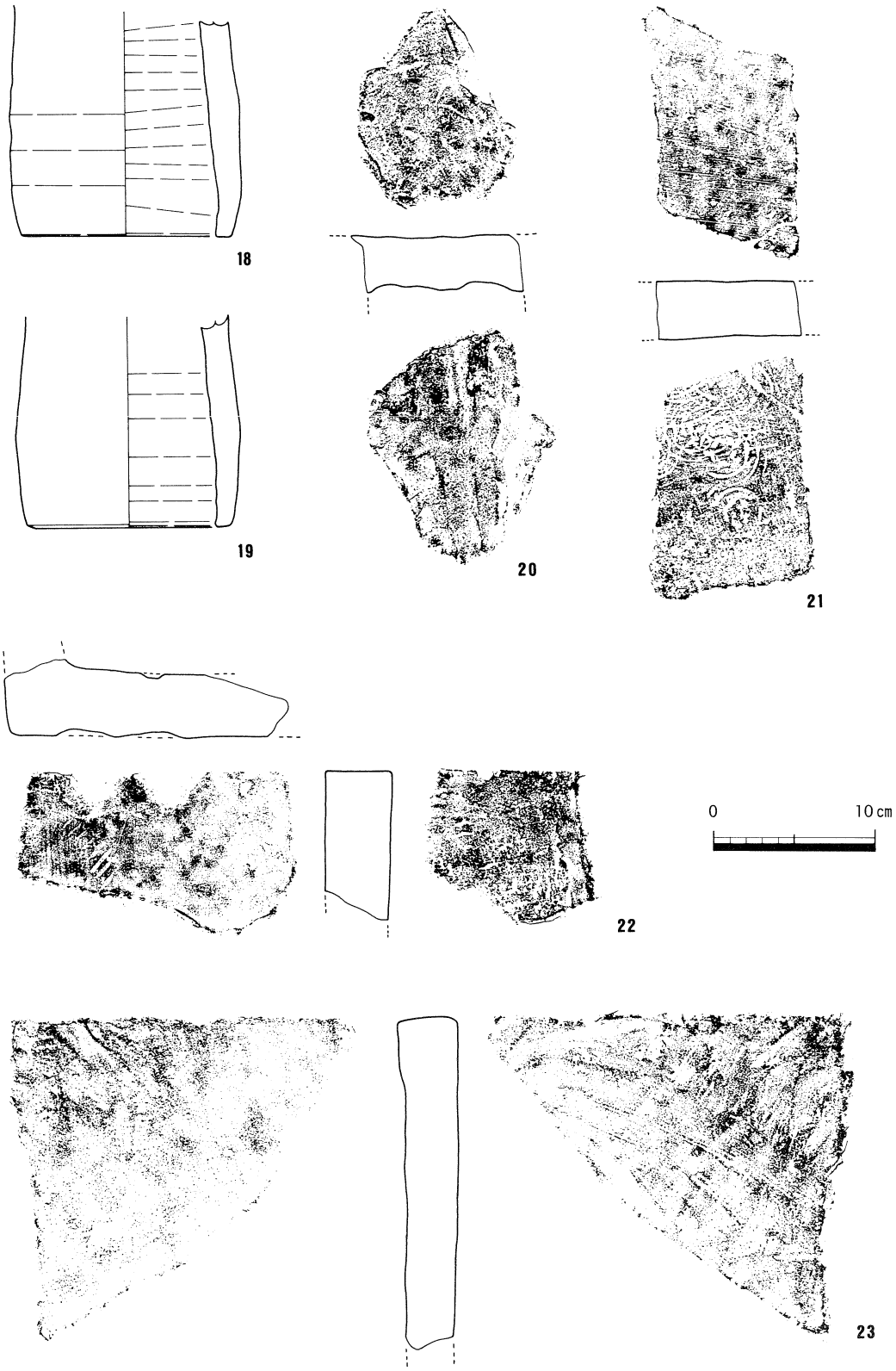
また，羨道前面には，幅2.2m，深さ約20cmの墓道が検出されている。墓道は，石室主軸から約45°振っており，南南西にのびている。これは，地形に左右されたものと考えられる。


L=67.0m
L=66.0m
奥壁
L=67.0m
L=66.0m
L=66.0m
L=67.0m
L=66.0m
0
2m

第44図　平木1号墳　横穴式石室実測図（縮尺1/50，高松市教委1990）



第45図　平木1号墳出土遺物実測図①（縮尺1/4，高松市教委1990）

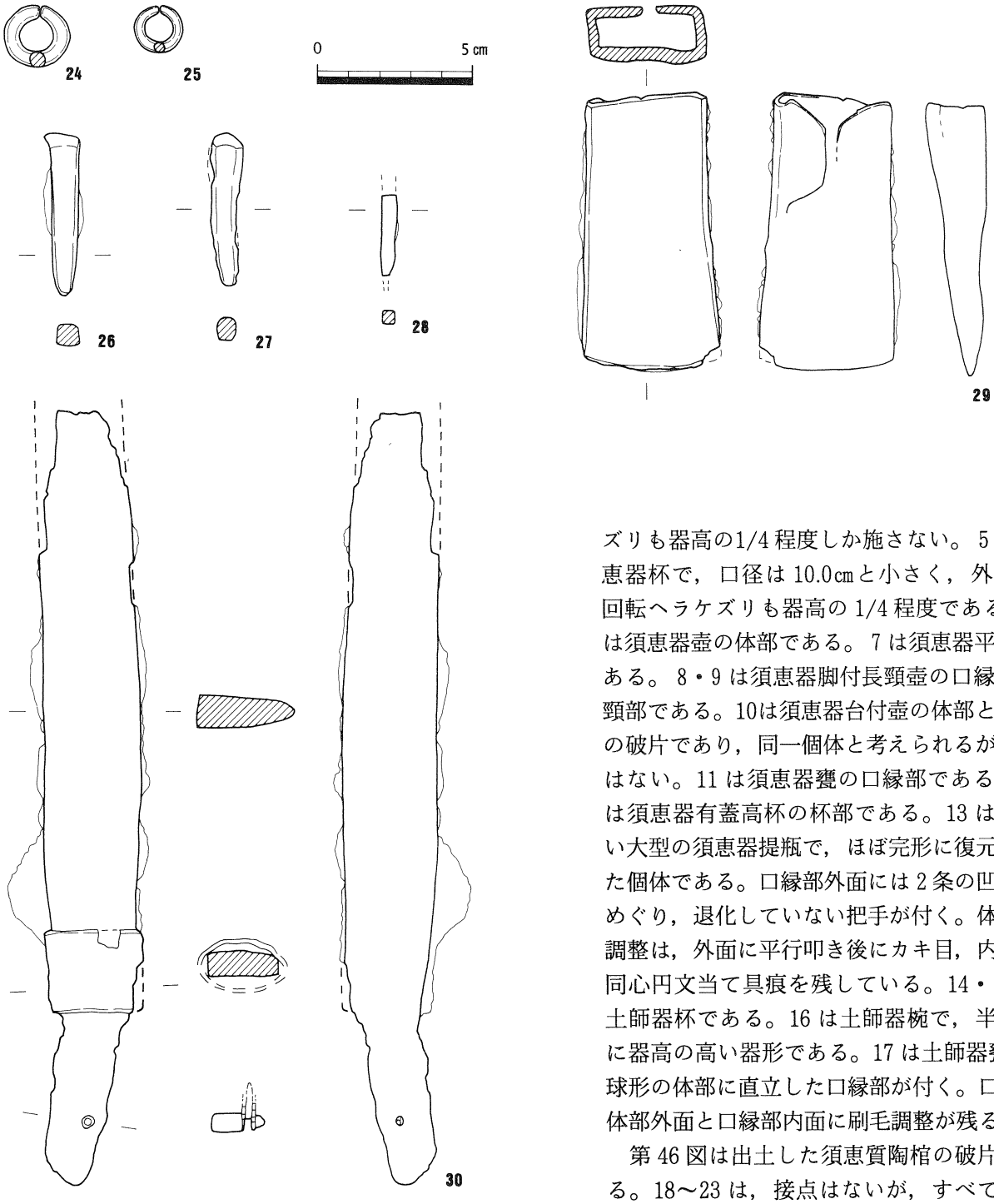


第46図　平木1号墳出土遺物実測図②（縮尺 1/4，高松市教委 1990）

【出土遺物】

平木1号墳は，すでに報告書が刊行されているため，ここでは遺物実測図を再掲するにとどめ，観察表・遺物写真は省略した。また，遺物の出土位置は，玄室・羨道や墓道から出土した破片が接合して複雑なことから，玄室や羨道に分けないで遺物を掲載している。出土位置は，第43図を参照されたい。

第45図は出土した土器である。1～4は須恵器杯蓋で，口径は10.4～12.0cmと小さく，外面の回転ヘラケ



第47図　平木1号墳出土金属製品実測図
(縮尺 1/2，高松市教委 1990)

ズリも器高の1/4程度しか施さない。5は須恵器杯で，口径は10.0㎝と小さく，外面の回転ヘラケズリも器高の1/4程度である。6は須恵器壺の体部である。7は須恵器平瓶である。8・9は須恵器脚付長頸壺の口縁部と頸部である。10は須恵器台付壺の体部と脚部の破片であり，同一個体と考えられるが接点はない。11は須恵器甕の口縁部である。12は須恵器有蓋高杯の杯部である。13は珍しい大型の須恵器提瓶で，ほぼ完形に復元できた個体である。口縁部外面には2条の凹線がめぐり，退化していない把手が付く。体部の調整は，外面に平行叩き後にカキ目，内面に同心円文当て具痕を残している。14・15は土師器杯である。16は土師器椀で，半球状に器高の高い器形である。17は土師器甕で，球形の体部に直立した口縁部が付く。口縁～体部外面と口縁部内面に刷毛調整が残る。

第46図は出土した須恵質陶棺の破片である。18～23は，接点はないが，すべて同一個体のものと考えられる。18・19は脚部，20は底板，21は側壁，22・23も側壁だが上端の破片である。調整は，外面が格子目叩き後ナデ，内面が同心円文の当て具痕後ナデである。

第47図は出土した金属製品である。24・25は金環であるが，それぞれ直径が違うことから，別の組み合う個体が存在した可能性がある。24は玄室奥，25は玄室入口より出土している。26・27は鉄釘である。28は鉄釘より細く鉄鏃の可能性があるが，断定できない。29は袋状鉄斧である。30は鉄刀で，刀と柄の間に金属の板を巻き付け，柄には目釘が貫通している。

6．平木2号墳

平木2号墳は，昭和58年に香川大学により学術調査が実施された(香川大学1983・1984)。西へのびる尾根の稜線上に立地し，石室は南方向に開口している。

【墳　丘】

墳丘は未調査であるが，円墳と推測される。

【石室構造】

全長5.5m以上を測る両袖式の横穴式石室で，玄門が突出している。石室の主軸は，磁北から約11°西に傾いている。石室の規模は，玄室長約2.9m，玄室幅は奥壁側で約1.2m，玄門側で約1.4mを測り，細長い台形を呈する。玄室の高さは1.4～1.5mである。羨道は，長さ2.6m以上を測り，幅は玄門で約1.0m，入口で約1.2mを測り，ハの字形に開く。

玄室の構築は，奥壁に石材の中ではもっとも大きな石を2石上下に据えている。玄室の側壁は，やや大きな石を最下段に腰石として据え，左右側壁とも4石を使用している。側壁上位では小振りの石を腰石含めて5段ないし6段積んでいる。横断面を見た場合，奥壁側でゆるい持ち送りが見られるが，玄門側は不明である。天井石は，3石で構成されている。

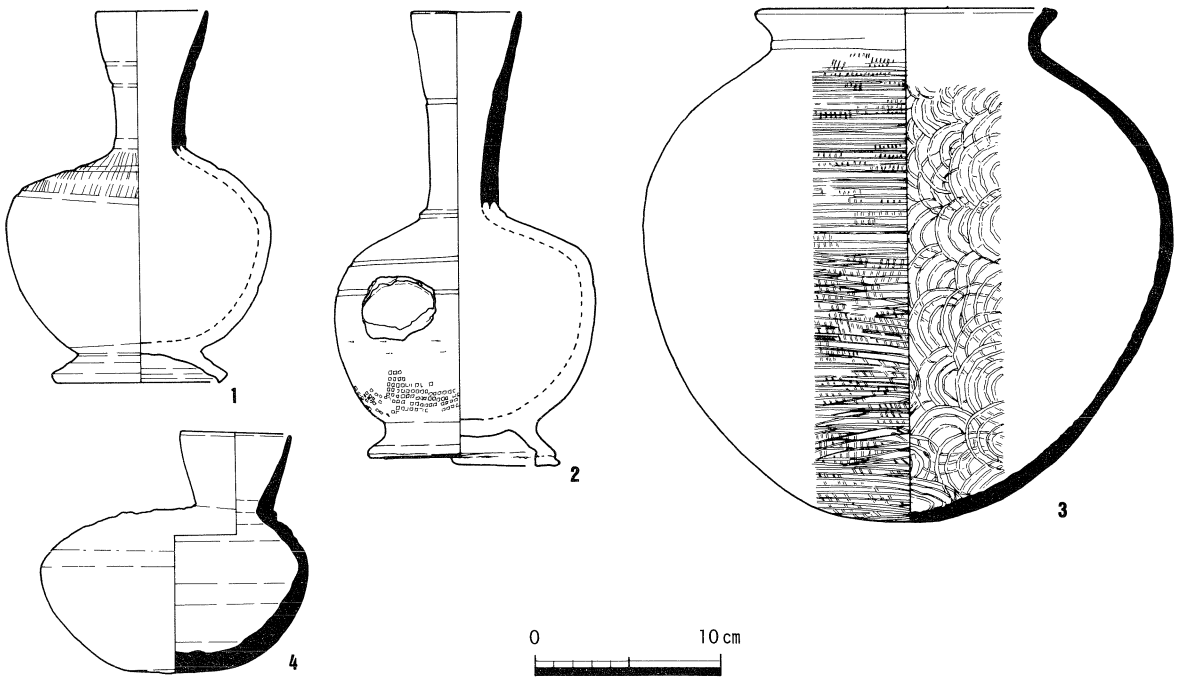
羨道は，最下段近くを残して大部分が破壊されているが，左側壁では2～3段まで石積が確認できる。最下段には，左右側壁とも4石が残っているが，玄室最下段の石に比べ小さい。

床面は，玄室奥壁側に約10～20cm大の床石が残っているだけであった。

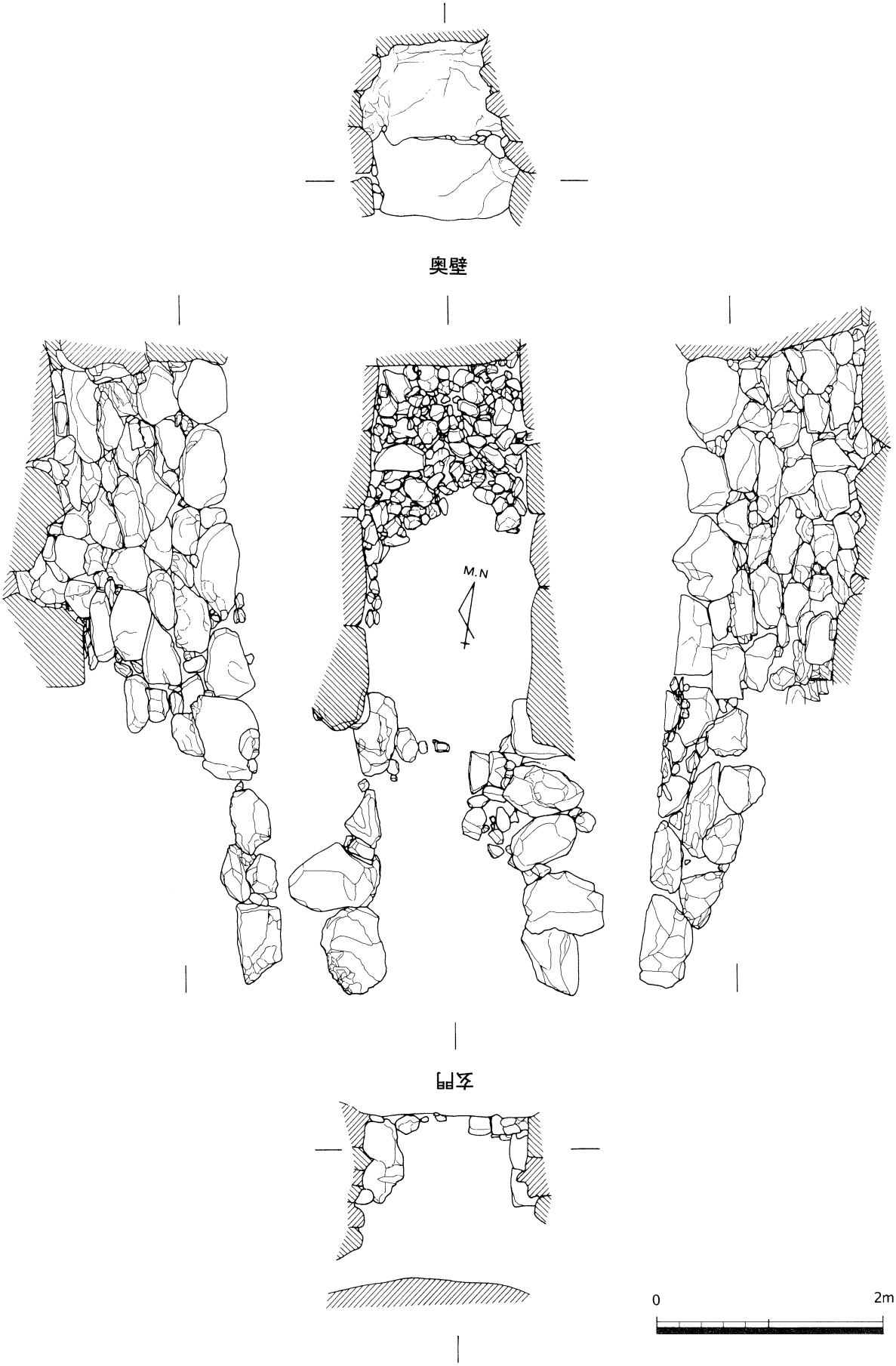
【出土遺物】

須恵器と鉄釘が出土しているが，相対的に少ない。詳細な出土位置は不明である。

第48図の須恵器が出土している。1・2は須恵器台付長頸壺である。2の頸部と体部に計3条の凹線がめぐり，さらに頸部と体部の境には突帯がめぐる。体部外面には格子目叩き痕が見られ，焼成時に付着した他の土器片がある。3は須恵器甕で，球形の体部に，短い口縁部が付く。体部の調整は，外面に平行叩き後にカキ目，内面に同心円文当て具痕を残している。4は須恵器平瓶である。これらのうち，1・4は現物が不明なため，実測図は現地説明会資料より抜粋した。また，ほかに須恵器杯蓋片と鉄釘が出土しているが，現物は不明である。



第48図　平木2号墳出土遺物実測図（縮尺1/4，1と4は香川大学1983現説資料から抜粋）



第 49 図　平木 2 号墳　横穴式石室実測図 (縮尺 1/50，香川大学原図)

7．平木３号墳

平木３号墳は，昭和59年に香川大学により学術調査が実施された(香川大学 1984)。西へのびる尾根の稜線上に立地し，石室は南方向に開口している。

【墳　丘】

墳丘は未調査であるが，円墳と推測される。

【石室構造】

全長5.5m以上を測る両袖式の横穴式石室で，玄門が突出している。石室の主軸は，磁北から約11°西に傾いている。石室の規模は，玄室長約3.7m，玄室幅は奥壁側で約1.4m，玄門側で約1.7mを測り，細長い台形を呈する。玄室の高さは1.9～2.0mを測る。羨道は，玄門を含めて長さ1.8m以上，幅は約1.2mを測る。

玄室の構築は，奥壁に石材の中ではもっとも大きな石を腰石として据え，その上にもう１段のせている。玄室の側壁は，比較的大きな石を最下段に腰石として据え，左側壁は５石，右側壁は３石を使用している。側壁上位では大小さまざまな石を腰石含めて５～７段積んでいる。横断面を見た場合，奥壁側でゆるい持ち送りが見られる。天井石は，３石で構成される。

羨道は，大部分が破壊されており，左側壁で最下段の石が１石，右側壁で２段に１列しか残っていない。

玄門は，立柱として大きな石を最下段に据え，左側壁では小振りの石を１段積んでいる。天井石は，残っていない。

床面は，後世の撹乱が著しく，床石は残っていなかった。

【出土遺物】

出土遺物は，後世の撹乱のためか残っていなかった。

8．平木４号墳

平木４号墳は，平成８年の香川県立高松西高等学校新体育館建設工事中において発見された古墳である。このため，香川県教育委員会によって緊急の発掘調査が実施された(香川県教委 2003)。以下の文章は，既刊の報告書を元に記述を進め，一部追加・修正した。

【墳　丘】

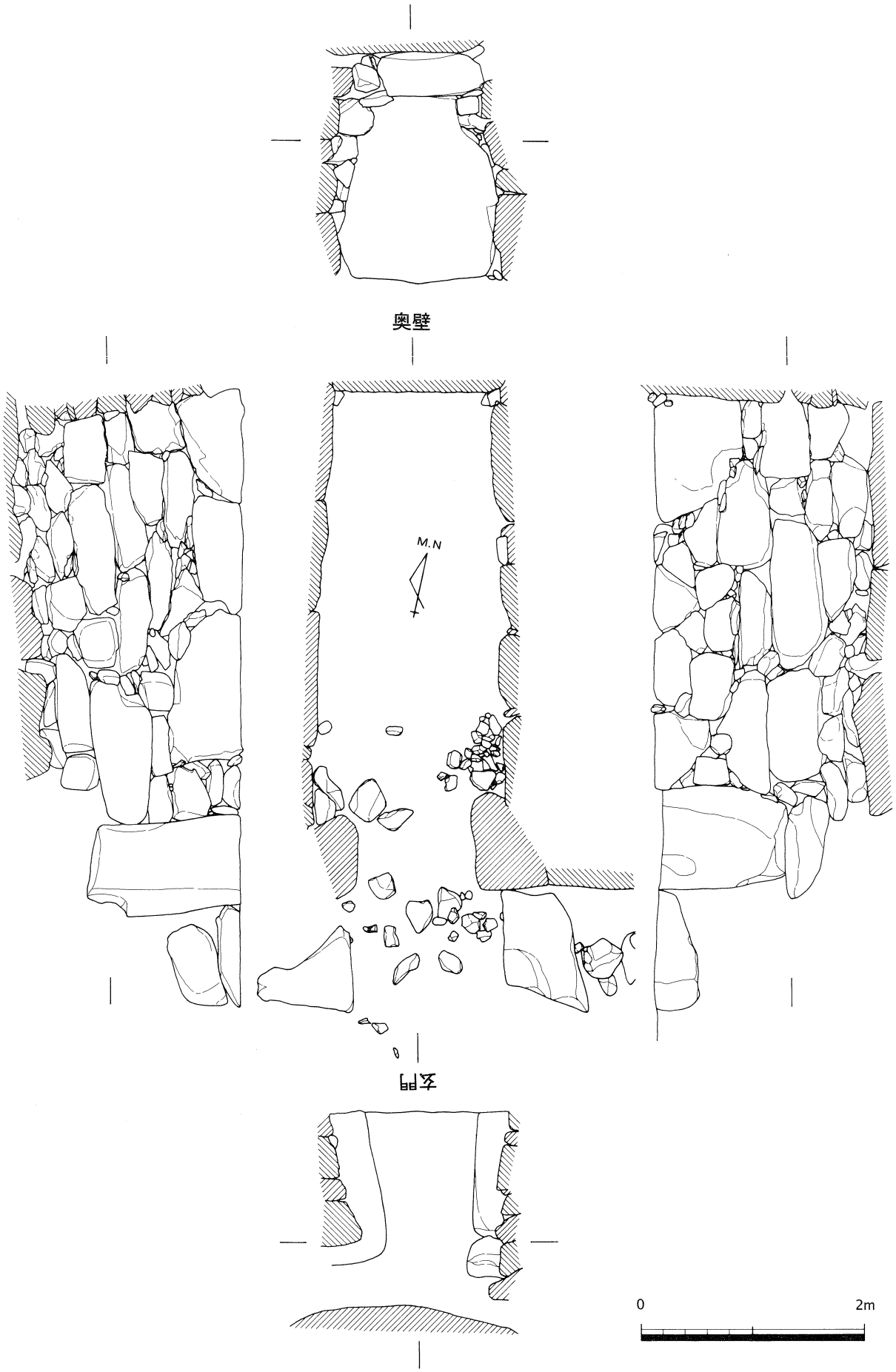
墳丘盛土は削平を受けてほとんど消失していたが，北側半分は円弧を描く周濠が残っていた。また，南側にも等高線の張り出しが認められることから，直径約13mの円墳と推測されている。この古墳が北から南に向かって傾斜する緩斜面に立地することから，周濠は全周するものではなく，南側に向かって浅くなり，開口部に達するものと考えられている。

【石室構造】

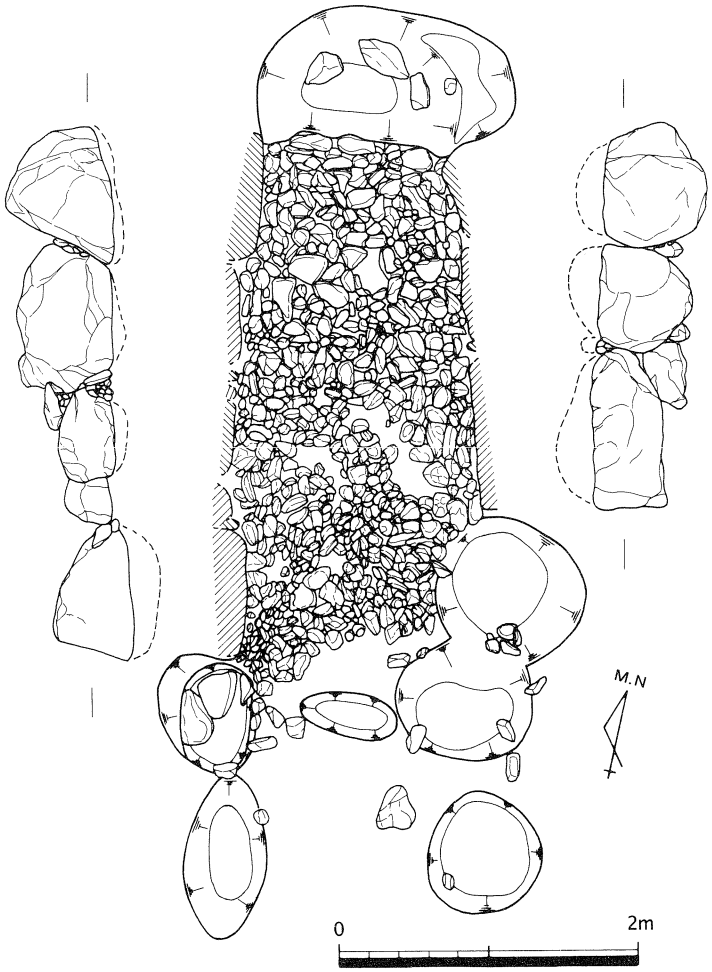
全長5.6m以上を測る片袖式の横穴式石室である。石室の規模は，玄室長約3.6m，玄室幅は奥壁側で約1.2m，玄門側で約1.6m，羨道長2.0m以上，羨道幅約0.9mを測る。石室の主軸は，磁北から約13～20°西に傾いている。石室は破壊が著しく，右側壁が５石，左側壁が３石の基底石のみが残っており，抜き取り穴から右側壁に２石，左側壁の羨道部分に３石が少なくとも存在していたと推測されている。奥壁の基底石も抜き取られていた。石材はほとんどが安山岩である。

【出土遺物】

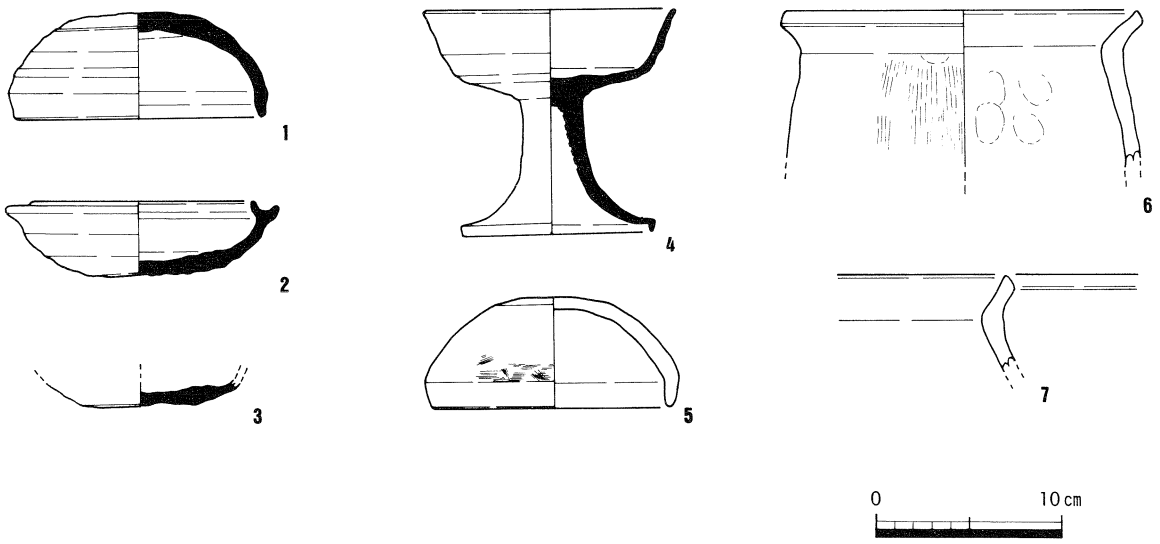
第52図の須恵器・土師器が出土しているが，相対的に少ない。１は須恵器蓋で，石材抜取穴から出土している。２は須恵器杯身で，玄室右側壁付近から出土している。３も須恵器杯身と考えられる破片である。４は須恵器高杯で，玄室右側壁付近から出土している。５は土師器蓋で，奥壁付近から出土しており，須恵器を模倣したものであろう。６・７は土師器甕である。他に図化されていないが，石室床面直上から鉄器片が，周濠から須恵器甕の体部片や白磁の口縁部片が出土している。



第50図　平木3号墳　横穴式石室実測図（縮尺1/50，香川大学原図）



第51図　平木4号墳　横穴式石室実測図（縮尺1/50，香川県教委2003を一部改変）



第52図　平木4号墳出土遺物実測図（縮尺1/4，香川県教委2003を一部改変）

9．その他の古墳

本章では取り上げない未調査の古墳について，概況をここで報告しておく。

神高池西古墳は，横穴式石室の玄室が道路脇に倉庫として利用されており，石室下半は埋没している。玄室の規模は，現状で全長約5.6m，幅約1.9mを測り，大きな石材を用いて構築されており．神高古墳群中でも規模の大きい部類に入る。南向きに石室が開口している。

こめ塚古墳は，露出した石室石材が崩れた横穴式石室である。規模は推定で，玄室長約5.0m，同幅約2.0m，羨道長約3.0m以上，同幅約1.6mを測る。大きな石材を用いて構築されており，神高池西古墳同様に古墳群中でも規模の大きい部類に入る。南向きに石室が開口している。

空家古墳は，横穴式石室の石材と推定される石材が，民家の庭先に認められるだけである。神高池南西1・2号墳も，かつて畑の中に石材が散在していたことが知られるが，古墳かどうか判然としない。

10．神高古墳群の分類と変遷

以上，発掘調査を実施されながら，報告書未刊の古墳を中心に紹介してきた。ここでは，各古墳の石室構造から分類と変遷を試みるとともに，出土遺物も含めて相対年代を割り出し，神高古墳群を造営した集団の性格について言及したい。

【研究小史】

神高古墳群について触れた研究論文は散見できるが，大半の石室および遺物実測図等が公開されていなかったため，どれも資料的に制約があった。

古墳群を発掘調査した丹羽佑一氏は，幾つかの論文を記されている。「笠居郷の古墳」(丹羽佑一 1986)では，神高古墳群は，平木1号墳と古宮古墳を主墳とする2つの大グループからなり，大グループは2～3つの小グループから形成され，小グループは1～3基程度の古墳から形成されると論じられている。そして，大グループは当時のムラ単位に相当し，小グループは同一血縁集団から構成されていたと考えられている。そうした中にあって，古宮古墳が石室規模・副葬品とも古墳群中もっとも卓越していることを指摘されて，古宮古墳の玄門梁石に連接する玄室第1天井石が1段低く，あたかも廂の様相を呈する特徴は，県内各地の主墳クラスの石室と共通するとも指摘されている。また，神高古墳群の一般的な玄門平面形が突出形である特徴は，坂出平野周辺と共通し，奈良・平安時代の文献から綾氏の居住が知られることから，この共通性は綾一族の先祖を示すものと推定されている。

さらに，丹羽氏は，県内の横穴式石室の分類(丹羽佑一 1985・1989)でも神高古墳群を取り上げられている。玄門平面形では，山野塚古墳を羽子板形，古宮古墳を中間形，鬼無大塚古墳と平木1～3号墳が突出形とされている。玄室平面形では，山野塚古墳・古宮古墳・鬼無大塚古墳がa長方形，平木1～3号墳がb長台形となっている。そして，玄室側面形では，古宮古墳がB2－aすなわち袖石上に梁石を懸け，その上に天井石をのせ，梁石上の天井石が玄室内にせり出し，玄門以外の天井石は水平に懸けるものとされている。山野塚古墳，鬼無大塚古墳，平木1～3号墳については，A1－aすなわち袖石上に天井石を垂直にのせ，天井石は水平に懸けるものと分類されている。

山崎信二氏は，玄門立柱を有する横穴式石室の分類を行い，その中で古宮古墳の石室をBa型とされている(山崎信二 1985)。すなわち，平面では玄門幅が羨道幅と同じで，立面では玄門の天井石が羨道の天井石より1段低いものである。そして，綾歌郡の古墳がA型すなわち平面で玄門が羨道より突出しているものと分類し，神高池古墳群と区別されており，丹羽氏と見解を異にしている。

大久保徹也氏は，讃岐における古墳編年案(大久保徹也 1995)の中において「山野塚古墳→古宮古墳→鬼無大塚古墳→平木1号墳」という変遷を掲示し，築造年代を7世紀前半と位置づけられた。

國木健司氏は，県内の横穴式石室をA～Eの5分類に，B類を4つに分けた上で，神高古墳群にはB－2類とB－3類が共存していると指摘されている(國木健司1995)。すなわち，B－2類とは「玄門立柱が羨道部から

突出しないか，あるいはわずかな突出に留まるもの。」，B－3類とは「玄門立柱は羨道部より内側に突出するが，玄室の玄門付近の幅が奥壁側を大きく上回るもの。」とされている。そして，B－3類が高松平野西部・南部と坂出平野に集中して築造された特徴的な型式であると位置づけられている。

【石室平面プランの検討】

瀬戸内海沿岸の横穴式石室については，一般的に九州型と畿内型が知られている。研究者により若干の相違はあるが，九州型は玄門立柱が羨道部より内側にせり出すが，畿内型は玄門立柱が羨道幅と同じものという一つの特徴がある。この点からすると神高古墳群は九州型となるが，先学諸氏が指摘するとおり，典型的な九州型ではなく，2次改変をうけたものである。

さて，神高古墳群を，石室平面プランで細分すると，次の3つに分かれる。山野塚古墳と古宮古墳，鬼無大塚古墳，そして平木支群（古墳群）である。

山野塚古墳と古宮古墳は，玄室平面が長方形で，玄門立柱の突出度が非常に弱い。持ち送りもほとんど認められない。神高池北西古墳も，石材の一部しか残っていなかったが，玄室幅が同じことや，距離的に近いことから，このグループに含まれる可能性がある。

鬼無大塚古墳は，玄室の奥壁幅と前壁幅が同じで，中央付近の幅がわずかに広くなる胴張り長方形で，玄門立柱が突出する。玄門立柱の突出は平木支群と共通するが，羨道前方から見ると平木支群ほど明瞭でない。また，羨道幅が奥から前に進むに従い開く「ハ」の字形を呈している特徴は他のグループに見られず，また，ゆるい持ち送りが見られる。

平木支群のうち1～3号墳は，玄室の前壁幅が奥壁幅より広がる長台形で，玄門立柱が突出し，ゆるい持ち送りが見られる。4号墳も，石材の一部しか残っていなかったが，平面形が同じ長台形であることから，このグループに含まれると考えられる。

この石室平面プランの相違は，地形による区分けと一致する。すなわち，山野塚古墳と古宮古墳は同じ谷間にあり，鬼無大塚古墳は丘陵を一つ隔てた別の丘陵上に，平木支群は鬼無大塚古墳と同じ丘陵だが更に谷奥へ進んだ斜面に密集して築造されている。地形別による各支群の立地は，古墳造営集団の違いを反映している考えもでき，集団の違いが石室平面プランにも表れている可能性がある。ただし，集団の違いがムラ単位であるかどうかまでは言及できない。

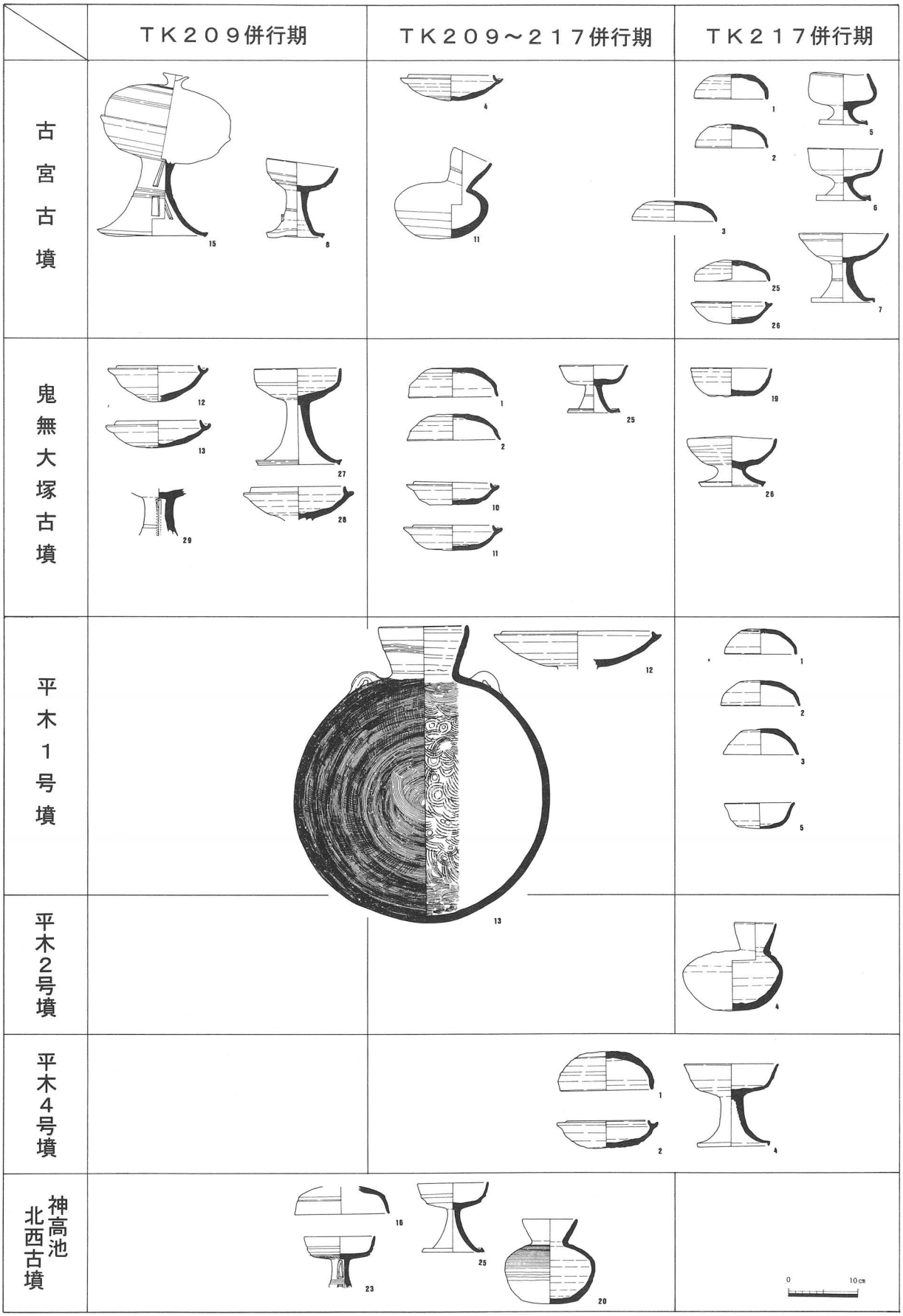
【石室構築と変遷の検討】

横穴式石室の編年については，河上邦彦氏(河上邦彦 1995)，白石太一郎氏(白石太一郎 1966・1982)，山崎信二氏(山崎信二 1985)らの研究がある。それらを参考にしながら，各古墳の相対的位置付けを行いたい。

	山野塚古墳	古宮古墳	鬼無大塚古墳	平木1号墳	平木2号墳	平木3号墳	平木4号墳	神高池北西古墳
玄室長	5.4m	5.9m	5.4m	5.4m	2.9m	3.7m	3.6m	4.0m
玄室幅	1.85～2.0m	2.0m	2.2～2.3m	1.6～2.0m	1.2～1.4m	1.4～1.7m	1.2～1.6m	1.45m
玄室高	2.5～2.8m	2.9～3.2m	2.5～2.6m	2.1～2.4m	1.4～1.5m	1.9～2.0m		
羨道長	5.5m以上	3.7m以上	4.0m以上	5.1m	2.6m以上	1.8m以上	2.0m以上	1.5m以上
羨道幅	1.5m	1.6～1.7m	1.8～2.0m	1.8m	1.2m	1.35m	0.9m	
羨道高	1.9m			1.8～1.9m				
玄門幅	1.4m	1.5m	1.4～1.5m	1.2m	1.0m	1.1m		
玄門高	1.7m	1.9m	1.8～1.9m	1.55m				
玄門突出度	1.07	1.13	1.31	1.50	1.20	1.23		
奥壁段数	5	2	3	2	2	2		
側壁段数	5～7	4～5	4	4～5	5～6	5～7		
天井石数	4	4	3	4	3	3		

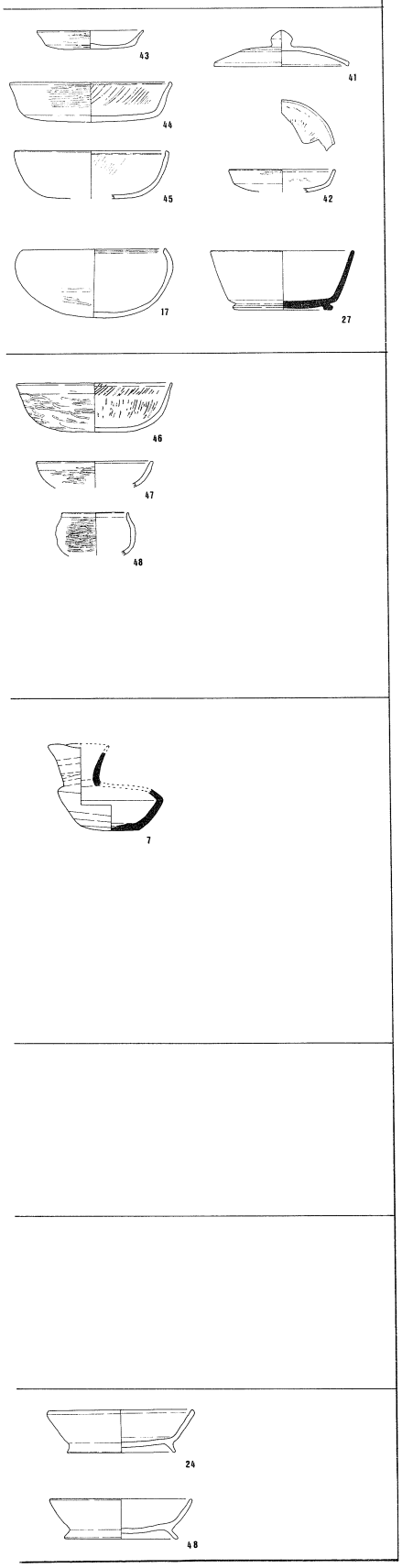
※玄門突出度は，羨道幅／玄門幅で，数値が高いほど突出している。

第4表　神高古墳群石室一覧表



第53図　神高古墳群出土遺物変遷図（縮尺 1/8）

飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）頃



第４表として石室規模等を記した一覧表を掲示した。規模を比較すると，もっとも大きいものが古宮古墳で，玄室長･高さとも優っている。次いで規模が大きいものは山野塚古墳，鬼無大塚古墳，平木１号墳で，玄室長は同じだが幅・高さから，鬼無大塚古墳，山野塚古墳，平木１号墳の順になる。他は，神高池北西古墳，平木３号墳，平木４号墳，平木２号墳の順になるが，神高池北西古墳は撹乱が著しく，玄室長は確定していない。一般的に巨大化のピークを迎えた横穴式石室は，小型化へと向かうことから，おおむね築造順を反映していると考えられるが，さらに石室構築等から詳細に検討する。

石室構築から山野塚古墳と古宮古墳を比較すると，山野塚古墳の奥壁は腰石の上に小さめの石を４段載せているが，古宮古墳の奥壁は腰石の上に腰石とほぼ同じ大きさの石を載せて２段としている。奥壁腰石は，山野塚古墳の方が古宮古墳より小さい。側壁を比較すると，山野塚古墳が５～７段で構築されており，石材も古宮古墳より小さいが，古宮古墳は４～５段で構築されている。壁面段数の減少と石材の巨大化という傾向から判断すると，山野塚古墳→古宮古墳と考えられ，古宮古墳築造時に巨大化のピークを迎えたと推測できる。

鬼無大塚古墳と古宮古墳を比較すると，鬼無大塚古墳は奥壁を腰石の上に小さめの石で３段載せているが，古宮古墳の奥壁は先述のとおり２段である。一方，側壁は，鬼無大塚古墳が４段で，古宮古墳は４～５段で構築されており，差異は少ない。奥壁の段数は鬼無大塚古墳の方が多いが，腰石は鬼無大塚古墳の方が大きく奥壁の 2/3 近くを占めていることを考慮すると，古宮古墳より鬼無大塚古墳が新しい可能性はあるが，時期差は少ないと考えられる。

平木１号墳は，奥壁が２段だが，腰石が占める割合が 3/4 以上となり，より一枚の石で奥壁を形成しようとしている。石材は，平木１号墳のものが，古宮古墳や鬼無大塚古墳のものより平坦面を石室内側に向けており，新しい傾向がうかがえる。ただし，石材の大きさは３古墳とも大差なく，次の時期に属する古墳より大きいことから，これら３古墳築造時がもっとも石材が巨大化した時期である。なお，神高池西古墳とこめ塚古墳の石材も，これら３古墳と劣らぬ大きさと考えられる。

平木３号墳は，平木１号墳の規模を縮小したものであるが，玄室幅は玄室長に比して縮小率は低い。奥壁は，平木１号墳同様に腰石が 3/4 以上を占める。石室規模の縮小と同時に石材の小型化も認められ，側壁の段数は平木１号墳より多い。

平木２号墳は，平木３号墳より石室規模が小さく，石材も小振りである。奥壁も，腰石が小さく，腰石の上にほぼ同じ大きさの石を載せている。また，玄門は突出しているが，これまでの古墳に見られた玄門立柱は認められない。

平木４号墳は，側壁基底石（腰石）の一部しか残っていないため比較は難しいが，両袖式と片袖式の違いがあるがものの，平木

3号墳とほぼ同規模である。石材の大きさも平木3号墳に近いものがあり，断定はできないが，平木3号墳と近い築造時期の可能性がある。

神高池北西古墳も，側壁基底石（腰石）の一部しか残っていない上に，奥壁と羨道がまったく不明である。玄室長は平木2～4号墳より長いが，無袖式の可能性があり比較は難しい。玄室幅は，平木3・4号墳とほぼ同じであるが，石材の大きさはやや小さい。

【出土遺物の検討】

各古墳から出土した副葬品のうち須恵器について検討し，石室の変遷との相関を検討したい。そこで，第53図のとおり，神高古墳群出土須恵器のうち古墳造営時期を示すものを掲載し，田辺編年(田辺昭三 1981)のTK209併行期，TK209～217併行期，TK217併行期の3段階に大別した。合わせて，追葬または後の祭祀に関わると考えられる須恵器・土師器も掲載した。なお，以下の遺物番号は第53図のものと同じだが，古墳単位で番号を付しているため，番号が重複しているものがある。

古宮古墳では，TK217併行期のものが比較的多く出土しているが，TK209併行期のものも出土している。15の有蓋高杯は，長脚2段透かしが3方向から穿たれており，調整も丁寧なことから，TK43併行期に遡る可能性がある。ただし，ほかにTK43併行期のものが認められず，TK209併行期でも古い時期のものとしておきたい。この高杯は，自然釉によって蓋と身が付着して離れないため，口縁端部の形態が確認できない。8の無蓋高杯も，15同様の自然釉が全面に見られ，杯部に段を有することから，15と同じ時期の可能性がある。4の杯は口縁端部が立ち上がっており，口径11.8cmを測ることから，TK209～217併行期と考えられる。1～2・25の杯蓋は，口径10cmを越える程度と縮小しており，26の杯は口縁端部の立ち上がりがわずかであり，TK217併行期と考えられる。5・6の高杯で見られる器形は，TK217併行期以降のものであり，1～2・25・26と同じ時期のものと考えられる。

鬼無大塚古墳では，TK209併行期のものが多く，TK217併行期では少なくなる。12・13の須恵器杯は，口縁端部が比較的強く立ち上がり，口径は12cm前後を測り，器高も比較的高いことから，TK209併行期と考えられる。28の有蓋高杯も同様な特徴をもち，同じ時期のものであろう。29は長脚2段透かしの高杯で，TK209併行期のものと考えられる。1・2の杯蓋の口径は10・11の杯の受け部径と近く，同じ時期のものと考えられる。10・11は，口縁部の立ち上がりが12・13より弱く，口径も11cmを超えるぐらいになっており，古宮古墳の26よりは退化しておらず，TK209～217併行期と考えられる。19の杯は，かえりの逆転した後のもので，TK217併行期のものと考えられる。

平木1号墳は，TK209およびTK217併行期のものが出土している。13の大型提瓶は，把手が退化しておらず古相を呈するが，口縁部がゆるやかに内湾して端部を丸くおさめており，TK209～217併行期のものと考えられる。12の有蓋高杯も復元口径が21cm以上と大きいが，口縁端部の立ち上がりが弱く，同じ時期のものであろう。1～3の杯蓋は，口径が10～11cmと小さく，外面天井部が未調整のものもあることから，TK217併行期のものと考えられる。5の杯は，かえりの逆転した後のもので，TK217併行期のものであろう。第53図には掲載していないが，陶棺はTK217併行期と考えられる。以前の調査報告書(高松市教委 1990)では，13の大型提瓶などから出土遺物がTK43まで遡るとしたが，今回これを修正しておきたい。

平木2号墳出土のもので，時期が明確に分かるものは出土していない。唯一4の平瓶が，体部が角張り始めており，TK217併行期のものか。

平木4号墳は，報告書(香川県教委 2003)によればTK217併行期とされている。1の杯蓋は口径13.4cmを測り，2の杯も口縁端部の立ち上がりがまだしっかりあることから，TK217併行期でも古い段階のものであろう。

神高池北西古墳は，TK209併行期が見られることは本報告書のとおりである。16は有蓋高杯の蓋で，23は長脚2段透かしをもつ無蓋高杯である。25の高杯は，杯部に段を有する。

以上，古墳ごとに出土須恵器を概観してきた。出土須恵器から見てもっとも古いものは，古宮古墳であり，鬼無大塚古墳も近い時期と考えられる。TK209併行期でも古い段階のものである。TK209併行期でも新しい段階のものが，平木1号墳と神高池北西古墳と考えられる。TK217併行期でも古い段階のものが平木4号墳で，平木2号墳はそれに続く時期のものか。なお，古宮古墳・鬼無大塚古墳・平木1号墳では，TK217併行期

まで追葬が行われており，古宮古墳・鬼無大塚古墳では２回以上，平木１号墳では１回以上の追葬が想定可能である。

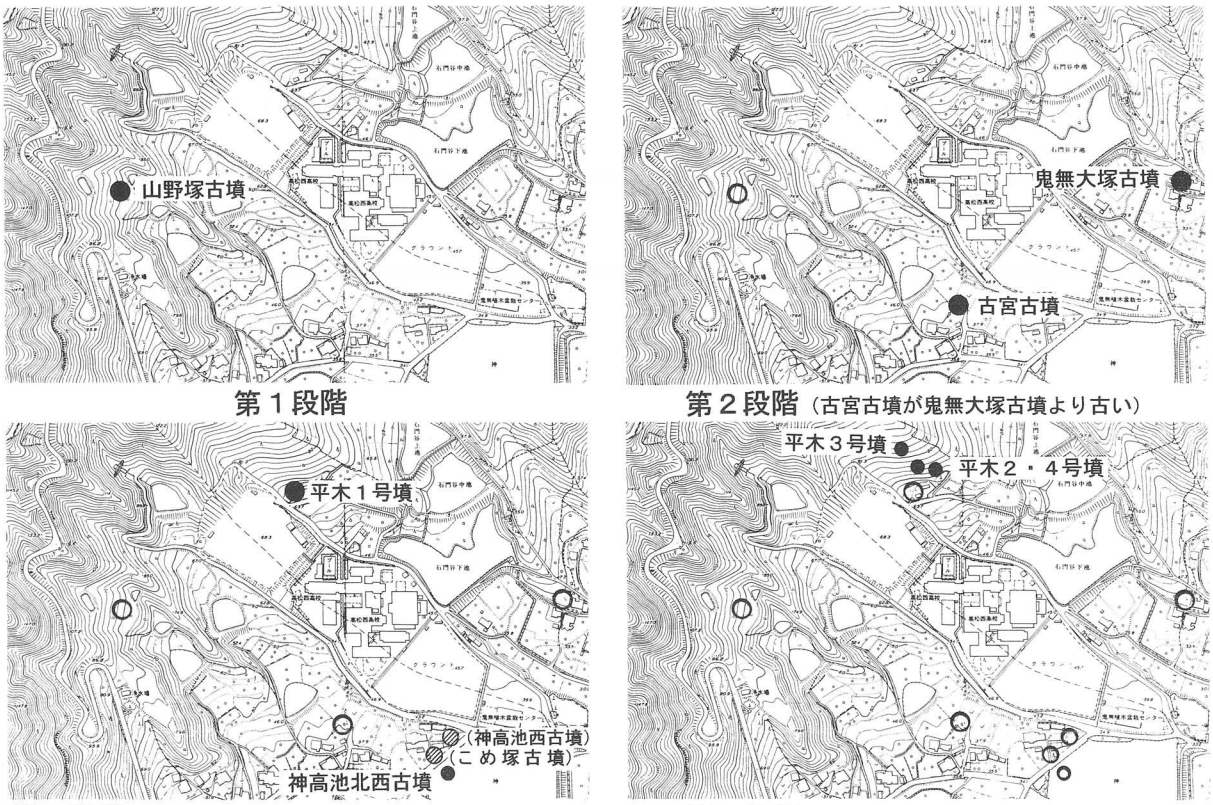
さらに，須恵器の型式から実年代を導き出した場合，研究者によって諸説はあるが，TK209併行期がおおむね７世紀第１四半期，TK217併行期がおおむね７世紀第２四半期に相当することから，６世紀末～７世紀初頭に古墳が築造され始め，７世紀前半代に築造が続き，７世紀中葉まで追葬が行われたと考えられる。

さいごに，飛鳥Ⅴ期（平城Ⅰ期）頃の暗文付土師器や須恵器が，古宮古墳・鬼無大塚古墳・平木１号墳・神高池北西古墳から出土している。７世紀末～８世紀初頭を中心とした時期のものと想定される。最後の追葬から，しばらく時間が経過しており，これらの土器も追葬に伴うものとするには難しい。しかし，石室内から出土していることから，何らかの祭祀に伴う可能性がある。

【石室および出土遺物からみた神高古墳群の変遷】

推定した石室の変遷と出土遺物から見た変遷を照合し，古墳群の変遷について検討したい。

最初に山野塚古墳が，谷奥部に築造される。出土遺物はないが，石室はもっとも古相を呈している。TK209併行期以前，TK43併行期かもしれない。次いで，谷入口近くに築造されたのが，古宮古墳である。出土遺物・石室とも古く，TK209併行期でも古い段階のものであろう。同じ頃，鬼無大塚古墳が北側の丘陵斜面に築かれる。神高池北西古墳は，次のTK209併行期でも新しい段階のもので，未調査の神高池西古墳やこめ塚古墳も神高池北西古墳とほぼ同じか古いと考えられ，古宮古墳より後のものであろう。古宮支群は，TK209併行期までで古墳築造を終えている可能性がある。神高池北西古墳と同じ頃，北側の谷奥部で平木支群の築造が始まる。まず築造されるのが，支群中もっとも大きい平木１号墳である。TK209併行期でも新しい段階のものであろう。次いで，出土遺物はないが平木３号墳が築造されたと考えられる。平木２・４号墳が最後に築かれている。TK217併行期でも古い段階である。



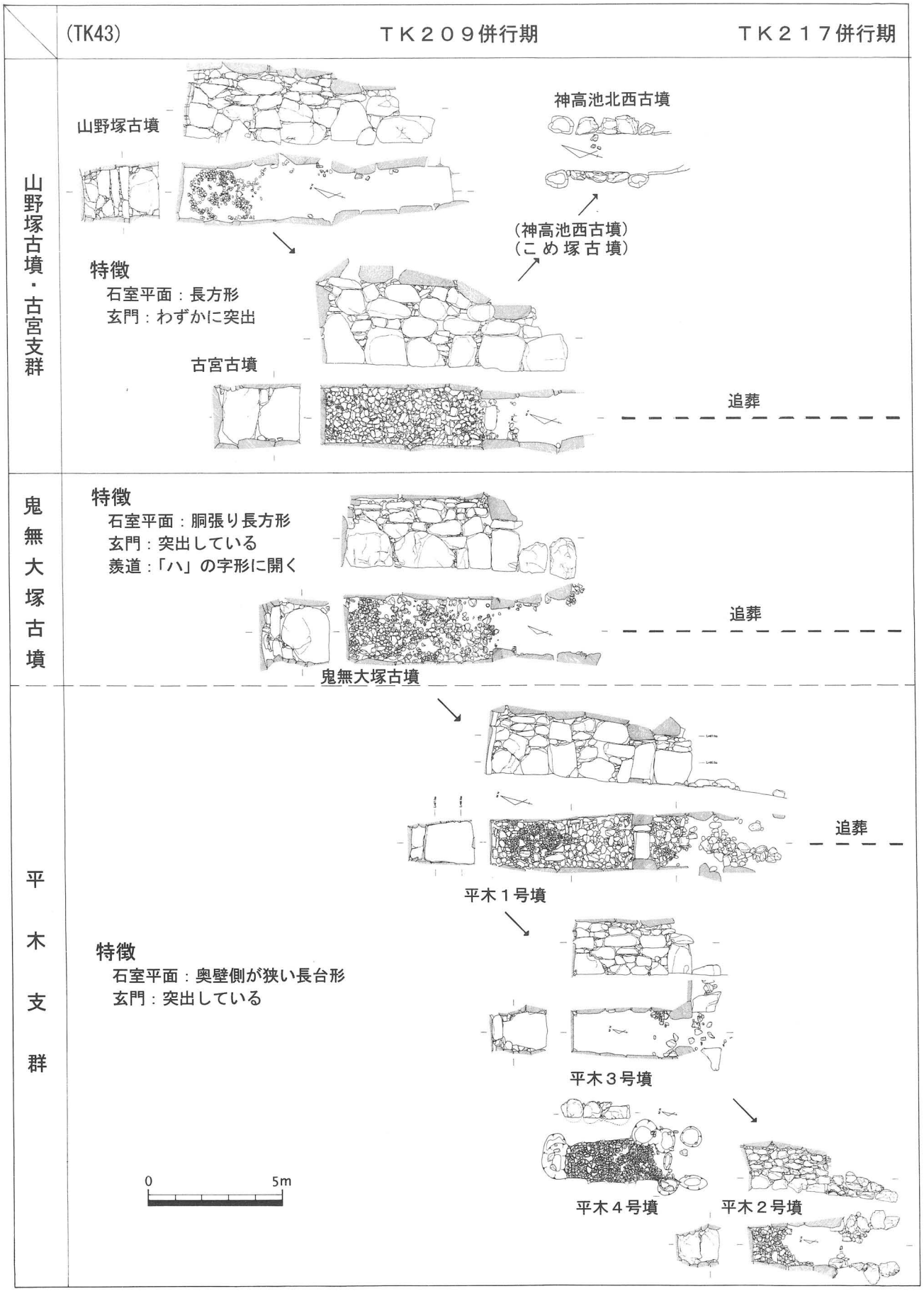
第１段階

第２段階（古宮古墳が鬼無大塚古墳より古い）

第３段階（神高池西・こめ塚古墳が神高池北西古墳より古いか）

第４段階（平木３・４号墳が平木２号墳より古い）

第54図　神高古墳群変遷図（縮尺 1/10,000）



第 55 図　神高古墳群石室変遷図 (縮尺 1/200)

【石室および出土遺物（副葬品）から見た神高古墳群の造営集団・被葬者】

石室と出土遺物（副葬品）から神高古墳群の造営集団について検討したい。

石室については，平面プランから，山野塚古墳を含む古宮支群（古宮古墳・神高池北西古墳），鬼無大塚古墳，そして平木支群（古墳群）の3グループに分かれることは前述したとおりである。このグループ分けは，地形別に分けたグループとも一致し，3つの造営集団を想定することが可能である。なお，鬼無大塚古墳と平木支群は，玄門の突出度が高いという点と，距離は離れるが同じ谷間に立地する点では共通している。

出土遺物から見た場合，副葬品の卓越性は古宮古墳が優っている。金銅装の鞍金具・雲珠といった馬具，銅製の刀装具，鉄製太刀，数多くの玉類，多量の土器が，卓越性を証明している。石室規模が古墳群中もっとも優れていると同時に，玄室天井石の一部が廂の様相を呈する特徴が県内各地の主墳クラスと共通すること(丹羽佑一 1986)も，被葬者の優位性を裏付けている。古宮支群のみならず神高古墳群中において最有力の人物が被葬者として想定される。現在のところ，当該期の高松平野西部においても，もっとも優れている。

それでは，各古墳の出土遺物を比較してみたい。鬼無大塚古墳からも，馬具として金銅装の雲珠が出土しており，古宮古墳と同じく石室規模において古墳群中ベスト3に入ると同時に，他の副葬品も豊かである。古宮古墳と同じ支群の神高池北西古墳からも，金銅装ではないが馬具として鉄製鉸具が出土している。一方，平木支群からは，馬具が出土していない。馬具副葬の有無が，古墳造営集団の性格を表しているとも考えられるが，これら馬具を副葬している古墳より平木支群が新しいことを考慮すると，時期差とも考えられる。実際，全国の古墳でも7世紀第3四半期になると馬具の副葬が極端に少なくなるという(坂本美夫 1985)。ただし，古宮古墳と同じ頃に築造され，高松平野東部に位置する久本古墳(大嶋和則 2004)は，平木1号墳と同じく石室玄門の突出が強い上に，馬具が副葬されていないことから，造営集団の性格を表す可能性も否定できない。

馬具副葬の代わりに特徴的なのは，平木1号墳から出土した須恵質の陶棺である。須恵質の陶棺は，県内において出土例が少なく特異な存在である。また，鉄斧の出土も他の古墳には見られないもので，被葬者の性格を表している可能性がある。この平木1号墳は，他の2～4号墳に比べ石室規模・副葬品とも優れており，石室・出土遺物も2～4号墳より古いことから，平木1号墳の造営を契機として，平木支群が形成されたと考えられる。この平木支群の造営集団は，鬼無大塚古墳の被葬者と何らかの関わりをもっているかもしれないが，山野塚古墳や古宮支群の造営集団とは性格が違っており，やや遅れて，新たに古墳群を形成したと考えられる。なお，平木1号墳以降は，石室の縮小化が進んでいる。

最後に，古墳を築造した氏族名であるが，坂出平野周辺の古墳と神高古墳群の石室玄門立柱の突出などが共通することから，綾氏を想定する考え(丹羽佑一 1986)もなされている。しかしながら，神高古墳群の石室平面プランは一様でないこと，玄門立柱の突出は高松平野東部でも見られること，神高古墳群が所在する香川郡に居住していた綾氏の確実な例は坂田郷であり笠居郷と離れていることを考えると，現段階では特定できない。

	山野塚古墳	古宮古墳	鬼無大塚古墳	平木1号墳	平木2号墳	平木3号墳	平木4号墳	神高池北西古墳
土器	出土遺物なし	◎	◎	○	△	出土遺物なし	△	△
装身具		金環・勾玉 ガラス小玉		金環				
武具		鉄刀 鞘金具		鉄刀				
馬具		鞍金具 雲珠・鉸具	雲珠 留具					鉸具
工具				鉄斧				
鉄釘		◎	○	○	△			△
その他				須恵質陶棺				

※　◎は出土量が多数，○は普通，△は少量

第5表　神高古墳群出土遺物比較表

11. まとめ

以上，神高古墳群の石室および出土遺物について検討してきた。そこから判明した内容を簡単に箇条書きにし，まとめとしたい。

①神高古墳群は，石室平面プランで分類すると，山野塚古墳を含む古宮支群（古宮古墳・神高池北西古墳），鬼無大塚古墳，そして平木支群（古墳群）の3グループに分かれる。このグループ分けは，地形別に分けたグループとも一致する。

②石室構造および出土遺物から，神高古墳群の変遷を検討すると，山野塚古墳→古宮古墳・鬼無大塚古墳→神高池北西古墳・平木1号墳→平木3・4号墳→平木2号墳となる。

③築造時期は，6世紀後葉にまず山野塚古墳が築造され，7世紀前半代に相次いで築造されたと考えられる。そして，7世紀中葉頃まで追葬が行われたと考えられる。

④古宮古墳が，石室規模・副葬品から，古墳群中もっとも卓越している。この卓越性は，同時期の高松平野西部においても通用する。

第Ⅴ章の主要参考文献

【神高古墳群報告書関係】

香川県教育委員会 2003『香川県立高松西高等学校第2体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　平木古墳群』

香川大学教育学部歴史学研究室 1983『平木二号墳現地説明会資料』

香川大学教育学部歴史学研究室 1984「鬼無町平木古墳群」『文化高松』第6号　高松市文化協会発行

香川大学教育学部歴史学研究室 1985『古宮権現古墳現地説明会資料』

高松市教育委員会 1990『平木1号墳試掘調査報告書』

高松市教育委員会 2002『高松市内遺跡発掘調査概報―平成13年度国庫補助事業―』

丹羽佑一 1985「古宮権現神社古墳発掘調査速報」『勝賀城跡保存会だより』　勝賀城跡保存会発行

丹羽佑一・藤井雄三 1988『遺跡が語りかける　高松の古代文化』　高松市立図書館発行

【その他報告書および研究論文関係】

大久保徹也 1995「讃岐」『全国古墳編年集成』　石野博信編　雄山閣出版発行

大嶋和則 2004『久本古墳』　高松市教育委員会発行

河上邦彦 1995「大和の横穴式石室の編年と諸問題」『後・終末期古墳の研究』　雄山閣出版発行

國木健司 1995「香川の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』　古代学協会四国支部発行

坂本美夫 1985『馬具』考古学ライブラリー34　ニュー・サイエンス社発行

佐藤竜馬 1997「7世紀における須恵器生産の展開」『研究紀要』Ⅴ　(財)香川県埋蔵文化財調査センター発行

白石太一郎 1966「畿内の大型群集墳に関する一思考」『古代学研究』第42・43合併号

白石太一郎 1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集　第一法規出版発行

杉山尚人 1987「陶棺の研究」『考古学研究』33-4　考古学研究会発行

田辺昭三 1981『須恵器大成』　角川書店発行

土生田純之 1992「横穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』7　石野博信ほか編 雄山閣出版発行

中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究』　柏書房発行

西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』　真陽社発行

丹羽佑一ほか 1985『川北1号墳』　引田町教育委員会発行

丹羽佑一 1986「笠居郷の古墳」『かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書』　高松市教育委員会発行

丹羽佑一ほか 1989『椋の木古墳・大石北谷古墳』　長尾町教育委員会発行

廣瀬常雄 1993「香川県」『季刊考古学』第45号　雄山閣出版発行

山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究―中・四国編―』　1984年度文部省科学研究費印刷

第6表　神高古墳群出土遺物観察表

【古宮古墳】

※法量の()は，残存値を表す。

挿図番号	報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
24	1	須恵器 蓋	10.3		3.6	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰10Y5/1 内面:灰10Y5/1	密	
24	2	須恵器 蓋	10.4		3.4	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	
24	3	須恵器 蓋	12.0		2.9	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N5/	密	
24	4	須恵器 杯	11.8	3.4	3.8	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	
24	5	須恵器 台付碗	9.4	7.0	7.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰黄2.5Y7/2	密	
24	6	須恵器 台付碗	10.6	7.8	7.5	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y7/1	密	
24	7	須恵器 高杯	12.7	9.0	10.0	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ？ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	やや密	
24	8	須恵器 高杯	10.2	7.9	11.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y7/1	密	杯部下半:突帯文3条 脚部中位:沈線1条
24	9	須恵器 脚部		9.4	(3.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰7.5Y6/1	密	脚部中位:沈線1条
24	10	須恵器 脚部		11.0	(3.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	
24	11	須恵器 平瓶	6.0		13.3	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰7.5Y6/1	密	頸部中位:沈線1条 体部外面:自然釉
24	12	須恵器 平瓶	8.0	3.6		外面:回転ナデ，ナデ 内面:回転ナデ	釉:オリーブ黒7.5Y3/2 外面:灰白7.5Y7/1 内面:灰白N7/	密	口縁部内面:自然釉 口縁～体部上半外面:自然釉
24	13	須恵器 脚付広口壷	13.4	5.5	18.0	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:オリーブ黒7.5Y3/2	密	口縁部:波状文1条，沈線1条 頸部:波状文1条 体部:波状文2条，沈線3条 内外面:自然釉
24	14	須恵器 脚付長頸壷	7.5		(18.7)	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y5/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	頸部中位:沈線4条，列点文1条 体部中位:沈線3条，列点文1条 脚部円孔:三ヶ所
24	15	須恵器 有蓋高杯		15.0	28.5	外面蓋:回転ナデ 杯部:回転ナデ，回転ヘラケズリ 脚部:回転ナデ 内面脚部:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰5Y7/1	密	蓋:沈線4条 脚部:沈線2条 方向透かし2段×3方向 蓋外面:自然釉
24	16	須恵器 長頸壷	6.0		(13.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ，絞り痕	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰N7/1	密	頸部中位:沈線2条 頸部下位:沈線1条 頸部外面:自然釉
24	17	土師質 鉢	16.7	8.6	8.2	外面:ナデ，ヘラミガキ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	2mm以下の石英・長石・1mm以下の雲母を含む	
24	18	土師器 甕	16.0		(10.8)	外面:ヨコナデ，ナデ 内面:ヨコナデ，ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	2mm以下の石英・長石を含む	
24	19	土師質 脚付直口壷	6.0	6.2	15.6	外面:ハケメ，指頭圧痕 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石を含む	
24	20	土師質土器 把手	残存長 4.4			外面:ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石を少々含む	穿孔一ヶ所
24	21	土師器 高杯	8.4	7.5	8.8	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
24	22	土師器 高杯				外面脚部:ナデ 内面脚部:ヘラケズリ，ヨコナデ	外面:橙5YR7/6 内面:橙5YR7/6	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
24	23	土師器 高杯		6.6	(5.4)	外面脚部:ナデ 内面脚部:ヘラケズリ	外面:橙7.5YR7/6 内面:橙7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
24	24	土師器 高杯		6.0	5.9	外面脚部:ナデ 内面脚部:摩滅のため不明	外面:橙2.5YR6/6 内面:橙2.5YR6/6	2mm以下の石英・長石を含む	
25	25	須恵器 蓋	10.7		3.0	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰10Y5/1	密	
25	26	須恵器 杯	9.8	3.1	3.2	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y7/1	密	
25	27	須恵器 杯	16.6	11.2	6.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y7/1	密	
25	28	須恵器 杯		11.6	(3.0)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:灰黄2.5Y7/2	密	
25	29	須恵器 脚付長頸壷	7.8	10.5	27.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	頸体部境:突帯1条 体部中位:沈線2条，列点文 脚部:4方向から方向透かし
25	30	須恵器 脚付長頸壷	8.25	8.8	18.0	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:青灰5B5/1 内面:赤灰5R5/1	密	頸部中位:沈線2条 体部中位:沈線2条 脚部:円孔6ヶ所
25	31	須恵器 広口壷	11.2		(19.9)	外面:回転ナデ，ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白7.5Y7/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	頸～体部上半・頸部内面:自然釉 体部下半:他の土器の付着痕 体部上位:沈線2条
25	32	須恵器 長頸壷		10.3	(12.7)	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰N6/	密	体部上半外面:自然釉
25	33	須恵器 片口壷	16.2		25.4	外面口縁～体部上半:回転ナデ 体部下半:タタキ後，板ナデ 内面:回転ナデ，ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰白5Y7/1	密	体部外面:沈線3条 列点文2条 体部外面:自然釉
25	34	須恵器 壷		13.0	7.0	外面体部:タタキ 底部:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰オリーブ5Y3/2 内面:灰白5Y7/1	密	外面:自然釉
25	35	須恵器 壷	12.0		(5.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰黄2.5Y6/2 釉:灰オリーブ7.5Y4/2	密	自然釉
25	36	須恵器 長頸壷	9.2～ 10.0		(8.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	頸部:沈線2条
25	37	須恵器 長頸壺	6.8		(5.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	頸部:沈線1条
25	38	須恵器 横瓶	11.5	33.6		外面口縁部:回転ナデ 体部:回転ナデ 内面口縁部:回転ナデ 体部:同心円分	外面:灰5Y4/1 内面:灰N5/	密	外面:自然釉
26	39	須恵器 甕			(24.0)	外面:格子目タタキ痕 内面:ナデ	外面:灰5Y5/1 内面:灰5Y6/1	密	
26	40	須恵器 甕	19.2		(23.4)	外面口縁部:ヨコナデ 頸部:ヘラ状圧痕 体部:タタキ痕 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ，接合痕	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:黄灰2.5Y5/1	密	
26	41	土師器 蓋	15.6	宝珠径 2.4	4.2	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/1	1mm以下の石英・長石を少々含む	
26	42	土師器 杯	12.4		(2.5)	外面:ヨコナデ，ヘラミガキ 内面:ヨコナデ，ナデ	外面:橙2.5YR6/6 内面:橙2.5YR6/6	1mm以下の石英・長石を少々含む	内面:暗文
26	43	土師器 杯	12.2	10.0	2.2	外面:ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ 内面:摩滅のため不明	外面:橙2.5YR6/6 内面:橙2.5YR6/6	1mm以下の石英・長石を少々含む	
26	44	土師器 杯	18.8	15.7	4.6	外面:ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ 内面:ナデ，ヘラミガキ	外面:橙5YR6/8 内面:明赤褐5YR5/6	密	内面:暗文
26	45	土師器 杯	17.6		5.6	外面:ヨコナデ，ナデ 内面:ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ	外面:橙2.5YR6/8 内面:橙5YR6/8	1mm以下の石英・長石を含む	内面:暗文

挿図番号	報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
27	46	弥生土器 壺		9.8	(7.7)	外面:ハケメ 内面:指頭圧痕, ナデ	外面:明褐7.5YR5/6 内面:明褐7.5YR5/6	5mm以下の石英・長石を含む	外面:黒斑
27	47	土師質土器 皿	8.0	6.6	1.4	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む	
27	48	土師質土器 皿	8.2	5.4	1.1	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切, 板目 内面:回転ナデ	外面:にぶい橙2.5YR6/3 内面:灰黄2.5Y7/2	1mm以下の石英・長石・金雲母を少々含む	
27	49	土師質土器 皿	8.4	6.1	1.4	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄2.5Y6/3 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
27	50	土師質土器 脚付皿	9.2		(1.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:浅黄橙7.5YR8/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
27	51	土師質土器 脚部		8.8	(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄2.5Y7/3 内面:浅黄2.5Y7/3	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
27	52	土師質土器 脚部		8.0	(4.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:浅黄橙10YR8/4	1mm以下の石英・長石を含む	
27	53	瓦器 椀			(4.0)	外面:指頭圧痕, ヘラミガキ 内面:ナデ, ヘラミガキ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	密	
27	54	土師質土器 片口こね鉢	35.0	16.0	13.0	外面口縁部:ヨコナデ 体部:格子目タタキ後ナデ 底部:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ, ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石を少々含む	口縁端部:沈線1条 体部内外面:黒斑
28	55	瓦器 皿	9.1	2.65	1.95	外面:ヨコナデ, 指頭圧痕 内面:ナデ, ヘラミガキ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
28	56	土師質土器 皿		4.0	1.8	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい橙10YR7/3 内面:にぶい橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
28	57	土師質土器 皿		6.3	1.6	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
28	58	土師器土器 皿	7.8	4.2	1.2	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
28	59	土師質土器 皿	8.0	5.2	1.5	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切, 板目 内面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石を少々含む	
28	60	土師質土器 皿	8.0		(1.3)	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	
28	61	土師質土器 皿	9.1	5.8	1.4	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	底部:黒斑
28	62	土師質土器 皿	8.4	6.4	1.4	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR6/3	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
28	63	土師質土器 皿	9.0	7.0	1.15	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:淡黄2.5Y8/3 内面:淡黄2.5Y8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
28	64	土師質土器 皿	11.4	7.0	2.1	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切, 板目 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
28	65	土師質土器 皿	10.8		(2.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
28	66	土師質土器 椀	15.6	5.2	4.75	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	2mm以下の石英・長石を含む	
28	67	土師質土器 脚部		6.4	(3.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	密	
28	68	土師質土器 甕	36.2		(12.4)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧痕, ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/3 内面:にぶい橙7.5YR6/3	1mm以下の石英・長石・金雲母を少々含む	
28	69	土師質土器 釜	24.2		(13.8)	外面口縁部:ヨコナデ, 指頭圧痕 体部:格子目タタキ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
29	1	金環	直径 3.0		厚さ 0.9			鉄地金銅張	
29	2	金環	直径 3.1		厚さ 0.8			鉄地金銅張	
29	3	金環	直径 2.7		厚さ 0.8			鉄地金銅張	
29	4	ガラス小玉	直径 1.1		高さ 1.1		外面:暗緑灰10G3/1		
29	5	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.2		外面:緑灰10GY6/1		
29	6	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.0		外面:暗青灰5PB4/1		
29	7	ガラス小玉	直径 1.0		高さ 1.0		外面:暗青灰10BG3/1		
29	8	ガラス小玉	直径 1.0		高さ 0.8		外面:オリーブ灰5GY3/1		
29	9	ガラス小玉	直径 1.3		高さ 1.0		外面:暗青灰5BG3/1		
29	10	ガラス小玉	直径 1.1		高さ 1.1		外面:暗青灰10BG3/1		
29	11	ガラス小玉	直径 1.3		高さ 1.1		外面:暗青灰10BG3/1		
29	12	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.1		外面:暗緑灰10G3/1		
29	13	ガラス小玉	直径 1.3		高さ 1.1		外面:暗青灰5BG3/1		
29	14	ガラス小玉	直径 1.0		高さ 0.8		外面:暗青灰5PB3/1		
29	15	ガラス小玉	直径 0.8		高さ 0.6		外面:灰白7.5Y8/1		
29	16	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.0		外面:暗青灰10BG3/1		
29	17	ガラス小玉	直径 1.1		高さ 1.0		外面:明青灰10BG4/1		
29	18	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.1		外面:暗青灰10BG3/1		
29	19	ガラス小玉	直径 1.0		高さ 0.7		外面:オリーブ灰10Y5/2		
29	20	ガラス小玉	直径 0.8		高さ 0.5		外面:灰白10Y8/1		
29	21	ガラス小玉	直径 0.9		高さ 0.6		外面:灰白2.5Y8/2		
29	22	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.0		外面:暗緑灰10GY4/1		
29	23	ガラス小玉	直径 0.8		高さ 0.6		外面:灰白7.5Y8/2		
29	24	ガラス小玉	直径 0.9		高さ 0.6		外面:灰白7.5Y8/2		
29	25	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.1		外面:暗緑灰10G4/1		
29	26	ガラス小玉	直径 0.8		高さ 0.6		外面:暗緑灰10G4/1		
29	27	ガラス小玉	直径 0.9		高さ 0.6		外面:灰白10Y8/1		
29	28	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.1		外面:灰白N8/		

挿図番号	報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
29	29	ガラス小玉	直径 0.8		高さ 0.5		外面:暗緑灰10G4/1		
29	30	ガラス小玉	直径 1.2		高さ 1.1		外面:明青灰10BG4/1		
29	31	ガラス小玉	直径 1.1		高さ 0.9		外面:灰白5Y8/2		
29	32	鞘金具	残存高 1.8	残存幅 1.7	厚さ 0.9			銅	
29	33	鞘金具	残存高 1.3	残存幅 1.5	厚さ 0.7			銅	
29	34	鞘金具	残存高 1.5	残存幅 1.8	厚さ 0.7			銅	
29	35	鞘金具	長径 3.3	短径 2.1	厚さ 0.5			銅	
29	36	小刃?	長さ 5.2	幅 1.5	厚さ 0.5			鉄	
29	37	鉄刀	長さ 21.6	幅 5.6	厚さ 1.6			鉄	
30	38	鞍金具	残存幅 5.0～8.9	高さ 1.8～	厚さ 0.3			鉄地金銅張	
30	39	鞍金具	残存幅 13.3	残存高 4.8	厚さ 1.0			鉄地金銅張	
30	40	鞍金具	残存幅 1.2～9.5	高さ 0.7	厚さ 0.4			鉄地金銅張	
30	41	銅製品	直径 2.3		厚さ 0.4			銅	
30	42	雲珠			(1.8)			鉄地金銅張	内面に,別の鉄器が付着
30	43	鉄製品	長さ 3.3	幅 1.8	厚さ 0.5			鉄	
30	44	鉄製品	直径 2.4		厚さ 0.3			鉄	
30	45	鉸具	長さ 8.0	幅 5.8	厚さ 0.9			鉄	
30	46	鉸具	長さ 6.9	幅 4.5	厚さ 0.5			鉄	
31	47	鉄釘	残存長 15.2	幅 0.9				鉄	
31	48	鉄釘	残存長 4.4	幅 0.6				鉄	
31	49	鉄釘	残存長 2.7	幅 0.8				鉄	
31	50	鉄釘	残存長 6.4	幅 0.6				鉄	
31	51	鉄釘	残存長 5.6	幅 0.6				鉄	
31	52	鉄釘	残存長 4.0	幅 0.7				鉄	
31	53	鉄釘	残存長 3.8	幅 0.5				鉄	
31	54	鉄釘	残存長 5.7	幅 0.8				鉄	
31	55	鉄釘	残存長 6.2	幅 0.5				鉄	
31	56	鉄釘	残存長 3.9	幅 0.5				鉄	
31	57	鉄釘	残存長 3.8	幅 0.5				鉄	
31	58	鉄釘	残存長 5.6	幅 0.8				鉄	
31	59	鉄釘	残存長 7.0	幅 0.5				鉄	
31	60	鉄釘	残存長 0.5	幅 0.4				鉄	
31	61	鉄釘	残存長 2.1	幅 0.4				鉄	
31	62	鉄釘	残存長 4.3	幅 0.5				鉄	
31	63	鉄釘	残存長 2.6	幅 0.7				鉄	
31	64	鉄釘	残存長 3.4	幅 0.8				鉄	
31	65	鉄釘	残存長 3.3	幅 0.6				鉄	
31	66	鉄釘	残存長 3.0	幅 0.8				鉄	
31	67	鉄釘	残存長 4.0	幅 0.6				鉄	
31	68	鉄釘	残存長 3.0	幅 0.5				鉄	
31	69	鉄釘	残存長 3.6	幅 0.5				鉄	
31	70	鉄釘	残存長 2.5	幅 0.3				鉄	
31	71	鉄釘	残存長 8.6	幅 0.5				鉄	
31	72	鉄釘	残存長 6.3	幅 0.5				鉄	
31	73	鉄釘	残存長 9.3	幅 0.5				鉄	
31	74	鉄釘	残存長 9.5	幅 0.5				鉄	
31	75	鉄釘	残存長 12.1	幅 0.7				鉄	
31	76	鉄釘	残存長 8.0	幅 0.5				鉄	
31	77	鉄釘	残存長 3.2	幅 0.6				鉄	
31	78	鉄釘	残存長 3.2	幅 0.6				鉄	
31	79	鉄釘	残存長 4.7	幅 0.7				鉄	
31	80	鉄釘	残存長 4.3	幅 0.5				鉄	
32	81	鉄釘	残存長 1.8	幅 0.7				鉄	
32	82	鉄釘	残存長 6.6	幅 0.5				鉄	
32	83	鉄釘	残存長 5.6	幅 0.5				鉄	

挿図番号	報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
32	84	鉄釘	残存長 4.0	幅 0.5				鉄	
32	85	鉄釘	残存長 3.7	幅 0.5				鉄	
32	86	鉄釘	残存長 4.6	幅 0.5				鉄	
32	87	鉄釘	残存長 3.4	幅 0.6				鉄	
32	88	鉄釘	残存長 2.8	幅 0.6				鉄	
32	89	鉄釘	残存長 1.2	幅 0.5				鉄	
32	90	鉄釘	残存長 2.2	幅 0.6				鉄	
32	91	鉄釘	残存長 2.9	幅 0.6				鉄	
32	92	鉄釘	残存長 2.5	幅 0.6				鉄	
32	93	鉄釘	残存長 2.8	幅 0.4				鉄	
33	94	鉄釘	残存長 1.6	幅 0.6				鉄	
33	95	鉄釘	残存長 4.4	幅 0.6				鉄	
33	96	鉄釘	残存長 2.4	幅 0.6				鉄	
33	97	鉄釘	残存長 3.2	幅 0.6				鉄	
33	98	勾玉	長さ 1.4	幅 0.7	厚さ 0.6			ヒスイ？	

【鬼無大塚古墳】

※法量の()は，残存値を表す。

図版番号	報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
36	1	須恵器 蓋	12.8		4.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白N7/	密	
36	2	須恵器 蓋	13.4		3.8	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	
36	3	須恵器 蓋	13.8		3.4	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白7.5Y8/1	密	
36	4	須恵器 蓋	13.4		(2.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	密	
36	5	須恵器 蓋	14.4		(3.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
36	6	須恵器 蓋	14.3		(1.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N5Y6/1	密	
36	7	須恵器 蓋	14.6		(0.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	
36	8	須恵器 蓋	17.1		3.2	外面:回転ヘラケズリ，回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	
36	9	須恵器 蓋			(2.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰7.5Y5/1	密	
36	10	須恵器 杯	11.2	6.8	3.4	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR7/1 内面:にぶい黄橙10YR7/2	密	
36	11	須恵器 杯身	11.5		3.7	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	
36	12	須恵器 杯	11.8	2.0	5.2	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰褐7.5YR5/2	密	
36	13	須恵器 杯	12.0	3.4	4.0	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰赤2.5YR6/2 内面:黄灰2.5Y5/1	密	
36	14	須恵器 杯	10.5		(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
36	15	須恵器 杯	11.2		2.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
36	16	須恵器 杯	12.4		(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰白N7/	密	
36	17	須恵器 杯	12.6		(2.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白7.5Y8/1	密	
36	18	須恵器 杯	14.0		(2.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰N6/	密	
36	19	須恵器 杯	11.6	6.5	3.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:緑灰10G5/1	密	
36	20	須恵器 杯	8.5		3.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
36	21	須恵器 杯	13.2	8.8	3.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰5Y5/1	密	
36	22	須恵器 杯		7.8	(2.3)	外面:回転ナデ(底部未調整) 内面:回転ナデ，一定方向のナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	
36	23	須恵器 皿	14.1	10.6	1.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
36	24	須恵器 皿	16.9	14.6	2.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y7/1	密	
36	25	須恵器 高杯	9.7	7.0	6.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:暗灰N3/ 内面:灰N5/	密	脚部外面:凹線1条
36	26	須恵器 高杯	12.6	8.8	7.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白10Y7/1	密	
36	27	須恵器 高杯	12.6	11.8	13.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	
36	28	須恵器 高杯	13.3		(4.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	
36	29	須恵器 高杯			(6.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ，ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N6/	密	脚部:透かし穴2方向 脚部外面:凹線2条
36	30	須恵器 高杯		9.2	0.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰N6/	密	
36	31	須恵器 高杯		13.2	(1.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
36	32	須恵器 高杯		13.8	(2.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y5/1 内面:灰5Y6/1	密	
36	33	須恵器 高杯		14.6	(3.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
36	34	須恵器 台付広口壺	19.2	18.5	28.0	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5N/ 内面:オリーブ灰10Y4/2	密	頸部外面:沈線1条 体部外面:沈線2条 脚部外面:突帯3条 脚部:円孔6ヶ所(推定) 内外面:自然釉

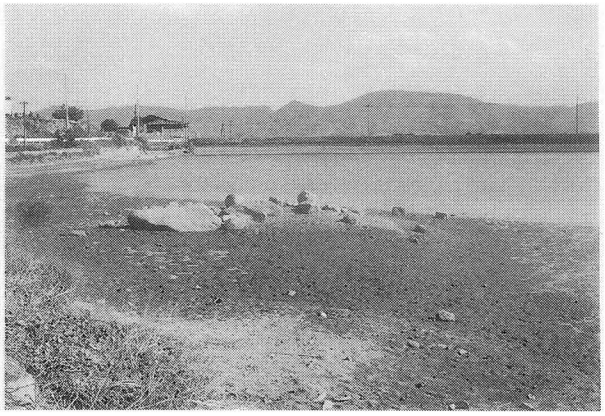
挿図番号	報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
36	35	須恵器 広口壺	13.9		(24.0)	外面:回転ナデ, カキ目, 平行叩き痕 内面:回転ナデ, 同心円文当て具痕, ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	口縁部外面:×印の刻目文 頸部外面:縦方向の直線文 体部外面:沈線2条間に刻目文 外面:自然釉
37	36	須恵器 広口壺	9.2		15.2	外面:回転ナデ, カキ目, 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ, 不定方向のナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	密	体部外面:沈線1条
37	37	須恵器 壺			(10.0)	外面:回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰白N7/	密	体部外面:沈線3条間に刻目文2段
37	38	須恵器 壺		8.8	(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5GY8/1 内面:灰7.5Y4/1	密	脚部外面:突帯1条
37	39	須恵器 壺		13.0	(3.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	脚部外面:突帯1条
37	40	須恵器 壺		23.4	(4.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	外面:貼付(?)突帯
37	41	須恵器 長頸壺	8.4		(7.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指頭圧痕	外面:灰N6/ 内面:灰白N7/	密	
37	42	須恵器 はそう	10.8		(2.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰白N7/	密	
37	43	須恵器 甕	24.8		(5.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
37	44	須恵器 甕			(7.2)	外面:格子目叩き痕 内面:同じ円文当て具痕	外面:灰白7.5Y7/1 内面:灰白N7/	密	
37	45	須恵器 甕			(9.9)	外面:格子目叩き痕 内面:ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰N6/	密	
37	46	土師器 杯	18.0	8.9	5.7	外面:ヨコナデ, ナデ, ヘラミガキ 内面:ヨコナデ, ナデ	外面:橙5YR6/8 内面:橙5YR6/8	1mm以下の石英・長石を含む	口縁～体部内面:暗文2段
37	47	土師器 杯	13.4		3.1	外面:ヘラミガキ 内面:摩滅のため調整不明	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR7/6	1mm以下の石英・長石を含む	
37	48	土師器 小形壺	7.6		(5.1)	外面:ヨコナデ, ヘラミガキ 内面:ヨコナデ	外面:明赤褐2.5YR5/6 内面:橙2.5YR6/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
38	49	須恵器 高杯		10.8	(3.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	脚部外面:凹線1条
38	50	須恵器 高杯		13.2	(1.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	
39	51	須恵器 椀	16.8		4.6	外面:回転ナデ(一部未調整) 内面:ナデ, ヘラミガキ	外面:灰白2.5Y7/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	
39	52	黒色土器A類 椀	12.8		(3.1)	外面:摩滅のため調整不明 内面:ヘラミガキ	外面:灰白5Y8/2 内面:黒5Y2/1	1mm以下の石英・長石を含む	
39	53	瓦器 皿	10.0	5.8	2.1	外面:ナデ 内面:ナデ, ヘラミガキ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
39	54	瓦器 椀		5.4	(1.1)	外面:摩滅のため不明 内面:ヘラミガキ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
39	55	土師質土器 椀		7.8	(2.5)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙5YR7/4 内面:にぶい橙5YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
39	56	土師質土器 椀			(1.9)	外面:摩滅のため調整不明 内面:摩滅のため調整不明	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙10YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
39	57	土師質土器 皿	8.0	5.2	1.1	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白7.5YR8/2 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
39	58	土師質土器 皿	9.0	6.5	1.4	外面:回転ナデ, 回転ヘラ切 内面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙7.5YR8/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
39	59	土師質土器 皿	9.6	7.6	(1.5)	外面:回転ナデ, 回転糸切 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白10YR7/1	1mm以下の石英・長石を含む	
39	60	土師器 甕	3.1		(7.0)	外面:ヨコナデ, ハケメ, 指頭圧痕 内面:ハケメ, 指頭圧痕	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
39	61	弥生土器 底部		6.0	(4.7)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
40	62	雲珠	本体径 6.7 本体高 2.4	留具幅 2.5 留具長 1.9	摘み径 1.1 摘み高 0.8			鉄地金銅張	
40	63	留具	長さ 3.2	幅 2.2	厚さ 0.5			鉄地金銅張	
40	64	鉄製品	長さ 3.4	幅 0.7	厚さ 0.6				
40	65	鉄製品	長さ 2.5	幅 0.6	厚さ 0.5				
40	66	鉄製品	長さ 2.8	幅 0.7	厚さ 0.6				
40	67	鉄製品	長さ 3.0	幅 0.7	厚さ 0.5				
40	68	鉄製品	長さ 0.8	幅 0.7	厚さ 0.5				
40	69	鉄製品	長さ 2.1	幅 0.7	厚さ 0.3				
40	70	鉄製品	長さ 1.7	幅 0.7	厚さ 0.3				
40	71	鉄製品	長さ 1.8	幅 0.7	厚さ 0.4				
40	72	鉄製品	長さ 3.8	幅 1.8	厚さ 0.5				
40	73	鉄釘	長さ 6.9	幅 1.1	厚さ 0.8				
40	74	鉄釘	長さ 4.7	幅 0.7	厚さ 0.6				
40	75	鉄製品	長さ 4.2	幅 1.3	厚さ 0.8				
40	76	鉄製品	長さ 5.2	幅 1.3	厚さ 0.8				
40	77	鉄製品	長さ 2.9	幅 1.4	厚さ 0.3				

【平木2号墳】

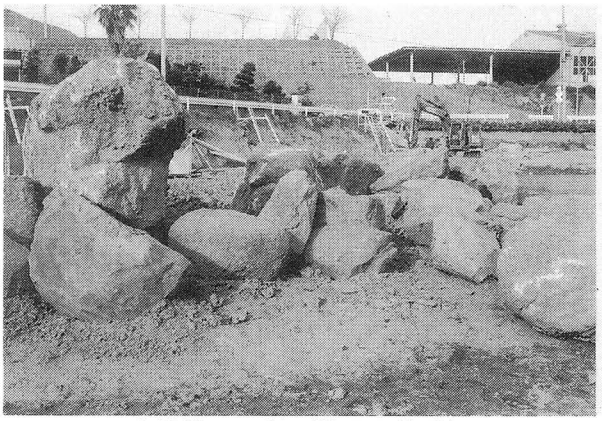
※法量の()は, 残存値を表す。

図版番号	報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
48	1	須恵器 台付長頸壺	5.8	8.6	19.8				頸部外面:凹線2条 体部外面:凹線2条
48	2	須恵器 台付長頸壺	5.9	9.9	24.1	外面:回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 格子目叩き痕 内面:回転ナデ	外面:オリーブ黒5Y3/1 内面:灰5Y4/1	密	頸部外面:凹線1条, 突帯1条 体部外面:凹線2条
48	3	須恵器 甕	15.0		27.2	外面:回転ナデ, 平行叩き痕, カキ目 内面:回転ナデ, 同心円文当て具痕	外面:灰白7.5Y7/1 内面:灰白5Y8/1	密	
48	4	須恵器 平瓶	5.8	5.7	13.0				

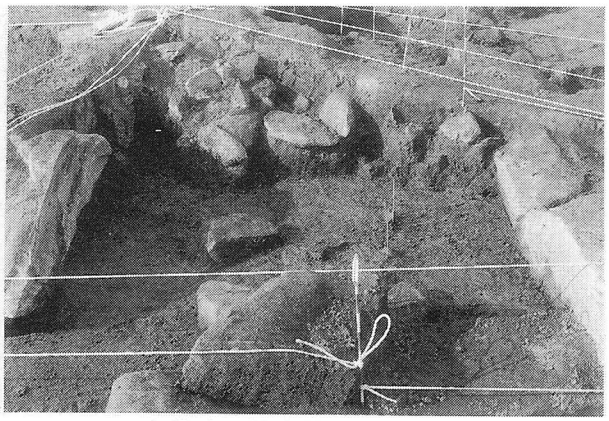
1　神高池北～西岸



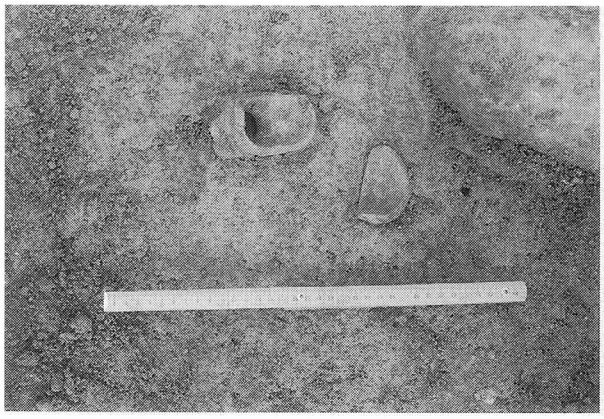
2　神高池北西古墳遠景（発掘前）



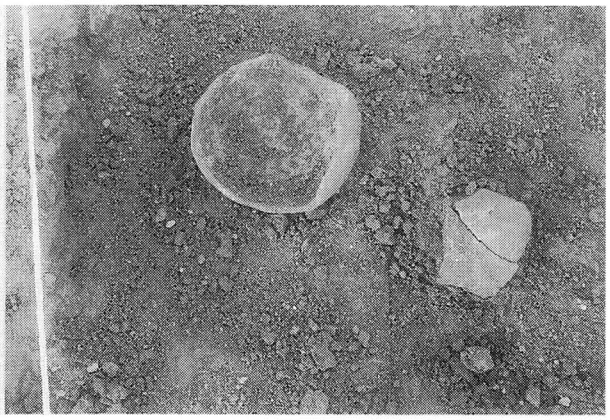
3　古墳使用石材（散乱を集積）



4　石室基底石検出状況

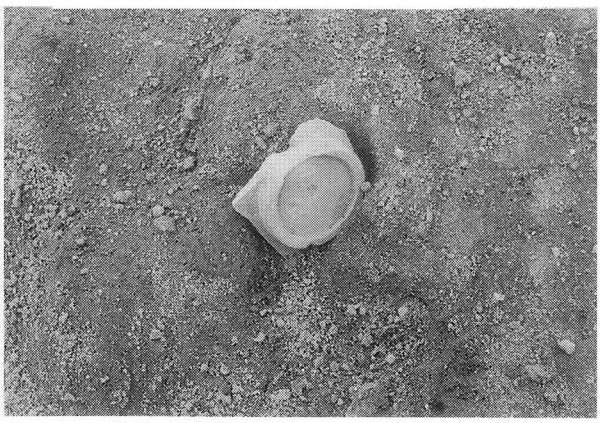


5　遺物出土状況



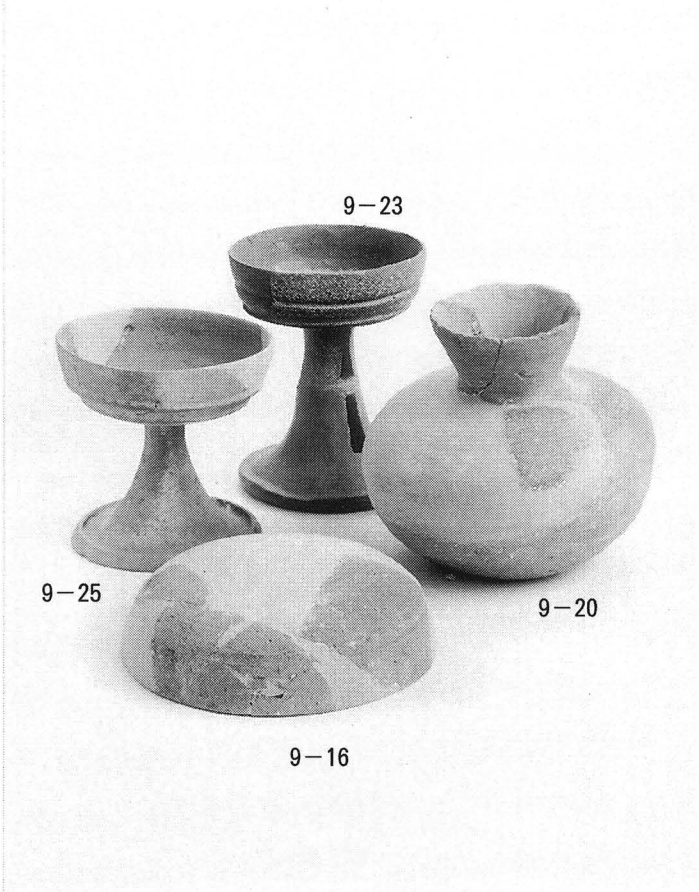
6　遺物出土状況

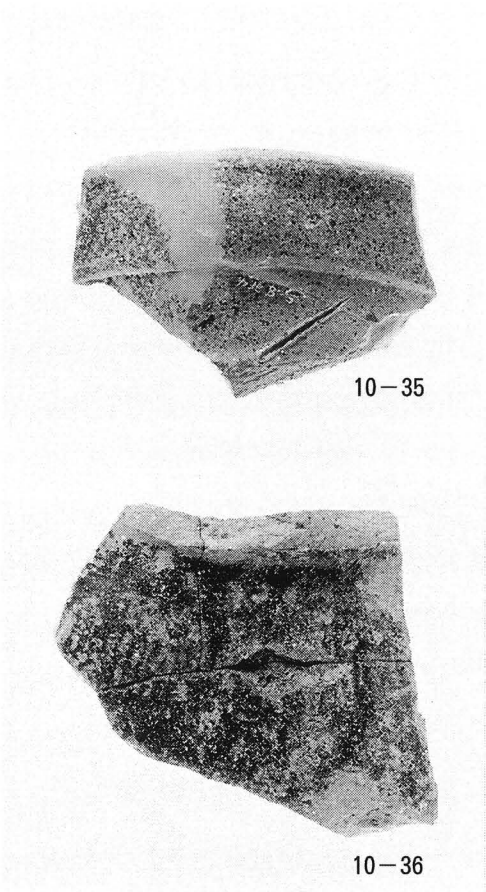
7　遺物出土状況



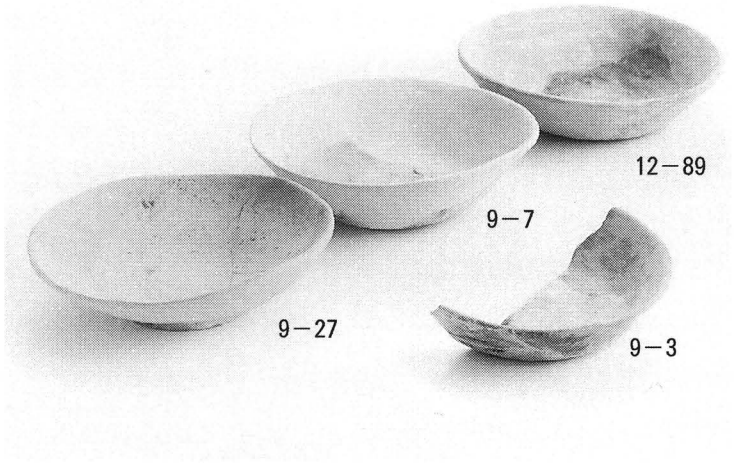
8　遺物出土状況

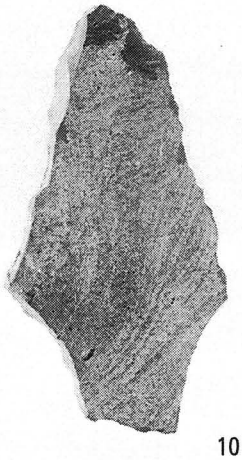
図版2　神高池北西古墳　出土遺物①

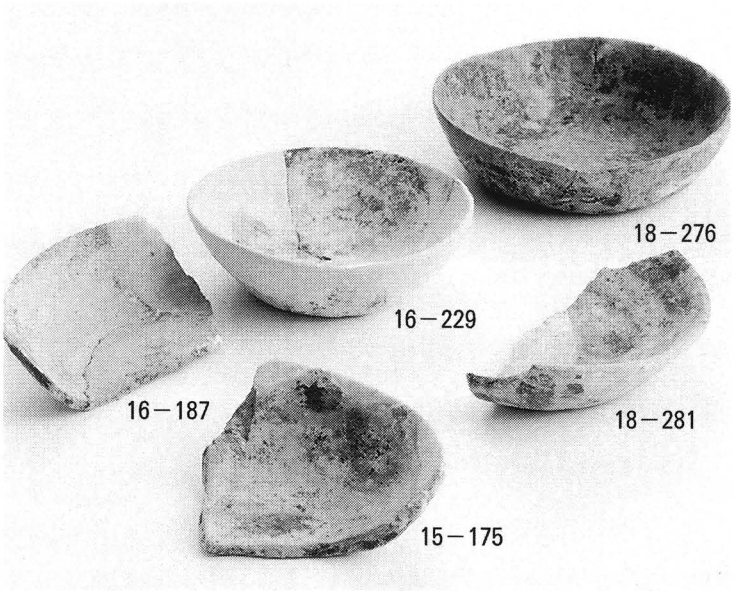


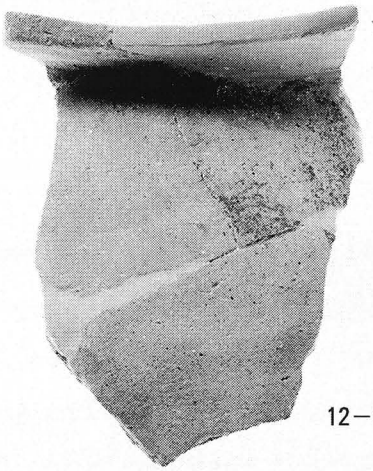


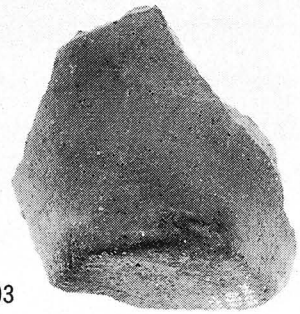
図版3　神高池北西古墳　出土遺物②





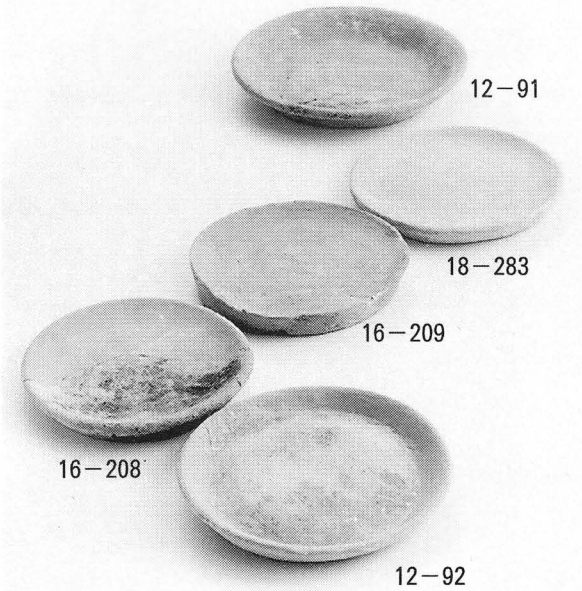






図版4　神高池北西古墳　出土遺物③

10－39



12－91

18－283

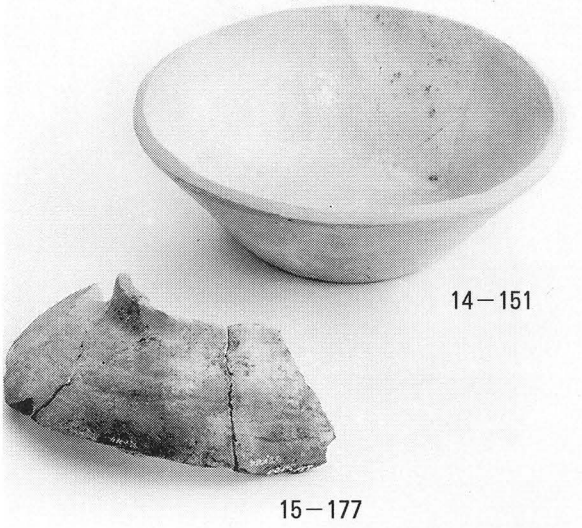
16－209

16－208

12－92

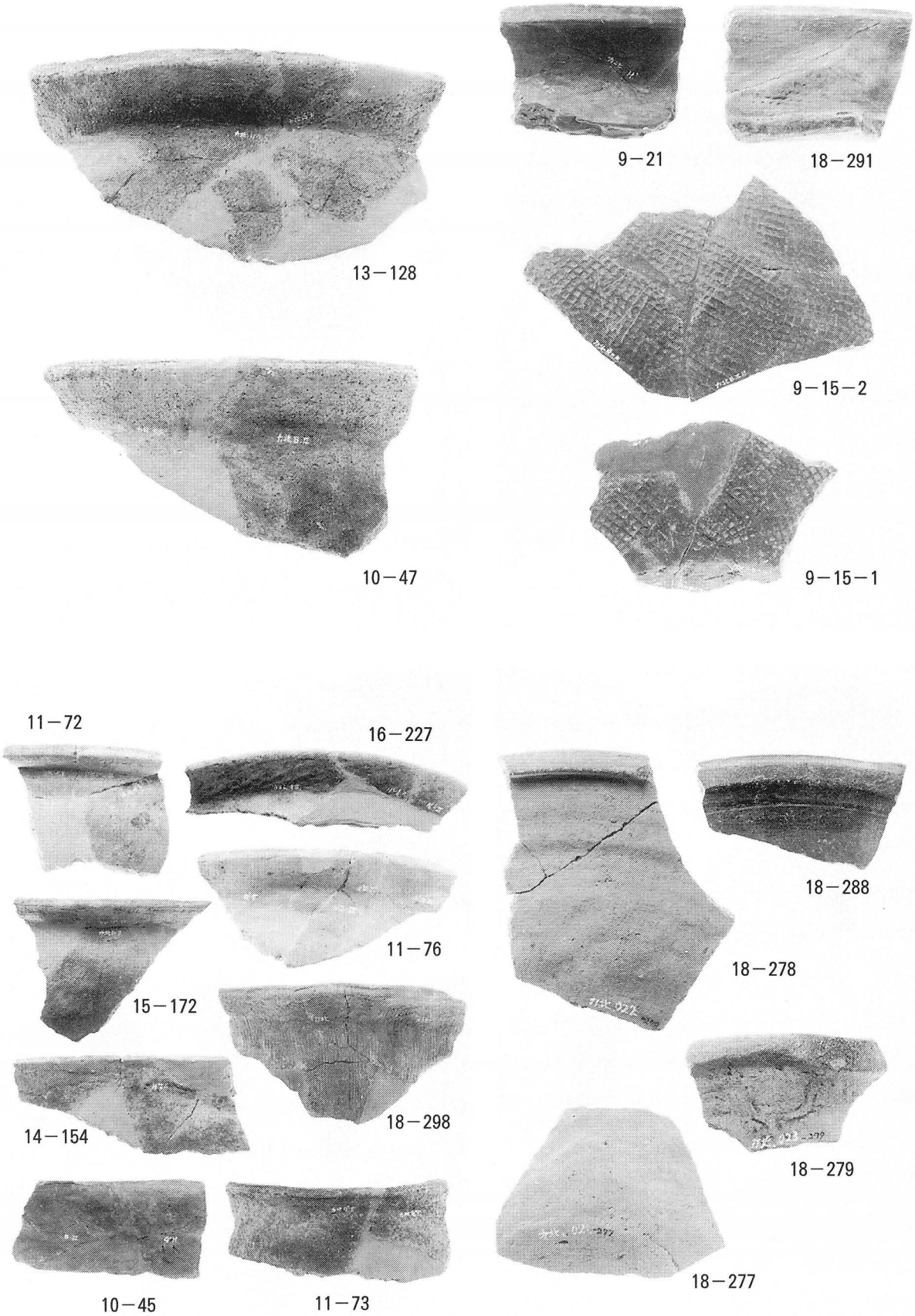
10－38

17－256

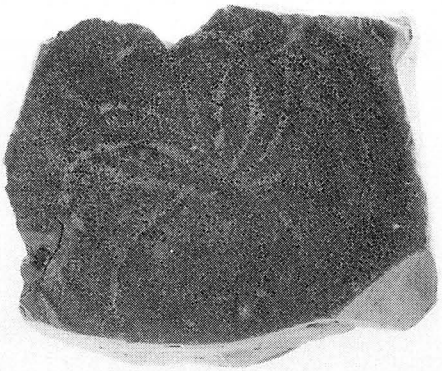


14－151

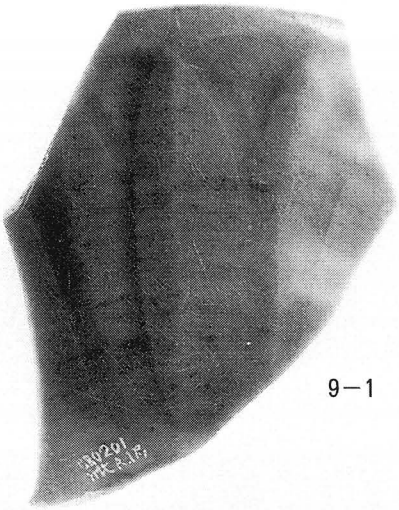
15－177


13－128
9－21
18－291
9－15－2
10－47
9－15－1
11－72
16－227
18－288
11－76
18－278
15－172
18－298
14－154
18－279
10－45
11－73
18－277

図版6　神高池北西古墳　出土遺物⑤

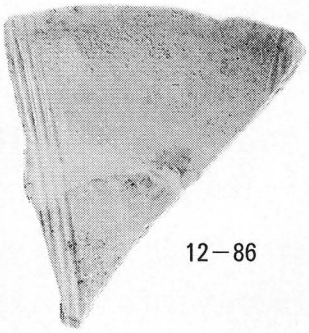


11－53

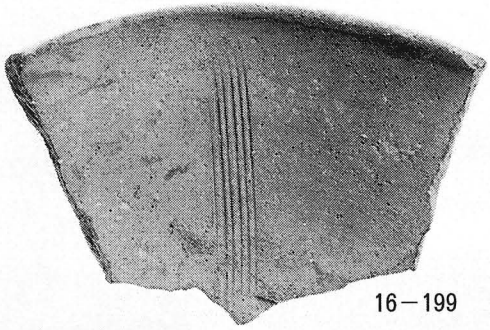


9－1

16－201



12－86



16－199

17－267

17－270

16－197

17－271

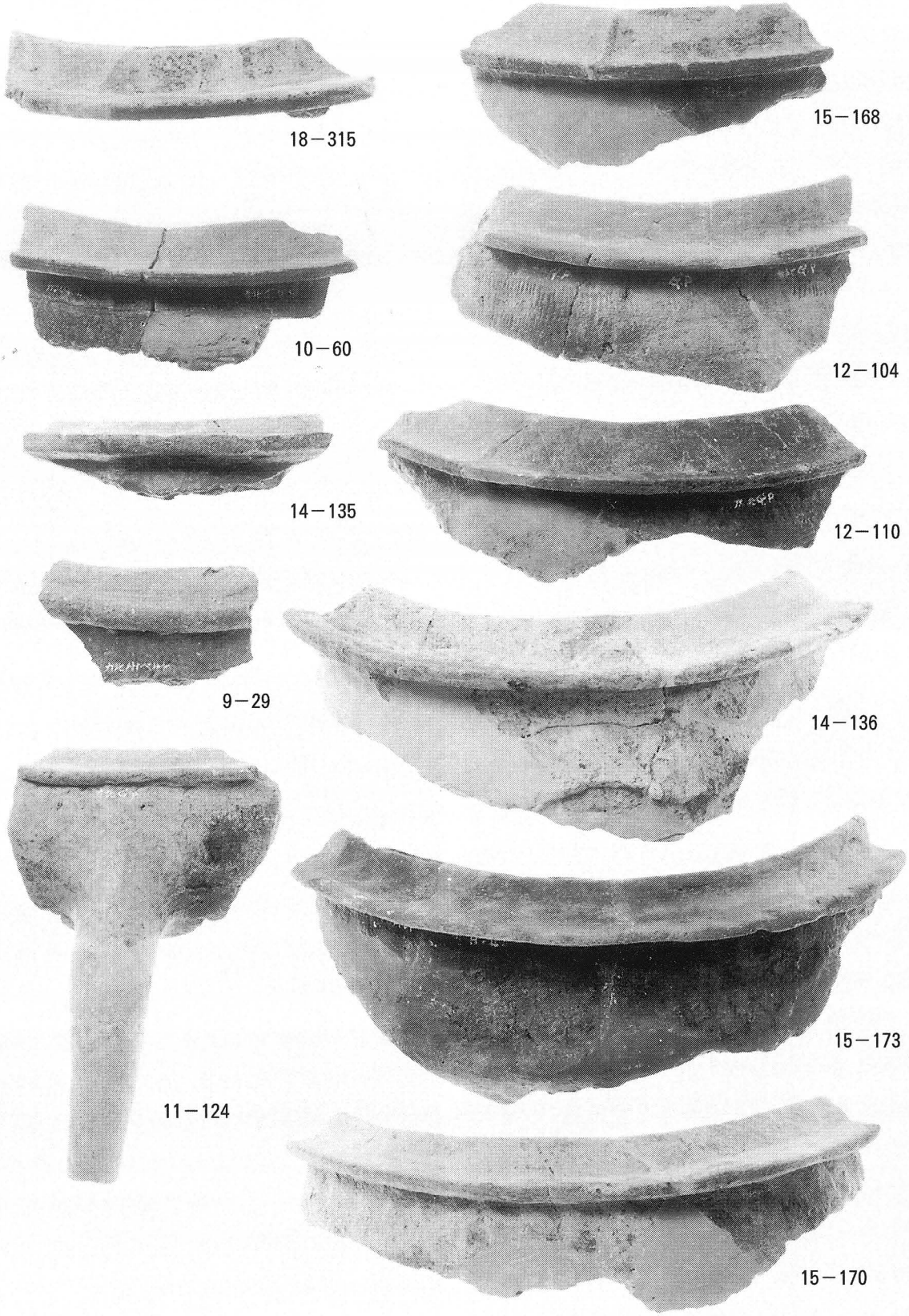
17－266

17－269

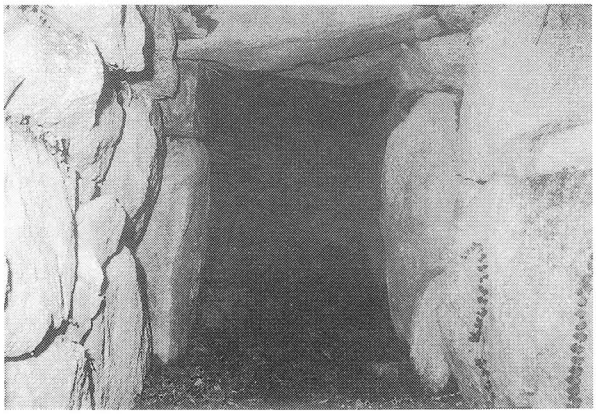
17－268

9－14

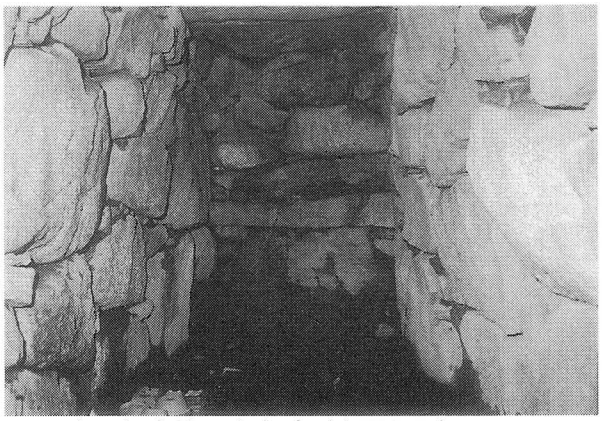
図版7　神高池北西古墳　出土遺物⑥



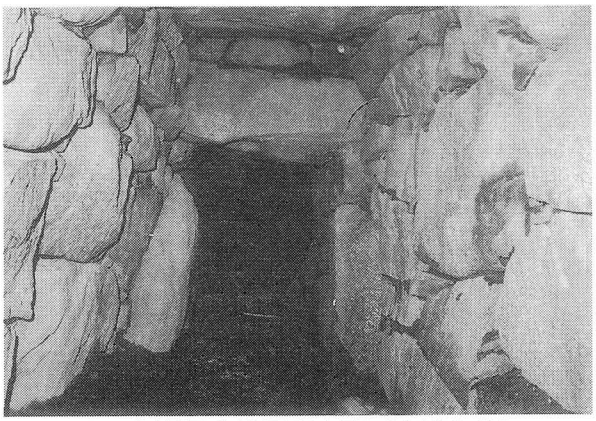
1　山野塚古墳石室前面（南から）



2　山野塚古墳石室玄門（羨道から）

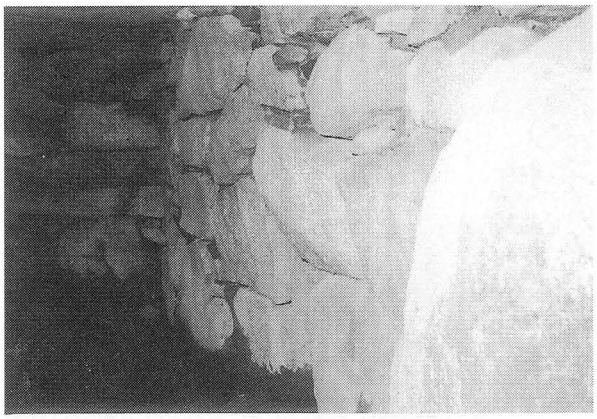


3　山野塚古墳石室奥壁（玄門から）

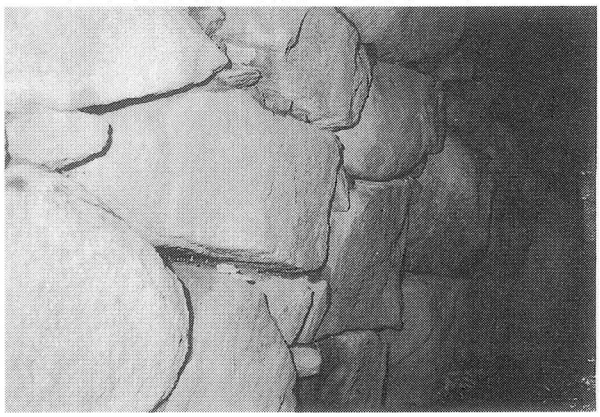


4　山野塚古墳石室玄門（奥壁から）

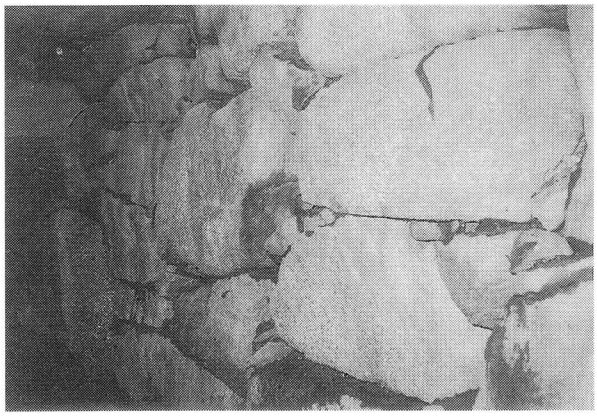
5　山野塚古墳石室右側壁（玄門から）



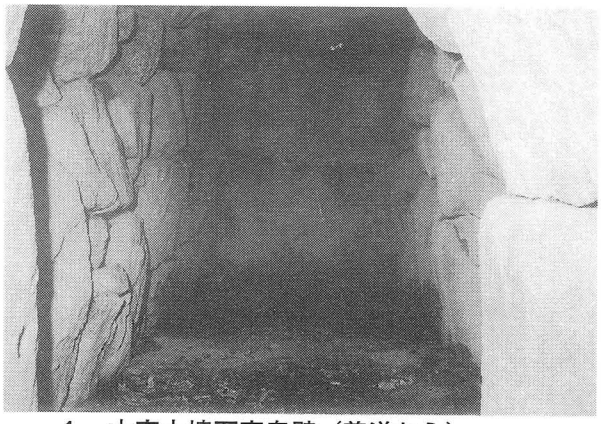
6　山野塚古墳石室左側壁（玄門から）



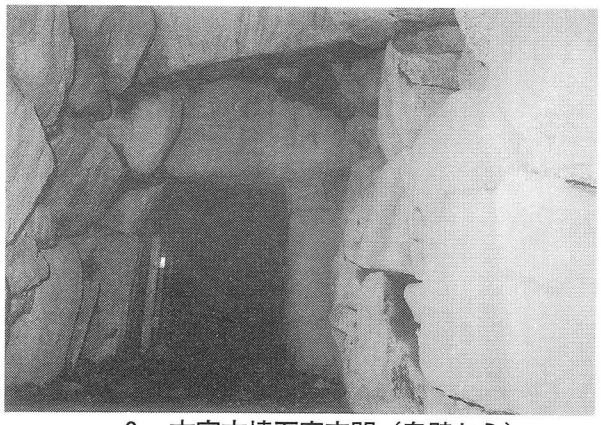
7　山野塚古墳石室左側壁（奥壁から）



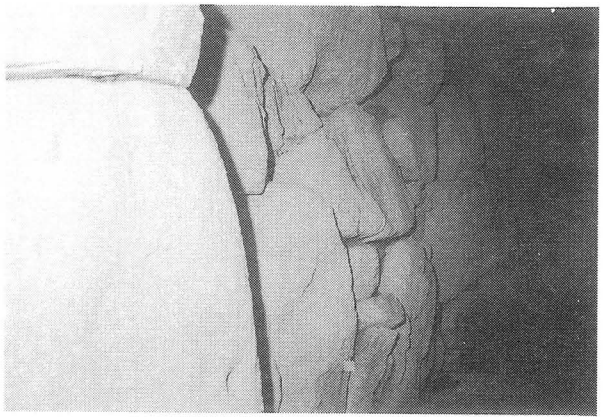
8　山野塚古墳石室側壁（奥壁から）



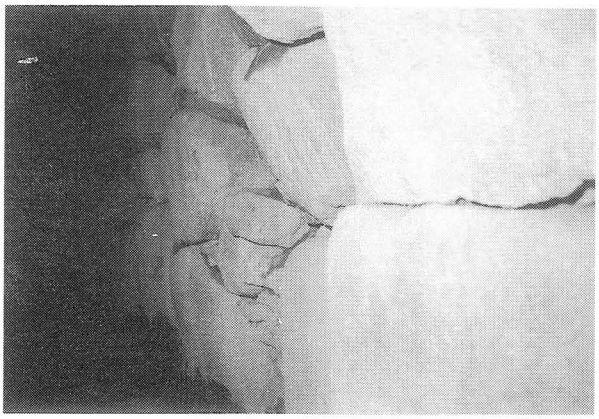
1　古宮古墳石室奥壁（羨道から）



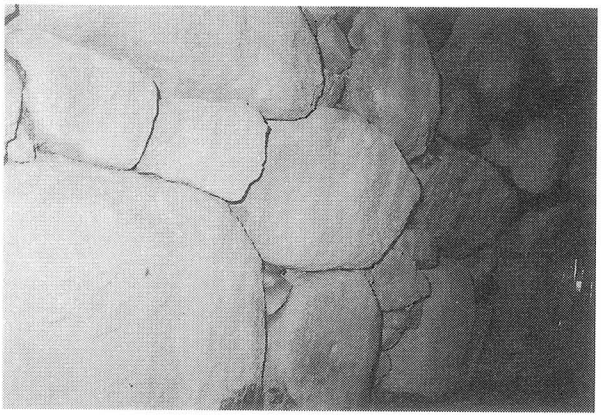
2　古宮古墳石室玄門（奥壁から）



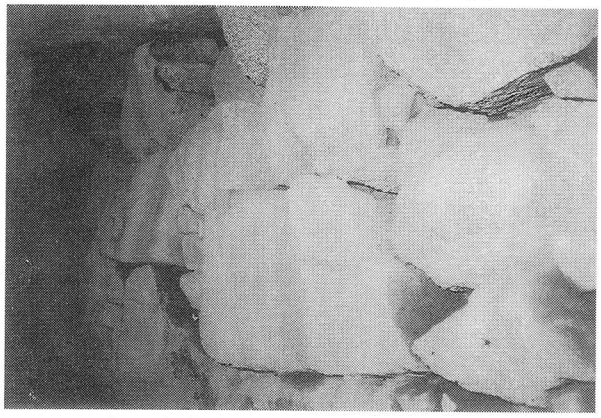
3　古宮古墳石室右側壁（玄門から）



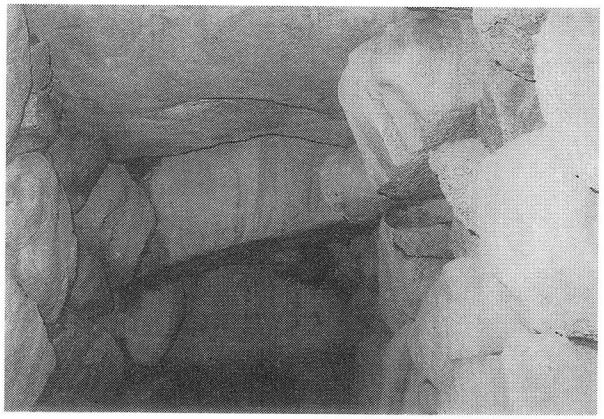
4　古宮古墳石室左側壁（玄門から）



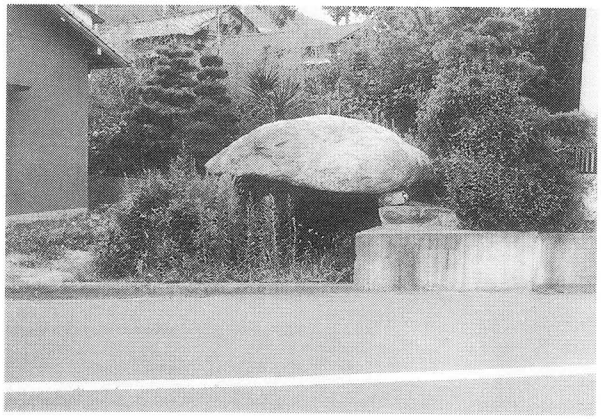
5　古宮古墳石室左側壁（奥壁から）



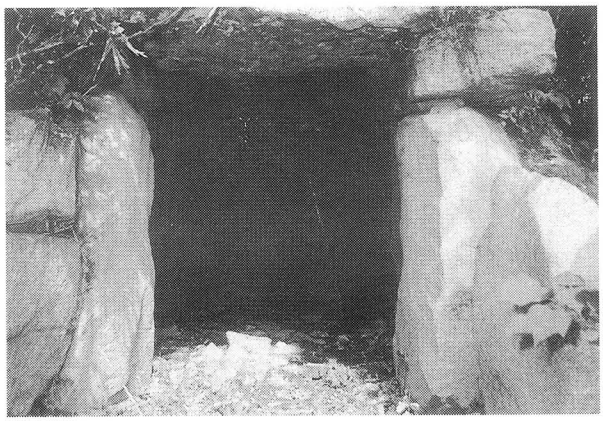
6　古宮古墳石室右側壁（奥壁から）



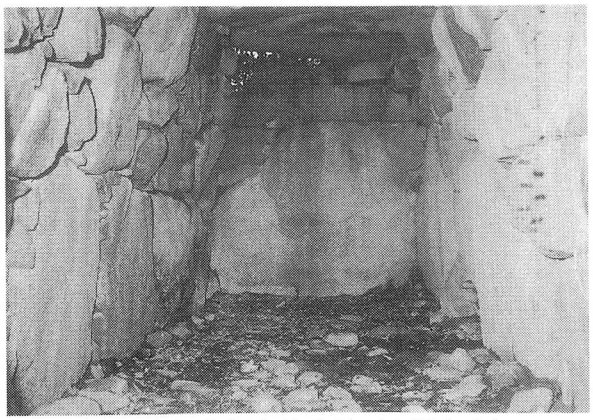
7　古宮古墳石室天井（奥壁から）



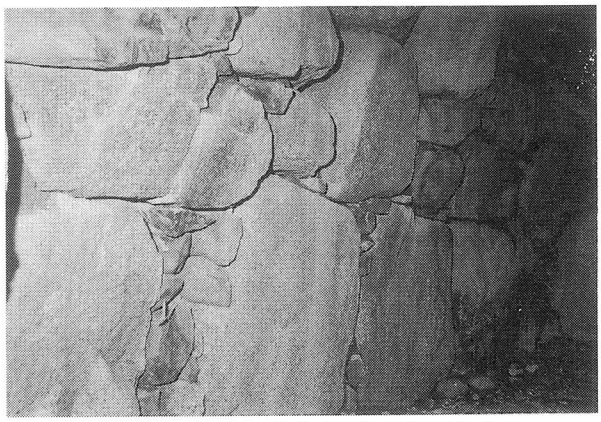
8　神高池西古墳石室前面（南から）



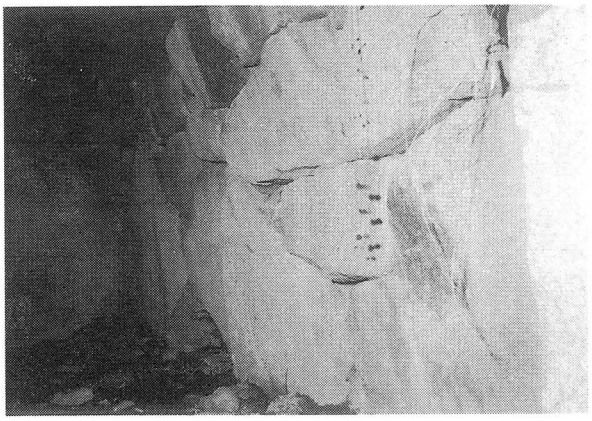
1　鬼無大塚古墳玄門（羨道から）



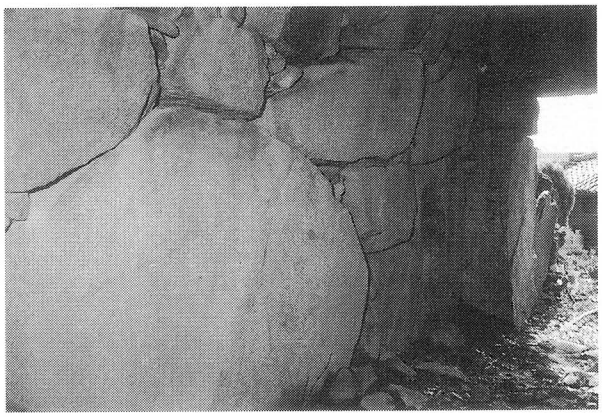
2　鬼無大塚古墳奥壁（玄門から）



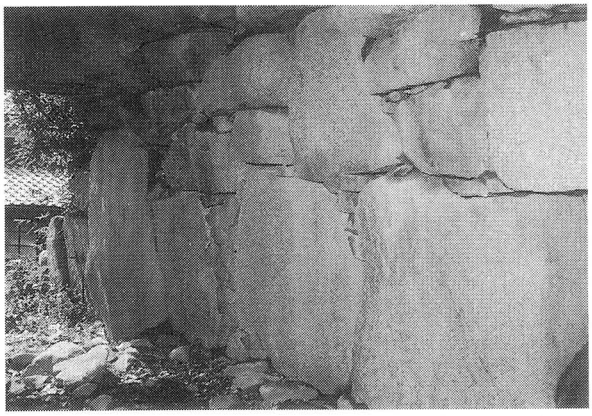
3　鬼無大塚古墳石室右側壁（玄門から）



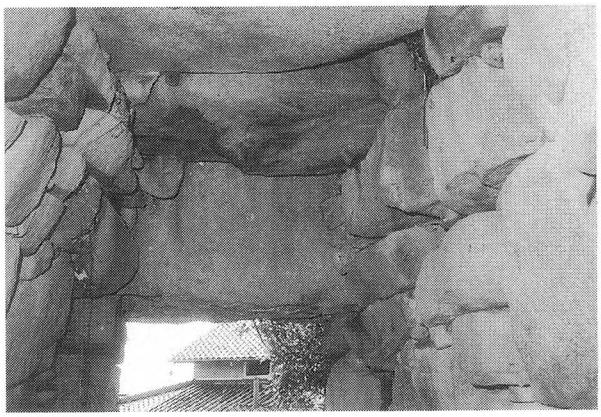
4　鬼無大塚古墳石室左側壁（玄門から）



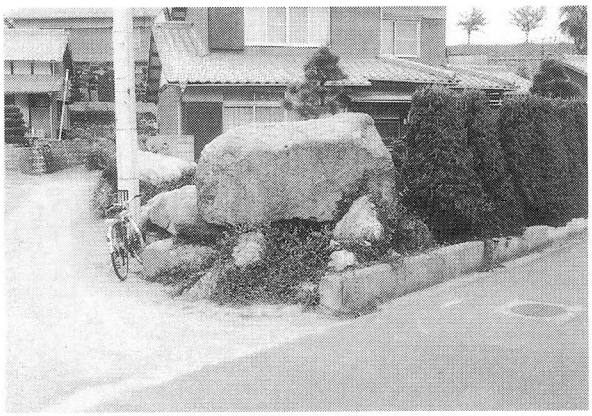
5　鬼無大塚古墳石室左側壁（奥壁から）



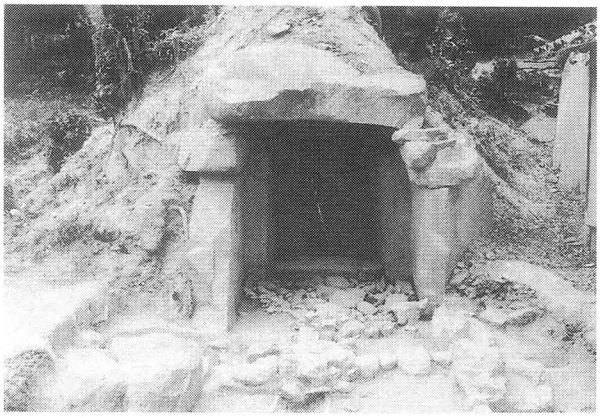
6　鬼無大塚古墳石室右側壁（奥壁から）



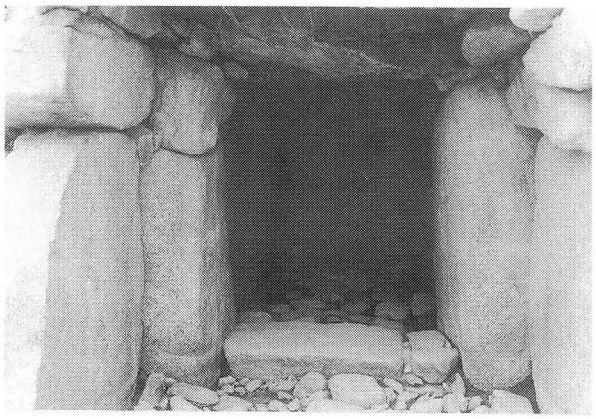
7　鬼無大塚古墳石室天井（奥壁から）



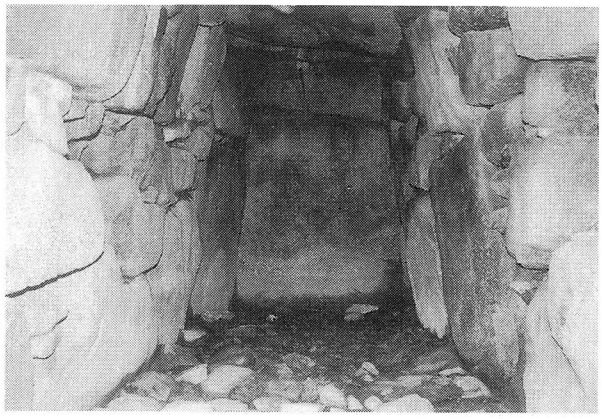
8　こめ塚古墳石室前面（南から）



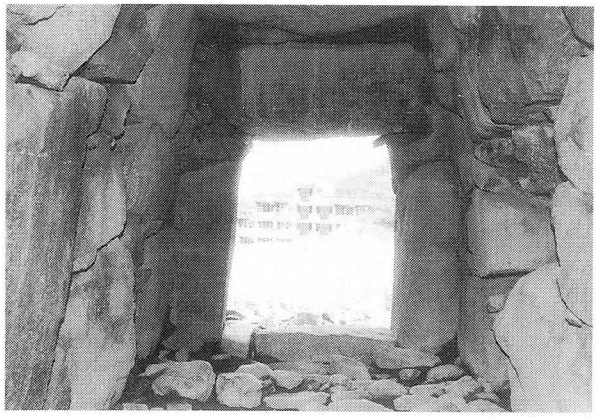
1　平木1号墳石室前面（南から）



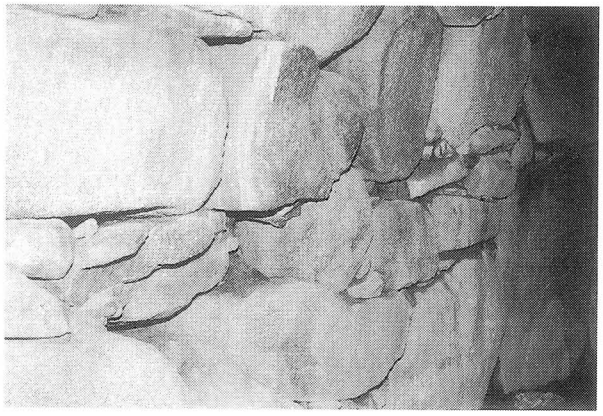
2　平木1号墳石室玄門（羨道から）



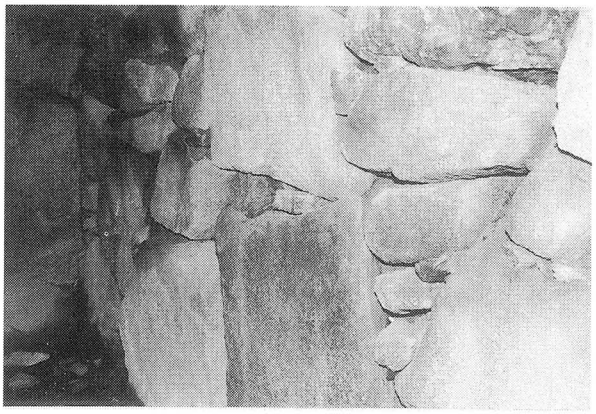
3　平木1号墳石室奥壁（玄門から）



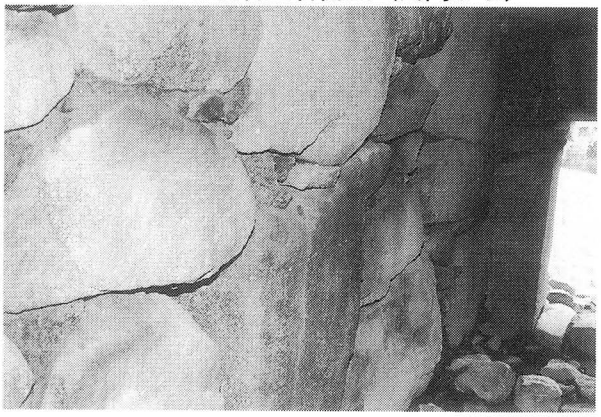
4　平木1号墳石室玄門（奥壁から）



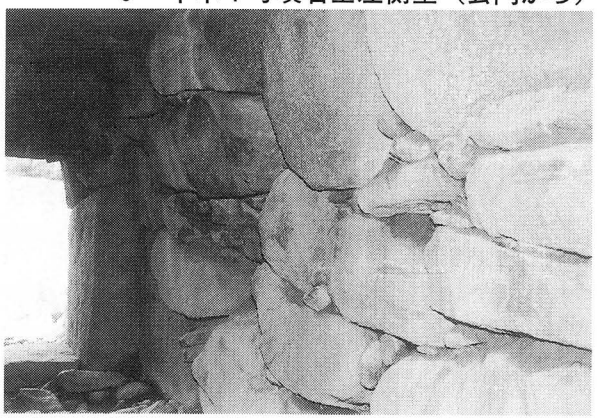
5　平木1号墳石室右側壁（玄門から）



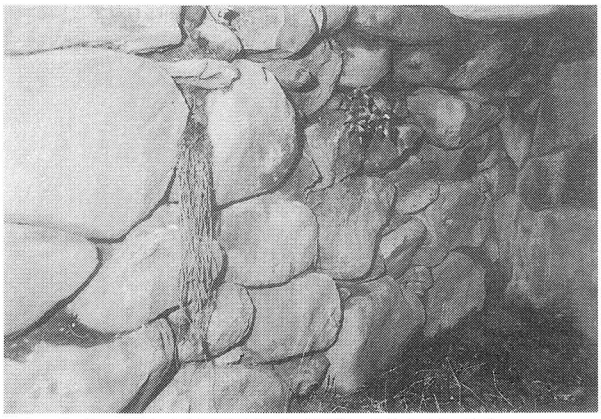
6　平木1号墳石室左側壁（玄門から）



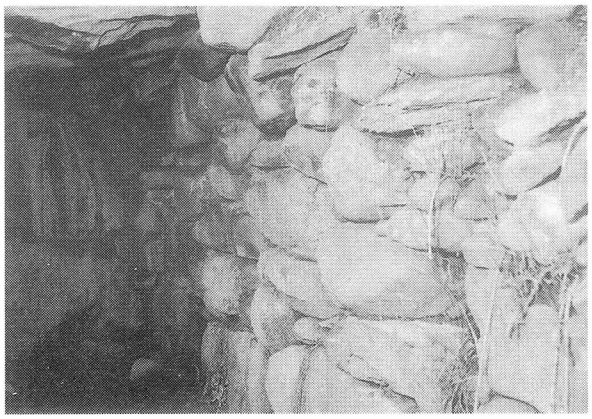
7　平木1号墳石室左側壁（奥壁から）



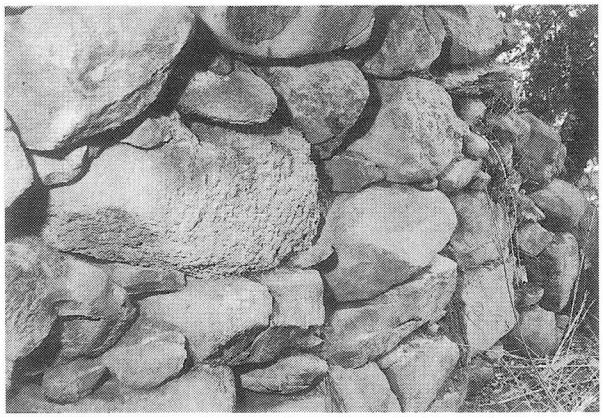
8　平木1号墳石室右側壁（奥壁から）



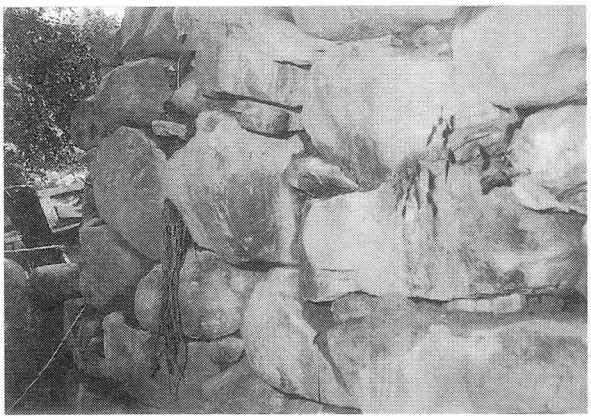
1　平木2号墳石室右側壁（玄門から）



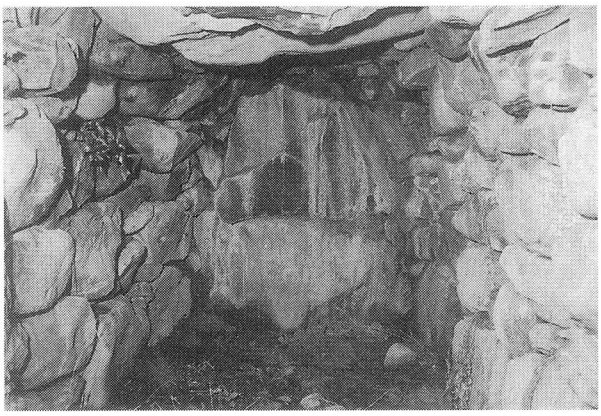
2　平木2号墳石室左側壁（玄門から）



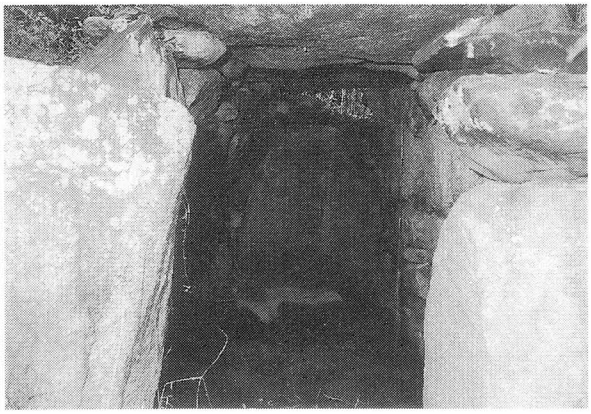
3　平木2号墳石室左側壁（奥壁から）



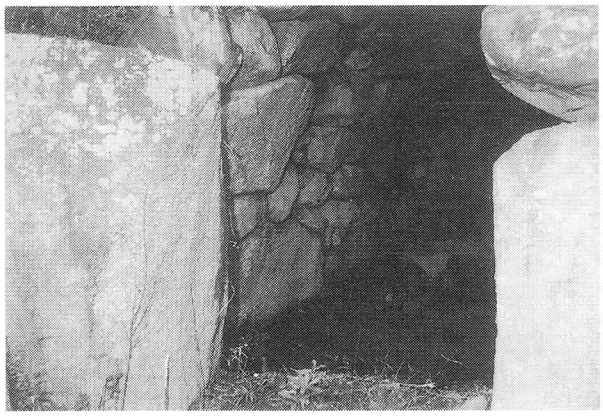
4　平木2号墳石室右側壁（奥壁から）



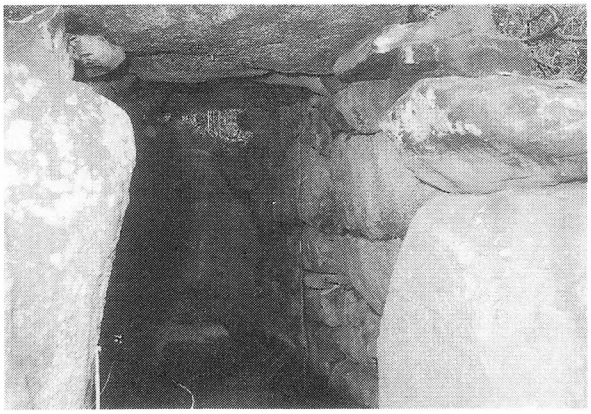
5　平木2号墳石室奥壁（玄門から）



6　平木3号墳石室奥壁（玄門から）



7　平木3号墳石室右側壁（玄門から）



8　平木3号墳石室左側壁（玄門から））